
青い鳥ルーレット

シトラチネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い鳥ルーレット

【Nコード】

N9754J

【作者名】

シトラチネ

【あらすじ】

並行世界の自分に、世界をトレードされちゃった！ 一族の長だの軍だのに連行されては無体な扱い。初対面で政略結婚を申し込んでくる海賊風大佐、文明の番人を名乗るインテリヤクザな中佐と、いい男はいても性格に欠陥アリ。事件や婚約発言に振り回されても心の拳でがんばりたい異世界交換ファンタジー。（本編、気楽な続編、スピンオフ『甘口弓師と白魔の妹』完結済み）

1. とりあえずの失礼至極

人それぞれに、二度と耳にしたくない言葉というのはあるはずだ。単語であれ文章であれ、ソレの入り込んだ耳は瞬間、発音の末尾を待たずにふさがれる。ギャーと叫んでかき消そうと試みるは、魂のどん底も抜けるほどの恐怖か、割腹ものの生き恥か、奥歯も砕く苦味にまみれた思い出か。

あるはずなのだ、誰にでも。

江藤桐花^{えとうじゅうか}の場合、そのNGワードはこれだった。

「とりあえず」。

そんな些細な言葉が親の仇、いやそれどころじゃなく憎くなる日が来るなどと、想像すらせず十数年を生きてきた。仕事上がりの父の「とりあえずビール」に「はい」と発泡酒を差し出して嘆かれ笑う、むしろそんな小さな幸せの象徴でもあつたほどだった。

春つらら、商店街の外れのささやかな本屋で店番をしながら、客足が途絶えたのをいいことにカウンターに頬杖ついて昼寝する。そんな微笑ましい、経営者である両親からすれば眉をしかめるひと時に、桐花が「とりあえず」を世にもつくき言葉認定する事態は訪れたのだ。

「じゃあ、とりあえず7番？」

起きてなければいけない、でも眠い。そんな時は夢が夢と分かる。赤いような黒いような、もやもやとした空間はまぶたの裏と知っている。

それにしても自分の声が聞こえるとは珍しい夢だ、と桐花はぼんやり思った。

「おやまーアバウトだねー。えーと7番はね、学生、未婚どころか彼氏なし、両親と3人で本を売って暮らす中流家庭……」

「ここじゃないならどこでもいいの！早くして！」

「おつとコワイ顔！。せつかちだねえ。まあ他の君も似たり寄つたりな環境だし！。うん、7番でいつか、うああーふ」

桐花の声は判決ほやほや死刑囚かと思えるほど悲痛で切羽詰っている。答える間延びした声に聞き覚えはない。それは少年とも少女ともつかない。映像こそないが、襟元つかんでガツクガツク、頸椎破壊の情熱さえ感じさせる勢いの桐花の声に対し、あくびを噛み殺そうという真摯さはない。爪の先だってもう少し真面目だ。

桐花は幼い頃から商売の手伝いをしてきた。現実的思考回路と礼儀作法に関しては、同年代より出来ているという自負がある。ゆえにヒステリックに叫ぶ自分にも、誠意の感じられない相手にもイラリとした。

「はい、つてことで」

桐花のそんな奇立ちを知ってか知らずか。あくびの余韻が残るアフアフと定まらない口調で、間延びサイドがまともに入った。

「7番世界と13番世界の君たち、トレード発生ってことで。とりあえずファイトですよー」

口先だけでも程がある声援の直後、桐花の顔をひゅうと爽やかな潮風が撫でていった。

春つらら、商店街の外れのささやかな本屋で店番をしながら。

ちなみに桐花の両親が営む本屋は、内陸にある。隣は魚屋ではない。

また、本屋の入り口である自動ドアが故障した覚えはなかった。そして客が通ればティローン、とお出迎えもお送りの兼ねた軽薄な電子音が鳴るようになっていて、桐花はティローンと同時に頬杖を解除し熟練の営業スマイルを作り、いらっしやいませと言うのが脊髄反射となっていた。

なのに、ティローンなしに潮風が、桐花の髪で遊んでいる気配が

する。

桐花は頬杖に目を閉じたまま考えてみた。

髪は長い。量も多い。本を愛する父が、「書店の娘は黒髪ロングストリートでないと駄目なんだ！」と泣いて頼むから、情けで伸ばしてやっている。それに冬には自前のマフラーだ。一石二鳥だ。

日本人特有のコシのある長い髪、それをもてあそぶ風となると、隙間風などという可愛らしい威力でない。

しかも潮の香り。

内陸育ちの桐花にとって潮の香りは干物のおいと同義だった。が、干物が泣き崩れるくらいその潮風は清々しく、爽やかだった。

それに心なしか、いや間違はなく体が揺れている。揺らさされている。波に身を任せた時の独特の、たぶんたぶんしたりズムで、だ。

本を前に、桐花は寝食を忘れる。文字さえ食べていけば満たされる。父譲りのそんな性質だが、取り上げた本で頭頂部をひっぱたきながら肉料理を突っ込んでくる母のおかげで、貧血とは縁がなかった。

だからその揺れが貧血に起因するのではなく、またザパーン、ザパーンと音でもマイナスイオンを振りまくものが耳鳴りでもないことは断言できた。

ずいぶん五感を駆使した夢もあるものだ、と桐花は感心する。しかし本格的に寝入っては、ティローン反射もさすがに起動しなくなる。

ぺしんとひとつ頬を叩いて、まぶたを引き上げる。

春つらら、商店街の外れのささやかな本屋は、商店街の外れにあったはずの本屋は、本とカウンターと桐花だけ残して波間に浮かんでいた。

2・腫れ物にさわれ！

陽射しは強い。

額をジリリと攻撃してくる紫外線の気配。浅い海とわかる、緑色の強い海面は小さな波を駆使して、乱反射させた陽光を見せ付けてくる。

「書店の娘は白磁の肌でないと駄目なんだ！」と父が泣いて頼むから、情けで美白してやっている。30分ビーチにいたら半年の手入れが無駄になるんだ、どうしてくれる。桐花は習慣的に日陰を探して見回した。

空模様の器に海を張り、石で作った剣山を入れて。

林立するぶつとい石柱の間で、本の散乱する丸太のいかに揺られながら、桐花は考えた。

その剣山の隙間に無数の船を浮かべたら、この光景を箱庭的に表現できているかもしれない。剣山の奥は岩山で囲む。海から垂直に伸びて、伸びて、森林限界はすぐに訪れ、岩肌はそれでも休むことなく伸びて、伸びて、薄い雲を突き破り、万年雪確定の白い氷の櫛歯となつてもなお、伸びて、伸びて。その先の輪郭は太陽の影に溶けてしまつて、確かめることすらままならない。

雪山の白を際立たす、これでもかと青い青い空には大きな星が浮かんでいる。

「木星」

あまりに見慣れぬ光景に、突如見知つたものを発見し、桐花はぽかんと呟いた。だがメノウのような赤褐色と白のマール模様は間違えようもない。

「……でかくない？」

いやでかい。肉眼でマールが目視できちゃうとは何事だろうか。

「水金地火木土天海」

木星周辺に生物の生息する惑星があったらどうかと思い起こしてみよう。ない。

気づけばガヤガヤと不穏な囁きに遠巻きにされている。周囲に無数に点在する丸太のいかだ、その上にはモンゴルのゲル風極彩色テントが載っている。船というより住居のようだ。そこから桐花を眺めやる生物は限りなく人間に近い。というか一見、違いは見受けられない。身長も色も顔立ちもアジア人そっくりだ。

しかし地球人にはないモノを隠し持っているかもしれない。腹に第二の顔があるとか。四次元ポケットがついているとか。フェルト状のすーんとした衣服の下はどうなっているんだ。

目をすめれば透視できるわけでもないが、桐花が第二の顔を確認しようとまぶたを細めた時。

「トカ！」

桐花の名前のようでいて違うような、曖昧な、それでも耳に慣れた発音に思わず発信源を探す。

若草色のすーんとした服の裾、そして後頭部でくくった黒髪が海風にたなびいている。色よく焼けた肌に包まれた頑丈そうな腕が桐花に向かって振られている。もう片方の腕は手綱を握り、乗っている動物を見事に疾走させていた。

「……疾走？ と桐花は、若草青年の素足の下で元気に波を切るイルカを見て首をかしげた。

「テイ！」

若草青年が指示を出すや否や、イルカは腹筋を縮めて三日月形に立ち上がり、水の抵抗を最大限に受けて急停止した。桐花の乗ったいかだに寸止めして乗客を上陸させる、その目は明らかにフッフと得意げだ。

「うわああうあ」

イルカタクシー！？ 可愛い！ 賢い！ 欲しい！ という魂の

叫びが知らず口をついて出る。ああ、現実にもこんな、いたらいいのに！ 桐花が思わずイルカに急接近した弾みで、いかだに散乱していた本の一冊がボチャンと海へ落下した。

「ギャー！ 商品が！」

慌てて海へ手をつ突っ込んだが、指は空しく水を掻いた。

使い込まれ色あせた、父のピンクのはたき。華麗に埃をまき散らし、風を切つて唸るはたきによる、お仕置き一秒前の画像。脳裏を走る鮮明な記憶が桐花を慌てさせる。

「だめだめだめーっ」

言つたところでハイと本が引き返してくるわけではないのだが、大声で沈み行く本を引き止める。

すると、不意に灰色の塊が本をさらった。コレ？ と本をくわえたイルカが海中から見上げている。

「あっそう！ それ！ サンキュー、タクシー！」

するん、とイルカタクシーはいかだに上半身を滑り載せて、拾った本を届けてくれた。その目は明らかにまたフフと得意げだ。

「うわああうあ」

可愛い！ 賢い！ 欲しい！ の言葉にならぬ叫びを桐花は繰り返す。イルカも同意するように嬉しげにビチビチすると、期待一杯のつやつや黒目でびしょぬれの本をじつと見た。

「……………もしかして、「取って来い」をねだられているんだろうか。」

桐花は本とイルカを交互に眺めた。

びしょぬれで歯型が付き、もはや商品価値など薪以下の本。

喜びといたずらな光とがくるくる巡ってキラめく無垢な動物の瞳。変色したはたきを持つ父の姿は、あっけなく頭の隅から投棄された。投げては取ってくる、投げては取ってくる、その度にフフと得意げな目をするイルカ。

「いいねタクシー！ あっそう、そうそう上手だね！ だめだめ渡して。いけっタク……………もっ」

いきなり大きな手に、口をふさがれた。

なぜこうなったのか。

戸惑いと怯えと好奇の視線を大量に浴びながら、桐花は座り込んでいた。

イルカタクシーと遊んでいた桐花は、それに乗ってきた若草青年によって口をふさがれ抱えられて、二頭立てのイルカタクシーで何やら立派ないかだに連行された。

発言と行動の自由、および説明を求めて暴れても、若草青年は甚だしく赤面した顔を背けるばかりである。しかし風に流され「ユピテライ、ユピテライ」とうわ言のように呟いているのは分かった。

この水上ゲル民族の、明らかに知恵袋なんだろうなという威厳と目力と妖怪度の高い老婆の前に座らされた。薄暗い大きなゲル内は、豪華な刺繍が施された布で覆い尽くされている。

大ババ様、と桐花が内心で呼んだ老婆は、総白髪を後頭部で結わえている。すーんとしたフェルト状の衣服は海を抱える岩山の色彩をそのまま写し取ったような、足元から青、緑、灰、白のグラデーションに染められている。深いしわに埋もれそうな瞳は、老齢のためか、取り巻く人々より一段茶色く見えた。

若草青年は大ババ様の足元で深々と土下座してから、赤面のまま歯切れ悪く何やら報告しているようだ。耳を近付けて聞いていた大ババ様の眉間のしわが数段、深くなった。

「ユピテライ……」

古い枯れた声は、間違いなく呪詛だと桐花は思った。

「ユピテライ……！」

遠巻きにしていた、色とりどりのすーんとした人々がどよめきながら呼応する。

「ユピ……ゴホガハッ、ユピテライ……」

「ユピテラーイ……！」
リピートアフターミー！ と指揮する英語教師の姿がダブって見えた。

大ババ様が渋面で取り巻きの一人に指示を出す。真っ赤なすとーんとした衣服の大柄な男二人が頷き、桐花の腕を両側からガツシとつかみ上げた。

「やー！ やだやだ何？ 誰か説明して、本人抜きで話進めないでー！」

連れて来られるまではただ、わけもわからなかった。わからなくても、目に映る世界は単純にキレイだった。イルカは可愛かった。ここがどこで何が起きたのか、ただ、わからないだけだった。

でも今はわかる。何か悪意が満ちていて、暴力的な何かが待ち受けていて、痛くて凄惨な結末に呑み込まれかけていることが。

両腕をつかんでいる真っ赤なすとーんとした衣服の男たちが、周囲とは明らかに段違いの筋骨隆々とした体軀から、兵士であろうことも。

「離せー！」

暴れたところで、つかまれている腕の皮膚がねじれて余計に痛いだけだ。それでも、ごく近い将来に襲いかかるであろう痛みを思えば無視できる。

「やだ、助けて、誰かー！」

ゲル内にも、その外にも、人は大勢いた。しかし腫れ物を見る視線ばかりで、助けの手を差し伸べる気配など微塵もない。いかだの上で足を踏ん張ると、丸太の下で波がバチャバチャと騒ぐのが聞こえた。無駄だ、諦めろと言い含めるように。

三頭立てのイルカタクシーの、ぬらりとした灰色の背中へ引きずられていく。可愛いと思ったイルカも今は地獄への火車だ。

「トカ、」

涙と怒りに歪んだ視界に、若草色が混じり込んだ。イルカに乗って颯爽と現れた青年の着ていた、穏やかな春の色。

「イツオライ、エブリシンウィルビオーライ！」
イルカにまたがされながら気付いた。
今の、英語じゃなかったか？

3 . やっぱ、さわんない方向でひとつ

銀河系に英語圏の惑星が存在するとは知らなかった。

ざんざんと軽快に波と風を切り、海面を跳んでいくイルカの手綱にしがみついていた手。離れたところで、両側から兵士にホールドされているのだから落ちそうにない。

片手で下を指差して、桐花は兵士の一人に問うてみた。

「Earth?」

言葉が通じるなら、地獄の門へ放り込まれそうなこの状況もどうにかできるはずだ。言葉わかりますよ、頭おかしくありませんよ、と言外の意味を込めて営業スマイルで繰り返してみる。

「Earth?」

「ユピテライ・・・」

だめだ通じてない！ 輪をかけて腫れ物認定した兵士の目を直視できずに、桐花はイルカの背に突っ伏した。

おかしい。英語の成績は良かったはずなのに。学校名を言えばたいていホホウと感心してもらえるレベルの教育を受けてきたはずなのに。実践ではこんなに役立たずだなんて。

せめて地球の歩き方でもあれば、英語圏の惑星版の。

「・・・ん?」

又ラツとしたイルカの背から顔を上げる。

もしかして、あるのではないだろうか。

振り向いたら、風を受けてバツサバサはためく自分の髪の間隙から、イルカを駆って追ってくる若草青年が見えた。

「Book!」

What? と答えたのが唇の形でわかった。

「My books! 取って来て、えーと・・・Fetch

h!」

しまった、Fetchは犬に「取って来い」を命令する時の言葉

だったような。桐花が気付いて正しい単語を脳内で探し回る間に、若草青年はイルカを方向転換させていた。

「OK、トカ！」

どうやら了解してくれたらしい、犬扱いにもかかわらず。

最初のいかだの上に、本が山積みになっていたはず。あの中にせめて和英辞典でもあれば。

桐花は前を向きなおし、イルカの手綱を握り直す。

ユピテラーイの処刑は免れるかもしれない。

生命の危機に光明を見出したところで、また気付く。

若草青年がなぜ、自分の名前を知っているのか。

登れ。と顎で示されたはしごは、仰いでもゴールが見えなかった。イルカたちと桐花およびごっつい兵士二人は、海に林立する石柱のあいだを山方面に進んでいたが、やがて一本の石柱の前で止まった。表面にはしごが据え付けられている。

心なしか空が暗い。はしごを見上げるとまぶしいから太陽は出ているはずなのだが、周囲の海面は暗い色をしている。

ここがユピテラーイの処刑場なのだろうか？ このとんでもなく高さのありそうな石柱の上から飛び降りろ、とか？ 登るのをゴネてみようかと思った桐花だったが、背後で険しい顔をして拳動を見張っている兵士たちの、時間短縮コレ幸いとばかりに桐花の首をねじ切りかねない上腕二頭筋が太陽よりまぶしすぎた。

登ろう、時間稼ぎになるかもしれないし。桐花は覚悟を決め、太い蔓を編んだような、野趣溢れるはしごに手をかける。足先で強度を確かめながら、ゆるゆると体を引き上げ始めた。

ジーンズで良かった。「書店の娘はワンピースでないと駄目なんだ！」と泣く父の、眼鏡とピンクのワンピースの誕生日プレゼントを庭に捨ててやったのは小学生の頃の話だ。

ジーンズは海水を吸って重いが、それでも助かった。

しかしついてくる兵士二人はどうなんだろう。すとーんとした衣服の下に、何か身に着けているのだろうか？ いない場合、一番下の兵士の視界は。いやそれよりも、またがれてたイルカの背に密着しちゃうモノは。

イルカが不憫で、桐花は涙をこぼしそうになる。

本当は周囲を眺めて地形だの逃げ道だの把握しておきたいところだ。が、すでにとんでもない高さを登っているはずで、石柱やはしごをすり抜けていく潮風は強まる一方だ。髪が暴れて視界不良でもある。

息が切れ、腕がダルくなってくる。太腿の筋肉がフルフルしだす。「書店の娘は運動音痴でないと駄目なんだ！」と父は体育5の通知表を見て泣いたが、あいにく生まれ持ったものは変えようがない人並みの運動神経も体力もあるはずだった。しかしこんな暴力的に長いはしごを登らされる羽目に陥るなど、夢にも思わなかった。

桐花は内心愚痴つてからふと、夢、と呟く。

これは夢なのか現実なのか。

夢にしては鮮やかすぎる。感覚も、感情も。現実にしては鮮やかすぎる。感覚も、感情も。

痛みに似た寒さが思索を中断させる。海水に触れ、海風になぶられた手足の指先から、熱の脱走が止まらない。はしごの蔓を捉えようと握り、踏ん張る強さも曖昧になってきた。

ズルリ、とついに滑らせた足裏。体重を乗せて空を掻いた足は直後に何かを蹴りつけ、反動で安定を取り戻す。

見下ろすと桐花の足元から、顔を押しさえた兵士がひとり、アアアアと叫びながら落下していった。すとーんとした衣服の赤がみるみる点になる。アアアアという悲鳴は息継ぎをして、もう一度アアアアと繰り返され、その後にようやくボチャンと遠い水音がした。

広がる静寂。

残った兵士が驚愕から激烈な怒りへと視線を沸騰させたのが、桐

花の視界に捕捉されていた。焦点を合わせたらいけない、身がすくんで恐らく自分も超高飛び込みをしちゃうのは分かりきっている。

「わああああー！」

桐花は迫り来る怒気の塊を振り切ろうと、はしごを駆け登った。屋根が見える。半透明の屋根。はしごはその縁で完結している。つるりと冷たい感触の屋根に、桐花は手をかけた。

石柱を切りそろえ、巨大な水晶の板を敷き詰めたその上には、街があつた。

追いついた兵士にガツチリと後ろ手を拘束されたが、桐花はそうされずとも動けずにいた。

石柱の上の、空中都市。

地面が水晶でなければ、まるで数百年昔のヨーロッパの、城塞都市のようだった。敷き詰められた水晶の地面は緩やかな勾配をつけて、屹立する岩山へと連なっている。岩山と木星を背負うように石造りの無骨な城がそびえ立つ。その裾野に広がる無数の屋敷や家々を睥睨し、天に最も近い存在であると高らかに宣言していた。

「ユピテラーイ」

もはや馴染みの出てきた単語に振り向く。すとーんとした赤い衣服の兵士の隣に、もう一人の兵士が湧いていた。一見、日本の鎧かと思わせたそれは、よく見れば薄い石板を革で繋いで編み上げてある。金属が使われていない。生成り色の長袖長ズボンに革手袋・革ブーツで、鎧としてはかなり軽装に感じられた。

「ユピテラーイ？」

鎧兵士の怪訝そうに呟いた馴染みの単語は、初めて疑問符を伴っていた。おっ、と新鮮さと期待に顔を上げた桐花は、白人の青い瞳に眺め回されている。

改めて城塞都市を観察すると、白人だらけだった。いやアラブ系もいる、アジア系もいる、インド系ばいのも黒人までもいる、だが

半分は白人だ。まるでニューヨークだ。

「OK、カモン」

小学生でも分かる英語で手招きされて、つい石鎧白人兵士の方へと踏み出した。すとーんとした赤い衣服のアジア系兵士は、水晶の床の縁からはしごへ戻っていく。その肩越しには遙か眼下に広がる紺碧の海、剣山のような石柱、その間にたゆたういかだと原色のゲル。全てを抱きつくし、宇宙へと突き抜けそうな青空。

やっぱり夢だ、と桐花は思った。

こんなキレイすぎる惑星が、存在するわけがない。

「No! No! It's a dream, but 絶対NO!!」

人間、気迫で訴えればジェスチャーで何とかなる。と思いたい。

そっくりなだけで実は地球人じゃないのかもしれないけど、

「嫌がつてることくらい分かるだろ変態！」

桐花はやけくそそのもの、日本語でもって叫んだ。こんなことからノコノコとついて来ないで脱走するんだった、と自分を呪う。空中の城塞都市を、半ば観光気分でここまで来てしまったのだ。

すとーんと赤い衣服の兵士から、石鎧兵士に引き渡されて、桐花は都市の中央部へと連れられて来た。

石なのか半貴石なのか。土なのか煉瓦なのか。欧州風なのか中東風なのか。建物全ては様々な素材や文化があまりに雑居し、それでいて一定の芸術的秩序に達しているという混沌。

すれ違う男の半分は先導する石鎧兵士と同じ兵装で、ここが現実機能する城塞都市であることを窺わせた。

だが、兵士以外の服装はあまりに自由だ。人種も、肌の色も、衣服もバラエティ豊かだ。そのせいか、はしごの下にあった水上ゲルの街にいた時よりも、桐花は自分を異質と感じなかった。兵士が捕捉でなく先導という緩やかな連行方法を取っていることもあり、通

行人も桐花に特別な目を向けない。

ユピテライと眩きながら取り囲まれた、処刑前のような戦慄の気配は霧散していた。

そうして案内された建物はまた変わっていた。石造りなのだがドア、窓、床が半透明の水晶で出来ている。海辺の明るい陽光を通し、室内はさんと明るい。

がらんとした天井の高い広間には石のベンチが置かれ、石鎧兵士が数人、何かを待つ風情で座っている。それを横目に奥へと進み、水晶のドアを通して小部屋に通されたところで、石鎧兵士はくるとキレよく向き直ってきた。

何か言われたが桐花には理解できない。

部屋には冷たくて硬そうな石の長椅子があるのみ。転々とどす黒いまだら模様がついている。

ものすごく血に見える。

疑惑のまだらを凝視している桐花に、石鎧兵士は同じ言葉を繰り返した。はっきりと命令口調。

どうやら、コーヒーがいいか紅茶がいいか？ 砂糖はノンカロリーでいいかな、なんて悠長な文言が言い渡されているのではなさそうだった。

苛立った様子の兵士が両手を伸ばしてきた。正面から両手首をつかまれ、床と水平な位置までグイと持ち上げられる。

はりつけの体勢じゃないかコレ！ ユピテライの処刑は勘違いじゃなかったのか！

瞬時に凍りついた桐花の胸を、兵士の手のひらが両脇からつかんだ。

「ギャー、どこさわってんの！」

逃走から格闘モードになだれ込む。そして、

「No! No! It's a dream, but 絶対N

O!!! 嫌がつてることくらい分かるだろ変態！」

と叫ぶ事態に陥ったのである。

乙女の危機は、乙女をかなぐり捨てて闘わねばならない。だが相手は兵士である。

桐花はすぐにうつ伏せに組み伏せられ、両腕を縛り上げられた。兵士はジタジタする桐花の体に、念入りに手を滑らせ始めた。

「やだー！ このレイプ魔！ イルカに食われて死ねバカッ」
ありとあらゆる口汚い単語を総動員で罵ってやった。

桐花が二重の意味で乙女を捨てようかという時。床に押し付けられた桐花の目の前で、水晶のドアが開いた。

あまりに迷いなく開いて、硬質のドアは桐花のこめかみにヒットした。

星が散る。頭蓋骨内を振動が反響する。意識が浮遊する。

「武器を持っていたのか？」

綿を耳に詰められたみたいだ、と桐花はぼんやり思う。声が遠い。

「いいえ、ルテナンカーネル」

「抵抗していたようだが」

「言葉を理解していなかったの。ボディチェックを誤解した恐れはあります」

遠く、ゆつくりと、こだまして聞こえるせいで、英語がすんなりと頭に入ってきた。

ああそうか、ボディチェックだったのか。落ち着いて聞けばいいんだ。何も無体でわいせつなことをされるわけじゃないんだ。きつと彼らだって慈悲の心は持っている。あいだみつをも言っている、人間なもの。友好的に分かり合える。

安心してひとつ、息をつく。

次の言葉は桐花の期待通り、クリアに理解できた。

「裸にしる」

4・籠の外の鳥

人生記録を塗り替えるキレイなものは、そろそろ出尽くしたかと思っていた。この英語圏の惑星に来てから次々と立ち現れたキレイなもの、圧倒されるもの、息を呑むもの。

まだあった。

「うわ、すっごい目、キレイ……」

左右、色違いの瞳。茶色とグリーン。エメラルドの透明さとヒスイの神秘さを溶かし、大地の茶色を放射状に染め流す。左右を合わせて眺めていると、豊饒な大地に芽ぐむ柔らかな、一面の草原に立っているかのよう。

しかしその豊穡な草原は次の瞬間、殺意の塊に化けた。

「自分の腸で首を吊りたいか。裸にしる」

「コーヒー紅茶、どちらになさいますか？ コーヒー。」

そんなサラリ具合で、部屋に入ってきた兵士、桐花の頭に水晶のドアの角を故意にぶつけたくさい兵士、鎧の板が石ではなくびかびか金属の白人青年兵士はそう言った。

ハッ、と悲鳴だか返事だか不明な鋭い息を漏らして、石鎧兵士が桐花の服に手をかける。

「Wait! Stop! I don't have second face on my stomach! I don't have yōjigen pocket! Believe me! Trust me! I'm not your enemy! I can speak English ちよつとだけ!」

もうどうでもいい、文法も発音もどうでもいい、害を及ぼすつもりはないと、それさえ伝わればいい。自分の腸で首を吊る石鎧兵士も見たくない。人道的見地からでなく単にグロイからだが、これまたこの際どうでもいい。この金属鎧兵士がどんな拷問趣味を持っているかが構わない、いや構わなくはないのだが、それを自分に対し

て実行してくれなければそれでいい。

とにかく思いつく限りの友好的な単語を繋げて吐き出す。衣服を剥ごうとしてくる石鎧兵士の腕を、抵抗でなく制止と受け取られる範囲で押しとどめる。

金属鎧兵士の色違いの殺視線を決死の覚悟で見返して、敵じゃない、と伝えた。

「トカ！」

不意に若草青年の声、慌てた素足の足音が石壁に反響する。広間の方だ。だが桐花は金属鎧拷問上等兵士から、目をそらすわけにはいかなかった。

「トカー！ あ、」

バササツ、ベリと重い紙の音がした。本を、商品を落としやがったあの野郎と内心舌打ちするが、桐花は金属鎧氷点下百五十度液体窒素も裸足で逃げ出す冷酷視線を仰いでいた。

「………『紡ぐ家のトカ』」

「ご存知なのですか、ルテナンカーネル？」

訊ねる石鎧兵士が、衣服を挟んで桐花とせめぎあう手の力を緩める。

助かった！ 自分に瓜二つのトカなる人物がいるらしいのが、役に立つとは。これでむげな扱いは受けられないに違いない。

八寒地獄に一筋の光明を見だし、桐花はほうとため息をついて、脱力した。

「『紡ぐ家』はネイティヴの家系や歴史を刺繍で記録・保管する一家だ。ネイティヴの伝承について報告書を作成する際、聴取はしただろうな。だが忘れた。興味なきものに無駄遣いする記憶容量の存在など許さない」

金属鎧兵士は額に落ちてきた薄い金髪を、心底うっとうしそうな顔でかき上げる。

「で、紡ぐ家のトカ。私の時間をあと一瞬でも浪費させる気なら、おまえの手でおまえの口を縫わせるぞ。裸になれ」

うつつとうしいのはわたしだったのか！
桐花は汗も凍ったように思えた。

「トカごめん、遅くなって」

若草青年が部屋に転がり込んできた。両手一杯に本を抱えている。発音が聞きづらいつらいつらと感じて、桐花はふと思いついた。鎧兵士たちがどうやら「ネイティヴ」と呼ぶらしいこのアジア系の顔をした水上いかだゲル民族は、なまりが強いのだ。

ひゅつと息を呑む、声にならぬ声が出た。

「なぜ縛られている？」

若草青年の声は低くなり、たつぷり憂いを含んだ。

「額に怪我してる。大丈夫？ ルテナンカーネル、僕は集う家のデ―デと申します。失礼ですが、これはひどい扱いではありませんか？」

日焼けした精悍な顔だが、黒い瞳には柔らかな優しさが満ちている。夜の空がこの色ならば、誰も影を怖がることなどないだろう。

後ろ手に縛られたまま床に転がされていた乙女を抱え起こし、毅然と金属鎧兵士に抗議する若草青年。桐花は男らしい横顔に目を奪われた。

しかし返ってきたのは謝罪どころか、一瞥だつてもう少し時間をもらえるであろう刹那な眼球運動。

「持って帰れ、それはユピテライズではない。腹が減つてうっかり自分の脳みそを食つたんだらう」

「ええつ、自分の脳を！ そんなことは不可能です！」

「当たり前だ。持って帰れ。餌に魚の頭でも与えとけ」

「わ、わかりました」

こいつ、頭の回転が情けなさ過ぎる。

彼はイルカに乗った王子様かもしれない。という期待を、桐花はそつと忘れ去ることにした。

それにしても持って帰れとかそれとか、生き物扱いではない。なけなしの英語力を絞り、ありつたけの想いを込めて見つめた。全霊を賭けて敵ではないと訴えた結果、「裸にする人」から「返却するモノ」に落ちている。ひどい理不尽だ。

まあ良しとしよう、とにかくこの、体罰を自分にやらせる主義らしいサドさんは解放してくれるようだ。桐花はもそもそと体を起す。

「待て。その本は誰の所有物だ」

桐花の腕の縛を解こうとしてくれていた石鎧兵士の手を、金属鎧兵士のブーツ裏が優雅な所作で踏みつけて止めている。

「あ、これはわたしの、」

わたしの本です。と言いかけて桐花は口をつぐむ。

なんだか、と恨めしくなってくる。

なんだか若草青年、集う家のデーデとやらは、ヒーローとして詰めが甘すぎやしないか。

その本、と氷の槍が具現化しそうな氷結視線が指し示したのは。

ぶちまけられた本の一冊、成人向けの雑誌の、落とした弾みで破れたのであるう袋とじだった。

あの絵を誰から買ったのか。誰に売ろうとしていたのか。あのわいせつな詳細すぎる絵を。

きっとそんなことを尋問されてたんだと思うが、桐花の英語力では、あれは両親の経営する本屋の商品のごくごく一部であって、地球の日本では法律違反でも何でもなくて、むしろ生ぬるい部類で、いやそれはどうでもいいけれども、店番してて昼寝から覚めたら本ごといかだに揺られてて、などと説明できるわけもない。日本語でも説明できる自信がない。

若草青年は真っ赤になつてうつむき石化しているし、石鎧兵士は前屈みで退出したまま戻らない。残った金属鎧兵士が、尋問は徒労

と悟るのは早かった。尋問を重ねる石鎧兵士へ、世界で一番無駄なことに時間を費やせる阿呆を観察する目を向けていた。

アワアワと口も思考も空回りさせる桐花を、金属鎧兵士は蔑視の見本みたいな逆三白眼で見下ろす。広間にいた数人の石鎧兵士を呼びつけ、「厩舎につまんで投げておけ」と、今日はいいい天気ですからの何気なさで命令した。

厩舎。主に牛や馬などの家畜を管理する施設。

金属鎧兵士は軍人だ。軍の厩舎ならば軍馬の小屋だろう、と桐花は思っていた。

さすがにつまんで投げるのは物理的に無理があつたのか、兵士たちは蔓で編んだ大きな籠に桐花を入れて籠ごと厩舎に放り込んだ。

鷲の厩舎に。

象ほどもある巨大な、翼を一振りするだけで桐花の籠が毛玉のように吹っ飛ぶくらいの、そんなのがウヨウヨと群れている厩舎に。

桐花の籠は鷲の、牛をも食いちぎりそうなくちばしに突付き回され、馬もひねり潰せそうな爪に蹴り回され、一晩中、ギヤーと音の出る楽しいオモチャとして鷲たちを大いに楽しませたようだった。

5・身から出てた錆

「鷺の餌になりたいなら、そのまま寝ている」

一晩中ねんごろに巨大鷺多数にもてあそばれて、桐花入りの籠はボロボロだった。鷺たちには適度な運動だったのか、明け方には藁代わりらしき乾燥させた海草に座り込み、フゴーと盛大な寝息を立て始めていた。

桐花は厩舎のなるべく端までハムスターの回し車よろしく籠を移動させ、ささやかな休息を取ろうとしたのだが。

「ザッ！ ザッ！」と、尊大さの溢れ出る足音が近づいたかと思うと、そう勧告した。立ち止まりもせず桐花の籠の脇を特急通過していく。

「わあああ起きてます！ ていうか、いきなり最後通牒ってなに、起きろくらい言うてから……眠い」

突然である上に睡眠不足に空腹で、英語なんか出てこない。日本語でわめいてみたが力が続かない。

「口ごもっていると、厩舎の奥の巨大な扉がゴゴゴと開いた。白くまぶしい朝の陽光に桐花は目を細める。寝ていた鷺たちが首をもたげ、足踏みをし、羽を揺らして色めきたつ。」

「搬入！」

若い兵士らしき力強い、朗々とした声が響く。間髪入れずにヤー！ と掛け声がし、地鳴りと共に、数人の兵士たちが厩舎へ台車を押し込んだ。象サイズの巨大なグッターした何かが載っている。鷺たちの歓喜らしき鳴き声が厩舎の屋根をビリビリ震わせた。

「配給！」

凜とした朝陽と涼やかな海風の中。鷺たちのくちばしと爪による世にもグロい光景に、『そのまま寝てい』ないことを主張しようと、桐花は狭い籠の中で精一杯シャキンとしてみせた。

そろりと横目で確認したが、鷺の餌発言の主はやはりあの目が色

違いの金属鎧兵士だった。桐花のシャツキリ背筋を涙も出ないくらい華麗に無視して、鷲の餌担当兵士の一人を呼びつけ指示している。内容は、背後の鷲たちによるグヌチャッだのベキゴリブチッだのグ口音の饗宴に消されて、桐花の耳には届かない。

餌担当兵士は平静を装う努力をしているようだった。直立不動でかしこまっているものの、中南米系のよく語る目が「何言ってるんだこの人」的な恐怖と驚愕のオーラを放出している。

桐花の胸に嫌な予感、いや確信が渦巻く。

「了解、ルテナンカーネル」

指示を受け終えた餌担当兵士が腰の短刀を抜く。とろりと艶やかな刃は、金属でなく磨き抜かれた石のようだった。石刃は桐花の籠の繋ぎ目をバリバリと裂いた。

「いやー！ 起きてるってば、餌イヤァッ！」

抗議虚しく、籠から床へ振り出される。手首を金属鎧兵士に捕獲され、ギャーと叫んだ。

「全ての戦闘本能を持つ生物は、恐怖をよく嗅ぎ分ける」

「……………はい？」

グリーン、と桐花の腕は手首をもがれるかという乱暴さで、心臓の高さに修正させられた。

「生き餌にされたいなら、そうして恐怖を振りまくことだな」

「……………はあ」

食われなくなきや静かにしる。餌にする気はない。という内容を、なぜストレートに言えないのか。事態は理解したが、この金属鎧毒舌兵士のひねくれ具合は桐花には理解できなかった。

ひねくれ兵士は片膝をつき、桐花の手首に指を当て、しばしじつとした。かと思えば突如ポイと放り出して舌を出せと言った。

「切り落とすんですか？」

無言のまま、周囲の気温が二十度下がる。桐花は素直に舌を出して見せた。一瞥の後、瞼の裏を確かめたりされる。

「もしかして、医者？」

「昨晚はよく眠ったか？」

巨大鷲のサッカーボールにした張本人が、シラツと何を！ 髪はなまはげ状態な自信があるし、擦り傷打撲だらけだし、顔はむくんでくまが出来ているのは間違いない。

寝たわけないだろバカ、と日本語のしかも小声で呪ってから桐花の脳は英単語を掻き集めた。

「見てわかるでしょ」

「見てわかるだろう」

むかつく、と桐花は日本語で呟いてやった。呟いてから、桐花のあちこちの擦り傷を検分する金属鎧軍医を眺めた。

指先は普通の人間みたいに温かいんだな、と思う。

あの背筋凝結視線でさえなければ、瞳の色だって温かい。柔らかかな土の色と、草原の色。一対で一幅の絵のようなのに、目つきで全てが逆ベクトルへ振り切れている。

ふと、淡い金の前髪の、一房だけが白いことに気づいた。短気で神経質そうだからなあ、と桐花は妙に納得した。軍医は立ち上がり、軍服の膝の汚れを優雅にはたいた。

「狂人の演技にしては馬鹿すぎる」

なんだとー！ 神経質は撤回、無神経極まりない！

「ネイティヴのスパイではないようだな」

桐花はあんぐりした。

「スパイ！？ 違います、あ、なるほどあの人たちはわたしが狂ったと思つて医者に見せようと……待ってください、えーと、ドクター……ドクター・ルテナンカーネル！？」

ルテナンカーネルと呼ばれていた、と思ひ出して背中を呼び止める。すると意外にも効果があった。

「ドクター……何だつて？」

「ドクター・ルテナンカーネル？」

振り向いた色違いの瞳は、珍しく生物生存可能な温度があった。しかし徐々に眉根が寄り、ドクター・ルテナンカーネルは眉間をつ

ねるようにしばし指で押さえていた。

「ややあつて、そのままの体勢で呻くように言っ

「持って行け」

「せめて「連れて行け」と！」

断然抗議しかけた桐花に一閃の注意も払わず、ドクター・ルテナンカーネルは連行を命じた。

鷲の餌担当の兵士はドクター・ルテナンカーネルが厩舎から出て行くのを、直立不動で見送っていた。陽光を受けてキラキラ輝く金属鎧が見えなくなると、途端にざわめきだす。

「笑っていた。ルテナンカーネルが笑っていた。今日こそ月が落ちてくるんだ」

「何より、ルテナンカーネルが厩舎に人を捨てたのを覚えていた。ありえない」

「彼女がドクター・ルテナンカーネルと言った時、鷲のデザートになると思った」

「いつ、ドクター・ルテナンカーネルが笑ったというのか。桐花は首をひねる。」

「あの人は、ドクター・ルテナンカーネルではないんですか？」

餌担当兵士は問われてやっと、桐花の存在を思い出したらしかった。中南米系だの白人だの、様々な色の顔が一斉に桐花を振り向いた。

「ドクターは正しい」

「ルテナンカーネルも正しい」

「だがドクター・ルテナンカーネルは正しくない」

その後ベラベラと説明が続いたが、入り組んだ文章は桐花には理解できなかつた。

まあいいや、たぶんこういうことだ。カーネルと言えばフライドチキンを抱えたおじさん、カーネル・サンダース。つまりカーネル

は下の名前。ファーストネームだけをミスターだのドクターだのに繋げるのは、基本的に間違っていたはず。

桐花はOKと頷いておいた。

「さて、こつちへ来い。食事と清拭をさせると命じられている」

「あ、そう！」

実はお腹が空いていた。トイレも我慢していた。桐花は思わぬ朗報に弾んだ声を出す。

が、兵士たちは揃ってポカンと大口を開けた。次にある者は赤面し、ある者はゲラゲラ笑い出す。

「えー……あつそう、つて変だった？」

「彼女、最高に狂ってる！」

爆笑していた兵士が肩をけいれんさせたまま、指で地面に文字を書いた。

ass hole。ケツの穴。

「おまえさんの『あつそう』は、ネイティヴの発音だとケツの穴だと思われる」

桐花は若草青年の甚だしい赤面を思い返していた。イルカタクシーと遊んでいた時だった。あの時、「あつそう、そうそういい子だね」とか言ったような気がする。他にどんな発言をしたかと記憶を掘り返した。

「だめだめ？」

兵士はまたも腹を抱えて笑い転げる。地面に書かれたのはdamnit、ちくしょう。

「……タクシー」

兵士は笑いすぎで気管を鳴らし、「殺す気か！」と息も絶え絶えになっている。地面にはtake a shit、ウ コしろ。

いいねタクシー！ あつそう、そうそう上手だね！ だめだめ渡して。いけっタクシー！

いいねウ コしろ！ ケツの穴、そうそう上手だね！ ちくしょうちくしょう渡して。いけっウ コしろ！

若草青年の前で、大声で、イルカ相手にそんなことを連呼した気がする。花の乙女がそんな下品な発言を嬉々として叫びだしたら、それは口をふさがれて医者に強制連行されても仕方ない。

そして軍の医者が呼ばれたものの、軍は狂人のフリをしたネイテイヴのスパイじゃないかと疑ったと。

この一連の無体な扱いは自分の英語の発音の悪さ、ネイティヴのなまりがまずい具合に重なった結果だったようだ。頭を抱える桐花の背を、兵士はバンバン叩いて急かした。

「さあ行くぞ、遅くなるとルテナンカーネルに白魔の矢を食らっちゃう。あれは戦場以外で拝みたくはないね」

6・その軍人が護るもの

湯の入った壺と布をもらって体を拭き、正体不明な赤身肉のステーキを平らげ、桐花はようやく人間に戻った気分になった。

待っていた餌担当兵士が軍の食堂から桐花を連れ出し、さらに城に近い建物へと歩いていく。通行人の軍服率が一気に増え、建物も装飾性より機能的なデザインが目立ち、軍の関連施設が多い地域であることを窺わせた。

箱のように窓のない建物の前で止まる。石造りに薄黄緑色の鋳物製らしき扉が据えられ、その前にはやたらと筋肉質な警備兵が仁王立ちしている。それこそ仁王像のように動かない警備兵に、餌担当兵士はキビキビと何かを告げた。警備兵がフクロウのように首だけ回し、扉の内部へ短く怒鳴る。

呼応して扉が開いた。地獄の門を連想させる、不吉な緩慢さで。警備兵はデカさに似合わぬ機敏な動きで、サツと内部への道を空ける。餌担当兵士も脇に退いた。ここから先は一人らしい、と気づいて桐花は踏み出すのをためらった。

「進むんだ、発音が最高にクレイジーなお嬢ちゃん」
餌担当兵士がニツと笑う。

「また厩舎に放り込まれたら、今度はもう少し丈夫な籠を用意してやるよ。グッドラック！」

助けてはくれないのか。
ドクター・ルテナンカーネル・瞳色違い金属鎧軍医に会うのは、幸運を祈られるほど不運な出来事らしい。うん、太陽が東から昇るくらい清々しく納得。

できれば逃げたい。逃げたいが、あの巨大鷲を捜査犬よろしく放たれたら、十分に消滅した台車の餌より早く処理されるのは間違いない。丸呑みでいける。生きてまますで溶かされるのは、老衰死希望の桐花としては不本意極まりない。

扉の奥は精神的地獄。逃亡は身体的地獄。選択肢の悲惨さに、悲嘆を通り越してむしろニタリとしてしまう。

餌担当兵士がヒイツ、と飛び上がってから駆け出した。

「お嬢ちゃんが真性のクレイジーに！ 出たぞ、ルテナンカーネルの犠牲者がまた出たぞおお」

通行人や周囲の家々から悲鳴が沸き、あちこちでドアや窓がバタン！ バタン！ と病原菌を締め出す勢いで閉じられ、あたりは瞬時にゴーストタウンと化した。ブツブツとお経か祈祷か悪魔祓いの大唱和が渦巻いている。空襲警報だってこんな効力はないだろう。

桐花の唇からまたもフフリと微笑が漏れる。

あの様子では既舎に放り込まれても、籠も用意してもらえまい。どっちに進んでも丸呑みゴックンだ。

桐花は重すぎる足を引きずって、中へと踏み入れた。

暗い。

背後で扉が閉まると、一段と暗くなった。瞬きをして、目が慣れるのを待つ。どうやら通路がまつすぐ奥へと伸び、両側には小部屋が並んでいるようだ。天井は高い。

ずらりと並ぶ小部屋の一つから、光が差していた。部屋の入り口と同じ長方形に切り抜かれた白い光が、通路にくつきり浮かんでいる。

不意にすぐ近くに人の気配を感じて、桐花はぎよつとした。扉の脇にちんまりと痩せ枯れた老人が立っている。軍服だが鎧は着けていない。曲がった小さな背、刈り込まれたゴマ塩頭、深く皺の刻まれた褐色の肌、開いているのか判別できない伏せ目。木彫りの放浪僧みたいだった。

魔界の門番かもしれない。

「あの、」

どこへ行けば。問おうとした桐花の腕をかすめるように、節くれ

だち、関節の曲がった指が光の長方形をさす。腕以外は顔も視線も微動だにせず、低い宙のどこかに定められている。

ありがとう、と言って桐花は光のこぼれる小部屋へと歩きだす。数歩進んだところで、桐花の背に乾いた小さなささやきが届いた。

「どこから来た？」

思わず振り向く。

誰もそんなこと訊かなかった。トカという自分に似た誰か、トカがおかしくなったかスパイを企てているか、いずれにしるトカがどうになつた、としか考えられていないようだった。

この老人は違う。

桐花は今、誰かが用意してくれたのであろう、水上ゲル民族のすとーんとした白い服を着ている。髪は彼らと同じように後頭部で結わえてはいないが、顔立ちからしても服装からしても、今の桐花はネイティヴに映るはずだ。どこから来たかなんて、空中都市の下のいかだ群だと、この街の軍人ならば訊ねずともわかるはずだ。どこから。

現実から、だと思う、ここが夢の世界であつて欲しい、というかそれしかない。だが桐花には夢と片付けるのがためらわれた。

「なぜ、来た」

答える前に質問を追加しないで欲しい。どこから、だけで頭が精一杯なのに。

桐花は少し考えてから、正直に答える。

「わたしも、それを知りたいんです」

薄暗闇で、息をひそめて立ち並ぶ小部屋。天井一杯まで作りつけられた棚には輪郭の崩れた冊子、像の断片、巻かれた何か、原型のわからぬ塊などが整然と置かれ、入場者のいない博物館のような不気味さが漂う。埃や土や革や布、年代を経たものに特有な重く湿り気を帯びた匂い。

ミイラがウガー！ と叫びながら躍り出てきそうな部屋の数々を、桐花は気配を殺して通過していく。

明かりがついているのではなかった。導かれたのは、陽光の降り注ぐ部屋だった。壁は素っ気ない灰色の石だが、天井は建物の扉と同じ薄黄緑色の、もっと透明度の高い石板で造られている。中央には大きな石の机が据えられ、本が高層ビル群のように積み上げられていた。

「わたしの本！」

桐花は駆け寄ってひとつを手取る。

日本語の本だ。両親の書店に並んでいた本。初めてこの世界を目にした時、桐花と一緒にいかだに載っていた本。インクと紙と現実世界の匂いがする本。

「昨夜、集う家のデーデが全て届けてきた」

本製ビル群の向こうから急に声がして、桐花は心臓を口から取り落としそうになる。ビルの隙間からそうっと覗くと、ベンチに足を組んでページをめくる金属鎧軍医がいた。

「集う家のデーデ？」

「集う家は動物を飼育・管理する一族だ。イルカの調教もする。ネイティヴは動物を友人とみなすから、集うと表現している。草で染めた緑色の服が特徴だ」

ページをめくる指を止めず、本から顔を上げず、軍医は機械的なから説明してくれた。

恐らくトカの精神を心配してのことだったろうが、結果的に桐花をサド軍医送りにし、桐花の頼みではあったが、風俗規制のあるらしい社会の軍人の前でキワどい写真を大公開してくれた、例の若草青年が「集う家のデーデ」らしい。

その服を持ってきたのもデーデだ、と軍医は付け加えた。

「白い服は紡ぐ家の者だけが着る。ネイティヴの家系や歴史を刺繍で記録・保管する一家は、事実を染めずに刺繍で伝承していくのを使命としているからだ。……意味が分からない、妙な英語

だ

最後の言葉は、読んでいた本に対する感想らしかった。コンピュータ言語の本だ。確かに英語ではあるが、コンピュータのなさそうな世界じゃ話すのムリ。と桐花は、ネイティヴの職業と服の色について教授してくれた相手に対して説明を放棄した。

軍医は本をそつと閉じ、慎重に机上のビル群へと重ねた。立ち上がったって本の摩天楼を眺めながら、ゆっくりと首を振る。

「ある時点から間違った記述ばかりだ。だが正しく古い文明の遺物だ。だが進化している」

『だが』の使い方がそれこそ間違っている気がする、と桐花は言いかけたが、鷲の胃袋が見えた気がしてやめた。

「創造主のビリヤードがなければ、文明はこうなっていただろうと思えるほどに」

「創造主のビリヤード？」
「ネイティヴは大精霊の流浪と呼ぶ」

大精霊の、何ですか？ 桐花が首をかしげながら仰いだ先には、はつきりと値踏みする異色の瞳があった。脳の最奥まで見透かして探りまわり、見えない伝票に値段を書き込んでいるような気配がある。

「鯨はどうだった。食わせるよう、指示しておいた」

「鯨？ ああ、食堂のステーキ？ あれ鯨だったのかー、食べたことなかった。おいしかった！」

再び伝票に書き込まれている気配がする。

「ネイティヴは、赤い血を流すものを食べない。赤い血を持つものは、生物として人間と同類だとしている。よって鯨も決して口にしない」

「へー！」

自然派な民族だなあ、と桐花は日本語で感心した。観察してくる色違いの目の奥で、伝票がめられた気配がした。

「創造主のビリヤード、大精霊の流浪は、数百年前に起こったと伝

えられている星の大移動だ。一夜にして木星が接近し、火星は地球を守るように立ち上がり、木星に飲み込まれた。月は大きさが二倍になるほど近づいた。地震、津波、暴風雨、噴火、あらゆる天変地異が大地と海を根底から作り直した」

この人、ノストラダムスの大予言とかハルマゲドンとか、いきなりソレ系な話を始めたよ？

「生き残った人類はわずかだった。文明の痕跡は欠片ほどしか残らなかった。それでも先祖たちは身を寄せ合い、記憶と知恵と新たに与えられたわずかな資源をかき集め、数百年をかけて文明をここまで復興させてきた」

ここ。と言いながら軍医の指先が机をトンとさす。

「生態系にも変化があった。環境の激変に絶滅した種もあれば、突然変異も多発した。様々な原因不明の変化の事象を、木星化、ユピテライズと呼ぶ。木星との関連性は定かでないが、そう呼ぶ。驚も、創造主のビリヤード以前は人間の肩に乗るほどの小ささだったと言われている」

ここにあるのは、と言いながら軍医は頭をめぐらせ、石壁を透かして收藏された品々を眺め渡したようだった。

「壊滅的な打撃を受けて断絶しかけた、かつては繁栄していた文明の欠片」

珍しく、いや桐花にしてはこれこそ天変地異レベルで驚くべきことに、軍医の口調に謙虚さがにじんでいる。ユピテライ！ と叫びそうになるのを、命がけで我慢した。

「人類の叡智、それらを再び結晶化したもの……文字とは、記録とは、本とは、遺産だ。真理を求め、よりよく生きようと命を燃やす人類にとって、誰にも侵されてはならない崇高なる宝だ。私はいま世界で最も強大なこの国で、その聖域を守る番人だ」

現代なんだ、と桐花は思った。

思考でなく直感で、脳でなく魂そのもので、理解でなく悟った。この世界は桐花の世界とは違う。それでも地球で、現代なのだと数百年前のどこかの時点で分岐して、桐花の世界とは異なる歴史を重ねてきた地球なのだと。

創造主のビリヤード、大精霊の流浪がなぜ、どのように起こったのかはわからない。小天体の衝突かもしれない、宇宙空間が歪んだのかもしれない、ただ本当に創造主が気まぐれに、太陽系でビリヤードしちゃっただけかもしれない。理由などいい。

この建物に収蔵されたものはおそらく、この空中都市を建設した国家、金属鎧兵士たちの属する国家が丹念に拾い集めた人類再構築の足跡。同時に実現手段の失われた、今となっては奇跡のような科学技術の粹。

軍医は、桐花の本を丁寧に扱った。敬意を払った。所有者である乙女を籠に閉じ込め、鷲の厩舎に一晩放置するような人でなしのくせに。

桐花は、頬を伝い落ちる涙がこんなに熱いと感じたことはなかった。

それまでの無体な扱いに対する涙ではないと、言い切れはしないが。自分の無知さに泣けた。

書店の娘として生まれながら、本に囲まれて育ちながら、本の価値など本当は全く理解していなかったのだ。紙に刻まれた文字ひとつひとつが、人類にだけ許されたかけがえのない至宝であることも。「ラウー・スマラグダス。アダマス帝国軍のドクターで、ルテナンカーネルだ」

……名乗ったよね、いま。はっとして、桐花は慌てて頬の涙を拭った。

「君は誰だ」

「え」

「紡ぐ家のトカ、と識別されているのは知っている。だがこの本は

ありえない。材質も製法も、内容も。地球にはまだ我が帝国軍の見知らぬ土地があり、そこでは古の文明が途切れず発展していて、君はそこから来たのかもしれない。だがそれなら、創造主のビリヤードの記載が全くないのはおかしい」

軍医が手を置いた本の山は百科事典や図鑑、自然科学に関するものばかりだった。記述は日本語だが、図や英語も含まれている。軍医はジャンルの混濁した数百冊の中からそれらを選別し、散在する英単語を拾い、推理を重ねて行き着いた結論を持っているようだった。

「一晩で調べたんですか。こんなにたくさん、知らない日本語の本を全部」

桐花を鷲に遊ばせているあいだに。気高い使命感をもって一睡もせず、未知の難解な本と向き合ったに違いなかった。

桐花の心の中で隔壁がひとつ、温かな余韻を残して溶けていく。

「わたしは、江藤桐花つていいいます。江藤が名字で、桐花がファミリーネーム」

「トーカー」

「桐花」

「トーカー……桐花」

発音は大事だ、と桐花は実感する。発音ひとつで「あっそう」はケツの穴になり、見知らぬ人の名は自分の名として魂を呼び起こす。懐かしい響きに、桐花は頬が緩んだ。軍医の目尻も温暖化したようだった。

「あっそうだ辞典！ 辞典があれば！」

不意に思い出して日本語で叫び、本の山々を探索する。英和と和英を掘り出して、桐花は胸をなでおろす。よかったこれがあれば、コミュニケーションがもつと円滑に！ 頭はおかしくないと知ってもらえる！

辞典を抱えてニッコリ、そして固まる。軍医の顔はもはや、北極熊も生存不能な永久凍土に変貌していた。

「……あの卑俗な絵といい、おまえの世界は発達していないから低俗だな」

卑俗な絵？ 成人向け雑誌の袋とじのこと？ むむ、そういえばいま、発音は大事と実感した次の瞬間にケツの穴と叫んでしまった気が。youはyouでも君からおまえに格下げされた、白目面積の増加量へ如実に反映されてた。

桐花は慌てて首を、髪で自分の頬が鞭打たれるくらい強く振ってみせる。

「違うんです。違うんですドクター・ルテナンカーネル、わたしは馬鹿なわけでは……」

ドクターは正しい。ルテナンカーネルも正しい。だがドクター・ルテナンカーネルは正しくない。

厩舎の鷺の餌担当兵士の声が脳裏をよぎる。

手にした英和辞典をこわごわ引いてみる。

ルテナンカーネル。

空軍中佐。

説得力を失った沈黙の痛さに、桐花が永久凍土に穴があったら埋まりたいと真剣に切望していると。

「中佐、」

博物館の扉番である木彫りの放浪僧風老兵が、カサカサとした足音を立てて入ってきた。

「幽霊船が、湾に。凶事とネイティブが大騒ぎに。提督ジュニアが鎮圧に。中佐に応援要請が」

返事もせず軍のとおつてもお偉いさん、中佐は部屋を飛び出していた。桐花を後ろ手に指差し、それを石棺に詰めておけ！ と言いつつ捨てて。

帝国軍の忠実なる老兵さんは、乙女がどんなに叫んで懇願しても、即時に軍令を遂行した。

彼の護る「人類の叡智」には、人の心を効率的に凍結粉碎する方法も優先的に含まれている、と桐花は石棺を涙で濡らしながら思っ

た。

7・ 驚は見た！

偉人は言った。元気があれば何でもできる。

腹が減つてりや何でも食える。眠たかつたらどこでも寝れる。

ザツザツという音に合わせて体が上下に揺れている。背中と腿裏に強く、それでいて優しい、安心と安定を保証する温かさがある。

この感覚には覚えがある。

父は、本に夢中になりそのまま眠ってしまう桐花を、小さい頃によくこうして運んでくれた。目覚めた時に騒がないよう、桐花の腹に読みかけていた本を乗せて。きちんとしおりを挟んで。それがわかってから、桐花は夢うつつに父にしっかり抱きついたものだった。幼い記憶どおりに抱きつく。

父はそんな桐花をお姫様を扱うように、柔らかなベッドへと降ろしたものだっどサツゴロゴロゴロン。

天上の雲から奈落に投げ落とされたかの衝撃に、桐花は全霊でパチクリした。

視界は驚。下からのアングルで、超至近距離。漆黒の胸に純白の頭、てろりと黄色い鉤のくちばし。そこが冥界への洞穴かのようにカツと開いて、生温かい息が桐花の顔面に吹き付けられた。

くさッ。

背の下に固い地面と、乾燥させた海藻のガサガサした感触がする。周囲のあちこちで、恐怖の一晚で鼓膜にしみこんだ、飢えた驚たちのうごめく気配がする。厩舎だ。

しかしいま、桐花は驚たちがむしろ可愛く感じられた。愛しいのではない、可愛く見えただけである。なぜなら、象サイズの驚よりはるかに目つきが酷薄で、はるかに容赦なく人を解体するであろう生物に見下ろされていたからだ。

「起きてる」

反射的に言う。

「構わない、ゆっくり眠れ」

すらりとした体躯にキラキラ輝く金属鎧をまとい、白金の髪を海風になびかせ、ラウー・スマラグダス中佐はあっさり許可を出した。「最近は驚の餌の鯨が不漁で困っていた」

「起きてます！！」

目覚めが一番の悪夢だワイ。

桐花はゆっくり永遠に眠れるオプシオンを全力で遠慮させていた。どこかでひそひそ声がした。

「よかった、鷲が腹を下したら俺らの眉間に氷穴が開く」

「それより見たか、ルテナンカーネルが姫抱きで運搬してたぞ。ドリブルさえ光栄レベルだというのに」

「女嫌いじゃなかったのか、憎いっでも愛しいっキーツ」

餌担当兵士たちらしい。

運搬。桐花は背筋シャッキリで起立してみせつつ記憶を探る。

中佐殿が急用で博物館から飛び出してゆき、桐花は石棺に詰められたのだった。意外にも石棺の中はひんやりと心地よかった。ベツドの壁際に貼りついて寝るのが好きな桐花はつい、石棺の壁にも貼りつきながら睡眠不足解消にいそしんだわけだが。

こいつにはわたしが飼葉桶に盛られた餌に見えたわけだな、と桐花は睡魔に意識を揺すられながら思う。

「髪を結べ。邪魔だ」

あのう、中佐殿。わたしの髪が結ばれてなくて、あなたに迷惑をかけたことがありますか？

非難でなく純粹に疑問を無言で語ってみた桐花だったが。

「剃るとは殊勝な心がけだ。軍曹、鯨解体用のナタを。なるべく血糊にまみれた刃のこぼれてるものを」

今日もいい海風だ。

とアテレコしたくなる爽やかさで餌担当兵士へ指示を出され、慌てて手ぐしで髪をかき集める。しかし結ぶものを持っていない。ヘアゴムの支給はなさそうだし、そもそもこの世界にそんなもの存在

していそうになかった。困った。

紐でもないかときよるきよるしていると、中佐がおもむろに人差し指を立てて桐花の注意をつかまえ、視線をドラッグ&amp;ドリップした。足元の乾燥した海草に。パリパリした繊維質、海くさい紐状のソレに。

鷲の糞が付着してるかもしれない乾燥ワカメで髪を縛れというのか。

「お嬢ちゃん、うっかり手を滑らせてあんたが首ごと剃っちまうのはごめんだぜ！」

と怯えつつもしつかりナタを用意している餌担当兵士が進言してくる。桐花とて、自分で自分をギロチンしたくはない。

細くて長くて丈夫そうな乾燥海草を使い、ナイティヴのように後頭部でひとつに結わえることにする。が、慣れない伸縮性ゼロな素材で量の多い髪をまとめるのは至難の業だった。

モタモタする横で、中佐が待ち時間のカウンタダウンを始めている気配がする。使用している不可視の砂時計の砂粒は、片手で数えられるほどしか入ってなさそうだ。同時に桐花の命の残り時間も減っているのだろう。餌担当兵士がナタだけでなく台車まで用意した。

「不器用は犯罪だ」

判決が出た。中佐の手がグイと桐花の頭をつかむ。

「いたっ、いたたたたハゲる、ハゲるーっ！」

髪をギリギリ締め上げられ、それを伸長力限界まで引っ張られた海草で縛り上げられ、桐花は暴れた。

顔の形変わってるんじゃないか、ストッキングかぶった時のつり目になってるんじゃないか、それよりハゲる、髪を結わえる前にトウルンと全部抜ける、お父さんに泣かれる！

ガフツ、こいつ押さえるために踏んだ、乙女の背中を膝でガハツ。

「不手際には手を汚さず腹を切らせる主義のルテナンカーネルが！」

「女の髪を結ってやってる！ 今日こそ木星が爆発するんだ！」

「煮豚の肉を縛ってるようにも見えるが、うらやましいっ」
背面に破壊力抜群のニーをくらい、咳き込む桐花に中佐の涼やかな命令が降り注ぐ。

「くちばしで運ばれたいなら、そうしている」
え？ と顔を上げた桐花の前に、乙女を踏みにじった中佐はいなかった。

鷲が従順に白い首を下げている。その漆黒の背の鞍へキラキラ金屬鎧がひらりと飛び乗るさまは、夜空を横切る彗星を思わせた。

彗星が黙って、鞍の前部の空いたスペースを指差す。鷲が準備よく、馬でも運べそうなくちばしをカパツと開ける。

人間をくちばしで運搬するのは、コウノトリだけでいい！
桐花はまさしく死にモノ狂いで鷲の背によじ登った。

遊覧飛行ができる、内心喜んでいたので。厩舎を出るまでは。厩舎の脇の断崖絶壁を蹴り、鷲が急降下するまでは。

ギヤーという自分の叫び声さえ、風に吹き飛ばされ後方から届く風圧で目から押し流された涙がこめかみを伝う。胃が浮く。ついでうか身体が浮く。落ちる落ちる、いやすでに鷲ごと落ちてるけど、その鷲から落ちるってうか飛ぶ！

安全ベルトなしの天然ジェットコースターで意識まで飛びかけた桐花へ、背後から淡々としたアドバイスが寄せられた。

「イルカと同じだ。膝で挟め。爪で空中キャッチされたいなら、気絶しろ」

握りつぶされるがな。と言外に続いている。

「あの、中佐」

脚が折れる限界まで膝に力をこめ、鞍を挟む努力をする。

「落ちたら中佐が受け止めるといふ選択肢を忘れてる」

「ラウーと呼べ。空から落下した人間が兵器としてどれほどの破壊力を持つか知りたいなら、演習に参加させてやる。実弾として」

生身の人間が受け止められる物体ではなくなっている、ということですね。目撃談ですよ。怖くて後ろを振り返れない。

風圧で明瞭でない視界の遠くに青が広がる。海。ネイティヴのいかだゲルが、千代紙の紙吹雪をまいたように浮かんでいる。ようやく鷺が落下角度を緩めて滑空に入った。桐花も一息つく。

「あれ、中佐」

ネイティヴ居住地の風景が何かおかしい。

「石柱がない」

海に林立していたはずの石柱が見当たらなかった。ネイティヴのいかだは遮るもののない波間で所在なげにぶかぶかしている。

「ラウーと呼べ。満潮の時刻だ」

振り返ると石柱の上に築かれていた城塞都市が、海面から数メートルもない。何メートルものはしごを登ってたどり着いたはずの空中都市は、海辺の街に変わっていた。

なんて満ち干の差。そうか、月が近くなったから。

驚嘆する桐花と背後の中佐を乗せて、鷺は岩山が抱く楢円の湾の沖合いへ滑り出て行く。

岬の突端に空母を思わせる大きな箱舟が横付けされている。甲板では何頭かの鷺が羽を休めている。中佐が短く指示すると鷺は翼を立てて減速し、空母の甲板へと舞い降りた。

「おう来たか、考古学者」

甲板に陽気な声が響いた。

声の主を探す。鷺の手綱を受け取りに走ってきた数人の石鎧兵士の奥から、一人だけのんびりと歩いてくる青年兵士がいる。その方向へ、中佐はひらりと音もなく降機した。

華麗に置いてけぼりをくらった桐花は、鷺整備係らしき兵士たちに手助けされて転落気味に降りる。中佐へ一方的に親しげな挨拶をぶつけていた青年兵士が、ん？ と肩越しに顔を覗かせた。

「どうしたネイティヴなんか連れて。あー、俺の嫁候補？ ナニおまえまで加担してんの、あの計画」

嫁。

「別にいいけど、タイミング悪いだろ。いま殺気立ってるじゃん、あいつら。捕鯨やめるだけでもうるさいのに、幽霊船を壊せとか。死者の魂を返してやれとか。アレ壊したら俺がおまえに死者にされるっの」

「しませんよ。生きたまま死者の世界へ行かれるのを見送るだけです」

「実績がありすぎて笑えねっつーの」

生まれながらにして陽光に愛されていそうな人だった。肩まで波打つ黒い髪、彫りの深い顔は磨いた銅のような肌をしている。骨太な体格にまとった分厚い筋肉を作るため、一体何頭の鯨を費やしてきたのかと桐花は聞きたくなくなった。体脂肪率は果てしなく低そうで、フン！ と胸を張れば、石板を繋いだ鎧が弾け飛びそうだった。

嫁。

その石板は水晶に血を滴下したような色を内包しており、美しくもどこか禍々しさを漂わせている。桐花は驚整備兵や警備兵の石板が、無色か白の半透明で統一されていることに気づいていた。どこかの口の極悪な中佐のキラピカ金属のように、特別な鎧は特別な地位だと考えてよさそうだった。

「嫁！？」

生きたまま死者の世界へご案内も気になる、実際に自分も半分足を突っ込まされてる、けどいま議題にすべきはここだ！

桐花が声を張り上げると、黒い頭だけが振り向いた。ん？ と、頭ふたつぶん上から反応が落ちてくる。体が動くまゝで、鎧の表面で炎が揺らめくようだ。

「うん。嫁。喜べ、俺はモテるぞ」

何を喜べというんだ！

「愛人たちの悔し涙をせせら笑えるぞ」

そんな趣味はない！ えっ 愛人？ しかも複数？

「ユピテライズしたデカ猫も飼ってるぞ。あいつの腹毛に埋もれて寝るのはいいぞー至福だぞー」

ほほうそれはぜひ詳しくお話を伺いたく……………。

「いえ」

桐花が食いつきかけた時、大海も凍らす北極の寒気があたりを包んだ。

「あなたの花嫁候補ではありません。私の助手です」

「助手？」

二人の声がハモる。

「大量の本が出てきましたので、翻訳させます」

聞いてない！

「言っでなかつたがそういうことだ」

事後承諾か！

「中佐、わたしは」

一刻一秒でも早くあなたの魔手から逃がして欲しいんですが。という続きは氷河期再来の前兆で喉の奥へ強制送還された。周囲の鷲たちが何かを感じて怯えた鳴き声をあげている。

「わたしは喜んでお受けしたいと思います、スマラグダス中……………」

キエエエエエツ！ と鷲が断末魔の叫びを絞り出し、足をけいれんさせる。

「いえ、ラ……………ラウー」

鷲はかろうじて蘇生を果たしたようだった。桐花はニッコリと営業スマイルを作る。その顔のまま日本語で呟く。

「飼い鷲に食われちゃえ」

「What？」

「いえ何でも」

疑惑の視線と仮面笑顔でせめぎあっていると、タイミングよく無
色石鎧兵士が駆けて来た。胸に拳を当ててビシッと敬礼する。

「カーネル・ダルジ、ルテナンカーネル・スマラグダス、幽霊船へ
の案内を務めさせていただきます」

「カーネル……」

石棺に詰められる前に握っていたポケット版英和辞典を、挟んで
おいた組紐のベルトから引き抜き開く。

カーネル。

大佐。

桐花は知らなかった。

フライドチキンを持った好々爺、カーネル・サンダースはサンダ
ースさんのカーネル君ではないことを。サンダース大佐だとい
うことを。軍の大佐ではなく州が授与した称号だが、いずれにしろカ
ーネルは大佐なのだということ。

「大佐!？」

間違いなく中佐より階級は上である。大佐に失礼な言動をとれば、
部下である中佐は十中十、すなわち百パーセント、不敬罪で桐花を
罰するだろう。

桐花は氷の指が心臓に手をかけている悪寒がした。さつき、嫁入
り話にものごくイヤな顔をしちゃったんじゃないか……。

火を含んだ水晶の鎧をキラめかせて、太陽の化身がニカツと笑う。
「そつ、大佐。ビスコア・ダルジ。アダマス帝国軍提督の輝かしい
一人息子！ 待て、俺を知らない女がいたのか。ラウー、俺はいま
激しく自尊心を傷つけられたぞ。信じられるか、俺を知らない女が
この帝国軍下にいたんだぞ!？」

「あなたの後始末をするのが私でなければ、世界があなたを中心に
回っているという妄想の邪魔はしません」

「違うね。俺が世界を回すんだ」

「妄想という点では違いません。桐花、鮫に内臓を与えたいなら突

っ立っている。そうでないならおまえの百科事典を使って、幽霊船の年代と建造地および目的の同定を手伝わせてやってもいい」
どうして常に従わなかった場合の報復を先に宣告するかな。

「おお俺の嫁候補、可哀想になあ、ラウーの助手だって？ 前の助手は泣きながら市壁から飛んじやってさー。満潮だったから命だけはあつたけど。命だけは」

命以外の何が助からなかったのか、ぜひ聞きたくないと桐花は思った。げんなりした桐花の頭をよしよし、とデカイ手が撫でまわす。黒い瞳は底抜けに快活でまっすぐだ。誰かさんと足して二で割って平均気温だ。

「ま、俺の嫁候補ならラウーも壊しやしないだろ」

「嫁候補で持参したではありません。私の助手です」

「おーこわ。さむツ。さあ行くか幽霊船、おおー我らの行く手、木星をも退けてー、進めアダマス帝国軍チャッチャラー！ ラウーにいじめられたら俺に言えよー。一晩でキツチリ忘れさせてやるぞ、嫁候補！」

デカ猫布団を貸してくれるんだ、きつと！

「ありがとう！」

軍隊行進曲らしきものを朗々と歌いながら、ビスコア・ダルジ大佐が歩き出す。桐花が足取り軽くその背を追うと鷺が、生気を取り戻していたはずの鷺がまた、瀕死の絶叫を大合唱した。

8・北極風と太陽

空母とおぼしき巨大箱舟に、幽霊船は横付けされていた。

木靴のようにどっしりとした船体は表面が剥げ落ち、高波が来れば今にも真つ二つになりそうだ。三本備えられているマストは折れ、濁った灰色のロープやぼろ布に埋もれている。波に揺られるたび、木の精が拷問を受けているかの耳障りな摩擦音がした。

空は太古の青色で晴れ渡っている。紅の墨流しで染め分けられた木星が、櫛の歯のごとく突き立つ岩山から覗いている。

背景がどれほど美しくても、美しいほど、幽霊船は異質さを際立たせていた。

「キヤラック船だ。創造主のビリヤード直前のものだな」

中佐は箱舟空母への渡し板を心持ち足早に渡る。

「軍用船じゃねーな。つまらん」

大佐は渡し板をしなせながら軽快に渡る。

「あの、あのっ」

この板、生きてるんじゃないだろうか。

桐花は二隻の船の揺れの周波の違いが生み出す複雑な運動により、猿さえ鮫の口へまっ逆さま確定なうにゃんうにゃん曲がる渡し板の前に、足止めを食らっていた。

ん？ と黒い頭だけが反応して振り返る。

「あーそうだよな、俺の嫁候補は俺がエスコートしないとない！」

「私の助手です」

すでに幽霊船へ渡りきった金の頭が、微動だにせぬまま訂正したのが聞こえた。

平地を歩いているかのごとく、足元も見ずに大佐が引き返して行く。物理の法則さえ筋肉でねじ伏せてるに違いない、と桐花は思った。思った瞬間、ガツと抱き上げられる。重力の糸を引きちぎったかの豪快さ。腕の中で桐花をポンポンと小刻みに跳ねさせ、姿勢を

修正する。

慣れてやがる。

「だけどすごいぞ安定感！ 落つことされる不安なんて微塵もない！ たくましい、頼りになる、わああニカツと笑ってくれちゃって、心も腕も包容力抜群だ！」

「いくぞー、それーい」

「は？」

桐花はその言葉が終わらぬうちに、宙を舞っていた。

「ギャー！」

投げられた途端、桐花の体に重力の糸が巻きついてくる。

首をねじまげて落下地点を探れば、幽霊船の甲板。腐れ朽ちた木の板、帆布だったとおぼしきドブネズミ色の繊維の成れの果て。致命傷になるほど固くはなさそうだったが、空から落ちた人間の破壊力についてほめかされたばかりだ。甲板を突き抜け、船倉と船底を破り、結局鮫の餌じゃないか！

ポン、ポテツゴロゴロゴワン。びちよ。

雨風にさらされてきたのだろう、ぐつちより濡れたドブネズミ色の布の山にうつ伏せながら桐花は、そんな擬態語および擬音語があるてはまる経緯を推理してみた。

びちよ、は考えるまでもなく、いまこの瞬間にも桐花の白い服をドブネズミ色に染めつつある湿った帆布だ。

ゴワン、は陶器の壺を蹴った音らしい。

ゴロゴロ、は体のあちこちが痛むからわかる。

あれ、ポン、は？

「これは人類の文化遺産だ」

三步ほど離れた場所で、中佐が錨らしき鏑の塊を調べている。

「おまえの体は壊れても痛手ではない」

うん、それは今までの仕打ちで痛感してるけど、わざわざ口で駄目押ししなくてもいいだろう！

ズルリと水気を含んだ上体を腕立ての要領で持ち上げる。髪を留

めていた乾燥ワカメが水で緩んだのか、黒髪が滝のように肩へ流れ落ちてきた。

手を差し伸べようとしてくれていた案内役石鎧兵士が、ホラー映画鑑賞中の顔でヒツと唇を引きつらせた。ものすごく逃げ腰な手を借りて立ち上がる。

ありがとう、と言ったら蒼白の兵士はブルブルと首を振り、なぜか中佐を指差し呟いた。

「今日こそ世界の終末です」

「桐花。私は覚えるから、重要だと感じるものがあれば示せ」

「覚えるって何を？」

「全て」

だから何の全てを？ と聞き返す隙を与えず、金属鎧の背中中は甲板を眺め渡しながら船首の方へ行ってしまった。とにかく追うかと踏み出した帆布の下は、甲板が腐り落ちていたらしい。嫌な空振り感とともに重力が桐花の足をつかんだ。

「おっと嫁候補、危ねーなあ」

ギヤーと叫ぶより前に引き戻される。桐花の腰に巻きついた太い腕は、穴から伸びる重力の指をいとも簡単に振り切った。

なんて頼もしいんだ大佐、嫁候補を船から船へ投げ渡す暴挙なんて許してあげたい！

桐花が礼を言つと、大佐が笑う。磨かれた銅色の肌に白い歯が映えてまぶしい。

「なんの。ラウーが覚える前に壊したりしたら、死んでもネチネチ言われそうだからな！」

騎士道精神でなく保身だったのか。

「動かしてもダメだ、あいつはそっくりそのまま記憶するだろ。は、知らん？ あいつが覚えられないことなんかこの世にねーぞ、ユピテライズだもんな！」

え、と仰いでも快活な笑顔は止まらずにこう続けた。

そりゃそーだろ、あの目、ありや普通の人間じゃねーだろ？ おまけに白魔だ。は、知らん？ ネイティヴは帝国軍について情報規制でもしてんのか？ 不屈きだな！

あいつはまー軍規だの軍人の名前所属階級だの、会議での発言だの、戦地で何人何羽の部隊を率いてどう展開してどんだけ戦果と被害があつただの恐ろしく正確に覚えててさ、書記官を路頭に迷わすつもりとしか思えないね！ あー能力を悲観して出家しちゃったヤツもいたね！

俺の可愛い愛人たちの誰に何のプレゼントをしたかも覚えてくれねーかな、ムリだろーな、興味がなけりや一瞬で忘れやがるからなまーだからこの幽霊船も丸ごと覚えちまえば、わざわざ持ち帰らなくてもいいわけ。昼間に堂々とそんなことしてみろ、死者の世界のもんを持ち込んだ、つてんでネイティヴが暴動起こ・・・。。あれっ嫁候補、おまえネイティヴだろ、幽霊船に乗ったりしているのか？ 死出の船だろネイティヴにとっちゃ！ 禁忌の象徴なんだろ！

わー噂をすりや来たよ来たよ、めんどくせーなもつ。

「アダマス帝国軍よ！ 我々は、ただちにこの棺を海の精霊へ返すことを要求する！」

野太い声が響き渡った。

「海の父の腕へ！」

「精霊の元へ！」

船外でシュプレヒコールが渦巻いている。大勢の喚声に、幽霊船のどこかがまた苦しげに呻いた。

何事か、と桐花は舷へ首を伸ばす。ネイティヴだ。イルカにまたがったすとーんとした色とりどりの衣服たちが何十と、幽霊船を包囲している。

直後に背中に覚えのある衝撃波を受けて、桐花は甲板へと沈没した。

「大佐、屈んでください。帝国軍に損害を与えたいなら、にっこり笑ってネイティヴに手を振ってやってください」

「おまえはもー、非常時でも感心するくらい嫌味だよな」

大佐の口調は伸びやかだったが、サツと風の軽さで甲板に伏せた桐花は背中にブーツ裏だけでは説明できない重圧を感じながら、泥水くさい帆布から必死に鼻を背ける。もろくなった板が、腹の下でミシヨツと不吉な音を立てた。

立ち上がったらず最初にも和英辞典の「人権侵害」の項を突きつけてやる、と心に誓ったが。

「大佐もおまえも、この船にいるのを見られると戦略上の不利益だ。見られたか？」

「さあ、船上からネイティヴが見えたからといって、見られたとは限らないんじゃないかなーイタタタ、背骨ゴリツていったゴリツてー！」

「私はアダマス帝国軍のスメラグダス中佐だ。気を静めていただきたい。今朝にも申し上げた通り、この船はしかるべき調査を終えたのち外海へ曳航し、自然の手へ委ねることを、誠心誠意約束しよう」
乙女の背中を踏みつけながら何が誠心誠意かつ。

大佐も伏せたままウンウンと頷き、中身をこっそり頂戴したあとでな、と小さく補足している。しかしネイティヴは納得していないようだ。

「調査が不要と言っている！ 今すぐ父の御手に返さねば、精霊たちの怒りをかうことになるだろう！」

「帝国軍が鯨たちを食べるから、すでに海の精霊はお怒りだ！ この船がその証だ！」

「死者の船を海へ！」

やまぬ抗議に、大佐がハアアとため息をこぼしている。

「あのさー、嫁候補。帝国軍もネイティヴも、互いの腹を探り合い

ながらの共存にはもういい加減、ウンザリしてんだろ？ 西の島とか南の海とか、立ち向かうべき脅威が外にいくらでもあるってのにさ。内輪もめすんのは損だと思うだろ？ 和平のシンボルがいるだろ、なあ？」

事情はよくわからない。だが黒い目が真剣そうなので、桐花はハイと頷いておく。よしそれなら、と大佐は満足げにニカツと笑った。「婚約だな！ この件が落ち着いたら発表す」

「私の助手です」

「るぞー。ラウー、俺の声明文を考えとけよ！」

「ビスコア・ダルジ大佐」

母親が赤ん坊に、もうねんねの時間ね、おやすみね。と囁く時の穏やかな口調だ。だが船外ではイルカが雷に打たれたように一目散に逃亡し、振り落とされたネイティヴが慌てふためいている気配がする。

逃亡できる自由を、桐花は心底うらやんだ。

「五回目になります私の助手です。科学および帝国の発展を著しく妨げたいなら、あなたの妻として実益皆無なサロンやら舞踏会やらを主催させるがいいでしょう。これは勧告でなく警告だ、ビスコア」

いろんな意味で冷や汗が止まらない。桐花は気絶したい、目覚めたら現実に戻っていたい、と激しく願う。

パニックになったイルカの逃亡ではからずも静けさを取り戻した海を見下ろし、中佐は呟いた。

「帰りはくちばしだな」

桐花は断言できた、ラウー・スマラグダス中佐は有言実行の男だと。

9・逃げるって何だっけ

そうだスライドガラスっていうんだっけ。顕微鏡に乗せるアレ。アレっぽい鉱物の薄い板が大量に挟まれていく百科事典を、桐花は呆然として見ていた。

覚えるって何を？ 全て。

宣言どおり、ラウー・スマラグダス中佐は幽霊船内の残存物の形状を全て記憶してしまったようだ。博物館か図書館か、人類の叡智の欠片と呼ぶ品々を収蔵した資料館に戻るなり、中佐はスライドガラスなしおりを挟み始めた。挟まれすぎた事典は扇状の半開きになっている。

「訳しておけ」

と、皮紙らしき山と金属製のペン、インク壺を並べる。

「いつまでに？」

「眠るまでに」

終わるまで寝るなっということかー！

箱舟空母でもらった、魚っぽい何かと芋っぽい何かを焼いた料理っぽい何かのおかげで、激しく眠い。ドブネズミ色になった服も予備のすーんとした白服に着替えて快適だ。さらに図書室の静けさと午後のサンルーム的温かさなど加わったから、極上の昼寝タイムだ。

桐花はフフリと笑った。

「ムリです」

と日本語で言ってみる。

「定例会議がある。夜に戻る」

桐花が和英辞典で労働基準法の項目を探しているうちに、中佐は行ってしまった。机に突っ伏す。その嘆きの姿勢のまま意識が睡魔に持ち去られそうになったが、いや待て。

重大な局面だと思い当たった。

ラウーがいない。籠にも石棺にも入れられてない。すなわち逃げる絶好のチャンス！

顔を上げたら、木彫り放浪僧風の老兵と目が合った。部屋の入り口に半身だけ覗かせてじつと立っている。ものすごく見張っている。妖木のような威圧感だ。桐花はがんばって見返した。

こんなちっさなおじーちゃん兵なら、蹴倒して振り切って逃げられるんじゃないかな。

敬老という脳内辞典の項目が開きそうになるのを必死で閉じる。

「中佐は」

脳内辞典の封印に成功しかけた時、妖木がしゃべった。

「あの子は眠ったか？」

カサついた小さな声だが、桐花に老人虐待を忘れさせるに十分だった。

「あの子は食べていたか？」

淡々とした質問だった。

「あの子は休んでいたか？」

桐花は記憶を探った。眠っていない。食べていない。休んでいない。桐花の知る限り、ラウーは働き続けていた。疲労の一片も見せずに。

「そうか」

悲しんでいる、と桐花にはわかった。老兵の眼差しも口調も変化がない、それでも桐花には老兵が泣いているのがわかる気がした。じょうろがあれば足元に水をやりたくなるほどに。

「あの………ラウーはユピテライズなんですか？」

異色の瞳、桁違いの記憶力、疲れ知らずで働く身体。訊くと、老兵の落ちくぼんだ目がギリリと光った、ように感じた。

「ごめんなさい。馬鹿な質問をしました」

桐花は素直に謝った。ユピテライズであろうとなかろうと、人が人を心配するのに条件などあるだろうか。

石のベンチに腰を下ろす。背筋をシャピンと伸ばして頬を叩く。百科事典と和英を開き、桐花は膨大な宿題に取りかかった。英語は上手でなくても、すばやく確実に要点をとらえる国語力は書店の娘として自信がある。

皮紙を文字で埋め尽くす。右手で書きながら左手でページをめくり、文をなぞる。埋め尽くす。

陽光は暖色を濃くして弱くなる。桐花の世界より大きな月が強烈な明かりとなったが、次第に雲が出て暗くなる。老兵が黙ってランタンと新しいインク壺を置いていった。食事っぽい何かもあったが、ペンを走らすうちに忘れた。

「よし、ラストいつこ……」

最後の翻訳を終えて天を仰ぎ、桐花は大きく息をついた。文字との真剣勝負は常に気分がいい。脳に酸素と栄養が行き渡るようだ。

ふと思いついて、皮紙の末尾に書き足す。

眠ってください、食べてください、休んでください。彼が心配しています。

「トカ。トカ、起きて」

肩を揺らされている。

「あと五分……」

「助けに来たよ、トカ」

切迫した潜めた声。非常事態の気配が桐花の心臓をドクンと暴れさせた。眠気が弾け飛ぶ。

上体を起こす。場所は変わらず資料館の閲覧用小部屋だった。

しかし景色が変わっている。火を細く細く絞ったランタンの濃い橙の光に、若草色の衣服を着たネイティヴの青年が浮かび上がっている。集う家のデーデ。

文字で埋まった皮紙の山がきれいに整えられている。金属ペンのペン先はインクがすっかり拭き取られ、インク壺のふたもきちんと

閉められている。桐花はそんなマメな整頓をした覚えはなかった。

ただ、百科事典だけは閉じた記憶があった。しかし参照したはずのないページが開かれている。挟まれすぎたしおりのせいで開いたようだった。

「木彫りおじーちゃんは？」

「帰ったようだ」

通じてるのがスゴイ。

机の上は老兵が帰る前に片付けていったのだろう。桐花は腕をさすった。石の机に突っ伏して寝ていたせいで冷えている。

疲れた乙女が事切れているというのに、保護したのは資料だけか。毛布をかけてやるとかいう配慮はないのか？

しかし老兵の上司があの中佐であることを思い出し、桐花はあっさりその行動に納得した。

「警備兵は吹き矢で眠らせて隠してきた、今なら逃げられる」

「逃げる？」

戸惑った自分に、桐花は驚いた。

ずっと逃げたかった、心底こりこりしてた、けどこんな挨拶もなく隠れて消えることになるなんて、いやそれこそが逃げるって意味のはずなんだけど、でもでも。

「いやちよつと待って、一応こう、書き置きというか恨み言というか」

「早く出よう、友人が待ってる」

「友人？」

のそり、と返事するように廊下から影が姿を現した。胴長短足でたれ耳が地に着きそうなほど長い。目はドツシリと思慮深そうだ。毛は白に茶色のぶち。

犬。

「こいつがトカの匂いを嗅ぎつけてくれた。ヨシヨシよくやってくれたね、ハハ、ハハハそんなに舐めるな、あっ耳はダメっ」

デーデはとろけそうな笑顔で頼ずりに夢中になっている。ばわう、

と犬が小さく吠えた。

「そうだった、逃げなきゃ。行くよトカ、紫の洞窟でマザー・ガウフが待ってる」

「マザー・ガウフ？」

すらりと濃い眉をひそめて、デーデは哀しげに嘆息した。憂いのアジアンスターといった趣だ。

「どうしちゃったんだ本当に。誇り高き才女の君が、マザーさえわからないなんて」

トカの母親か、と桐花は合点する

「マザー・ガウフは心配してる。癒す家のチボが、トカを死者の船で見かけたって。いくらなんでもそんな、罰当たりなことしないよね。できるわけないよ」

幽霊船のことらしい。ラウーに蹴り伏せられたが見られていたようだ。デーデは否定の言葉を信じきった、曇りのない瞳をしている。ごめーん、それホント。それに鯨も食べちゃった。おいしかったよー！

言えない。

桐花が口をもごもごさせていると、犬がまた小さく吠えた。

「そうだった、逃げなきゃ。行くよ、トカ」

待って伝言っていうか捨て台詞っていうかアバヨとか、何か残していかなきゃいけない気がする！

犬が走り出し、デーデが走り出し、早く、と急かされる。桐花は焦って周囲を見回した。英和と和英と二冊の辞典を抱え、なおも焦って見回した。

「早く！」

ああもう！

緊迫した口調に負けて、桐花は扉へと駆け出した。

紫の洞窟で待っていたのは、大ババ様だった。

あんたが母親でたまるかー！ と叫びたくなるのをこらえてその前へ行き、桐花は改めて洞窟内を見渡した。

かがり火が、洞窟内を隙間なく埋めた紫水晶の柱を照らしている。一本一本が大人二人で抱えても届きそうにないほど太くて大きい。打ち付ける波、柱の先からぼたぼたと落ちる無数の滴の音が重なり合って、音楽を奏でているようだ。

デーデと桐花と犬は人目を盗んで市街を抜けてきた。闇夜に降り出した雨が煙幕となって味方して、兵士はおるか誰にも会わずにすんだ。

長いはしごを伝って海へ下り、イルカに乗って外海へと向かった。幽霊船とは湾を挟んで向かい側にある岬に沿って進んだ。屈まない頭をぶつけそうに低い入り口をくぐれば、そこが紫の洞窟だった。満潮時には深い海に沈むのだろう。

水晶群はかがり火が揺らめくたびに色と表情を変える。ずっと眺めていた桐花だったが、大ババ様、マザー・ガウフのしわに埋もれた茶色の瞳でじっと見据えられ、イルカの上でかしくまった。「マザー」が一族の女系の長という意味らしいと気づいたからだ。

「よく帰った。我らが娘、紡ぐ家のトカよ」
老いて震える低い声で、大ババ様がのたまう。桐花はただいまと返すべきか迷った。

「集う家の、デーデよ、ご苦労だった」

「いいえ、統べる家のマザー・ガウフ、苦労など何も！」

デーデは犬を抱えたまま深く頭を下げる。

「全てこの鼻の良い友人のおかげなのです」

「そうか。苦労を、かけた」

「友人へのねぎらいのお言葉、感激です！」

あのさーデーデ。大ババ様はデーデを人払いしたがってるんだと思っただけだなー。

「もうよい」

「良くはありません！ トカのこと、こうまでご心配いただき・

「……わあ、どうした！」

デーデの腕から抜け出た犬が、洞窟の入り口へと泳ぎだす。短い足フル回転で意外に速い。気配にさとい脱走犬をイルカで追いながらデーデは、マザー・ガウフ、失礼しまーすと叫んで消えた。

「ちゃぷん、ちゃぷんと脱力感を増幅させる波音が響く。」

顔と気立てはいいのにな……全くだ……と桐花は大ババ様とアイコンタクトしてしまった。

「雨で、寒かったろう」

大ババ様は水筒らしきモノをかぼりと開けた。石製だがフェルト状の布で保温されており、筒からはほんのり湯気が立ち昇る。

「雨に打たれてきたし、イルカに乗っていると足先は海に浸かりっぱなしだ。寒かった。」

大ババ様には軍医送りされて良い印象がなかったが、あれもデーデと同じく、トカのユピテライズを懸念してのこと。桐花は水筒を受け取った。

「おまえは、仮にも、紡ぐ家の娘だ」

ゆっくりと単語で区切りながら、大ババ様が話を切り出す。桐花は茶っぽい何かに口をつけながら曖昧に頷く。

「診察や、勾留のあいだに、我らの刺繍を、話したりは、しなかったろうな？」

『紡ぐ家』はネイティヴの家系や歴史を刺繍で記録・保管する一家だ。

ラウーの講義を思い出す。尋問するような大ババ様の口調から、刺繍される事柄には軍に知られたくない内容もあるらしかった。

「ええと……たとえば？」

「薬。金属。鯨の、回遊路。金属」

大ババ様、金属を二回言ったよ？ 大事だから？

内心で突っ込んでから、桐花はハツとした。大事だからだ。

空中の城塞都市で、金属はほとんど見かけなかった。ラウーの鎧とペンくらいだ。石鎧兵士の剣は石を磨いたものだった。木も。お

よそ桐花の現実世界で使われる木製品や金属製品は、ここでは石で出来ている。石が豊富だからというだけじゃない。

この土地は垂直に近いほど切り立った岩山か、狭くて急な傾斜地ばかりで、木材は貴重なのだ。いかだは実は超高級住宅なのかもしれない。

同様に金属が採れないか、採れても製錬加工する技術が失われているのか。

「いえ、してまひえん」

舌がもつれた。

「白魔が、拷問を、したな」

ラウーの拷問が決定事項で語られている。それはもうと答えかけ、桐花は首をひねる。無体な扱いを受けたが、口を割らせようという意図は感じなかった。むしろこの世界について教えてくれた。

「人類の宝を教わりました」

おかしな沈黙。

「やはり気が、触れたか」

待って！ 激しい語弊があった！

「ユピテライイの、ふりをし、刺繍と引き換えに、やつらの保護を、ゲホゴホツ、カーペツ、受ける気かとも、思ったが」

「ええっ？ ま、待って、わた、わたひは」

舌が回らない。

「そそ、そういふ、しゅ、趣味は」

指から水筒が滑ってイルカの背に落ちる。ピギツという抗議が遠い。

「一度、死者の船に、乗れば、戻ることは、ならぬ」

視界が回り出す。二本の赤い幕が近づいてくる、幕じゃない、あの色には覚えがある、兵士の服。隠れていたのか。

「死出の、船へ」

「父なる精霊の腕へ！」

唱和する兵士の声が耳にこだます。

「我らが友人、鯨たちの、霊を、鎮めるため」

「我らも差し出さねばならぬ！」

腕をつかまれているはずなのに、自分の体は空気との境目もわからず、上も下もない。

「精霊の嫁よ、一度は内諾、しておきながら。恐れをなして、気が触れるとは、情けない」

「海の精霊の元へ！」

トカ。

桐花は意識だけで語りかける。

逃げたんだね。ネイティヴの友人である鯨、帝国軍に狩られた鯨たちを慰めるため、海に捧げられることになったんだね。だからどこでもいい、とりあえずどこかに逃げたかったんだね。

お互い、貧乏クジ引かされたんだね。

うん、でもこれは夢だから。謎が解けたところで起きようじゃないか。

………夢じゃないと困る。

10・繰り返す、これはマジックではない！

寒い。でもあと五分。ちやぷんちやぷん、うるさい。でもあと五分。顔に水しぶきかかった、冷たいなーもう、でもあと五分、

「ん・・・・・・？」

闇夜でもわかることはある。波に揺られている、風が唸っている。固いものの上に寝ている、ひとけがない。わびしい状況らしい、でも、と桐花は思った。

起こされずに起きるなんて久しぶりだ！ 目覚めた直後に命の危険が鼻先で大口を開けている、そんなことないんだ！

・・・ないよね、とつい首を回して金属鎧の有無を確認する自分が嘆かわしい。

ジャポンと衝撃を伴う波の音がして、足に水がかかる。反射的に足を引きつつ起き上がる、起き上がるうとした。

出来ない。

頭は動く。腕がおかしい。分厚い雲にねじ込まれた月光が、かろうじて状況を教えた。

石を抱かされている。頭ほどもある石。辞典らしき本も。それらとまとめて、ぐるぐるに縛られている。

ごおつと風が騒いで桐花の体は横滑りし、すぐ壁にブチ当たった。小さな船にいるらしい。ぶつかつた背中に冷たいものがどつと流れ込んで、桐花はヒヤツと海老反った。

浸水している。

問一、船に浸水するとどうなるか。答、沈没する。

問二、船が沈没する時、縛られているとどうなるか。答・・・

「うそっ!？」

目覚めた直後に命の危険が迫っている。やはりそんな目覚めだった。

精一杯首を伸ばして、潜望鏡のように船のふちから外を見る。大きくうねる波と、黒雲に存在を消されかけた月のおぼろげな輪郭。いかだゲルや街はおるか陸地もない。桐花の潜望鏡の回転範囲外にあるのかもしれない。ないのかもしれない。なかった。

どくんどくと、心臓が音高く不安を全身へ送り出している。

最新の記憶を呼び出してみる。紫の洞窟。マザー・ガウフと兵士。一度死者の船に乗れば、戻ることはならぬ。鯨たちの霊を鎮めるため、我らも差し出さねばならぬ。精霊の嫁よ、海の精霊の元へ！

恐らく、トカを精霊の嫁として生贄にする計画が立てられていた。そのトカは気が触れ、帝国軍人と一緒に幽霊船に乗ったりしている。これはもう色々とひっくるめて、サツパリと海へ流してしまおうじやないか。イエース大ババ様。おやこの娘、重り持参ですぜ。

事態を理解するほどに桐花の血が冷えていく。

これまで何度も死ぬかと思った。鷲のサッカーボールにされたり、生き餌にされかけたり、安全ベルトなしの急降下で空へ投げ出されそうになったり。

だけど死ぬ「か」と思っただけだった。

籠で守られていたり、生き餌や人間爆弾の回避方法を一応忠告する中佐がいたり、死は半透明の壁を隔てた向こう側で惜しそうにしているだけだった。

いまは死ぬ、と感じている。

そのための重り、そのための船、そのための場所に、独りで放置されている。死の手へ引き渡そうとする明瞭な意志によって、この装置は作られている。

桐花は身震いした。死の装置にだけでなく、それを発動してしまふ強い意志に。おまえが消えても構わないのだという意志を、これほど明確に突きつけられたことはなかった。

ちやぶん、ちやぶんと打ち寄せる波が桐花の命まで削り取る手か

のようだ。岩を砂に変えるように、少しずつ、でも着実に。月が雲の向こうで知らぬ顔を決め込んでいる。桐花の心にまで闇を落としている。

涙が溢れる。恐ろしさと悲しさに打ちのめされる。泣いてしゃくりあげたところで、事態が一片も好転しないという容赦のなさにも、驚の餌になりたいなら、そのまま寝ている』

不意に頭の中で声がした。

『生き餌にされたいなら、そうして恐怖を振りまくことだな』
中佐の声。

『生きたまま死者の世界へ行かれるのを見送るだけです』
中佐という地位、それに見合うだけの実践を重ねたはずの軍人の声。

あれは、と涙を飲み下しながら桐花は思った。あれは生き延びる心得だ。場をしのぐために取るべき行動を裏返して言っているんだと思っていた。それもあるが、それだけじゃない。

行動を起こせ。恐れるな。諦めた時点で死んだも同じだ。己を助けるのは己のみ。

「それに、」
と口に出してみる。

「本を翻訳しないで死んだら、死んでもネチネチ言われそうだし。．．．．．やだなソレ」

しゃべったら実感できた。大丈夫、少なくとも今はまだ生きてる。「よし」

船の骨組みを背中で探す。体に巻きつく縄を木材の角に引っかけずらしにかかる。幸い足は自由になる。狭い船の両脇に足をつっぱり、縄へ圧力をかけた。石と本と抱かされている前側も試す。勢い余って滑り、肘にチクリとした痛みが走る。割れて削れた木の破片が刺さったようだった。それでも続ける。

沈没船縄抜け脱出シヨ！。挑戦者一人、観客一人。
「指導、ラウー・スマラグダス中佐」

強い風と波にあおられて、重りをつけられていても転がされる。そのたびにイモ虫のように這いずっては体勢を立て直す。徐々に、船の内部にも波が立ち始めた。海水を飲まないよう、首をねじって空を向く。浸水が進んでいる。

突如、闇夜にホイッスルが鳴り響いた。

「生きているか！」

どこからか野太い声がする。

「紡ぐ家のトカか？」

「は、はい！」

正確に言つと違うのだが、違いますオヤそれは失敬と去られるのも困る、とにかく返事をした。

「行方不明者発見、位置連絡の火矢を撃て！」

桐花は亀のように首を伸ばす。船べりの向こうの大きな波に、小型の帆船が見え隠れしている。甲板にいくつかの明かりが揺れている。トーチを掲げた人影は鎧を着ているようだ。パシユ、と軽快な音と共に、夜空高くへ火の玉が放物線を描いた。

「やった！ これで俺らの隊は安泰だ！」

兵士の影が抱き合つて狂喜している。

「資料館前の警備兵は中佐のひと睨みで失禁したらしいぞ」

「全域搜索の緊急配備命令を出した時の中佐には、俺だつてイキそうになった」

「おつと回収しないとヤバいぞ、あの船。沈没が先か転覆が先か」
回収したいのはわたしじゃなくて船なのか。

風にさらわれ途切れ途切れながら、兵士の会話は桐花をゲンナリさせた。

助けが来た、という安堵も虚しい。むしろ恐ろしい。ラウー・スマラグダス中佐は絶賛ご立腹中のようなのだ。どうせなら、川に洗濯に出たおばあちゃんに拾われたかった。あつても結局は鬼に立ち向か

わなきやいけないのか。

魂ごと息を吐き出したら、縄がするりと緩んだ。嘆息で胸腔が縮んだらしい。ばちゃばちゃと、浸水した海水を跳ね上げながら体をよじり、縄の緩みを大きくする。隙間から石が抜け落ちた。縄は一気に緩み、桐花は自由を奪い返す。

縄抜け成功！ よし次は沈没船脱出だ！

起き上がり、こいつめと呪いながら石を船外へ捨てる。櫂は見当たらない。だぼん、と大きな波にぶつかって、小船の喫水線がぐんと下がった。自力航行不可、よしこい救助！

兵士の乗る巡視船へと向き直る。だがトーチを掲げる影、救助用フローターのついた縄や鉤を持った影、それらがシンとして動かない。

桐花の目の前の海面を、三角形の背びれが通過していった。

「イルカ！」

じゃない。

遠いトーチ、弱い月光が、大きな波間にチラチラ現れる無表情な目や尖った鼻先、エラを申し訳なさげに照らしていた。

桐花は自分の肘を伝い落ち、船内へ、海へと拡散し、彼らをおびき寄せたであろう血を見下ろした。

ハプニングが発生しました！ 沈没船脱出イリユージョンで海に鯨が、鯨が出現したもようです。ああっ何頭もおります、船が沈むのを待つように、周囲をぐるぐると回っております。果たして無事、鯨の海を泳いで巡視船にたどり着くことが出来るのでしょうか！ 涙ながらに叫ぶ現場レポーターの幻聴が聞こえた。

11・ 殺人的人命救助

行方不明者発見の火矢を確認したのだろう。巡視船らしき小型帆船が続々と集結する。だが荒天による衝突と鯨を警戒し、沈みかけた桐花の小船を遠巻きにするだけだ。

多数の船に当たって波は干渉を起こし、複雑さを増す。桐花は船べりにつかまり、落ちないようにするだけで精一杯だった。救助しようとする船が近づいただけで転覆するだろう。

なんてことだ、これだけ人も船もいるのに。縄抜け脱出シヨウが鯨の生き餌付けシヨウに変更されちゃうのはイヤだ！

「おー生きてたか嫁候補！」

風吹きすさび波うねる不気味な薄暗闇に、陽光の一閃のごとく快活な声が響き渡った。ひととき大きな帆船を通すため、小型帆船たちが退いていく。

船首のバウスプリット。帆を張るロープを固定するため前方へ長く伸びた太い棒に、デカイ兵士が立っている。特大のトーチを掲げる姿は海神のごとき威厳だ。

「ダルジ大佐！」

頼もしい！ 何とかしてくれると思える！

「うへー鯨来てるよ！ 食えばウマいが食われるのはマズいな、ハハハ」

「愛想笑いが欲しいなら、私以外の前でお願いします」

わー冬將軍きたー。何かさせられると断言できる。

桐花はダルジ大佐の後方、船首に立つスマラグダス中佐が暗く見えないうりをした。

「で、俺の参謀。どーすんだアレ」

「あなたではなく軍の参謀です。この状況で救助は絶望的ですな」

おやフォークを落としてしまった。という台詞にだって、もう少し憐れみが含まれているぞ！

「驚がいれば網を持たせて低空飛行させ、つかませるといふ手段があったのですが。厩舎に睡眠煙を焚き鷲を使用不能にしたのは、デーデ。貴様ら集う家の仕業だろう」

ダルジ大佐の足元、帆船の喫水線付近にデーデがいた。トカの不在と火矢に気付いて駆けつけてくれたのかもしれない。またがるイルカが鮫と、鮫以上に凶悪な何かに怯えてピリピリしている。

「あれは……トカを追跡させないためとマザーに言われて！ まさかこんな……」

「鮫のおとりになるくらいに仁義もないなら、反省も後悔も自慰と同じだな」

「くそっ！」

中佐の口調は挑発ではなかった。ただ恐ろしく平坦に感想を述べたにすぎないようだった。それでもデーデは顔を上げ、背筋を張った。手綱を引かれ、イルカが恐怖と興奮にビチビチと尾で海面を叩いた。

「あ、つい汚い言葉を。精霊よ許したまえ。トカ、助けに行くよ！」
「待つて。来なくていい！」

あと一回大きな波にはたかれたら、転覆する。あるいはその大きな波が来る前に浸水して沈む。いずれにしる、時間はなかった。

水風呂のような小船の中で、桐花は何か立ち上がる。足を踏ん張り、勢いをつけ、デーデめがけて投げつけた。

「イルカ、Fetch！」

「わああっ」

条件反射のように、イルカは投げられた玩具を取りに海中へ潜った。放り出されたデーデが大きな水しぶきをあげる。ぴよこんと海面へ戻ったイルカの口には、和英辞典がちゃんとくわえられていた。
「デーデ、それをラウーへ。もう一冊！」

英和辞典も投げる。

たも網でデーデの手からすくい上げられた二冊の辞典が、中佐へと渡る。大佐の持つ巨大トーチの明かりにそれを確認して、桐花は胸をなでおろしかけた。

だが瞬間、鮫があちこちでビクツと背びれを震わせた。数多のトーチの暖色も熱も吹き消すような冷気が渦巻いている。

桐花は冷気発生源から精一杯首を背けた。

「なぜ投げた」

わーい怒ってるよ！ 人類の叡智の結晶とやらをズブ濡れにして投げたりしたから！

「ごめん、でもビニールカバーついてるしケース入りだし、あまり被害はないかと！」

ビニールなんてこの世界にはないだろうけど、察してくれ！

「なぜ投げた？」

あつ、お気に召さない答でしたか？

「ごめんなさい、誰かが翻訳に使うと思って！」

「なぜ投げた！」

なんて答えて欲しいのかわかりません先生！

「ビスコア！」

ばーん！ と音高く、人類の叡智の結晶とやらが甲板に投げつけられる音がした。せっかくナイスピッチングで渡したのになんてことするんだー！ 文化遺産の番人はどうしたー！

「鮫の注意を逸らせ。ありったけのトーチを海へブチ込め。鯨油のものがいい」

「ダルジ大佐と呼べっての」

「水兵、捕鯨用の銚を持って来い。軍曹、私の弓を。桐花！」

鮫退治してくれるらしい。兵士たちが走り回る様子を眺めていた桐花は、怒鳴りつけられて飛び上がった。

「はいっ？」

「合図する。死にたくなければ海へ跳べ」

「はいっ？」

聞き間違いだよ。鮫がウヨウヨして、トーチが海面で燃え広がって、高波がザッパンザッパンしてる海へ飛び込めと？ 入水しろと？ 自分の腸で首を吊れる的な？

「水兵、次の大波の山までカウントダウンしろ」

「6、5、」

見間違いだよ。ラウーが銚を、あるうことが捕鯨用の巨大銚を、あるうことが弓につがえて、あるうことがこつちを狙ってるんだぞ！ 辞書を投げた処罰かー！ 介錯つきかー！

「桐花、おまえの体は壊れても痛手ではない」

知ってます。

「3、2、」

「だがおまえの中身に用がある。跳べ！」

ぴょん。

ぴょんというのは気持ちだけで、現実はかけ離れていた。

水の抵抗でうまく跳べず、傍目にはきつと、人から大の字形になった物体が斜めに転落した程度にしか見えなかったと思う。

それでも跳んだと言えるなら跳んだ途端、足をすくわれ投げ飛ばされたかの衝撃と共に海へ打ちつけられた。肺の空気が一気に叩き出される。次の瞬間には落ちたのと逆の方向へ、ものすごい勢いで引つ張られた。頸椎がゴキッていったゴキッてー！ うわ海水が口に鼻にゴバババ。

不意に、消防車の放水を浴びるかのようだった水の圧力が消えた。咳き込む。咳き込みながら思う、なんだろうこの妙な浮遊感。なんで目をひんむいてるデーデの顔が逆さなんだろう。首の骨が折れて霊が出ちゃったのかな。

「回収したぞ！」

足元で、わあっと喚声が上がっている。足元？ 足元に目をやると足の間、字で言えば太の点、すとーんとしたネイティヴの服の裾

を銚が貫通している。先端の巨大なかえしが生地をガツチリ引つけている。持ち手にはロープが結ばれ、そのロープは帆船の舷を越え、甲板の兵士たちの手にあるようだ。つまりは。

船首にブラブラと逆さ吊りにされている。

むしる処刑じゃないか。回収と言っならせめて甲板に上げてください、と桐花は心で泣いた。

「うはっ、ひさびさに見ちゃったなー白魔の矢。捕鯨銚をあの速度で撃ち出すうえに一発勝負あの精度って、鬼だね鬼。そう思うだる嫁候補！」

船首のバウスプリットから、大佐が朗らかに声をかけてくる。トイチに負けない明るい笑顔。助かったんだ、と実感が湧いてくる。それにしても、銚があと数十センチずれたら串刺しじゃないか！ うんわかる、串刺しがイヤなら鮫に食われるとか答えるんだよね、あの人。串刺しの上に鮫に食われたかもしれないけどね。

「だけど、なんだろう。妙に悲しい。」

「むっ？ おい嫁候補が泣いてるぞ、引き揚げる！」

「イエッサー！」

兵士たちの掛け声に合わせて、体は一段、また一段と上っていく。足や腕を力強くつかまれ、甲板へと下ろされる。打ち捨てられた辞書が放置されている。涙が止まらない。

「ご無事で何よりです、トカさま！」

「ああっお怪我を！ お手当てつかまっります、トカさま！」

「そそ、おまえら、俺の嫁候補だから可愛がれよ！」

「イエッサー！！！」

自業自得だとわかってる。それでも。

私の助手です、と訂正されないのがこんなに悲しいなんて。

12・大嘘も方便

「あなたの花嫁候補ではありません。私の婚約者です」
発言の主を除く乗員すべてが氷結した。

鯨に食われる準備が出来たら異議をとなえる。という聞こえない後半が雪女の指のごとく、乗組員の背筋をヒタヒタと撫でる。

「ゆえに可愛がる必要などない。帰港するぞ。面舵いっぱい、縦隊を各船舶に連絡しろ」

「イ、イエツサワワワ」

動揺してもそこは軍人。兵士たちは叩き込まれた反射で軍令に反応し、瞬時に甲板は動き出す。

連絡の火矢を上げる者、マストに駆け登り帆を調整する者。しかし射手は汗だくなあまり手元が狂い、マストに火矢を撃ち込んでいる。別の兵士が落ち着け！ と叫びながらそこに油をかけている。

ただ二人だけが動かず、一人だけが動けずにいた。

だばーん！ と大波が来て、船首に陣取る大佐の背後で砕け散った。

「へーえ？」

黒髪に縁取られた銅色の肌。軍服でなければ海賊の頭領でも遜色ない。口角がお宝発見の海賊風にニヤリと持ち上がる。

「助手じゃなくて？ 婚約者？ 俺の嫁候補が、ラウー。おまえの婚約者？」

「そうです」

黒雲を突き抜けてきた月光より冷たい視線のまま、水平線よりフラットな口調で続けた。

「些細な痴話げんかが原因で死んでやるという彼女の戯言を、集う家のデーデが真に受けて手助けしたようです。個人的事情で軍まで出動させたことをお詫び申し上げます」

「ぶはつ。ぶはははははは！」

ダルジ大佐が帆を張ったロープをバンバン叩いて爆笑する。

あまりの勢いにロープが外れ、頭上で帆を調整していた水兵がアアアと叫びながら暗い海へ落ちていった。別の兵士が救助用フローターを投げたが、動揺のあまりよろめいて後を追った。落ち着け、これにつかまれ！ と別の兵士が血のしたたる鯨肉を投げている。

「おまえの学者バカもここまで来たか！ 助手を俺の嫁にされたら困るもんなあ！ だから先に横取りか、見え透いてるぞラウー！俺の参謀がその程度か！」

「あなたでなく軍の参謀です」

「だめだ、面白すぎる。ラウー、見てみる、俺の嫁候補のポカーンとした顔を。胃まで覗けちまうぞ。どんな悪夢でもありえないって顔だろ！」

「すまない、桐花。驚かせた。これほど早く公表する予定ではなかったが」

中佐が大佐に背を向け、桐花の前に片膝をつき、顎にそっと手をかける。その手は大佐の死角に入るとグイグイと胃まで覗ける口を閉じさせた。グイグイついでに舌を噛み、痛みでようやく桐花は我に返る。

「ラウー、あの、」

ここでは婚約者という単語が使用人とかドレイとかって意味なの？ 可愛がる必要がないって、むしろコキ使っていいぞとかいう意味なの？

本気で確認したい。

「桐花。機嫌を直して私にキスをくれないか」

桐花の全身に寒い鳥肌が湧く。背筋から始まって脳天で折り返し、背筋を駆け下りてつま先で折り返す無限ループ。苦虫と砂利を一緒に噛んだような顔をしたのは間違いない。またグイグイと修正させられる。

続いたのはほとんど息だけの小声だった。

「帝国軍中佐の助手の誘拐および殺人幫助、軍鷲の器物損壊……
・・デーデを鷲の餌にしたいなら断ればいい。翻訳が終わるまでで
いい、脱走するな。何でも与える」

茶と碧の異色の瞳。桐花は交互にそれを見つめた。
脅迫されてる。

なのに、この人はなぜこんなにキレイな目をしてるんだろう。
愛情なんてひとつかけらも持ち合わせてないクセに。助手の身の
安全は二の次で、翻訳する頭さえ残っていればいいクセに。遺物オ
タク、文明の狂信者、人格破壊者のクセに。平気でこんな汚い闇取
引をするクセに！

なぜこんな、理念に澄み切った目をしてられるんだろう。
もしかして配慮？

脅迫まがいの取引の形を取ってでも、痴話げんかだなんて凄まじ
い恥をみずからかぶってまで。帝国軍とネイティヴとの全面衝突を
回避し、全てを水面下に丸く沈めようという配慮？

なにその似合わなさすぎる独断温情裁判！ 顔を近づけちゃうじ
やないか！

中佐の目尻に安堵と温度が載ったように見えた。
「とりあえず、契約成立だ」

とりあえず。

それは桐花のNGワードだった。この長い長い悪夢はその軽い一
言で始まった。憎むべき無責任と怠惰の象徴だった。桐花の中でざ
あっと黒い砂嵐が巻き上がる。

配慮撤回！ 温情撤回！ 脅迫確定！

形のいい中佐の下唇の端めがけて、桐花はガブツと噛みついてや
った。大佐からは中佐の背で見えないのをいいことに。

「……おまえの世界ではこれがキスか？」

噛みつかれたまま唇を歪め、中佐が息だけで呪詛を放ってくる。

これくらいで文句言うな！ こっちはファーストキスだ！ ファーストキスが脅迫された拳句の、怒りにまかせた結果の噛みつき行為だなんて、乙女が血の涙を流してるんだぞ！

桐花は心で号泣した。

それにしても不思議な触感。食感？ 出来たてプリンに吸いついたような。そこまで柔らかくないか。この張り、この滑らかさ、このしっとり感に近い食べ物ってなんだろう。

「おまえの世界のキスでは、男は食われてなくなるな」
確かにカマキリ界ではそうだけど。

「何でも与えると約束した。まずは私の流儀を授けてやる」
与えるって押し付けるって意味かー！ デカ猫布団とかじゃないのかー！

抗議しかけた口元を、頬にあっただはずの指でピシ、と弾かれ思わず噛みつき解除する。

しつかけを施した指は急に優しさを含んで目尻を、頬を、顎をゆつくりそつと撫でていく。触れるか触れないかの繊細さ。

まただ、と桐花は思う。視線は破滅的に冷え切っているのに、指先は驚くほど温かい。ずるい。

「目を潰されたければ睨んでいる。こっだ」

あ、違った。

唇もあつたかい。

「事情をご理解いただけましたか、大佐。ネイティヴの花嫁候補ならいくらでもご用意しましょう。祀る家のセデは比較にならない美女と言われていますよ」

待て、比較って誰とだ！

「えー。やだね。このまま横取りされて終わりじゃ男がすたる！」
それよりあつさりポイ捨て放置するな、仮にも婚約者を！ ずぶ濡れで、股に捕鯨用巨大銚を挟んだままなんだぞー！

「横取りとは事実には合いません。三回目になります。最初からあなたの花嫁候補ではありませんと申し上げています」

「うわ、覚えてるよコイツ。いやー楽しいね、楽しくなってきたね！ おっしやー野郎共、陣形を横隊に変える。一番乗りで帰港した船には酒と女をおごるぞ！ おおー帆を張って風を受け、舵を取って波を切れ、進めアダマス帝国軍チャッチャラー！」

「イエッサー！」

色を変えた火矢が放たれると、月が雲をおしのけて見物を始めた。縦列だった巡視船が横並びになる。帝国軍の紋章を染め抜いた帆が張り巡らされ、たちまち船たちは加速して疾走しはじめた。ずらりと並んだ船が波頭を切り裂いて競うさまは壮観だ。一路、港へ。街へ。

「桐花」

裾に刺さった巨大鉗を抜こうと、甲板に座り込み格闘している乙女を尻目に、中佐は微動だにしない。

「軍から私に貸与されている部屋がある。自由に使え」

監獄の独房が思い浮かんだが、桐花は一応礼を言っておいた。

「あのー仮にも婚約者なら、ひざまずいて鉗を抜いてくれても」

「ああ、これは私の失態だな。愚痴を聞きたくなければ口を射抜くべきだった」

桐花はニツコリと営業スマイルを作った。翻訳終わったら暴露本書いてやる、と日本語で宣告しておく。

「でもわたしが部屋を使ったら、ラウーはどこで暮らすの？」

「執務室がある。そこで睡眠も食事も休息も可能だ。だから」

一瞬より短いわずかな時間、中佐は言い淀んだ。

「だから伝えておけ、心配無用だと」

誰に？ という問いを断固拒否するオーラが中佐の眉間から湧き出ている。なにこのおぞましいシャイ・ガイ・モード、と桐花は二度、三度瞬きした

……ああ、そっか。百科事典を翻訳した皮紙、読んでく

れたんだ。よかったね、資料館の妖木おじいちゃん。きっと、前より悲しまなくて済むようになるよ。わたしも嬉しい。だから寝落ちした乙女には毛布かけてね。

一瞬より長く逡巡した気配の後、中佐はつかつかと距離を詰めてきた。何事かと警戒する桐花の服の裾を踏みつけて一気に鉈を引き抜く。ビリビリってギヤー、直腸検査に使えるそうなヤバいスリットが前後に！ 検査しそうな目で眺めるなーいくら軍医だからって！

「大佐が見ている」

「え？」

大佐の軍艦マーチはマストのてっぺんから聞こえるけど、あんな所から見えるなんてどんなオペラグラス内蔵？

マストを見上げようとした桐花の前にキラピカ鎧が立ちはだかる。デカイ掌は桐花の視界を片手で簡単に奪った。

「仮にも婚約者だ、演技しろ」

ラウー・スマラグダス中佐流キスの講義は、先刻ほど機械的ではなかった。

12・大嘘も方便(後書き)

ここまでたどりついてくださって、ありがとうございます！

まずはひと区切りのつもりなのですが。

キーワードの「R15」と「ほのぼの」が泣いている！ 「恋愛」
もか？ 続きでがんばりたい(希望するのは自由だ！

13・恋人たちへの愚問

「恋人同士が関係修復した夜に何をするかなど、愚問というものだ。そうだろう、桐花」

ダルジ大佐主催の競艇はダルジ大佐艇の勝利に終わった。酒場を飲み干すぞー！ と氣勢を上げる上司の脇を、スマラグダス中佐はあっさり戦線離脱する。

どこへ行くと咎める大佐に中佐は桐花を抱き寄せ、こめかみにキスマでしながらそんな宣言をした。

恋人同士が何をするんだろう乾杯とか？ と考えつつ桐花はハイと笑顔を作ってみせる。

周囲の兵士たちは、いい女があそこに！ とか、おっ石貨が落ちている！ とか、女性も金も見あたらぬ謎空間を目指してジリジリ移動していた。

その不穏な輪の中心で、大佐はフーン？ と楽しげに笑っている。「ちよつと鼻貸せ、嫁候補」

意味がわからずにいるうちに、桐花の鼻先は銅色の指先にニユツと潰された。

「な、なんれすかつ？」

大佐は桐花の鼻を触った人差し指をぺろりと舐めた。完全にいじわるな少年な勝ち誇った笑顔だ。

「処女だな」

「えええええ！」

桐花は両手で鼻を押さえて飛びすさる。

なんでわかるんだろう？ どうなっただらば処女なんだろう？ しかも何でいまそんな話になるんだろう！

「はははは、素直でいいねー」

「うがー！ カマかけられた？」

「可愛がってもらえよー、嫁候補。比較対象があるほど俺も寝盗り

甲斐があるってもんだ。まあ、寝盗るまでもないか？」

遠ざかるうとしていたはずの兵士たちが啞然として振り返っている。

皆さんお待ちください、啞然として凝視すべきはラウーじゃなくて、フラチ発言した大佐の方ではないでしょうか！

ぐるぐるする桐花の肩を生ける脅威の手がミシリと鳴らす。桐花にはそれが、誘導尋問に自白した罪で処刑宣告する裁判長の木槌に思えた。

「どうかご心配なく、私の貞淑な婚約者はあなたの戯言に穢される耳さえ持ち合わせていません。急ぐぞ、桐花」

振り返ってしまった兵士をメドゥーサより確実に行動不能にさせながら、中佐は早足で歩き出した。

「ええと、ラウー、急ぐって何をかなー」

乾杯を、処刑を、そっそれとも！？

バクバクする桐花は肩を抱かれた腕からそれがバレそうに思えて落ちつかない。このやっかいな拘束を外せないかとモジモジ身をよじってみる。外れない。困って腕の主を見上げる。

白金色の月光の中、異色の瞳はいつになく真剣に桐花を貫いていた。

「仕事だ。マザー・ガウフを締め上げる」

そうだった、脱走する翻訳機にしか思われてないんだった。とはいえ。

花の乙女が腕の中で不安がっていると、老人虐待宣言する飯にも婚約者ってどうなんだ。大佐の視界から出た途端、腕からもポイと放出されたし。それこそもう袖の埃を払うより軽く。

いやこれが本性だって知ってるけど落差が。ノンストップな無体な扱いより、婚約者パフォーマンスを間に挟まれる方が精神的ダメージが。

歩調さえ一切の容赦が消えた。大股でザカザカ飛ばす中佐の後を、桐花は小走りさせられる。服に開いた余計な穴を海風が抜けていく。「着替えたいんだけど」

「被害者は惨めなほど有利な取引条件に使える」

仮にも婚約者を直腸検査可能な服で街歩きさせるのかー！ っていうか取引材料扱いかー！

「でもでもラウー、見てコレ」

桐花は服の無残な鉤裂きを広げてみせた。太腿見えてるけど夜だし軍医だし気にならないはず、それより服の悲惨さを訴えねばと思っただ。

ようやく軍医兼中佐の足を止め、注意を得られて桐花は満足した。何でも与えると約束した中佐の視線が鉤裂きに注がれている。わずかに泳ぐ瞳は直腸検査効率の計測でもしているのか。

「そうだな、確かに私のミスだ。口に捕鯨銛を刺し直す」

ラウー・スマラグダス中佐の虐待暴露本・口封じ編に書かねばと桐花は思った。

「約束は約束だ。交渉が終われば調達する。急げ、大佐が派手に帰港したせいでマザー・ガウフは船を回収されたと気付いただろう。動揺しているところを叩く」

回収したのはわたしじゃなくて船なのか！ 暴露本・パワハラ編に書かねばと桐花は思った。

中佐は揺るぎない足取りで、軍港の中を突っ切っていく。岩を切り出して作られた岸壁には貴重な木材を駆使した帆船が整然と並んでいる。帆を収納されたマストは無数の十字架のようで、大きすぎる白金の月を背景にゆらゆら揺れている。

書店の娘は礼儀正しくないと駄目なんだ！ 色あせたピンクのはたきを指揮棒のように振って熱弁する父の姿が脳裏をよぎる。

静穏な景色が桐花を謙虚にさせた。

「あの、ラウー。ごめんなさい。助手を受けると約束したのに、逃げたりして」

デーデに逃げようと言われたときの後ろめたさ。これが原因だったのだ、と思いがたる。約束を破った。父の名を汚してしまった。「約束したから信用して閉じ込めなかったし、資料館に一人にしたんだよね」

幻滅されただろうか、失望されただろうか。

前に行く背の高い金属鎧は振り返らなかった。ただ一言、呟いたのが海風に運ばれて聞こえた。

「私の見込み違いだった」

桐花の心臓がピクンと冷たく縮まる。

「鞭が生ぬるかった、ということだ」

今までの非人道的行為な鞭の数々を思い返しながら、暴露本・暴露編に書き足す羽目になりませんようにと桐花は祈った。

軍港の端は海がプールか養殖場のように岩で囲まれていた。大小の大きさの違う円形プールがいくつか並んでいる。手前の一つの海面から、足音に反応したイルカがびよこんと顔を出した。

「わーい、イルカに乗るの？」

「自分でわざわざ沖から呼び寄せた鯨に食われたければ、乗れ」

否、で済む返事をなぜそうややこしく、嫌味つたらしく出来るのか。ケツと息を吐く桐花をよそに、金属鎧は一段と大きなプールの前で足を止めた。ヒュツと短い口笛を吹く。

笛に応じてプールの海面が盛り上がった。イルカにしては巨大すぎる波の山が割れ、現れたのは月光にツヤリときらめく黒い背中。白いアイパッチと腹。シャチ。

「小型船舶に対しては魚雷として使用する。イルカに乗るネイティブには示威としても有効だ。占領時代の名残で民族衣装を威嚇するが、襲いはしない。はずだ」

モシモシ、わたしその民族衣装を着てやしないか。文末に不安を煽る単語がくつついていなかったか。

賢そうなシャチ目にジツトリと睨まれている気配を感じるが、桐花はがんばって見返す。恐怖を嗅ぎつけられてはいけないと、その恐怖に晒している張本人が言っていた。なんだこの矛盾！

「時間がない、後回しだ。乗れ」

何を後回し！

警戒心満載のシャチの、背びれ前に設置された鞍へまたがってみる。プールの水門を開けた中佐がひらりと背後へ跳び乗ってきた。

シャチは黒塗りベンツの趣で、月光が輝く道を作る海面へと泳ぎだした。湾の中央のネイティヴ居住地へと舵を切る。

桐花は老人いじめの共犯にされかけている我が身を嘆いた。

「わたし、これほど長い悪夢は初めて」

ぼつりとこぼす。

「夢かどうか確かめる方法ってある？」

訊きながら後部座席を振り返る。悪夢の象徴は無表情のまま、下に立ってた親指で首を掻き切るジェスチャーをする。それで目覚めなければ現実だ、翻訳終了後なら見届けてやるとトルコ石のように血の通わない瞳が語っていた。

関係修復した仮にも婚約者同士が何をするか。

息の根を止める相談だった。

急げ、マザー・ガウフが動揺しているところを叩く。

強大なアダマス帝国軍の空軍中佐であり、参謀でもあるラウー・スマラグダス中佐。殺人未遂事件の被害者である桐花を連れ、マザー・ガウフの水上いかだゲルへと、生ける駆逐艦シャチを飛ばして乗りつけた。

だがマザー・ガウフは動揺していなかった。
寝ていた。

「うん、ご老体だからね……」

桐花は武士の情けで振り向かないでおいた。海の王者であるシャチが、彼を砕氷船に変えるべく背中から降り注ぐ冷気にふるふると怯えている。

ゲルの外まで盛大なイビキが漏れていた。時折フゴツと止まる呼吸に、桐花は家庭用医学辞典で無呼吸症候群を調べてやらねばと思う。

マザー・ガウフに悪感情がないわけではない。出来れば会いたくない。

だがマザー・ガウフが桐花という人格を殺そうとしたのではない、と桐花はわかってしまっていた。鯨という友人たちを慰めるための民族代表。幽霊船という禁忌に触れた娘。その中身が桐花だっただけ。

風習だからと全てが許されるわけではない。でも、許す許さないって誰が、どういう基準で？ 明確に答えられない桐花には、マザー・ガウフを責めきれない。

周囲にネイティヴの兵士はなく、こちらには軍人である中佐がいる。翻訳が終わるまでの期間限定、脳みそ周辺の部位限定にしろ身の安全は保証されている。

そうやって頭で納得する以上に、緊張感も恐怖心も薄かった。

結局シャチでいかだに体当たりをかまし、中佐にしては穩便にマザー・ガウフを叩き起こした。世話係だと名乗った中年の同居女性がアタフタと来客の準備を整える。

「沖合二海里付近でト力が生き流されていた死出の船を回収した」
桐花でなくト力。混乱を避けるためと推測できても、桐花のこめかみはすうっと冷える。

誰も桐花の言葉に耳を貸さず、桐花に何者かと訊ねず、全てが自分を置き去りにして進んでいく時に感じた、押し潰されそうな黒い孤独が胸に蘇った。

桐花。

そうして正しい名前を読んでもくれる者が一人でもいるだけで、桐花は存在を許されている。

だけど、と桐花はゲルの片隅で嘆く。

その一人というのがよりもよって、自分を人とも思わぬ暴君上司とは！ こんな皮肉があるかー！

「アダマス帝国とネイティヴとの協定で、祭事において生者を供物とするのを禁じ、違反者は極刑に処すとした」

後頭部の総白髪と同じく、マザー・ガウフの表情は引き結ばれている。大地の色を移した衣服に包まれた体は小さく曲がっているが、それでも茶色の目には威圧感をたたえていた。

抜けた歯の目立つ口がワナワナと開く。

「鯨を、殺しておきなから」

「それは協定にない事項だ。引き合いに出される筋合いはない。免罪の天秤に載せる材料にならないとわかっているからこそ、側近だけでト力を始末したのは明白だ」

始末済みたいに言うな！ と桐花はあぐらを組む金属鎧の背を睨みつけた。

「ネイティヴの青年層には帝国軍との共存共栄を望む思想が広がっ

ている。今回の件でマザーが厳罰に処せられればネイティヴの内部分裂もありうる」

「凶星だったらしく、マザー・ガウフのしわに埋もれた瞳が苦みばしった。」

「それは互いの利にならない。ダルジ大佐の花嫁候補と、ネイティヴの保管する生産に関する情報全てを提供すれば処罰を回避する」

眠い、と桐花はあくびを噛み殺す。

傘状の天窓から垣間見える夜空は月でない光に白んできていた。

いけない、ここで丸まって寝たりしたら、直腸検査ドウゾな体勢になってしまう。しかしこのゆったりした浮遊感と柔らかいフェルトの床がなんとも魅惑的な就寝材料だ……。

バキャン！ と鋭くも乱暴な音がして、桐花は正座のまま床から飛び上がった。

見れば、中佐の握る短刀の柄が床に叩きつけられ、紫水晶の鋭利な欠片が四方に飛散している。

「技と知恵を秘匿し、死蔵し、文明の発展を鈍化させるとはこういうことだ。大地が育み、磨き上げた宝玉を握り潰すと同じだ。民族に愚直に固執し滅びるか、帝国軍に情報を提供するか」

出たー文明保護の狂信者ー！

思想は立派だけど実現手段がエゲツないなー、と桐花は呆れる。

お世話係の中年女性が震えながら骨組みにしがみつくせいで、ゲル全体がブルブル揺れていた。外でシャチが動揺しているのか、いかだごとグラングランしている。

桐花は津波さえ発生させかねない震源地から出来る限り顔を背けていた。

「処分を出すまで三日与える。こうしてネイティヴを砕き散らかされる前に執務室へ来られよ。私と違って温厚でない、辛抱強くない軍人はたくさんいる」

「いるわけないじゃん」

思わず日本語で呟いた。

空に広がる雲は薄くなり、朝陽を浴びて桃色に染まっていた。その下を白い海鳥が滑るように横切っていく。

「外交官を置いたらどうか。穏健で紳士な」

桐花はシャチに乗り込みつつ提案してみる。瞬時に、水晶も自爆しそうな殺人光線を浴びた。

「私の仮にも婚約者を拉致誘拐、殺害を企てた者に外交官も一片の容赦も不要だ」

拉致られ当時は助手だったと思うんだけど。

などと訂正できる雰囲気ではない。海鳥がもがきながら海面へ落ちていった。

「お、お待ちください、軍人さま」

石柱林を抜けるまで鈍行していると、背後からイルカが追いかけてきた。乗っているのはマザー・ガウフの世話係と名乗った中年女性だ。

やせぎすで、後頭部で結わえた髪は白いものが混じり艶もない。長いこと化粧を忘れ、伏せることに慣れたような小さな目は心労を重ねてきたように思えた。

「どうかお慈悲を。マザー・ガウフには帝国軍を信用できない事情がおありなのです」

わたくしの母から聞いた話なのですが、と世話係は語りだした。

七十年ほど前、マザーがまだうら若き少女でいらした頃。帝国軍と協定を結び、まだ日も浅い頃。マザーは岬の先で、火傷を負いうずくまる一人の少年兵士に出会ったのでございます。

名を尋ねると、へ・ワキガと答えたそうでございます。

「じぶっ」

臭いもの二重奏な名前に吹き出しかけたのをどうにか口内におさめ、桐花は先をどうぞと促した。

それ以上は顔の火傷のために話すこともかなわず泣く少年を、マ

ザーは看護なさいました。帝国軍に問い合わせましたがワキガという兵士はおらず、引き取ってもらえなかったのです。

ひと月ほどが経ち少年が回復する頃には、マザーは傍目にもわかるほど彼に夢中になっておいででした。

が、ある日のことです。少年は忽然と姿を消しました。そのうえ、ゲルにあった刺繍の壁掛けまで持ち去られていたのです。そこには集う家の知恵である、鷲の調教法が縫い取られておりました。

その後しばらくして帝国軍は、カラスに代わり鷲を軍機として使用し始めたのです。

マザーは少年の裏切りにひどく傷つきました。

「ゆえに帝国軍を信用できないと？」

あの大ババ様にそんなウブい乙女時代が！ むしろそんなウブい乙女があの大ババ様に！ と時間の残酷さを嘆く桐花の背後で、冷血人間は興味がなさそうだった。

「そのようなスパイ活動は記録にない。逆恨みで民族を危機に陥れるのなら、マザーなど降りると伝えるがいい」

とつてもイヤな予感がする。

マザー・ガウフの世話係との話を切り上げた後、満潮が訪れていた。遮る石柱の沈んだ広い海をシャチは快調に走っている。その背で桐花は首をひねっていた。

明らかに、帰るべき軍港とは違う方向へ進んでいるのだ。

中佐はシャチの速度を落とし、岬の絶壁にばかりと開いた洞窟へと導いていく。例の幽霊船が見えるから、軍の敷地のようだ。

洞窟の入り口に備えられていたトーチに火をつけ、中佐は奥へとシャチを進める。中はむっとする温度と湿度が淀んでいた。

トーチが水路脇に広がるドーム状の巨大空間を照らす。台地になっており、乾燥させた海草が敷き詰められているようだ。

「ここは軍が鯨の代替食糧を確保するため、ネイティヴの主食を参

考にして作った養殖場だ」

軍もネイティヴに配慮し、捕鯨を縮小しようとしているらしい。でも赤い血を持たなくて養殖できるものって？ と桐花はイヤな予感を振り払い、考えてみる。

「桐花。おまえは悪夢に入り込んだようだと聞いたな」

そうだからとか海老とかウニとか！ 大歓迎だ高級食材！

「つまり現実感が希薄ということだ。恐怖を与えても得られる効果が小さい」

でもカニとか海老とかウニとかに、台地や乾燥海草って必要だっけ？

「ならば別のものを与える」

別のもの？

その答がトーチの照らす橙の輪の中へ、のそりと侵入してきた。

王蟲サイズのイモ虫。

ギャー！ と叫んで桐花は飛びすさり、後部座席の中佐にドフツと背面アタックを入れてしまう。が、お構いナシに金属鎧に抱きつき叫び立てる。洞窟内にわんわんと声が響いた。

「生理的嫌悪は時に恐怖を上回……………」

「ギャー！」

「鞭としては恐怖より効果……………」

「ギャー！ やだやだやだお願い、お願いだからやめ、やめて！ うわーん」

舌を噛みそうなほど顎が震える。涙が止まらない。腕はガクガクするばかりで感覚も吹っ飛んでいるから、とにかく安心を求めて金属鎧の首付近にすがりついた。

「に、逃げない。約束、したから。約束、したのに、謝ったのに、どうして？」

しゃくりあげるあまり、マザー・ガウフ風に言葉が途切れる。

「さつきか、ら、冷たい。ラウーは、手段が、」

非人間的すぎる、と言いたかったが続きを飲み込む。その判断は

誰が、どういう基準で？

「人間の、至宝は、情報？」

「……………そうだ」

「正しい、けど、今朝のラウーは、尊敬、できません」

洞窟内を照らす橙色の範囲が動いて、背後でトーチが下ろされたのがわかった。それでも桐花のイモ虫残像も、マザーに対する中佐の強硬な横顔も脳裏から去ってくれない。

「がっかり、したく、ないのに」

こだます泣き声が情けなくて、桐花は懸命に息を整えようとした。不意に横Gがかかり、シャツが方向転換する。ジユツとトーチが海に捨てられ消えた音がする。加速するシャツはたちまち洞窟を抜け、外洋へと飛び出した。

朝の陽光がまぶしく、シャツの速度が速すぎて、桐花はぎゅっと目を閉じる。振り落とされないので不思議なスピードだったが、背中に安心な腕が回されているのに気づいた。

海風が髪をバタバタと勢いよく吹き抜けていく。

「すまなかった」

風の中、耳元にありえない謝罪を聞き桐花は一転、目を見開く。

「落ち着け、もう軍港へ着く……………大佐がいるな、こつちを見ている」

え、と振り返ろうとした桐花の頭は、背中にあったはずの手でガツチリ固定された。

唇を塞がれる。

塞いだものは温かく、肌よりも薄く繊細な滑らかさで、覚えたばかりの唇とわかった。

「ん……………ひっく、待って、泣いてるから、噛んじゃいそう」

桐花にとって噛むのはむしろ本望だった。が、ラウー・スマラグダス中佐流キスを返さねば、もれなくデーデが鷲の餌になる。

「噛んでいい。離すな」

どれだけ助手を取られるのがイヤなんだこの学者バカ。

桐花の内心の悪態が聞こえたのか、半噛みのキスを二度、三度とやり直される。

もう着くと言われたわりに、軍港はやけに遠かった。

「おつ、朝のお帰りか嫁候補！めでたいなー、飲め祝いの酒だ！」
大佐ご一行は軍港内の酒場では飽き足らず、岸壁近くまで酒や料理を持ち出して騒いでいたようだ。

満潮は階層構造になった岸壁の最上段にぴったりと海面を寄せていた。ダルジ大佐の筋肉だらけの腕が伸びてきて、シャツから桐花をヒョイとさらった。

ニカツと笑われると猛烈に酒くさい。

「いえ、その、何もめでたくは」

関係修復した恋人同士がするという乾杯どころか、人生で一番おぞましいものを見てしまった。闇にうごめく巨大イモ虫を思い出し、桐花はつい肩を震わせる。

「どうした嫁候補、泣くな！あーラウーおまえ、こんなに服を引き裂きやがって」

周囲で飲み狂っていた兵士たちが、急に額を寄せ合ってヒソヒソしでした。

「いえ、これは捕鯨話の……」

「あの時の服のままか？脱がしてももらえずに？むしろラウーの話を再現プレイか？」

「いえあの、服がこれしか」

「着替えナシってことは外か。着せたまま外で泣くまでか。さすがに悪趣味じゃねーか、ラウー」

確かにあのイモ虫は悪趣味だった。桐花は頷く。兵士たちがどよめいて、中佐に鬼畜を見る目を向けている。実に正しい行動だと桐花は感激した。

「かわいそーになあ、疲れ切った顔してんじゃねーか。ほら食え、飲め！」

そついえば前の食事からずいぶん時間が経っている。泣いたのも

手伝って急速に空腹になってきた。桐花は大佐が押しつけてくる食事に、いただきます！ とかぶりついた。

「桐花」

シャチ方面から凧いだ、恐ろしく平坦な声が流れてくる。兵士たちの手から石杯が滑り落ち、粉々に割れ散る大合奏が響き渡った。

「今朝の思い出は私たちだけのものだ、いいな？」

マザー・ガウフとの会談を漏らしたらイモ虫まみれにされる。桐花はガクガクと首を縦に振った。

「私はシャチを返却してから戻る」

鬼畜判定の操るシャチが華麗に波をさばいて消える。後姿を見送っていた大佐が、いきなり桐花の肩を抱き寄せた。

わわ、と桐花が弾みで落としかけた肉っぱい何かに気を取られた瞬間。視界は磨かれた銅色の肌と波打つ黒髪に遮られ、べろんと鼻先を舐められた。

「なっ、なにふるんれすか！」

とっさに身を引いても、マッチョな腕はむしろ桐花を引き寄せた。耳元で囁かれる。

「処女だ」

「ええええっ？」

しまった、と思ったときは遅かった。くつきり黒い眉の下で、悪ふざけが得意な瞳が朗らかに笑っている。

二回も同じカマかけて、何が楽しいんだろうこの人は！

二回も同じ反応する自分も自分だけど、と桐花は熱くなつた頬をこすった。

「俺の嫁になつても助手の仕事が続けていいなんて言ったら、アイツどうする気だろうな？」

コンコン。

意識にねじ込まれてくる硬質な音。桐花は体を丸めながら、あと

五分と答えた。

コンコンコン。

「おいでですわねー？」

あと五分。

コンコンコンコン。

「いらつしやるでしょ、ミセス・スマラグダス？」

ちよつと待てーい！

ガバと身を起こし、桐花は玄関へと突進した。寢室を抜け、ホールを抜け、ええいこの広い家め！と悪態をつきながら玄関扉に取りつく。

軍から私に貸与されている部屋がある。自由に使え、と中佐は言った。軍港から連れて行かれたそこはどんな独房かと思えば、部屋どころかまるまる一軒の家、家どころか屋敷だった。

全く使われた気配のない屋敷の寢室のベッドは石枠しかなく、五人は詰め込める石棺に見えた。それでも満腹と疲労、嘆かわしくも経験済みな石棺就寝体験によって、桐花はそこで眠りに落ちたのだ。

立派な錠を外して半透明な鉱石製の扉をゴゴゴと引き開け、訪問者を出迎える。ラテン系の艶やかな黒髪を結び上げ、しなやかな眉とバツサバツサと音を立てそうに密なまつ毛を従えた美女が立っていた。

「違います」

「あら」

と言う割には驚いた様子も見せず、年齢不詳の美女はのんびりと首を傾げた。身にまとった黒いセクシードレスのビーズが、昼下がりの陽光を受けてキラキラと光る。

「こちらはスマラグダス中佐のお屋敷ではありませんの？」

「そうですが、わたしはミセス・スマラグダスではありません！」
美女はにっこりと完璧な笑顔をした。

「では、ミス・スマラグダス？」

「違います！」

「それではやはりミセス・スマラグダスね」

確信犯的に断言されて桐花は黙る。何を言っても太刀打ちできない気配がムンムンと漂っていた。

「わたくし、マリポーサと申します。旦那さまからプレゼントが届いてましてよ」

マリポーサとその仲間たちが運び込んだ衣類の山に、桐花は啞然とした。

「ゼーんぶミセス・スマラグダスのお体に合うよう、仕立ててありますわ。採寸させて欲しいとお願いしたのですけれど」

ブティックの人らしい。あか抜けた娘たちを目配せひとつで動かすさまで店長クラスだと窺えた。

「旦那さまったら」

「違います」

「旦那さまったら素敵ですの。いきなりチョークを手にして、店の壁にミセス・スマラグダスの等身大の立ち姿をお描きになったんですわ。実際にお会いしたら寸分違わずで」

旦那さま否定を華麗にスルーし、マリポーサ以下ブティック一同がくすくす笑う。

「それでも特にバストは女性の死活問題ですもの。バストだけでも採寸したいと申し上げましたら、旦那さまはこう、」

と言つてマリポーサは片腕で優雅に中空を抱いた。まるで大切な誰かの背に手を添えるように。

「こうなさつて、この胸と腕の内寸を計れとおっしゃったんですの。これまた寸分違わずで」

桐花はつい先刻、採寸していった娘たちがキヤーキヤー騒いでいた理由を知つてめまいがした。

「たつくさんの生地の中から迷いもなさらずに、肌の色はこれ、瞳

と髪の色はこれ、とお教えくださって」

幽霊船の搭載物を一品残らず記憶した実績があるが、それでも桐花は中佐の記憶力の恐ろしすぎる正確性に呆れた。

「おかげでこうして色もデザインもサイズも、ミセス・スマラグダスにぴったりの品をお届けできた次第ですわ」

マリポーサが自信たっぷりに頷くだけあって、衣装の数々はどれも桐花の肌色になじんだ。滑らかな肌触りが無言で上質さを誇っている。

「こんな高そうな服でなくてもよかったのに」

「愛、謝罪、顕示」

詩を詠むようにたつぷりした唇が歌う。

「男性が女性に服を贈る理由はそのどれか一つか、二つか、全部ですわ。ならば女性は微笑んで身にまとってみせるのが粋というもの」
翻訳料です。と桐花は内心だけで正解を答えておいた。

衣装という翻訳料の中に桐花はふと、見覚えのある澄んだ明るい翡翠色を発掘する。

「お気づきになりました？」

ふふふ、とラテン美女は妖艶に笑う。

「旦那さまの左目と同じ色でしょう？ そのドレスをお召しになればご夫婦で並ばれたとき、本当に、本当に映えましてよ。旦那さまの左目にはミセス・スマラグダスだけが映っているかのようで」

右目の茶色はどう説明を？ と桐花は突っ込みたかった。そもそもドレスアップして中佐の脇に立つ機会など訪れるはずもない。クローゼットの最奥決定だ。

「それにしましても」

うふり、とマリポーサは一段と色気のある光を瞳に乗せる。

「夜ごとにそのようになされては、わたくしはお針子を倍にしなければなりませんわね」

そのように。と言いながらマリポーサのねっとり視線は、桐花の股付近の鉤裂きを検分している。

「旦那さまは夜もハードワーカーでいらっしやる」

「はい、それはもう休む間もなく」

食事も睡眠も休憩もろくにせず、昼夜を問わず働いているのは確かだ。桐花は力強く頷いた。

「中毒なんです、間違いなく。早死にするんじゃないでしょうか」
過労死という概念はこの世界にはないらしい。桐花の答を聞いてなぜか爆発的にキヤーキヤー騒ぎだす娘たちを眺めて、桐花はそう結論付けた。

「それではミセス・スマラグダス、今後もどうぞごひいきにね。今夜も旦那さまを殺してさしあげてね」

大量の衣類と誤解の山を築いてマリポーサー一行は引き上げていった。

ミセス認定をどうにか訂正せねばと心に決めつつ閉めた扉が、またコンコンと鳴った。ラテン美女が忘れ物かと扉を開けた桐花の前に立っていたのは、髪も服もネイティヴの女性。

二、三年ほど前の自分に良く似た顔をしていた。

「トカ姉さん！」

桐花は一人娘だった。

だが、生まれてすぐに天国へ召された妹がいることは知っていた。蓮花というその名も。

母にも似た優しげな目が戸惑い気味に、それでもはっきりと愛情をこめて笑いかけてきた。

「中佐さんから聞いたの。わたしのことも忘れちゃったかなあ？
妹のレンカ！」

16・思い出の外でも生きてました

「中佐さんが、姉さんは記憶喪失って」

現実にはもう消えてしまったはずの妹。

「あれだよ、酷い事故に遭ったとか、頭打った人とかに起こるっていう」

記憶を留められない幼い頃に父の腕に抱かれ、病院の窓越しにし
か会うことのかなわなかった妹。

「大丈夫だからね姉さん、よくあるよくある！でもえっと、もし
かしたら妹のことは覚えてるかもって」

自分よりはるかに母に似た大きな目、柔らかな輪郭、健康そうな
唇。桐花は思わず抱きついた。

「わあ良かった、覚えてるんだね！」

「ううん覚えてない。でも知ってる」

そっか、と返事は微妙だったが、桐花は腕が優しげに背中に回さ
れるのを感じた。

メキヨ。

ギヤーイタタ、肋骨が鳴ったー！

「ああつごめん姉さん、あたしってばもー！組む家の悪い癖なん
だ」

慌てて解放してくれたレンカは自分で自分の腕をメツとお仕置き
している。

「組む家？」

「そう、ゲルを作ったり組み立てたり。この街だと何て呼ぶのかな
？えっとー、そうだ大工！だからほら、力が強くてゴメンネ」

えへつと困り眉をしながらレンカは袖をまくり、力こぶを披露す
る。

しかし桐花は腕のこぶより、胸の山がはるかに衝撃だった。すと
ーんとしたネイティヴ民族衣装でも、セクシーブティック店長マリ

ポーサに負けないラインがくつきりと形作られている。

「うはー、すごいプロポーション」

「姉さんったら、やだもう！」

ばしーんと肩を叩かれて、桐花はドア枠に激突した。星を散らしながら激突相手の石柱にすがりつく桐花をよそに、レンカは両手で覆ってしまった顔をぶんぶん振っている。

「あたしの不器量は昔っからでしょ！ 姉さんみたいにすとーんとしてたら良かったのに！」

桐花には石柱激突よりも、すとーんの一言が痛かった。

「ここに来るまでの間にも何度も胸やお尻を凝視されたの。いくら不細工だからってひどーい」

半べそだ。どうやら本気で言ってるらしい。

組む家の着る服は大工という都合上、動きやすいよう工夫されていた。基本的にはネイティヴ民族衣装なのだが、袖がなく裾には深いスリットが入っている。スリットはゲルの骨組みを連想させる斜めの格子状に紐でかがってある。

豊かなスタイルでこのチャイナドレスと網タイツを足して二で割っちゃったような服を着ていけば、男性陣に凝視されるのは当然と言えた。

「母さんが恨めしい。あたしも姉さんみたいにすとーんって産んで欲しかったなー」

すとーんを連呼するな。妹より発育が遅れている姉が惨めじゃないかいかー！

「……………遅れてるだけだよ、もう成長止まったとかないなね？」

母さんという単語が出たので、桐花は両親について聞いてみた。二つ前の冬に二人とも精霊の御許へ、とレンカは寂しそうに答える。非現実とはいえ少なからずシヨックな桐花だったが、代わりに妹がいるんだし、と思い直した。

「それでね、姉さん」

目尻を濡らしたままだったが、レンカはニツコリ笑った。

「中佐さんがね、あたしを呼んでこのお屋敷の内装を任せてくれたの。姉さんの好きにしていって！ あたし半人前だしゲルしか組んだことないって言ったんだけどね、構わないって。えへへ」

ああ、これって悪夢じゃなかったんだと桐花は思う。

夢は夢のかなう場所でもあるのだと。

「やーん、ベッドが粹しかないー！ 姉さんここで寝たの？」

寢室の石棺状態のベッドを発見し、レンカは激しく嘆いている。

「中佐さんたら、助手をお屋敷に住まわせてくれるのは気前いいけど……」

「ううん、ちようどよかったかも。初めて泊まったのが昨日だし。

ほら、汚しちゃうでしょ」

海水に浸かったりしてシワの寄った、鉤裂きまであるボロボロ服を示してみせる。たちまちレンカの、母そっくりの形のいい唇がフルリと息を呑んだ。

「ええつ、姉さんってその……夜も助手してるの？」

翻訳が終わるまで眠るな、と言われて桐花は夜も働かされた。頷く。

「そお、そっか、だから助手なのにお屋敷に住まわせてくれたりするんだね、そっかー！」

何やら妙な興奮をして頬を染めるレンカも激しく頷いている。

「うんうん、初めては汚れちゃうって聞くしね！ でもさすがに石の台の上で服のまま……」

柔らかい手に手を包まれる。

メキョって指の骨が鳴ってるからー！

「大丈夫だからね姉さん、あたし腕によりをかける！」

ツヤンとした黒い瞳が覗き込んできて、また桐花の指がペキと悲鳴を上げた。

「どんなに激しく暴れてもへたらないベッドに作り上げてみせるから、だから助手のお仕事がんばって！」

そう言われるほど寝相は悪くないつもりだった。

だが、よいお仕事はよい睡眠から。

妹の家族愛を感動と共に受け止め、桐花はレンカとじっと見つめあった。

大工や内装業者なら、城塞都市下にいくらでもいるだろうに。わざわざ未熟な妹を指名してくれた中佐に、桐花は言わねばならないと思った。

湿布をください、と。

妹と積もる話をしてみたい桐花だったが、腫れてきた指と翻訳作業が心配で資料館へ向かうことにした。そう告げるとレンカの眉がぱつと曇る。

「気をつけてね、姉さん。城門のあたりに嫌な人いたから。あたしのコトすんごい馬鹿にして！ 嫁候補が増えたとか俺を知らない女がいたのかとか、心にもない台詞でからかって！」

ものすごく聞き覚えのある言い回しだ。

「アダマスの人って意地悪だよ、スタイル悪いのなんてほつといてくれればいいのに！ あたしアダマス人とは絶対結婚しないんだからー！」

可愛い妹を泣かすとは何事かー！

レンカが二度とダルジ大佐に会わずに済むようにしなければと心に誓った。

マリポーサー味が残っていた服の中からシンプルで動きやすそうなワンピースを選ぶ。サイズはぴったりだ。靴もあった。ぴったりだった。下着もあった。ぴったりだった。桐花は悶え死にそうになった。

形状記憶されている！

実のところ自分が翻訳するより、中佐に日本語を教えた方が早い
のではと思っていたのだ。

しかしそうなら今まで桐花が放った日本語の悪口の数々に気
づかれる可能性がある。意味はわからずとも発音や口の形を記憶さ
れているかもしれない。

そうなると早まるのは効率よりも自分の死期だ。

資料館に着くと仁王像な警備兵が扉を守っていた。脱走した時
にも警備していた兵に、桐花は見覚えがあった。桐花の姿を視認す
なり、ぎょろりとした目がギラン！ と異様な光を放った。

怒られる！

身をすくめた桐花の足元で仁王が土下座した。

「頼みます！ 逃げないでくださいえ、おれは、おれは死ぬより怖え
ことがこの世にあるたあ知らんかったんでさ……！」

石敷きの地面から煙が立ちそうなほど、額をすりつけて懇願され
る。

「あなたさんに逃げられたと知って、ス、スマラグダスちゅ、中佐
はははアハハハ」

「すみませんすみません、怒られたんですね」

「笑ったんでさあ！」

咆哮に近い一言に、何事かと寄って来ていた群衆がどよめいた。

「血より知の時代が来た。そうだろう？ と笑顔で肩ポムされて、
おれは漏らすしかできやせんでした！」

男泣きする仁王警備兵をヨシヨシし、逃げないと約束してから資
料館へと入った。

血より知。

その一言で、中佐の一連の行動が腑に落ちた気がした。

きつとこの国は過渡期にあるんだ。武力で制圧してきた国家が、
法で民を統べようとする途上に。

翻訳をさせるために最初は恐怖を、次に生理的嫌悪感を与えたの
は血のやり方。それでも脱走され泣いて抵抗され、豪華な服と家の

プレゼントに転換した、と……。

ラウー、その解決法は知じゃなくて金だー！

「知とか言うなら、マザー・ガウフの初恋事件だって調べてあげればいいのにね。脅さないでさ」

ぶつぶつと日本語で文句を垂れる。

カシャン、と胸を騒がす硬質な音が響いた。

閲覧室の隅でインクを詰め替えていた妖木老兵の手から落ちたインク壺は、石の床に染みを広げていく。心に侵入した不穏と同じ色をしていた。

「おじーちゃん？」

「ガウフ……ガウフがいま、マザーなのか……」

普段よりもう一段階、乾いた声。インク壺を逃した、関節の曲がった指が震えている。

「おじーちゃん、まさか」

曲がった小さな背、刈り込まれたゴマ塩頭、深く皺の刻まれた褐色の肌、開いているのか判別できない伏せ目。老兵の年齢は明確でなくとも、マザー・ガウフの乙女時代に彼が少年だったろうことは想像できる。

桐花は老兵へ詰め寄った。

「あなたの名前は！」

「わしは……ジョージ・タイラーだが……」

アジア系の顔して思いつきりアングロサクソンな名前かー！

「なんだー。へ・ワキガかと思っただのに」

「ワキガ……」

「マザー・ガウフから刺繍の壁掛け盗んで消えた人。軍に情報を流したんだって。それを恨んでるからあのババ様、帝国軍に反抗的らしいよ。タイラーさん、インク拭く雑巾とかない？」

返事をしない老兵の腕に手をかけて、桐花は異変に気づいた。

「タイラーさん、顔色悪い。熱ある？ わわ」

がくりと膝を折ってしまった老人を慌てて抱える。老人の軍服の

膝に青黒いインクがたちまち染み込んだ。

「警備兵！」

熱い、小さな軽い体。命の灯火をゆらゆら脅かす風から遮るように、桐花は老兵を抱きとめていた。入口から顔を覗かせた仁王警備兵へ怒鳴る。

「警備兵、ラウーを。スマラグダス中佐を呼んで、早く！」

「ミス江藤」

老人の発音の良さに驚く。中佐に教え込まれたのだろう、老兵はきちんと桐花の名を呼んだ。

「盗んだつもりは………思い出にと………誰にも見せてはおらん」

何十年もの時を経て錆びついていた歯車が動き出す、きしんだ音がした。

17・ 苦悩するコンピュータ

ほどなくしてスマラグダス中佐と、会談中だったというダルジ大佐も駆けつけた。

資料館の入口に出来た野次馬の輪が割れ、堂々とそこを突っ切ってくる二人の姿を見た途端に桐花の目に涙が溢れた。

「おじーちゃん、大丈夫だよ。ラウーもダルジ大佐も来てくれたからね」

伝えると、腕の中でこわばっていた老兵の体からも力が抜けたようだった。ぐったりした老兵を中佐兼軍医に預ける。異色の瞳は桐花を一瞥もせず、瘦せこけた老人の体を手早く調べ始めた。

「ラウー、おじーちゃんを助けて」

「私はそのためにここにいる」

簡潔に確実に請け合った軍医は左上腹部を触診し、脾臓の腫れが進行しているなど呟いた。

「肉腫も増えている」

「おじーちゃんがへ・ワキガなの。壁掛けは盗んだんじゃないって、誰にも見せてないって」

診察する手は一瞬も止まらない。患者に注がれる真摯な目がすぐめられるのだけが見て取れた。

「……ジョージ・タイラー退役軍人、1945年9月志願入隊、出身不明か。時期は合致する」

わー便利なコンピュータ、検索機能ついてるよ。帝国軍人データベース入ってるよ！

「全員ではない。彼は私の弓の師だ」

読心機能まであるよ。っていうかワキガ発見に少しは驚けっ。

「俺の師でもあるな。初代白魔だ。ラウーの方が兄弟子なんで、態度がでかいけどな」

一歩退いた場所からダルジ大佐が横槍を入れてきた。口調は軽い

がいつもの朗らかな笑顔は消え失せている。成す術もなくそわそわと老兵を見守るさまは小さな子供のようだった。

恐らく本当に小さな子供の頃から。老兵に中佐をあの子と呼ばせるほど小さな頃からの師弟に違いない。

「ごめんなさい」

ぐずぐず泣いていたことに気付いて、桐花は慌てて涙を拭った。

「お二人の方が、わたしよりよほど心配だろうに」

「交際の長さが心配の深さと涙の量に比例するなら、おまえに涙を流す資格はない」

嫌味も皮肉も、感情もない一言だった。反応さえ求められていないようだった。体温を感じさせない横顔は彫像より雪像に近い。

「ビスコア、担架を」

「ダルジ大佐と呼べつての」

老人の体がそつと担架へ移されている。

「桐花」

ようやく中佐の視線が桐花へ振り向けられる。平静な氷の視線。

恩師の急変にも揺らがない落ち着きは薄情さでなく冷静さであって欲しいと、桐花は願いをこめて見上げる。

唐突に頬に、次いで唇に口付けを受ける。

このやるー大佐の前だからって、こんな緊急時にも婚約者パフオ

ーマンスか。落ち着きすぎだ薄情者ー！

「泣いておけ。祈りだとわかっている」

耳元で小さく囁いた唇は、すぐに離れた。睨む間もなかった。

「ダルジ大佐、先頭を行って下さい。あなたほど露払いに最適な人材はいませんので」

「大佐って呼んでも扱いは変わんねーな……おい野次馬はどけどけ、道を空ける！」

警備兵が運び出す担架に付き添う金属鎧の背中。頬に残る温かな感触をさすりながら、桐花はそれを見送っていた。

いいなあ、と思う。

老兵と中佐は互いに一言も言葉を交わさなかった。なのに老兵は信頼して体を預けたし、中佐は桐花に祈れと頼んだ。心配していい、泣いていいのだという意思表示は例の裏返し毒舌だったけど、泣いておけなんてきつちりフオローをして。

フオローされなくても理解してたのに。ケツの穴だのドクター・ルテナンカーネルだの、中佐内桐花知性メーターが激しいマイナスから始まつてるだけに信用されてないらしい。

それだけ祈って欲しかったということ。

あの無慈悲の権化が。おまえの体が壊れても痛手ではないと乙女に通告し、しかも迷いなく実行する中佐が。なにこの差。

この世界にはいないかもしれない八百万の神様に手を合わせ、老兵の回復を祈りながら、意地悪中佐の表現を真似てみる。

読心機能つきのコンピュータは存在しない。

翌日、ジョージ・タイラー妖木老兵は軍の病院で小康状態を取り戻したという。体調に配慮しながら聴取した結果を、中佐は桐花に教えてくれた。

当時、他国から渡ってきたばかりのジョージ少年は英語が不自由だった。生活のため、ネイティブを占領下に置いた直後のアダマス帝国軍に入隊する決意を固めたものの、恩を仇で返すような行為。乙女ガウフに礼も決意もうまく伝えられない。

黙って去る形になり、その際に思い出にと壁掛けを持ち去ったという。だが壁掛けの刺繍に鷲の調教法が縫い取られているなど夢にも思わなかった。以来、壁掛けは誰にも見せたことはないそうだ。

「帝国軍の鷲の調教は、軍が独自に開発した。カラスからの移行期が重なったのは偶然の一致だ。だからスパイではない、逆恨みだと言っただろう」

「言い方が悪いよ……」

と桐花は日本語で呟く。イモ虫に食われたくはない。

ネイティヴの中で調教に携わるのは集う家。中佐はその家長に、集う家の口承と軍の調教法とが根本的に異なることを証言させ、マザー・ガウフのジョージ少年スパイ疑惑を晴らしたようだ。

七十年近く封印されていた壁掛けは返却され、少年の成れの果て・妖木おじーちゃんを、乙女の成れの果て・大ババ様が見舞ったという。

「壁掛けが玉手箱みたい」

「タマテバコ？」

未翻訳日本語書籍の山の中に、運良く浦島太郎の絵本が紛れていた。解説する。

「神話に度々登場するタブーの一種だな。開けてはならない、見てはならない。そうした禁を犯すと災いを受けたり別離を強いられたりなどの罰を受ける」

「あー、あるある。冥界とか黄泉の国とかから奥さんを連れ戻そうとしたけど、振り返っちゃいけないのに振り返っちゃって全部パーになるパターンね！」

「理性を破壊する愛情は人生を破滅させるという教訓だな。マザー・ガウフが寛大に許しておけば、ネイティヴと帝国軍の関係改善はもつと早期に進んでいたものを、愚かな」

と、軍ひいては文明のためなら乙女を足蹴にするのも躊躇ない参謀マシーンはバツサリ切り捨てている。

恋でバカをしちゃうのは若さの特権じゃないか。その恋さえろくにしたこともない桐花だが、このままでは中佐内の全乙女株が下落どころか額面割れする。

「でもホラ逆に。初恋の乙女心に左右されるガウフだからこそ、許してもらえた今はその一存で刺繍を貸してもらえて、文明の欠片が再結晶化できちゃうわけでしょ」

乙女株価はもち直さなかった。

他人を踏みにじるために存在しているような無駄に長い足を高く組んだまま、中佐は白けたような顔をしている。

ラウー・スマラグダスは妻が冥界に召されても、連れ戻し中に振り返ったりしないし、そもそも連れ戻しにも行かないに違いない。むしろ冥界へ蹴り落とす。それ以前に妻がありえない。なにしろ婚約が文明に捧げる助手確保手段である。

「ネイティヴの生産に関する情報提供に同意を得た。タイラー師とマザー・ガウフの面会直後に契約させた」

「再会を餌にサインさせたのかー乙女心を利用したのかー鬼だーこのヒト鬼だー」。

「ダルジ大佐の花嫁候補は選出を開始するそうだ。それから、桐花丸く収まりつつあるが、何か引つかかる。首をかしげて聞いていた桐花は急に名を呼ばれて背筋を伸ばした。

「はい？」

「おまえに対する民族的制裁は忘れるそうだ。身の安全を脅かされることは二度とない」

もう海に流されずにすむらしい。安心のため息をついた。

「うわーよかった、ありがとう！ 交渉してくれたの？」

「流されたければ翻訳が終わってから申し出る。船の穴くらい開けてやる」

そうだった。ネイティヴよりむしろこの鬼上司の方がよほど身の安全を脅かす要素だった。

君の命は守り抜く、私の仮にも婚約者だからね、スウィートハート。という発言は期待していないが、それにしてもと別種のため息が出る。

「ところで」

ため息が北極寒気団へ衝突し、あえなく凍結粉碎された気配がした。

資料館の閲覧室の天井は採光のため、半透明の薄黄緑色をした石で出来ている。黄金色を帯びた陽光はさんと晴れやかに降り注

ぐのに、部屋の体感気温はぐんぐん下降している。

「妙な噂を吹聴するな」

すらりとした長身の体躯。ひと房だけ白を染め流した淡い金髪。パーツも配置も申し分ない顔。一見、人畜無害な青年はその視線だけが、一瞥で猛禽も凍死する凶器である。

桐花は凶器の有効射程から逃れるべく目を逸らし、相席するベンチの最大限はしつこにジリジリ逃亡した。

「ええと……妙な噂って？」

何の心当たりもないが、それにもかかわらず仕打ちを受ける理不尽には心当たりがありすぎる。

「この一日二日で、軍でも街でも鬼畜を見る視線を受けるようになった」

「それは妙な噂でなく純然たる事実です」

しまった本気で言っちゃった。

「今までは恐怖や警戒のみだったが」

サラッと肯定したよ？

「好奇や興味や羨望さえ混じるようになった」

「何か不都合が？」

「なぜ私が服飾デザイナーに機能性の欠片もない女性用下着を勧められたり、組む家に使ってもいないベッドの強度や寝室の防音性を心配されねばならないのかと訊いている」

知るかー！

桐花がクエスチョンマークを大放出しているのを、中佐は感じ取ったらしかった。額に指先を当てて呻いたあと、諦めたように息を吐いてどっかかりと腕を組んでいる。

「私がおまえに」

「はあ」

「酷い乱暴を働いたと誤解されている」

「誤解じゃなくて事実です」

驚厩舎放置、石棺監禁、脅迫恫喝、あの無体な仕打ちと言葉の数

々が乱暴でなければ何なんだろうか。全世界の賛同を得られる自信がある。

「その乱暴ではない、私がいつおまえに手を出したというんだ」

「手どころか足とか膝だつて繰り出されてますけど！」

ベンチの端同士にいたはずなのに！

あつという間に中佐の体の下に押し込まれていて、桐花は何が起きたかもわからなかった。ベンチの上に組み敷かれ、脚は軍服の膝に押さえ込まれ、手首は痛いほどにつかまれている。

額が触れるほど覗き込んでくる中佐の瞳に、桐花は妖しい光を見る。

「無知は罪だ。手を出す乱暴を演習してやろうか？」

低い囁き。

桐花は動けなかった。圧倒的に支配する力の差。確かに兵士であり、男であることを証明してくるような封じ方だった。

「ラウー」

いまさら、と桐花は思う。

いまさらこの人に真の恐怖なんて感じない。コンピュータで鬼のくせに、拘束してくる指も、脅す言葉を吐く唇も、温かいと知ってしまっている。

「でも、血のやり方は本意じゃないんでしょ？」

冷たく燃えていた異色の瞳が一瞬、揺らいだ。

「警備兵が教えてくれたの。白魔が何なのか」

タイラー師が初代白魔つて？ おっしやる通りでさあ。

あのお人は入隊直後から普通じゃなかった、そう語り継がれてんでき。

まんず人を殺さねえ。戦争は平和に至る嘆くべき通過点、とまあ公言はしねえが、そういう心持ちのお人でさ。戦場じゃあ、撃つのは兵士じゃねえ。兵士が乗る鳥の方を狙い撃ちなさる。

それがまあ正確なこと。しかも速えこと！ 敵機が白い腹を出して次々と墜落してくさまがもう、戦場に大雪を降らせてるみてえだ

ってんでね。白魔の由来でさあね。

タイラー師が退役する頃にや、その一番弟子のス馬拉グダス中佐がまた、師匠の上を行く白魔っぷりでねえか。

この資料館はな、中佐が私財で建てなすった。血より知の時代が来るってのは、タイラー師の口癖でさあ。弓の腕も、お心も、中佐は一番弟子ってこつてすなあ。

「……またか、おまえは」

ポイと手首を放り出される。覆いかぶさっていた金属鎧がシャラリと鳴って、ベンチの向こう端へ退却していった。

桐花は知の時代万歳、と無裁判処刑を免れた喜びを噛みしめながらもぞぞ起き上がる。

「辞書の時もだ。自身の危機になぜ、私の理念などに構っていられる？」

口調は穏やかだ。質問の形をした言葉はむしろ困惑か驚嘆に聞こえた。部屋は突然の暴拳の跡も残さず、一転して温かさに満ちている。

「辞書の時？」

「まあいい」

自己解決するな、こっちはモヤモヤしたままなのにー！ まあいい、とか珍しく歯切れ悪いし。そうだ、モヤモヤといえば。

桐花はきちんと座り直す。

「話は変わるけど結局、おじーちゃん……じゃなくてジヨージ・タイラーさんがへ・ワキガって名乗った理由って？」

「白魔は人を落とせない、か」

「は？」

「いや」

これまた珍しくふてくされたような不機嫌な表情をして、息をひとつ吐いて、中佐はまた何か自己解決したようだった。

「不明だ。質問したが回答は得られなかった」

桐花は百科事典に触れる。

脱走する直前、眠りから覚めたときに百科事典が開いていた。参照した覚えのないページ。偶然に開いてしまったものと思い込んでいた、そこには写真が刷られていた。

焼け落ち、骨組みだけが残る円蓋。崩れた灰色の壁。前景に咲き誇る花の枝と、痛々しい建物とがあまりに対照的な写真だった。

「わたしね、わかっちゃったかもしれない……」

「おじーちゃんの出身は不明で、ジョージ・タイラーなんてバリバリ英語圏な名前だけど英語を話せなかった」

「そうだ」

「じゃあ、と家庭用医学事典で調べたことを聞いてみる。」

「おじーちゃんももしかして、白血病か癌？」

中佐は答えなかった。質問の意図を厳しい顔つきで無言のまま問い返してくる。

「ラウー。わたしね、へ・ワキガがネイティヴなまりの結果じゃないかと思って、色々変化をつけて発音しなおしてみたの」

「へー・ワキガ、へワ・キガ、などと発音してみせる。」

「そしたらね。若きガウフがジョージ少年に出会ったときに聞いたのは『あなたは誰？』だったけど、少年はそれを『何をしているの？』だと誤解したんじゃないかと気付いたの」

脱走する直前。

眠りから覚めたとき、百科事典は参照した覚えのないページを晒していた。偶然に開いたものと思い込んでいたが、違うのではないか。資料館にいたジョージ・タイラー妖木老兵なら、百科事典に触れることができたはずだ。

焼け落ち、骨組みだけが残る円蓋。崩れた灰色の壁。前景に咲き誇る桜の枝と、痛々しい建物とがあまりに対照的な写真が載っていた。

「おじーちゃんがマザー・ガウフに助けられた1945年の夏、私の世界の私の国では、酷いことが起きたの。爆撃されたの。何十年も経つてからでも白血病や癌を引き起こさせる、酷い爆弾。おじーちゃんはずっとあの時そこにおいて、あの世界に絶望した」

そして、トカと自分に起きたことが、ジョージ・タイラーにも起きたのではないか。

「火傷を負って岬で泣いてたおじーちゃんは、マザー・ガウフに素性を聞かれた。でも英語を知らないから、何をしているのか聞かれたと勘違いして、おじーちゃんは答えたの。へ・ワキガって。私とおじーちゃんの国の言葉でヘイワ・キガン、平和祈願、って」

「確認を取る。桐花、病院へ行くぞ」

言いながらすでに立ち上がっていた中佐が、閲覧室の入口で苛立ったように振り返る。不可視の腕で襟元をつかんでくるような、凄まじい強制力を持つ瞳。桐花は抵抗を試みる。

「待ってラウー。これが当たってたらわたし、」
「すごく困る。」

これが当たっていたら、この世界が夢ではない証拠になってしま

う。
ジョージ・タイラーは熱に浮かされたような目をして、スマラグダス中佐が桐花の言葉を正確に再現するのを聞いていた。

「真実はあるか？」と訊ねられても表情一つ動かさず、灰白色の天井を見上げたまま。引き結ばれた唇は何も語ろうとしない。

「ラウー、出直したほうが」

桐花は老兵のベッドの足元で逃げ腰になる。が、中佐の眉間に彫られた深い溝に足がすくんだ。

「これほど長い悪夢は初めてだ、夢かどうか確かめる方法はあるか、とおまえは訊ねた」

「そうだけど心の準備が」

フローチャートをサクサク実行するコンピュータと一緒にしないで欲しい。

あるはずもない緊急脱出装置の発射ボタンを探し、目が病室内をさまよう。

「桐花。おまえには夢でも、」

べし、と中佐の両手に頬を挟み取られた。アタフタしてもデカイ

手はびくともせず、むしろ鼻がつきそうなほど覗き込まれる。

「私には現実だ」

大部屋のあちこちで咳き込んだり嘔いたりしていた患者たちが、なぜか一斉にいびきをかきはじめた。

「記憶する必要性皆無のおまえの表情体温鼓動呼吸一挙手一投足一言一句の削除に失敗し続けるせいで軍務の効率が低下する、それが私の許しがたい現実だ」

生きてるのが許しがたいとか言われてるよ？ そりゃ前の助手も壁から飛ぶよね、こんなパワハラ。

茶と翡翠の異色の瞳に睨まれ、シーツを叩いて老兵へ救難信号を発してみる。が、老兵まで顔を背けた拳句にいびきをかいている。検温に回っていた看護婦さえその場で昏倒して寝息を立てている。

組織ぐるみのパワハラ隠蔽？

「夢だと思つて流されるのをいつまで黙認しろと？ じらすのがおまえの世界のやり方か」

中佐は遠慮ナシに体を寄せてくる。獲物を捕らえた目。噛みつかれそうなほど近い、低く唸るような話し方は食欲を抑えているかのようだ。

そうかきつと空腹なんだ、そこにへ・ワキガの真相なんか持ち出されて、なのに説明を洪られて、怒つてパワハラしてるんだ。心狭くない？

「私がそれこそ手を出して乱暴して現実だと教え込む前に観念しろ。これがどれだけの譲歩か身をもって知りたいなら、今すぐ空いている個室を探してやる」

迅速に事実確認しないと病院送りにすると脅されている！

「いえその、結構です。ちゃんとおじーちゃんに訊くから」

言う通りにしてるのに、何で舌打ちするんだラウー！

一斉に睡魔に襲われたらしい患者たちは、なぜか一斉に覚醒したようだった。続々と残念そうなため息があちこちで充満する。

何か悪い病気が蔓延してるんじゃないだろうか、この病院。

やけに物騒に事実確認を迫った中佐の魔手から逃れると、桐花は老兵の枕元に立つ。

「ジョージ・タイラーさん」

深呼吸して覚悟を決めた。

「わたしが初めて資料館に行ったとき、あなたは問いかけてきました。どこから来た？ って。わたしが資料館や街でなく、この世界そのものに戸惑っていることを、自分の経験に照らして知ってたみたい」

老兵はそれこそ枯木に化したような黙秘の無言を貫いている。

「ミス江藤の発音も見事でした。母国語ならば当然です」
ダメか、ならばと桐花は日本語に切り替えた。

「これが夢じゃなきゃ困るのは確かです。だってラウーにファーストキスをカツアゲされたんですよ！ このままじゃダルジ大佐に処女まで奪われます。でもその場合、現実だったらもつと困ります！」

無反応。乙女の危機もスルーか。弟子も薄情なら師匠もだ！

桐花は考える。何か老兵の心を動かせることを。老兵の……

ふと、疑問だったことを思い出した。

戦争を疎んでこの世界に来たなら、なぜ帝国軍に志願したんだろう。平和を祈願しながらまた戦争に身を投じたのはなぜ？

「まんず人を殺さねえ。戦争は平和に至る嘆くべき通過点、とまあ公言はしねえが、そういう心持ちのお人です。戦場じゃあ、撃つのは兵士じゃねえ。兵士が乗る鳥の方を狙い撃ちなさる」

一刻も早く、犠牲を出さぬよう、戦争の終結に貢献しようかと？

「あなたは誰？」

「平和祈願」

英語が話せなくても傷を癒す間、一ヶ月も話しかけられているうちに、おじーちゃんは名前を誤解されていると気付いただろう。そ

れでも訂正させずにいたのはきつと、平和祈願の体现者たろうとしたおじーちゃんの決意。結果が白魔としての名声。

ほとんど無意識のうちに、歌は自然とこぼれ落ちていた。政治的、思想的な様々な論議に、元来の歌詞を忘れられがちな歌。平安を祈る歌。

「きーみーがーよー、は………」

桐花には特別な思い入れなどない。むしろ学校行事や国際試合のアクセント程度にしか感じたことがない。けれど何十年もの年齢差があっても共有できる平和祈願の歌を、桐花は他に知らない。

「ちーよーにー、やーちーよーに」

落ち窪んだ老兵の目から濁りが消えた。一切を拒否して貝のように頑固だった顎が震えだす。

「さーざーれ、いーしーの」

褐色の肌を涙がぼろぼろと滑り落ちていく。老人の体のどこにそんな泉が隠されていたのかと驚くほどの。

「いーわーおーと、なーりて」

「……こ、け、の………」

老兵の喉がかるうじて息を吸い、小さくかすれる声で続きを継いだ。

それが答だった。

「む……す、ま……で」

桐花は老兵の、布団の上に投げ出されていた手を握った。弾力はなく乾いていて、でも温かい。全身から力が抜けてしまい、その場へしやがみこむ。

「あの街には」

日本語だった。桐花は涙の間から、どうにかハイと答える。

「桜が……咲くように……なっただなあ」

百科事典の写真を思い返す。焼け落ちて骨組みだけが残る円蓋、崩れた灰色の壁。そして前景に咲き誇る桜の枝。

「はい」

「あの焼けただれた街が………なあ」

「はい」

「はかないばかりじゃあなく………命というのは、かくもたくましい」

言葉を返せず、ただただ老人の手を握り締める。

ここは夢じゃないのかもしれない。トレードは発生してた。経験者が他にもいた。トカのように、世界から逃げ出したいほどつらい思いをした人が。

「帰りたいねえ………」

陶然とした眩き。

「帰りたいなあ………」

不意に桐花の指の間から、温かい存在は消えた。

「なっ」

中佐の短い叫び声に顔を上げる。

ジョージ・タイラー退役軍人は忽然と姿を消した。ベッドにほんのりとした体温と、枕に染みだ涙だけを残して。

「おまえは行くな」

誰かがどこかで叫んでいる。何重もの膜の向こうに聞こえる。心臓が頭にあるみたいに鼓動がひどくうるさい。一心拍ごとに脳が揺れる。

「おまえまで行くな」

ついさつき主を見失った、皺の寄ったシーツの白さが網膜を焼く。波立つ海に見える。飛び込めば追って行けるかもしれない。

「桐花、私はおまえに用がある」

追って行く？ 行くんじゃない、帰るんだ。現実へ。元の世界へ。おまえにはなくても、私にはある」

トカ、もう危険はないよ。わたしも帰る。帰りたいの。この悪夢は長すぎる。

「だから行くな。……………なくて……………」

「……………え？」

聞き直すことは出来なかった。

いつものベッド。愛用の机。お気に入りのカーテン。

クリスマスにねだった、目に優しい電気スタンド。ヨレたポストイットがはみだす学校の教科書。誕生日にもらったアンティークの万年筆。

十数年を暮らしてきた自分の部屋に、瞬き一つで切り替わっていた。

ガラスのはまった窓の外には桐の木、お隣の屋根、日向ぼっこしている三毛猫。

見慣れた日常の風景。突発的事件など起こりようもない、のどかな昼下がり。

自分を確認してみる。布団をつかむようにして、ベッドにへたり込んでいる。手元には読みかけの本が開いたまま。

大好きな絵本作家のイラストの、使い込んで端がめくれた古びたしおりが落ちていた。幼い頃に父にうらやましげな目をされて、必死で書き込んだつたない自分の名がかすれている。

これはあれだ。

ぼんやりとしたまま自分の頬をひとつ叩く。

本を読むうちに眠くなつて首カックンする、身に覚えのあるパターンだ。うらかな午後に見れる、魔王級の睡魔に魂をいじられていたのだ。

しおりをはさんで本を閉じ、ベッド脇の棚に追いやる。寝落ちするほど夢中で読んでいたはずなのに、ひどく興ざめた気分だ。続きを読む気にならない予感がする。

部屋は何事もなかったようにシンと静まり返っている。

「………寝よ」

悪夢は終わった。めちやくちや疲れた。あれだけ長い夢を見てたら、脳も体も休まつてるわけない。うん。夢だった。だって言うわけないよ。学者バカだもん。夢でしか存在し得ない異色の瞳の冷血漢。

婚約者でなくていい、助手でなくていい。だからここにいてくれ。あんなこと、ラウーが言うわけない。

四時半。

カーテンと窓の隙間から漏れる光は弱々しい。アナログ時計を愛する父からのプレゼント、レトロなベルアラームは午前と午後を教ええてくれない。

どっちだろうと思いつながら布団の中をもぞりと泳ぐ。コットンの優しい肌触り、うーん石棺とは大違い。しあわせ………いやいや、あれは夢だから。

起き出して廊下を覗くと隣室のドアは閉まっている。両親は寝ているというサインだ。朝らしい。忍び足で部屋を出て階段を下りた。

ダイニングテーブルにはラップをかけた小鉢が一人分、ちんまりと置かれている。メモもある。

『起きないので寝かせておきました。夕飯は冷蔵庫にあります。チンしてね。母』

夕飯も食べずに爆睡していたらしい。十二時間ほどか。実に良く寝た。

だけど、と桐花はまじまじと見慣れた母の字の、見慣れない母の字を凝視した。

なんでコレ英語で書いてあるんだろう……。

チン、から矢印が引いてあり、電子レンジの電源とあたためボタンまで図解してあるのはなんでだろう……。

見回せば謎の大判ポストイットが部屋中に散りばめられている。

『冷蔵庫：食品を冷やして保存する箱』 『テレビ：画像の映る箱。』

英語音声切替はリモコン（ボタンのいつぱいついた黒い小箱）の赤い丸つけたボタンを押す』 『電話：離れた場所にいる人と話せる装置』

などと、解説してるのはなんでだろう。英語で。

おかーさんが英会話教室に通い始めたとか？ あー、駅ビルの教室にイケメン先生が来たらしいとか、回覧板渡しに来た肉屋のおばさんと盛り上がったたっけ。うんソレだ。

納得し、小鉢のラップをはがしにかかる。そこにもポストイットが貼ってある。

『海老団子です。血は赤くないから大丈夫だと思います。ご希望の食用虫ですが、蜂の子なら取り寄せられるかもしれません』

えっと。もしかして、おかーさんが駅前留学したんじゃないかと。

食事に関する思想に癖がある留学生を受け入れちゃったとか？

あ、しまった。ラップから水滴が飛んで服に、団子の汁なんてついたらシミが……。

団子汁が染みこんでいくワンピースを穴まで開ける勢いで見つめた。桐花が買ったものでもなければ、両親に買ってもらったもので

もない。ふらふらと自室に戻ってクローゼットを開ける。

真新しい、白い、すーんとした服。

数枚のうち一枚をハンガーから引きちぎるようにして手に取る。団子汁つきワンピースを脱ぎ捨て、白いすーん服に着替えてみる。サイズはぴったりだった。

ベッド脇に置いた、読みかけになっていた本を確かめる。英語だった。

またよたよたと階下へ下り、洗面台へ向かう。桐花専用棚にヘアゴムが増えている。後頭部で髪をひとつに結わえれば、鏡に映るのは謎の留学生。

恐らくトカという名の。

もう一つ階段を下りれば書店の店舗部分で、事務室と休憩所を兼ねた小部屋に通じる。そこを抜けていけばレジカウンター、書架、書架、書架、自動ドア、防犯シャッター、商店街の道路となる。

事務室の灯りをつける。ビン、と蛍光灯が鳴って明るくなる。三歩で到達してしまう対面の壁には店舗部分の照明スイッチと、そこへ通じるのれんが掛かった開口部がある。

スイッチを入れた。藍染めのれんの下で静かにしていたタイル敷きの床が、ここぞと白い電光を跳ね返してくる。その少し乱暴なまでの明るさを、久しぶりに見たような気がした。

目が慣れたところで、片手をのれんのスリットに差し入れる。手の甲でゆっくりと藍色の生地を持ち上げた。藍色と藍色の間から木製の書架が、色とりどりの本が現れ、本好きを酔わせる紙とインクの匂いが溢れてくる。

レジはあった。

だがカウンターがない。パイプ椅子にレジが載せてある。椅子の背には『カウンター紛失中につきご迷惑をおかけします』と貼り紙されている。カウンター周辺の書架はスカスカと、恥じ入るように

奥の背を晒している。

桐花は書架の間の狭い通路をゆっくりと歩き出す。背表紙を眺めながら、以前から売られていたのは知っていたのに、それらを初めて見るような気がしていた。

画集。ああ、刺繍はこうやってコピーすればいい。絵に書き写して解説つけて。そういえば紙。製法を百科事典から翻訳しといてあげればよかった。万年筆も。つけペンじゃ長く書けなくて不便だった。

でも金属が稀少なんだっけ。そしたらこれがいい、鋳業と環境の本。鋳山開発の歴史から精錬法、人体への安全性や環境問題の取り組みまで。

図鑑。ウゲツあのイモ虫ってカイコだったのかな。ちょっと違うな、でも養蚕業の本は使えそう。女性労働者の過酷な実態が綴られた『女工哀史』がやけに同情の涙を誘う。六法全書とか労働問題の本とかホント泣ける。

商店街の外れのささやかな本屋。

桐花は足を止め、店内をぐるっと眺め渡した。狭いスペースを補うため、壁は天井まできつちりとオーダーメイドの書架で埋められている。最上段にも埃ひとつない。

なんとという宝物殿で暮らしてきたんだろう。

書店の娘は、表紙に題名と著者名以外の刷られた本を持つたら駄目なんだ！ と泣いて頼む父はまた、雑誌や漫画はコンビ二に任せとおけばいいんだ！ と、売上貢献率の高いそれらのコーナーを最小限に留めていた。

母は文句の一つも言わず、父のすりきれたエプロンを大切に手洗した。色あせたピンクのはたきを前ポケに差したエプロンは、鎧と大刀にだって負けない父の戦闘服だったのだ。

別の通路へ足を向ける。

気象予報士試験テキスト。空軍は絶対欲しがる。地図。絶対いらぬ。けどこっちがいるんじゃないかな、地図学の基礎知識。

「あ、これもラウーが欲しがりそう……」
軍事関連の本へ指を伸ばしかけて、背表紙に触れる寸前で動けなくなった。

名前を言うんじゃないかった、と桐花は引つ込めた指で眉間を押さえる。それでたいてい涙は息を潜めてくれるはずなのに。

だってバカみたいだ。

いつの間にか腕の中に積み上がってしまった本を渡したら、あの指先がどれほどうやうやしく、大事そうにページをめくるか知りたいなんで。

キツチリ翻訳した皮紙を読んだら、爽やかに自分の腸で首を吊れとのたまうあの唇が、どんな感嘆をこぼしてくれるか聞きたいなんて。

あれほどあの生物兵器の射程から逃げ回っていたのに、茶と翡翠の異色の銃口を突きつけられたいと思うなんて。

今この瞬間でさえ夢かもしれない。確かめる術なんてない。これは現実だよと百万人に言われても、それが夢じゃない証拠なんてない。

『桐花。おまえには夢でも、』

信じればよかった。

『私には現実だ』

非人道的台詞の機関銃でも、どんなに精神破壊力のある銃弾でも、確固たる信念が原動力だった。文明の風化という壮大な敵を陥落するためには外道にもなるリアリスト。

彼の言葉を信じて、夢だと決めつけなければよかった。

「約束、破っちゃった」

恐怖で縛るのではなく、報酬と待遇で応えてくれようとしていたラウーの信用を裏切ってしまった。血でなく知の時代が来たと喜んでいたというラウーをきつと失望させた。

とっさに手に取った故事・偉人語録。ぱらぱらとめくるページの風圧で、雫になる直前の涙を乾かそうとする。

偶然に開いたのはシェイクスピアの言葉。

『運命とは、最もふさわしい場所へと貴方の魂を運ぶのだ』

キキイ、と細いブレーキ音がした。コトンとシャッターの郵便受けが鳴る。自転車のペダルを勢いよく踏み漕ぐ、ガシャリガシャリと力強い音がすぐに遠ざかっていった。

光と招かれざる客を拒絶しびつたり閉じられたシャッター。腰の高さの一枚には郵便受けが設けられていて、差し込まれた新聞は朝陽を招き入れている。天からの通知に思えた。

自動ドアの電源を入れ、新聞を回収する。日付は最後の記憶より数日進んでいる。

『日本兵、七十年ぶりに帰還』

小さな記事だった。

『昨夜、平和記念公園慰霊碑前で保護された男性は平良文治たいらぶんじさんと確認された。平良さんは大戦中に戦死したとみられていたが、市内の病院で無事に妹ら家族と喜びの再会を果たした。約七十年間の消息は不明』

「おじーちゃんだ」

不思議と驚きも衝撃もなかった。安堵していた。喜びの再会という文字をなぞりながら、自分が微笑んでいるのに気付く。

ジョージ・タイラー退役軍人、資料館の木彫り放浪僧風の妖木老兵、アダマス帝国軍の初代白魔。

どうか、今の世の中が少しでも、彼の祈願した平和に近くありますように。

この世界にはいるはずの八百万の神様に手を合わせ、目をつぶった瞬間。

「おやまーコワイ顔」

少年とも少女ともつかない、間延びした声が出た。

「えーまた君なのーもう諦めなよー7番世界の君が帰りたいって言うからトレードキャンセルになったのにー諦めなよーっていうか面倒、うあぁーふ」

20・それぞれの軍人魂

「諦めなよーっていうか面倒、うあぁーふ」

「ここじゃないならどこでも……待ってやっぱり7番がいい、早くして！」

紡ぐ家のトカ。並行世界の自分自身。

実の妹にさえ区別がつかないほど似た顔、似た声、似た体型、まさに一卵性双生児。

そのトカに一大事があるというなら、それこそ双生児の片割れ以上に他人事ではない。出来れば手助けしてやりたい。生贄寸前だったと知ったときには同情もした。

だけでももう少しこう、自助努力つてものをしようよ。

蓑虫のように縛り上げられながら、桐花はつらつらと恨み言を送信していた。

薄暗くても小さなゲルにいるのは、頬の押し付けられたフェルトの感覚、その下でちゃぱちゃぱと音を立てる小波、壁の格子状の骨組、刺繍の施された壁掛けから判断できた。

せつせと人間大の蓑虫を造形しているのは目出し帽のような覆面をかぶり、ぶかぶかとサイズの合わないツナギを着た大柄な男のようだった。ごつごつとした手には殴りダコらしき硬質な隆起が見える。真相を拳で語られちゃうのはイヤなので大人しく美術素材にされておく。

せつせと縄を巻く太い腕の向こうのねじれた毛布や倒れた壺が突然の、見知らぬ乱入を物語っている。

これはどう考えたって不審者に誘拐されようとしている場面ではないか。

ピンチを丸投げするのはやめて欲しい、と猿ぐつわ越しにため息をついた。

やがてギツギツと嚴重に結び目を締めて、作品・人間蓑虫は完成

したようだ。蓑部分をつかまれズルズルと外へ引きずり出される。海面を漂う朝もやに、林立する石柱がぼんやり透けている。遠くに櫛歯のような岩山、その背後にメノウ模様の巨大な木星が浮かんでいる。男は蓑虫桐花を肩に担ぎ上げ、いかだ際から二頭立てのイル力に乗り込んだ。

まさに拉致の瞬間だというのに、桐花はこみ上げる嬉しさに胸を熱くしていた。

帰ってきた。戻ってこれた。

一時停止していた約束を再生できる、その場所に。

さすが偉い人と書いて偉人、世のことわりを的確に、簡潔に、かつ美しく凝縮する言葉の芸術家だ。

『運命とは、最もふさわしい場所へと貴方の魂を運ぶのだ』

ここが運命とやらのふさわしい最終地点なのだろうか。

風がゴウと唸りを上げて吹きすさぶ岬の突端に転がされながら、桐花は思った。縄越しにも岩が痛い。

岬と言っても屹立する岩山が海との境界線を主張しているような断崖。内角の小さな二等辺三角形の岩場は天然のジャンプ台だ。

ネイティヴ居住地の石柱の高さから推測すると満潮ではないようだが、海面は近い。時折大きな波が砕けると水しぶきが岩場へ上がって来て、岩山の領地を侵略しようとする歩兵の足跡のようだった。覆面男は自分の腰と桐花の腰を縄で結んだ。ポケットから何か乾燥したものを取り出し、焚き始める。煙が安定して上がるようになるとさらに何かを加える。煙の色が不吉な赤みを帯びた。

どうやらのろしを上げているらしい。

命を奪うのが目的なら、蓑虫にするまでもなくデカイ帯刀でやれたはずだ。腰同士を結んだときは心中かと疑ったが、覆面男は煙の流れる先を仰いで何かを待つ風情を見せている。

やがて二羽の巨大な鳥が飛来し、煙を避けながら上空で旋回を始

めた。茶色い鷲の背にまたがり石鎧を纏った兵士は高らかに、アダマス帝国軍の警備隊だと名乗った。

それを待ち構えていたらしく、覆面男は桐花の肩を太い腕で抱き込んで怒鳴った。

「アダマス帝国軍よ。自分は昨日、ネイティヴより不当に奪われた生産技術情報の全ての返還を要求するものである。直ちに要求に応じない場合」

シャリーン！ と抜刀されたデカい石の刃を喉元に突きつけられ、桐花はのけぞった。

「ラウー・スマラグダス中佐の婚約者である紡ぐ家のトカを殺害する！」

警備兵が息を呑み蒼白になるのが見えた。

「わ………悪いことは言わない、やめておけ！」

「今なら見逃してやる！」

人質事件はまず説得から。アダマス帝国軍の教育は末端の警備兵にまで行き届いているらしかった。

「狂人を羨むほどに精神を切り刻まれるぞ！ 痛覚しか残らない生ける屍にされるぞ！」

「あの方は処罰するために瀕死の重傷者だつて生き返らせるんだ。

ゾンビを作れるんだ。ドクターなのは命を救うためじゃない、生きたまま殺すためなんだ！」

少々の脅しを取り入れるのも効果的かもしれない。

「人質ならせめてダルジ大佐の愛人にしておけ！ たくさんいるから一人くらい大丈夫だ！」

「そつだ、それならせいぜい公開死刑で許してもらえろぞ！」

代替案が間違つてやしないか！

真実を訴える心のこもつた説得に、覆面男は口ごもってしばらく躊躇した。それを警備兵は見逃さない。

「世界のどこに逃亡しようと、スマラグダス八鬼神に捕まるぞ。あいつら全員ユピテライズに間違いない、おかしい、おかしいよ」「

「しっ！ 八鬼神の一人が戻ってるらしいぞ。き、聞かれたら食われる」

「そ、そうだな。だからつまりソレを解放してこちらに渡せ」

「そうだそうだ。覆面よ、居住地の母さんもきつと心配して泣いているぞ」

やっと普通の説得になった。桐花も解放の期待を込めて覆面男を見上げる。

が、目出し穴の奥の黒い瞳は怒りに燃えていた。

「マザーだと？ マザーは翻意してしまわれた………気高い国粹保存主義を捨ててしまわれた………ネイティヴの守り続けてきた力を、アダマス帝国は破壊と殺戮に利用する気だ！ 断じて許されない！」

喉に貼りつく石の刃に再び力と殺意がこもり、桐花は苦しい猿ぐつわの隙間から荒い息を繰り返す。

ツナギなど着てごまかしているが、この覆面男はネイティヴの、マザー・ガウフの側近に違いなかった。マザーが帝国軍に情報提供したことに怒り、取り戻そうと単身、強硬手段に出たのだろう。

筋肉質な体格や人間糞虫を担いで岬まで登った体力からして、かつて桐花を海に流し殺そうとした兵士かもしれない。未遂に終わったが、もう一度殺すことに抵抗はないように思えた。

警備兵の鷲が一羽、岬の上空を離れて城塞都市へと急行していた。残った警備兵の顔から沈鬱さが消えている。覆面男を誘拐脅迫犯として監視する兵士の眼になった。

説得は失敗したのだ。

朝陽がしつかりと昇った。だが涼やかな陽光に反して、岬の岩場は緊迫感に包まれている。

覆面男は桐花の全身を盾にして、山側に陣取ったアダマス帝国軍と対峙した。海側の背後に軍鷲を飛ばせないよう要求し、巨大な焚

き火を起こすよう指示する間も桐花の喉を脅かし続けた。

のけぞっていないと刃が食い込んできそう、桐花には帝国軍の姿がよく見えない。それでも磨かれた銅色の肌をしたマツチヨと、朝陽に燦然と輝く金属鎧は確認できた。

桐花は目を閉じて深呼吸する。

スマラグダス中佐とダルジ大佐。あの二人が揃った姿があるだけで、どんな最悪な状況にも光明が見えた。垂れ込める暗雲を冷たい光の剣で切り裂き、温かな烈風で吹き飛ばしてくれる、その信頼を裏切らない。

彼らがああ若さで中佐であり大佐である理由、慕う兵士の気持を桐花は震えそうな全身全霊で納得しようとしていた。

交渉相手の登場を察して、覆面男が叫びだす。

「繰り返す！ 昨日、アダマス帝国軍がネイティヴから奪った生産技術情報の焼却を」

「断る」

靴下に穴開いちゃった。捨てちゃえー！

そんなサラリ具合の即答が岬を静寂に包んだ。

「ソレはすでに私の助手でもなければ婚約者でもない。人質に値しないモノが対価の取引など驚の餌にもならない。これ以上私の時間を浪費させるつもりなら人質ごとおまえの首を掻き切らせるぞ」

「はあ？ 待てラウー！」

猿ぐつわに封じられてしまう桐花の叫びをダルジ大佐が代弁してくれた。

「あれほどこれ見よがしにイチヤイチャしといて何だ！ 嫁候補を見捨てる気か！」

「昨晚、助手の約束も婚約も破棄しました。私の家からも退去し、ネイティヴ居住地に帰らせました。今後、私とは一切の無関係を保ち、紡ぐ家のトカとして業務に励むことで一致しています」

氷の大地のように冷たく平坦な言葉に、桐花の頭から血の気が引いていく。

これはトレードなのだ。

自分が元の世界に戻った瞬間、並行世界の自分もその世界へ戻る。並行世界の自分がいない場合は一方通行になるのだろう。ジョージ・タイラー妖木老兵がその例だ。ただ消えてしまった。

だが桐花にはトカがいる。

桐花と入れ替わりにこの世界に戻ったトカは日本語を知らない。

桐花が持ち込んだ本を翻訳できない。そうならば助手としての約束、ダルジ大佐の嫁候補攻撃に対抗するための婚約者としての約束は無意味になる。

おまえの体は壊れても痛手ではない。だが中身に用がある、と言われた。

だからこそ助けてもらえた。

トカでなく桐花だ、またトレードしたと理解してもらえていない現在、スマラグダス中佐にとって桐花は翻訳機能という中身のない人間糞虫にすぎないのだ。

「あなたの花嫁候補ならご自由にどうぞ。ただし、生産技術情報の焼却は断固拒否します」

「えー。なんかそう言われると俺もやる気が出ないっつーか」

薄情者ー！ 二人とも薄情者ー！

人間としての良心を一顧だにせず、軍の不利益にしかならない取引に難色を示す彼らがああ若さで中佐と大佐である理由を、桐花は嘆き震えながら納得しようとしていた。

「あーでもレンカちゃんって嫁候補の妹だろ？ 助けないと嫌われちゃうなあ」

なんて消極的な救理由なんだろうか。

「スタイルいいんだよーあの子。自覚ないのがまたいいんだよ。まーネイティヴは貧乳寸胴が美の基準らしいからなー宝の持ち腐れってヤツだな」

桐花はネイティヴ的にはスタイルがいいらしい。だが豊満さを女性らしさとする西洋的な文化で育ってきた桐花としては素直に喜べ

ない。貧乳寸胴と褒められても無い胸が痛むだけだ。

「声かけたら『組む家として半人前の間は、提督に求婚されようとお断りなの。あたしは男以上に働くつもりだから、嫁にしたいって言うなら男を極めてから出直して！』なんてタンカきられて惚れた、いやあ惚れたね！」

姉から妹に乗り換えたのか、薄情を極めたのか！

「嫁候補姉妹は俺が助けないと！おいラウー、おまえがまきあげた刺繍よこせ。もう見たんだろ？」

もう見たか。

その質問が『もう覚えたか』を意味していると桐花にはわかった。幽霊船の搭載物を全て飲み込んだ中佐の記憶力ならば、生産技術情報 of 縫い取られた刺繍を見ただけで丸ごと記憶してしまっただろう。のけぞった状態から慎重に顎を引いて、桐花は帝国軍をきちんと見ることができた。

巨大な焚き火に刺繍をかざす大佐を、中佐が氷の視線で刺殺しようとしている。炎の赤い舌が刺繍の縁を舐め、味を気に入ったように包み始めた。

「あえ！ おやひははあえー！」

ダメ、燃やしたらダメー！ という叫びは猿ぐつわに阻まれる。喉を動かしたせいで、刃の当たっている部分にチリリとした痛みが走った。

たとえ情報を記憶で保存したとしても、燃やしてはいけない。刺繍はネイティヴの紡ぐ家が作り上げた美術品でもある。情報記録装置というだけではない文化財だ。

なのに、と桐花が肩を落とした瞬間。

茶と翡翠の瞳から、陽光さえ凍らせそうな冷気が溢れ出した。

21・黒アゲ八舞う

スマラグダス中佐の手が燃え始めた刺繍を奪取する。背後の兵士へ消火を命じてから覆面誘拐犯へ向き直った中佐からは、先刻までとはレベルの違う冷気が放たれている。間近で浴びてしまった兵士が膝をガクガクさせ、抱えていた水壺を取り落とし、結果として消火した。

「ラウー、嫁候補・姉を殺すつもりか！」

「いいえ、私の婚約者です」

パンツに穴開いちゃった。捨てちゃえー。

そんなサラリ具合で中佐は答えた。詰め寄った大佐の瞳の烈火さえあつさりと鎮火する。

「あーもーコイツわけわかんねー……」

大佐が呆れて呟きながらしゃがみこむ。場の統率を放棄したらしかった。

桐花も頭がぐるぐるしてしゃがみこみたかったが、デカイ刃が首筋に押し当てられている状況で実行すれば頭がぐるぐるどころかゴロゴロとカットされてしまう。蓑虫の身で唯一自由を許されている爪先で踏ん張りながら考えた。

婚約破棄を撤回した？ 秘策あつての虚偽発言なのか、それともト力でなく桐花とわかつたのか。「あえ、おやひははあえー」が猿ぐつわを通したら「わたし桐花なのー」に聞こえたとか。

ああでもよかった、助けてもらえそう！

しゃがんだまま、大佐がハイイと質問の挙手をした。

「確認するけど、おまえの『いいえ』が否定してんのは『嫁候補』だけ？ 『殺すつもり』は否定しないの？」

なんとというグッドクエスチョンですか大佐！

もし蓑虫の中身がト力でなく桐花だとわかつたのだとしたら。今の状況は脱走禁止令を破って逃亡した犯人がノコノコと洗った首を

差し出しながら戻ってきたようなものじゃないか！

「後者も否定します。殺すつもりはありません。死んでもらう選択肢は与えませんが」

婚約者の喉に穴開いちゃった。捨てちゃえー。

そんな軽い投棄っぷり。そうだった自分の手を汚さない主義だったね、ラウー。主張に一貫性があるのは感心するけど、その主義自体がいただけない。

「かわいそーな嫁候補・姉！ ラウーにつかまったのが悪い運命だと諦めるよー！」

それはもう半分諦めました。けど大佐、今は誘拐凶悪犯につかまってる運命をどうにかしていただけじゃないでしょうか？

「ダルジ大佐」

空気が一変した。

ラウー・スマラグダス中佐の低く静かな一言で、兵士たちが踵を鳴らして背筋を伸ばす。大気の分子までもが整列し、直立不動したように思えた。

キンと冷えたオーラの中心で中佐は宣言する。

「ぜひお心おきを。運命とは我々の将来を預けるに値しない不確実性です」

蛇に睨まれた蛙はきつと、恐怖で動けないのではない。蛇の目にある圧倒的な意志に、蛙は畏敬しひれ伏すのに違いない。

「運を天に放任すれば可能性、知恵を尽くして制御すれば確実性。

実現率を変えられるならば、人の知恵は運命という絶望を凌駕し支配できる」

信念という心の力で兵士を、戦場を、運命を統制する。ふりほどくのが困難に思える運命の糸に絡め取られていても、彼は操り人形に甘んじない。

だからこの人は中佐なんだ、と桐花は魂を揺さぶられながら思った。

「あーナニ、窮地脱出の心得？ ありがたく思えよー行き当たりば

「つたりな俺がいるから、おまえら参謀はメシが食える」

ポジティブシンキング大佐。

だからこの人は大佐なんだ、と感動を挫かれながら桐花は思った。中佐は仮にも上司である大佐の言葉を涙も出ないほど完璧に無視して、誘拐覆面男へ向き直った。

「状況が変わった。私には条件を飲む用意がある」

死んでもらう選択肢を強制する前に、一応助けてくれようとしているらしい。

その言葉には含みがあった。『帝国軍には』ではなく『私には』。交渉の責任一切を個人で負うという宣誓だった。

「帝国軍がネイティヴの生産情報を破壊と殺戮に利用するつもりだと主張しているそうだな。おまえが懸念しているのは硝石の製造法だろう」

「そうだ」

交渉相手に要求を即却下され、渋々受け入れられたと思えば仲間割れ、さらには運命論講義と急展開の連続に戸惑っていたのか、苛立った沈黙を守っていた覆面誘拐犯が急に勢いを取り戻した。

「硝石製造法の聞き取り調査を中止しろ。同時に、サンプルとして譲渡された硝石の返還を求めろ！」

「了承した」

中佐は背後に控えていた兵士の一団を指先ひとつで招き寄せた。

「科学技術部、昨日預けたサンプルを」

「いやああ！ ご主人さま、それだけはやめてええ！」

悲痛な嘆願を叫びながら一団から走り出てきたのは、うら若き舞妓。

着物だ、日本人だ！ と興奮するより先に愕然とする。

舞妓と言っては舞妓に怒られそうな出で立ちだった。桐花は喉の痛みも忘れてまじまじ観察する。

まず裾が短い。太腿もあらわな超ミニ丈。逆に袖は振袖並みに長い。襟を抜きすぎて指先が袖に隠れている。着物は黒だが前に結んだ帯は絢爛豪華だ。

足元は花魁が履くような底の分厚い黒塗りの下駄。長い黒髪は大雑把に結び上げ、かんざしが無造作に挿し散らされている。

白塗りはしていないが、それでも白磁の肌に朱の目元と唇が艶やかだった。

その舞妓もどきが包みを抱きかかえてイヤイヤしている。

「おつきくしたのにい！ あたしのだもん！ あたしの大事な可愛い子おおお！」

長い袖をぶんぶん振って駄々をこねる姿がやけに似合う。兵士たちが見てはいけないものを見てしまった顔を並べて一歩さがった。

だがご主人さまと呼ばれたスマラグダス中佐の氷の仮面は微動だにしない。

「おまえは不在のはずだ」

「認知してくれないのねー。ひどおい、あたしはご主人さまの子供よー」

兵士たちがどよめいてまた一歩さがった。

「それ以上誤解を生ずる無駄口を叩くなら」

「オーケイ！ りょーかい！ 黙ればいいんでしょー。でもこの子を渡すのはいやああ！ あたしとご主人さまの愛の結晶おお」

兵士たちがさらにどよめいて一歩さがった。悶える舞妓もどきと桐花を交互に見比べ、修羅場に居合わせてしまったようなハラハラ顔をしている。

別に、と桐花は思った。

婚約者ってというのはダルジ大佐の横槍をかわして助手を確保するための嘘だから、ラウーに子供がいようが子供との子供がいようが構わないといえは構わない。年齢的人道的には構わないとはいえないが、個人的には構わない。はずだ。はずなんだけど。

イラツとする………。

中佐の仮にも婚約者が頭切断寸前の糞虫にされているというのに舞妓もどきめ！抱いてるのが火薬だってことはわかってるんだー、おとなしくお縄につけ、じゃなくて火薬と人命とどっちが大切なんだー！

中佐の語った硝石という単語に、桐花は心当たりがあった。資料館で倒れたジョージ・タイラー妖木老兵の回復を待つ間、関連する全ての本から抜粋して訳しておけと命じられたリストのトップにあった。

木炭と硫黄で作る火薬に硝石を混ぜると、より強力な威力を持たせることができる。天然の硝石は、切り立った岩山ばかりの比較的温暖湿潤そうなこの土地ではほとんど採取不可能のようだ。ネイテイヴはその稀少な、軍事的に重要な硝石の製造法を秘匿していたらしかった。

しかも硝石だけでなく、木材もここでは貴重である。

火薬らしき油紙に包まれたモノを手放したがないのも当然だ。だからって中佐の仮にも婚約者の命より大事ってことはないだろー！しかもそれを抱えてるのが軍人じゃなくて舞妓もどきなのは何故だー！

「諦める」

「いやああ、ご主人サマのいじわるーっ」

「彼らとの衝突緩和、人質救出に必要な。任せるぞ」

「りょーかい、ご主人さま……あとで埋め合わせしてね」
くすん、と鼻を鳴らして舞妓もどきはがつくりとうなだれた。

誘拐犯、と中佐は舞妓もどきの襟の後ろをつかんで突き出しながら言った。

「ここで火薬を焼却すればおまえも含めた全員が吹っ飛ぶが、どう処理をする？火薬を無力化する水分ならば、周囲にいくらでもあるが」

「水分……海か、海に捨てる！」

海と言われて視線だけで見回してみても、桐花はびびった。いつの間にか干潮になったらしく、すぐ近くにあった海面がはるか眼下まで遠ざかっている。子供用のジャンプ台程度だった岬は目のくらむ断崖絶壁へ姿を変えていた。

水面とて、高所からの衝撃は破壊的だ。数十メートルもの距離を落下すれば、迎えるのは水面とはいえコンクリートと大差ない。

転落する可能性は数メートルでも数十メートルでも同じだが、桐花には急に足元が不安定に、海風が強くなったように思えて泣きそうになった。

「じゃあ、あたしが投げるわねー。ううっあたしの子、来世で咲いてね」

ずるずると見るからに重そうな黒塗り厚底下駄を引きずり、舞妓もどきが前へ出る。

「女、それ以上近寄るな！」

「やだーあたし丸腰なのに？ ほら。ほらあ」

舞妓もどきは包みを両腕で抱え上げ、小さな尻をぷりぷりと振ったり、体をひねって肩甲骨まで覗けるほど抜かれた襟を見せつけてくる。長い袖もハタハタと風になびいている。弓や刀を隠す場所などなかった。

「わ、わかった」

誘拐犯がおののいている。貧乳寸胴を美とするネイティヴにとっては、舞妓もどきの幼さを残した中性的とも言えるほどの胸や尻のすーん加減が心臓に悪いに違いなかった。

数メートルまで近づいてから舞妓もどきはきゅんと右へ向き、包みを海へ放り投げようとする。しかしその先には規制線代わりにホバリングする鷲と兵士がいる。

舞妓もどきはむきだしに近い肩をすくめ、くるりと反転して左を向く。そこにもホバリング鷲がいる。朱の鮮やかな唇を尖らせ、また肩をすくめる。

覆面誘拐犯と桐花に向き直り、舞妓もどきはアイドルばりの華や
いだ笑顔でにつこりした。

「軍人さんで血の花を咲かせてもいいけど、血しぶきが着物に付く
のは大ッ嫌いなもの。だからあんたの背後に投げるね。届くとい
いなあ、あたし非力だからー、ていつ」

誘拐犯の返事を待たず、油紙で嚴重に封じられた火薬の包みはテ
ロツとした光を反射しながら空を切った。覆面が反射的にそれを追
って顔を仰ぐ。

だが桐花には別の飛行物体が見えていた。

火薬の包みを投げた一拍後に振り抜かれた舞妓もどきの左脚。そ
の足先から大砲の弾丸のように蹴り出される、黒塗り厚底の下駄。

それは誘拐犯へと真っ直ぐに飛来した。そこまではよかった。問
題は、誘拐犯が盾を持っていたことだった。盾、すなわち人間大の
蓑虫状の桐花。

肩を押さえ込まれ身動きのできない桐花のみぞおちに、超重量級
下駄がクリーンヒットした。打撃に押されて体が曲がる。重心が浮
く。唯一自由になる足先が中空を掻いた。

重力が裏返る。

視界は岩場から青空へと転じる。誘拐犯が持っていた、桐花の首
を脅かしていた石の刃が離れていく。背後から地獄に墮ちる者が足
掻く、おぞましい悲鳴が聞こえた。

落ちる。

誘拐犯ごと岬から転落したのだ、とわかった。全ての音が遠ざか
り、代わりに中から肋骨を打つ鼓動がやけに間延びして響いた。

スローモーションで遠ざかるうとしていた足先の岬から、青い空
を背にして鮮やかな黒が飛び出してくる。黒い振袖がはためき、黒
アゲハの羽のようだ。アゲハは豪華な前帯に手をつ込むと何かを
取り出した。落ちながら腕を伸ばし、朱色の唇で楽しげに笑う。

「水中花の着水、開花まで2ー、1ー、もひとつ1、咲いちゃえ」
舞妓もどきな黒アゲハの手からガンガン、と爆竹に似た音と

白煙が噴き出す。

すでに風を切る速度で落下していた桐花の頬を何かがかすめる、鋭い気配がした。

拳銃？

次の瞬間、轟音と水音と下からの衝撃に桐花は意識も体も握り潰された。巨大な水柱に突き上げられて落下速度は相殺されるも、すぐに水に飲まれて重力を取り戻し、引きずり込まれて水中へと沈む。大量の泡で視界は真っ白になった。

衝撃に揺らされた脳が意識を寸断する。本能が息を吸おうとするのに、猿ぐつわに阻まれる。水面と思われる方向に浮上したくても、糞虫状態の縄が許さない。それどころか腰のあたりに強い引力が絡みつき、昇る泡と逆の方向へ連れ去ろうとしている。

この世界は夢じゃない、現実だとわかった途端に溺れるらしい。

『運命とは、最もふさわしい場所へと貴方の魂を運ぶのだ』

運命のバカー。トレードのバカー。身代わりになってト力を助けたのに、連れて行かれるのは竜宮城じゃなくて単なる海底じゃないかー、と桐花が意識の途切れる寸前で神様へ悪態をついたとき。

ザバンと激しい水音がして眼前に飛び込んできたのは、水中でさえまぶしくキラめく金属鏡。

金属鎧から伸びる力強い腕は覆面誘拐犯と繋がれた腰縄の引力を断ち切り、泡立つ海面を破って桐花を空の下へ押し上げた。運命の糸に囚われた人形を、人間蓑虫だが、解放するように。

水圧やまぶたを通してくる光の変化でそれを感じられるものの、確かめるために目を開けたくてもまぶたが重くて引き上げられない。喜ぶ気力も湧いてこない。意識だけが体を離れてまた海底へ落ちていくように思えた。

猿ぐつわをむしり取られる。バチバチと頬を叩かれる。痛いと抗議したいが唇が動かせない。途端にその役立たずな唇が塞がれた。

温かい息が気管を吹き抜け、肺を満たす。キスのような、と桐花はぼんやり知覚した。婚約者パフォーマンズのキスをしながら盛大なため息をつかれていられるらしい。二度も三度も何度も何度も繰り返さなくても、わかったってば。

顔を背けようとしても唇は執拗に追いかけてくるから、ムカついて噛みついた。噛みついたつもりだけど望むほど強く出来てなかったよ。そこでやっと酸素不足と思いがた。隙間から懸命に息を引き込むと、やっと唇は退却していった。

頭が徐々にはつきりしてくる。漠然とした青しかなかった視界は空と海に分かれ、波や岬の断崖絶壁を捉え、海面で頭を支えてくれる金属鎧の胸を映し出した。

「アイヤイ、誘拐犯を確保しろ」

耳元にラウーの声がする。

「えー、なにい？」

少し離れたところで黒アゲハな舞妓もどきが覆面頭を背後から抱え込み、拳銃の銃床でガンガン殴りつけていた。

「あんたのせいで着物が水浸しー！ やだー失神しないでね、まだ山ほど文句あるんだからあ。あたしの可愛い子を人質救出なんか

無駄死にさせてええ！」

グツタリした覆面を抱えたまま、舞妓もどきはキツと桐花を振り返った。顔や首筋に貼りつく水に濡れた黒髪がなまめかしいが、アイシャドウの朱色が水に溶け、血の涙を流しているようでコワイ。

「満潮なら爆発させずに済んだのに。恨んでやる。救出命令されたときの胸引き裂かれる思いったら、ああんあたしの子ー！ 戦場で花散らせてあげたかったーっ」

救出命令なんて指示してたっけ？ 舞妓もどきのスタンドプレーじゃないの？

と思つたのが瞬きの回数に表れたらしく、はんと鼻を鳴らされてしまった。

「頭悪いのお？ あんたたちと海との衝突緩和、人質救出って命令したでしょ。救出。保護と違うの。見てよこの崖の落差、どっかで衝撃を和らげなきゃ仏サン一直線。だから爆破で水柱立てたワケ。花火の距離とタイミング、あはーんあたしってカンペキ」

あたしがあたしじゃないならあたしに惚れる！ とムリな仮定にうつとりしてから、舞妓もどきは思い出したように付け足した。

「でもご主人サマってば、やーめーてー。急降下してる鷲から飛び降りてソレ回収しに海に突っ込むとか勘弁してー。そういうヤバイことがあたしたちの餌なのにい」

軍の巡視艇である小型帆船に拾われて、桐花はやつと蓑虫の殻から解放された。鼓膜がズキズキ痛むし喉に小さな切り傷ができたが、それ以外に怪我はない。

「生きてたか、嫁候補・姉！ 嫁候補・妹には俺が助けたって言えよ！」

「私の婚約者です。解決の発端を作ったのは大佐ですが、実行は」
「発端がなきゃ解決もないだろ。俺が助けたって必ず報告しろよ！
必ず、いいな！」

帆船にはダルジ大佐と、岬に集合していた兵士の一部が待ち構えていた。大佐の熱心な売り込みを、桐花はハアと曖昧な返事で濁す。桐花の横でもハアと息をこぼす人物がいた。黒い袖を絞ってビタビタと甲板を濡らす舞妓もどきが悲嘆にくれながら顔を振っていた。「あんもつ、花火も着物も台無し！。責任取ってね、ご主人サマー？」

ねだるように仰ぐ先には全身から滴り落ちる海水など気にも留めず、端の焼け焦げた刺繍の損傷を確認するスマラグダス中佐の背中がある。舞妓もどきには一瞥さえ寄越さずに眩く。

「分際を忘れた傭兵に与える花火はない」

「はッ」

突然の電気に打たれたように、舞妓もどきは直立不動をとった。

「ご無沙汰致しましたボス！ 傭兵アイヤイ、帰投致しました！」

硝石入荷と聞いて我を忘れ科技部に直行し非番の者まで叩き起こし徹夜で作業させ報酬はパンチラで踏み倒した非礼、深くお詫び申し上げます！」

腹から張った声、指先まで研ぎ澄まされた緊迫、触れれば斬られそうな鋭さで覆われた漆黒の瞳。舞妓もどきは一瞬にして兵士になった。突然の変貌ぶりに、周囲の兵士さえビンと居住まいを正す。

だが次の瞬間、傭兵はへにゃつと笑って振袖を揺らしながら、帝國軍人たちに陽気にひらひら手を振った。

「ハアーイ軍のワンちゃんたち！ あたしがスマラグダス八鬼神の一人、羅刹のアイヤイよー！」

羅刹のアイヤイ。

それを聞いた途端に兵士たちはどよめき、一歩二歩と後退した。大佐が疲れたように呻く。

「おまえんとこの八鬼神は相変わらず狂ってるな、ラウー」

「いいえ、そのような名称の組織は認めていません。私直属の傭兵の一員にすぎません」

「んもー認知してっばあ。それから大佐の身分をいいことに相変

わらず失敬なこの筋肉バカの発言の訂正を求めます、ボス」

「厚顔さが役職に比例するなら、その男は生まれながらにして提督だ」

取り込み中とは思ったが、桐花はあのと声をかけた。

「助けて下さってありがとうございます。軍の大事な火薬を無駄遣いさせてしまって、すみませんでした」

「軍の？ ノー！ あたしの子おお！」

実は傭兵だった舞妓もどきが頭を抱えてのたうっている。

「軍の弾薬だ」

金属鎧は刺繍に屈みこんで背を向けたまま訂正を入れてきた。静かな声が恐ろしい。

「あの。ちよつと混乱というか動揺というか故郷が懐かしくなったというか、それでトカと入れ替わったんですが。お互い思い残すことがあって、また帰ってこれました」

「わぁコレ二重人格ってヤツなのー？ やだ楽しい」

桐花は舞妓もどきアイヤイが興味津々に覗き込んでくるのを無視させていただく。

「助手の約束を二度も破ってしまって反省してます。でも一度戻ってみて、翻訳をやり遂げたいという自分の気持ちに気付かされました。だから」

ラウーの背中に目が付いてないのは承知だけれど、頭を下げた。

「もう一度助手にしてください、お願いします」

長い沈黙。ズキズキする鼓膜に、甲板を抜ける海風がしみるようだ。不安になる。どんな非道な答も即答が常だというのに。

「ねえねえ二重人格ちゃん」

その間に舞妓もどきが甲板に這いつくばってまで覗き込んでくる。

「三度目の正直、仏の顔も三度まで。でもご主人サマは仏の対極だし阿呆がお嫌いよー。二度あることは三度ある、覆水盆に返らずタ

「イブよー」

口調はフザけてるし、珍しいオモチャを見つけた子供みたいな笑顔だけど、朱のアイシャドウの剥げた目はものすごく笑っていない。「助けてから極刑にする念入りなサドだもん。命乞いはガン無視だし」。逃げる？ 逃げたい？ うふふふ女の子を狩るの、ひさびさあ」

嬉しそうで不吉な忠告が聞こえるが、ひたすら頭を下げておく。今は桐花という人間の資質を問われている、そんな気がしたから。

「……ならば、二度とあんな目で私を見るな」

一瞬にして甲板を包み込んだ寒気に、舞妓もどきの楽しげだった口角が引きつったのが見えた。

あんな目？

「助手だと告げたときの怯えた目。私の家が住居だと告げたときの絶望的な目。婚約者だと告げたときの生き地獄に墮とされたような目。契約と婚約を破棄し居住地へ戻る許可を与えた時の、かつてなくこの上なく嬉しそうな、安堵の涙までたたえた目だ」

淡々とまくしたてられた。

「こわっ。二度目も許さないのねーご主人さま」

這いつくばったままニジニジと器用に後退して離れていく舞妓もどき、軍艦マーチを歌いながら操舵室方面へ消える大佐の高らかな急ぎ足が場の一触即発性を物語っている。ラウーと二人きりに見捨てられた。

やだなー違うよラウー、その目をしたのはわたしじゃなくてトカじゃないかー。

とは言えない雰囲気バシバシと伝わってくる。でもこれは明らかに言いがかりというか逆恨みというか！ トカと同じ顔ではあるけど別人だから！

「んーと……その目について怒られるのは微妙に矛盾があるような。病院で、ここにいたら助手でなくても聞いた気が」「記憶に無い」

政治家か！

「あのとき病室にいた人に確認しても？」

「箝口令を敷いた」

独裁者か！

「おまえの人格変化もタイラー師の消滅も、説明に窮する事象だった。やむを得ない」

Xファイルか！

でもこれはラウーが正しいと思った。並行世界だなんて、自分が体験しなければ信じがたい。そろそろ顔がうつ血して苦しくなってきたので頭を上げた。

「おじーちゃん、無事に帰ってました」

ジョージ・タイラー妖木老兵は故郷に戻り、家族と再会したと伝える。そうか、と無感情に答える中佐の顔は窺い知れない。

でも金属鎧の肩からわずかに力が抜けたように見えた。

「民話や神話のタブーについて話したのを覚えているか」

首がムチ打ちになったのを隠してるんじゃないかと疑いたくなるほどしつこく振り返らないまま、中佐は訊いてきた。突然の話題転換に戸惑いつつも、急いで記憶の引き出しを漁ってみる。

「あーはい、したような」

向けられているのは後頭部なのに睨まれたとわかる緊迫感。

「いえしました、そうそう浦島太郎の話でしたよね。ほら覚えてます。覚えてるんです！ ラウーみたいに一言一句つてわけにはいかないけど！」

神話に登場するタブー。玉手箱を開けてはならない、冥界や黄泉から連れ戻す妻を見てはならない。そうした禁を犯すと災いを受けたり別離を強いられるといった罰を受ける。

「竜宮のように歓待しても浦島太郎は帰った」

血でなく知の時代をと説いたタイラー師という浦島太郎は帰って

しまった。師の理念の実現を大きく前進させられる助手を鞭や飴や嘘で確保しようとした、その助手まで立て続けに失った。

「あれ以上どうすれば留めていられたのか、見当がつかない。文明を守ると言いながらその最小構成単位であるたった一人さえ満足に保護してやれないとは笑い種だ」

知の時代を切り拓こうとしていたラウーにとって、どれだけの失望だったことだろう。

「だがマザー・ガウフが好例だ。女は好きな男のためなら民族を危機に晒しても情を貫こうとする。だから誰かを愛せ。この世界の誰かを愛せば自らここに留まるだろう」

「えーと……」

浦島タイラーの話をしてたのに、なんで女性論になるんだらう。

謎だが、とにかく助手だけは戻ったと強調したい。

「ラウーはわたしを、誘拐犯の腕という冥界から連れ戻してくれました」

部下を使うという新鮮にして手抜き感のある手段で。

「でもわたしはまだ婚約者で、妻じゃないから、振り向かれても消えたりできませんよ？」

役に立ちたいから、約束を守りたいから、この世界にいる。そう伝えたかった。

やっと中佐は振り返った。茶と翡翠の瞳の端には警戒が載っている。安心していいよ、とニッコリしてみせた。

途端に両頬をデカイ手に挟まれ、唇を強奪される。操舵室から大佐が凝視でもしてるのだろうか、めちやくちやに熱烈な婚約者パフオーマンス。

顎を砕きそうに力のこもった掌は首を滑り、肩を撫でて背中へ回り、腰を抱いて引き寄せる。ウエストまで形状記憶しなくていいから、ブティック店長マリポーサに測ってもらおうから！

ぴったり含むように覆ってきていた唇からもっと温かく濡れたものが攻め込んできて、ひいっもしかして舌？ どうしろと！ どう

しよう、とつろたえて引きつった唇の間を素早く侵攻された。わあ
舐められてる！

口を閉じたいけど、閉じたらスマラグダス中佐風キスの講義妨害
と叱られそうだ。かわりにぎゅっと目を閉じて、おずおずと唇と舌
を明け渡す。遠慮なく進駐した舌を舌で迎えた。

毒舌、とか思ってるけど。ラウーの舌は毒どころかほんのり甘い。
どんな料理の味とも違う、舌触りも違う、そもそも料理は口の中で
こんなに器用に動き回ったりしない。踊り食いはしたことないけど、
たぶん。

出会えばゆっくり絡んでくる舌先は、何度も抱きしめ直す腕のよ
うに感じた。

不意に解放されると、濡れた唇に海風が冷たい。かばうように風
上側へ頬を寄せたラウーの唇が淡々と宣言した。

「ならば、桐花。私はおまえを妻にする」

・・・・・・はい？

23・ 姫の憂うつ、太郎の高潔

ありえない単語がありえない文脈で出現した気がした。

「私は振り向かない。振り返らずに前へ進む。おまえは私を、ここに留まる理由にしろ」

はい？

いえ確かにラウーの助手がんばりますってというのはこの世界に留まる理由ですけど、なぜ妻？ どこから妻？

問いただそうと顔を上げたら、異色の瞳に囚われた。春の優しい土の色をした茶と、萌える草原の緑。いつもの極寒の酷薄さは影もなく、静かにまつ毛を伏せているだけで、豊饒の大地に包まれているような錯覚をおこす深い瞳。

反則だ、と桐花は思う。

圧倒的な美しさを前に人は言葉と思考を忘れる。唐突であればなおさら。しかもたちの悪いことにこの人は自分の瞳に美しい情景があるなど知りもしない、だから見つめるといって理性破壊行為を延々と真剣に実行できちゃうのだ。

「ラウー……」

桐花は霧散しかけていた理性の欠片をなんとかかき集めた。真摯に誠実に答えるべく深呼吸し、背筋を伸ばし、そして告げる。

「困ります」

桐花の理性破壊にいそんでいた瞳に、極悪な破壊衝動が光った。「だってわたしが嫁候補でなくなったら、大佐はレンカに集中しちやいます！ 妹はアダマス人とは絶対結婚しないって泣いて嫌がってるの……」

背中に回された腕が犯罪者の逃亡を阻止する腰縄の様相を呈してきた。致死級に痛い視線が超至近距離で突き刺さる。突き刺さるだけでなく光線銃のように肌を焦がしてくる。この光線には精神を焼き切る性能があると桐花は確信した。

「おまえが婚姻を要請した」

してません！

「私はおまえに、誰かを愛せと言った。おまえは私の名を挙げた。相違はあるか」

ぬおっ？ いつの間にそんな文脈になっていたんだろっ！ 相違はあるかどころか相違しかないつもりなんだけど、発言の意味わかってませんでしたと答えたらラウー内桐花知性メーターが壊滅的な被害をこうむりそうだ。

書店の娘として国語は得意なはずなのに、どうしてこうなったんだろっ……。

「約束を守ると言ったな。約束は言葉で成立するものだ。その言葉をおまえは違えるのか」

うっっ、なんとという正論。国語力で負けている。

「でもホラいくら要請……？ されたからって、受けて立たなくてもいいんですよ？」

丁重に辞退をおすすめしてみる。

「私はおまえに用がある」

唯我独尊の裁判長にあっけなく棄却された。

「考え直してください！ おかしいです、初めて会ってからまだ何日も経ってないのに！」

「おまえの世界では婚姻までに定められた準備期間がいるのか？」

そうかここで百年とか答えれば！

「アダムス帝国下では規定はない。おまえは帝国軍人である私が保護している。よって帝国の習慣を適用する」

聞く耳持たずというヤツですね。それに訂正を試みるなら保護しやなくて、監禁に始まって恐喝で引き継いだような。

「規定がないとしても早まりすぎです」

「では訊こう。何日なら許容される？」

返答に詰まる。答えられないと見越しての反語的な問いだと思っただ。バカめ、と宇宙空間級の超上から目線が語っている。

つまり早い早いと文句をつけたけど、問題にすべきは日数じゃない。

「思うに、大佐はラウーへの対抗意識でわたしを嫁候補と呼んで遊んでるんです」

賢くラウーの発言の意図を察して日数問題を打ち切り、核心を突いたと思う。なのになぜ舌打ちされねばならないのか。

「だから大丈夫、結婚までしなくても、婚約者のままでも、ラウーから助手を取り上げたりしないはず。偽装結婚なんてやめましょう、ねっ！」

愛人いっぱいなダルジ大佐の愛と誠意には期待できないものの、ラウーの理性に訴えるのは正解だろうと桐花は思った。

「白魔も人を落とせるか。おまえは実験材料だ」
断れば射殺する宣言？

理性じゃなく対極の、触ってはいけないモノに訴えてしまった気がする！

「これは譲歩だ。私も言葉を選えた」
婚約者から射殺用ダミー人形に格下げすることのどこが譲歩か、

真剣に問いただきたいのです。

「マザー・ガウフの民族的制裁破棄の申告を受けて、私はおまえが安全を脅かされることは二度とないと伝えた。だがこの有様だ。帝国軍、ひいては私への脅迫におまえを人質に使うなど」

模倣犯を許さぬ懲罰を与える必要がある。と、法で犯罪を裁く知の時代の先駆者は、正義に澄んだ目で言った。

「全て抜歯だな。舌を噛み切るなどと安楽すぎる選択肢は容認しない」

もしもし、血の時代に逆行してますよ？

「ゆえに、婚姻は保留してやる。結婚前提の婚約とする」

それが婚約というものの正しい定義だとは思っけど。譲歩までされちゃった今、するりと腕による拘束を解かれた今、誤解ですと主張し断固辞退するタイミングを完全に逸した感がある。

まあいいかな、と桐花は急に肌寒くなった腕をさすった。今はトリードから戻ったばかりで助手の確保に焦ってるんだろうけど、偽装結婚には利益がないってこと、ラウーだってすぐに気付くだろうし。

『おまえは私を、ここに留まる理由にしろ』

結婚前提の婚約で、勝手に消えたりしないって安心してもらえるなら。役に立ちたい、失望されたくないという気持ちは本当だから。この人の前で胸を張れる自分になりたい。

「ラウー。欲しいものがあるんだけど」

船舷で近づく軍港を眺めていた中佐は眉を上げた少し意外そうな顔をした。

「翻訳がンばるから買ってもいい？」

「好きにしろ」

何を、とか聞かないのか。大陸ひとつか言ってやるうか。

「何でも与えると言ったはずだ」

見透かしたように付け足された。じゃあと遠慮なく品名を挙げると、中佐の顎がわずかに落ちた。

「そんなものが欲しかったのか？ それで留まる気になると？ 竜宮のような歓待に勝ると？」

指先を額に当てて眉根を寄せている。

「海を統べる竜宮の姫は、浦島太郎というたった一人なら満足させられると自惚れた。みずからが最上と錯覚した饗宴で、太郎の抛り所など訊ねもせず」

空を仰ぐ左目の翡翠が輝きをかげらせたように見えた。

「笑い種だ」

桐花は中佐の執拗なほどの民話批判を不思議がりつつ、コキ下ろされる竜宮の姫を哀れに思った。

「まあ、ミセス・スマラグダス。使いを頂ければ、お屋敷までご用

命に伺いましたのに」

街ゆく人をつかまえて道を訊ねると、マリポーサのブティックはすぐに判明した。

軍の上官たちの屋敷が建ち並ぶ丘に程近い一角の、艶やかな黒い鉱石とピンクの水晶が組み合わされ彫刻を施された美麗な建物だった。凝ってはいても華美すぎず、内包する上質な生地や装飾品を引き立てる脇役として計算されているのが窺えた。

顔は王子様で服装はドアマンな青年がかしこまって扉を開けてくれる。髪は下ろしたままだしメイクもしていない小娘を通してくれたのは、着てきたマリポーサの服が通行証代わりに働いたからだろう、と桐花は場違い感にギクシャクしながら思った。

しかし顔が王子様なドアマンが、ごきげんようミセス・スマラグダスと挨拶してくる謎。

こんにちはと返しながら店内へ踏み入れてみて、桐花は顔と素性がバレている理由を一瞬で理解した。

まばゆいシャンデリアの下で帽子、手袋、ストール、傘、そうした装飾品のディスプレイで埋め尽くされた広い店内の一角が不自然に黒い壁を晒している。ドアほどの大きさの花の枠で飾られているのは、チヨークで描かれた桐花の等身大肖像画。

顔まで詳細に描き込まれたチヨーク桐花足元には『ミセス・トーカー・スマラグダス スマラグダス中佐の手による』と達筆な女性文字で日付まで入れられている。

思わずギャーと叫んだところで、奥から現れたラテン美女マリポーサがゆらりと微笑み挨拶に来てくれたのだが。

「こんにちはマリポーサさん今日は頼みたいことがあって来たのですがその前にコレ消してください消去消去イヤアアアア」

「芸術は永遠なるべきもの」

オペラ歌手のように情感をこめて謳っている。レースで豊かな胸の谷間を覆っているように覆っていないような黒いドレスは、マリポーサのわずかな動きにもしゅらしゅらと鳴った。

「津波に吞まれようともお姿を留めるよう、お薬で塗り固めてありましてよ」

余計なことを、と桐花は齒噛みした。羞恥に打ちひしがれる桐花に、マリポーサはまつ毛バサバサのラメな目元を緩ませる。

「遺憾なことですが、軍人という職業の殿方には奥さまの美貌やファッションに無関心な愚か者が少ないのですわ。美は戦を制する殿方を制する。クレオパトラがとうに証明しておりますのにね」

美貌もファッションもあるもんかとチヨーク画を睨みつける。ニコリともしていない顔に、服はシンプルを追求したネイティヴのすとーん伝統服だし裸足だし。

「そう嘆くわたくしたちを、スマラグダス中佐の絵は黙って戒めてくださいます」

「シンプルイズベストとかすっぴん推奨とかいう意味で？」

ヤケ気味な問いをいさめるようにマリポーサが首を振ると、甘く濃厚な香りが微風となって漂った。

「中佐の描かれたミセス・スマラグダスは、ほうら。左手に本とペンをお持ちです。瞳は強く高潔で、知性をたたえています。ですからリボンひとつない服でもすっぴんでも、このミセス・スマラグダスは美しいのです。クレオパトラがまず聡明であったこと、わたくしたちは目をつぶりがちなのです」

本とペンは単に資料館での翻訳姿を描いただけだと思う、と桐花は内心で呟く。

「軍人は貴族ではありません。上官の奥さまほど、それをお忘れになります。そうなればただの宝石と同じ。旦那さまという外からの光を受けねば輝けない宝石と同じ。いいえ。女性とは花のように、星のように、そこにいるだけで美しくあれるはずですわ」

採寸の手間を省くためだけの写生にえらい解釈を加えられている。「醜悪なご趣味が成金なのか旦那さまの気を引きたいがゆえなのか、このチヨーク画への反応で顕著にわかりますわ。成金は軽蔑し、愛されたい方は謙虚になられます」

踏み絵に使われている。

「わたくし、旦那さまがお命を懸けて国防に励まれた報酬を自己の虚栄心に浪費する奥さまに折る膝など、持ち合わせておりませんの」
歌うような優雅さ、バラ開花の瞬間で時を止めたような微笑で毒を吐いている。桐花はニツコリと営業スマイルを貼り付けた。爽やかに涼やかに自分の腸で首を吊れと推奨してくる上司のおかげで場数はこなしているが、こなしたところで恐ろしいものは恐ろしい。
すすす、と店の制服らしき黒と淡ピンクのワンピースの少女が寄ってきて何事かマリポーサへ囁いた。マリポーサはドレスをしゃりと鳴らし、桐花の前でうやうやしく膝を折る。

「ミセス・スマラグダス。サロンのご用意ができましたわ、どうぞこちらへ」

店に服が見当たらないと思ったら、オーダーメイドらしい。桐花は巨大な三面鏡やマネキンや豪華なソファの置かれた個室に通されてダラダラと汗を流した。これほどの高級ブティックだとは。

どのようなドレスをお望みでしょうかと微笑まれる。桐花は口ごもり、逡巡し、脱兎のごとく逃げ出そうかと三回ほど企む。マリポーサはゆったりと待ちながら人払いをした。

淹れてもらったお茶っばい何かがすっかり冷めたと思われる頃、桐花はようやく覚悟を決めた。情けないほどか細く告げる。

「実は、エプロンが欲しくて」

書店の父の戦闘服。

桐花が持ってきた本を整理するにも翻訳するにも、マリポーサの高級服を埃やインクで汚してしまっただらと思うと気が気でない。本を生業とするものとして父には及ばなくても、父の娘として、書店の娘となるべく、桐花はエプロンが欲しくなったのだった。

「まあ、うふふ。ミセス・スマラグダスからはすぐにこの類の御用を承るだろうと思ってましたの。サンプルをご覧にいただけますわ」

壁いっぱいのでレッサーからすかさず取り出されたエプロンがマ
ネキンに着せられていく。

なぜ透けた生地やフリフリレースばかりなんだろうと桐花は思っ
た。

「あの………もつと実用的なのは………」

啞然としながら言えば、さらに胸ぐりの下がったものやガーター
つきのものなど、ますます実用的でないものが並べられた。

「いえ、こんな可愛いのは汚せません」

「汚すのはミセス・スマラグダスではなくてスマラグダス中佐です
わ」

意味が不明である。

「生地はたとえば、帆布みたいな丈夫なものがいいんですが」

「まあ！ いけませんわあんなもの、素肌を傷めますわ」

エプロンを付けたら肌を傷めるなど聞いたことがない。帆布には
肌荒れでも引き起こす物質が含まれているんだろうか、と桐花は思
った。

「えつと………とにかく丈夫でこういう形の………」

黒板のような石のボードにチョークで、父のエプロンと同じ形を
描いた。マリポーサはそれを見て豊かな、こつてりと塗られた唇を
ちよんと尖らせた。

「本物のエプロンですか？」

偽物のエプロンなんてあるんだろうか？

「あとそれから………英語でなんて言うのか、調べるのを忘
れてきちゃったんですけど。こういう道具は、どこで買えば？」

はたきをエプロンの横に描く。なぜか気抜けしていたらしいマリ
ポーサの目がキラんと輝きを取り戻した。

「キャットオブナインテイルですわね。お作りできましたよ。スマ
ラグダス中佐からはすぐに御用を承るだろうと信じてましたの」

ミセス・スマラグダスから。じゃなくてスマラグダス中佐から？
と桐花は首をかしげた。ラウーも桐花の本用にはたき購入を打診

してくれていたのかもしれない。

サンプルを、とマリポーサが持ってきたはたきは革製だった。桐花はそれをドンヨリと眺める。

これは鞭というのではないだろうか。

「現代女性の鑑、と巷の噂ですよ。ミセス・スマラグダスがいか
に心技体を尽くすことで中佐のお心を射止めたか。あやかろうと、
チヨーク画のミセス・スマラグダスに祈りを捧げるご婦人まで」

「ラウーを呼んでください！」

マリポーサは嘘っぽい涙まで流して嘆願したが、採寸が終了した
以上は無用の長物、とスマラグダス中佐の簡潔にして無慈悲な鶴の
一声で桐花のチヨーク画は消去された。

23・姫の憂うつ、太郎の高潔（後書き）

13話から始まりました第2部・再トレード編（仮称。きつとずつと仮称）終了です。ここまで読み進めてくださった方、ありがとうございます！
続きを書けたらいいなあと思っております。

24・遺すか、持つてくか それが遺言だ

「起きてる」

反射的に言った。

目覚めて眼前にラウー・スマラグダス中佐がいた場合、起きていと激しく主張しなければ驚の餌にされるという恐怖の経験則が桐花には刷り込まれている。

血の時代および鬼畜の所業が我が身を侵食しているのを自覚して情けなくなつた。

資料館の閲覧室は桐花のオフィスでもある。像や建築物の一部など大きな物も運び込める高さ、資料をブチまけられる広い石机を置ける広さ。壁は質素な灰色だが、天井は透明度の高い薄黄緑色の石材で造られていて明るい。

ビツと起立し背筋を伸ばして覚醒しているフリをし、そのさんさんと明るい室内を横目で確認して、ああもう昼頃かなと桐花は思った。

朝方まで翻訳に没頭し寝落ちしたため、机の上のランタンが点きっぱなしである。縦列に並んだ中佐と舞妓もどきの傭兵アイヤいと仁王像な警備兵がそれに気付きませんようにと全力で祈つた。

起き抜けの目には暴力的なほどキラリと輝く金属鎧に白金の髪。朝の海風のごとく涼やかな顔を保つたまま、中佐はいきなり桐花を抱きしめた。啞然として反応し損ねている桐花を間髪入れずに姫抱きにする。

「やだあご主人さまつたらサカつた犬。オフィスの机でやってももしいけど、話が済んでからにしてよねー」

超ミニの黒い着物に豪華な前帯、朱のアイシャドウと口紅を施したアイヤイがウザそうに袖を揺らしている。部下の前でも婚約者パフォーマンスか、と桐花はギヤーと叫びそうになったのをどうにか飲み込んだ。

絶対零度を作り出す科学の存在しない世界で絶対零度な目をした中佐は、桐花をポイとベンチに投げ戻した。

「ベンチ、石製なんですけど」

桐花は日本語で悪態を囁く。

「警備兵からおまえの三日間の勤務と食事時間の報告を受けた。残業や徹夜や食事抜き、遅い帰宅など安全と自己管理がずさん過ぎる結果として体重、胸囲、胴囲の減少、具体的な数値は」

「ストップ！ 言わなくていいから！ すみません、すみませんでした！」

婚約者パフォーマンスじゃなくて身体測定だったのかつ。

本や勉強に没頭すると寝食を忘れがちなのは自覚していた。今までは母が強制的に食事をねじ込みベッドに押し込んでくれたおかげで体調が保たれていた。母のありがたさ、中佐の驚異的記憶力のありがたくなさを痛感する。

「ご用件は、と話題をそらすべく自慢の営業スマイルを作った。

「今日より毎晩四時間、おまえの帰宅と就寝を確認しに戻る」

話題それてない！ と無駄に散ったスマイルに嘆いたところで、

桐花は気付いた。ラウーがこの閲覧室に寄ったところで帰宅は確認できても、就寝は確認しようがないのでは？

「家にだ」

桐花の疑問を見透かしているに違いないタイミングで念を押された。

「うそーん、ボスつてば四時間も寝るようになったのー？ 鎧着て椅子に座ったまま仮眠するだけだった仕事中毒が！ フィアンセぐらいで普通の人間になっちゃって、つまんなーい」

執務室で睡眠が取れるって、椅子でだったのか！ 簡易ベッドでもあるのかと思えば。機会があれば妖木老兵タイラー師に言いつけねば、と脳内メモに書き入れた。

椅子ならリビングに立派な革張りソファがあったはず。桐花には大きすぎてちゃんと座ると足が床に着かない腹の立つ椅子だが、人

を蹂躪するためにある無駄に長いラウーの足ならびったりだろーと思えた。

「なあって言つといてそのうち三時間五十五分はベッドで運動しちやうんだろーけどねー」

ちよつと待てー！

あの家にはベッドがひとつしかないんですよ。腹筋とかヒップアップとか何の運動に使うか知りませんが、わたしのベッドでそんなことされたら！

寝れないじゃないですかと猛抗議したいが、アイヤイと警備兵がいる。婚約者の帰宅をイヤがったりしたら、偽装がバレる。偽装がバレたら妹のレンカがダルジ大佐の餌食になる。

「お……お待ちしております……」

これほどまでに心にならない言葉を口にしたのは人生初に違いない。引きつる営業スマイルの補正に苦心しているうちに、用件だが、と本題を切り出されてしまった。

「おまえが私の配偶者となった際に発生する事柄について説明する。待つて欲しい、と桐花は営業スマイルを貼り付けたまま背中冷えや汗をかいた。偽装結婚を思い直してもらつつもりでいたのに、話が勝手に進められていく。

「まず私が殉職した場合だが」

心臓が凍りついた。

「帝国軍から補償が支払われる。身元の保証はビスコア・ダルジ大佐に依頼し了解を得ている。ビスコアはアダマス帝国下で提督に次いで死にくい男だ。生活に困窮することはあるまい」

言葉が耳に入ってから理解できるまで、ひどく時間と労力がかかった。

淡々と説明される間に冷え切った血液に全身を侵略され、桐花は鳥肌の立った自分の腕をぎゅっと握る。

現代日本で生まれ育った桐花にとって兵士とは自衛隊であり、ほとんど交戦するものではなかった。配偶者になるにあたってまず殉職した場合を示されるほど、命の危険性に直面した職業だという認識は薄かった。

「えー、もつと手つ取り早い方法があるじゃない」

石机の端に尻を載せ、分厚い黒塗りの下駄を細い足でブラブラさせながらアイヤイが興味なさげにあくびしている。

「別の軍人と結婚すんの。身分保証なら男は軍人、女は軍人の妻になるのが簡単確実よー」

スマラグダス中佐が戦死したらどうなるかなど、桐花は考えたこともなかった。

ラウー亡き後も、何の後ろ盾もなくこの世界に放り込まれたわたしが生きていける手段として、ラウーは結婚を言い出したの？ その保護を助手確保のための偽装と曲解し、妹を守るためと拒否したの？

何でも与える、とラウーは言った。妻の座はラウーが供出できる最大の誠意なのかもしれないのに。

自分の浅はかさに桐花はぞつとした。

「でもわたしは……身分保証が欲しくて婚約したわけでは……」

「あはっ」

アイヤイがおかしな笑い方をした。

「信じらんない、佐官との結婚なんて夢みたいな話なのにねー。したがる女なんて掃いて焼き捨てても燃えカスから這い上がってくるほどいるっつのに」

朗らかに笑っている。

「あんだ、飢えたことがないのねえ」

頭を殴られたような衝撃で、魂まで抜けてしまったかと思えた。

「身体も魂も売り切つてまでパンの欠片が欲しくて、三度殺しても足りないほど憎い相手の足元に這いつくばったりしたことなんてな

いのねー」

「ごめんなさ……」

「うわあそんな顔やめてー。責めたんじゃないのー、生い立ちを他人と比べるなんてバカはガキの駄々！ びっくりしただけ。あんたつてば不思議なこと言うから、まるで戦争のない世界にいるみたいな」

アイヤイの口調に嫌味はない。純粹に驚かれているようだった。

桐花は他人から与えられた幸福な環境に安穩とあぐらをかいていた自分に気分が悪くなるのを我慢するしか出来なかった。

「そんな世界があるとしたら、あたしは用ナシかー」

舞妓もどきな着物の襟は肩甲骨が覗けるほど抜かれている。その背中にある薄くなった無数の古傷の跡に初めて気付く。

「それでもその世界で生きてみたいとか思っちゃうのはアレね、矛盾ってヤツよねー」

「いいえ！」

語尾にかぶせる勢いで否定した。

アイヤイの言う通り、戦争のない世界で傭兵は失業するだろう。

でも傭兵が、誰もが、生存のためにそれ以外を諦めなくてもいい平和を望んじゃいけないわけなんてない。

そうか、と桐花は納得する。タイラー師は兵士として戦争したんじゃないんだ。兵士として戦争と戦っていたんだ。

傭兵の片眉が意外そうに上がった。

「へえ？ あたしの大事な可愛い子を海に沈めて爆死させたあんたに」

仁王像な警備兵がおののき、鬼女に遭遇した面相を桐花へ向けてきた。違う、違うんですと必死に手を振る。

「あなたにあたしの遺言託すのイヤなんだけどねー。諦めるね」

はー、と大げさなため息をつかれている。さりげなく嫌われてる？

「その件も説明する。私が殉職した場合に配偶者として発生する責務として」

責務という単語を結婚とセットで語る中佐にぼかんとする。

「私に託された遺言をおまえが代理で実行する責任を負う」

結婚というものはいつか自分の身に起こるかもしれない幸福のひとつだと、実感なく感じていた。誰かの妻になるというのは、食事を作ったり一緒に暮らしたりする楽しげなことだと思っていた。

中佐の言葉に呼応して警備兵が持っていた箱を机に置く。中に収められた皮紙、蠟で封印された重要くさい大量の書類を見て桐花は自分の認識の甘さを知る。

「アダムス帝国軍は全ての兵士に遺言状の作成を奨励している。身寄りのない者が殉職した際、隊員や上官による遺品の略奪を防止するためだ。また上官に利益をもたらす内容の遺言は受理されない。金品に目のくらんだ上官による部下殺しが起こるからだ」

明らかに事実を元に話しているのが窺えた。なんてブラックな、と桐花は眉をひそめる。

「だが行動の依頼は許容される場合がある。アイヤイの遺言もその一つだ。後の説明は自分でしろ、私は会議がある」

「ハイ。失敬な筋肉バカによるしくねん」

ダルジ大佐へとおぼしき伝言を冷たい視線の一瞥で叩き落としてから、中佐は閲覧室を出て行った。

「肩こるわあ。ボスがいると行儀良くしなきゃいけないって」

首を回してボキボキ鳴らし、アイヤイは朱色の唇で嘆いている。

ものすごく自由に行動しているようにしか見えません、同感でさあ鬼女さま、とアイコンタクトで警備兵と頷きあった。

「でね、フィアンセちゃん。あたしね、火葬して欲しいのねー」

ランチは鯨ステーキが食べたいのねー。そんな軽さで笑いながらアイヤイは言った。

「アダムス帝国軍の水葬だけはやーめーてー。あたしのカラダはあたしのもの！ 鮫に食い散らかされるのは勘弁。バラバラでも腐っ

ててもゼーんぶ拾い集めて、ばつちり火葬してね！」

ステーキはミディアムでね！ ぐらいの勢いで注文されている。

「でね、その時に一緒に焼いて欲しいモノをご主人さまに預けてあんの。ソレと一緒にじゃなきや焼かれる意味ないから」

ふざけたような口調が一転、低くドスを含んだ。

「ソレがなきや死ぬに死ねないから。遺言を守ってくれるなら、あたしの大事な可愛い子を海に沈めて爆死させた女でも」

警備兵に人でなしを見る目を受けて、桐花は違う違うとハチドリ並みの高速で手を振った。

「土下座して頼むから」

「いいえ」

本心を見定めようとしていたらしいアイヤイの真剣な瞳が不穏にすめられる。

「いえ、断つたんじゃありません。土下座がいらないうつてことです。ラウーの配偶者としてのつとめなら、土下座されなくても頼まれなくても、ちゃんとやります」

アイヤイは一瞬ばちくりして、次にすたと肩から力を抜いて、朱に彩られた目尻を緩ませた。

「バカねー安請け合にしちゃって。ご主人さま率いる部隊が全滅したら、どーなると思ってるの？ あんたこの遺言状と死体の山と一人で格闘する羽目になるってわかってるー？」

死体の山は確かにあまり嬉しくはない。

「そうならないように祈ります。ラウーならそれが、間接的に敵の死を祈ることになるわけじゃないし」

「あー、白魔だからねー。さすがご主人さま、洗脳済みなのねー。だからあたしの大事な可愛い子を海に沈めて爆死させても良心が痛まないのねー」

よほど恨まれてるんだな、と警備兵の悪魔を見る視線を浴びながら桐花は思った。

「それでその……一緒に火葬して欲しいモノというのは？」

「えー？ あー」

アイヤイはニヤニヤしながら警備兵を眺めている。いたずらの成果に満足気な笑みを見て桐花は、アイヤイの大事なソレを魚の餌にしたい誘惑を自制する理性を必死にかき集めた。

「あんだ、日本語が分かるんだってねー」

「そうだ聞きたいと思ってたんだっただけ！」

かき集めかけた理性を投げ出し、舞妓もどきの黒い袖をつかんで詰め寄る。

「着物つてことは、アイヤイさんは日本の出身？」

アダマス帝国軍作成の世界地図から日本は消滅していたが、日本人コミュニティが存続していると聞いたことがあった。

「ウウン。前の飼い主が日系だっただけ。日本語分かんない」

ヨシ、と拳を握る。

「ラウーの悪口が言える！ 唯一のストレス解消法確保！」

と、早速日本語で歓喜を呟く。

「少しなら知ってるけどお」

それを先に言えー！

「意味は分かんない。『出番だ早く殺せ、弾を無駄遣いしてんじやねえぞクズ、メシが食いたきゃ働け』とかそんな。あはっ、あんなのその顔からして、意味は分かんない方がマシっばい」

大雑把に結び上げた髪からこぼれ落ちた束を、羅刹のアイヤイの指先はくるくるいじって遊んでいる。

「『ラセツ』だけは知ってる、その飼い主がわざわざ教えてくれたから。あんだ知らないみたいねー。ホント不思議、フィアンセちゃんってば奴隷のいない世界にでもいた……」

びた、と髪で遊んでいた指先が止まる。顎を上げ、耳を澄ませるアイヤイの瞳や肌に鋭い緊張がみなぎった。だらしない舞妓もどきから一瞬にして傭兵に変貌するさまに桐花は息を詰めた。

「なにー？ 騒がしくない？」

ぴよっと体重を感じさせない身軽さで机から飛び降り、アイヤイ

はすたすたと資料館の出口へ向かう。

すたすた………。

桐花は傭兵の足元を凝視した。

「ちよつと待つて！ その下駄、重くないの？」

花魁が履くような底の分厚い黒塗りの下駄。重さゆえに、花魁は円を描くように引きずりながら歩いたはずなのに！ 岬で腹に蹴り入れられたとき、すごい重量感だったのに！

「ああコレ。敵を欺くならまず味方からよー」

あっけらかんと肩をすくめている。騙されていたのか、と頭をくらくらさせながらアイヤイに続いて資料館を出た桐花は、途端に下駄より強烈な何かに突き飛ばされて転がった。

「やだー鈍くさあ」

同情の欠片もない感想に精神まで倒れそうになりながら、どうにか地面を探して上体を起こす。最も痛む場所を感覚で探って見やると。

足に犬が噛み付いていた。

「ギャー、いた、いたたたたた！」

犬はぱつと口を離し、捕獲しようとして迫りくる警備兵を引き連れてあつという間に走り去った。桐花はみるみるうちに紫に変色した噛み跡に恐怖する。

いた、痛い痛いすつごく痛いし痺れる！ あの犬、病気なのかもしれない！

しゃがんで患部を覗き込んだアイヤイは、しゃがんだ状態のまま器用に後ずさった。

「えー狂犬病っぽくはなかったから死なないってー。寄らないでねー」

前言撤回！ 発言が矛盾している！

「あ」

不意にアイヤイが後退を止めた。桐花はその視線を追って背後を振り返る。

幽霊かと思った。

お迎えが来ちゃったかと錯覚したほど、その人は白かった。驚くほど白い肌の長身を白いローブに包み、胸に大きな十字架を抱えている。

あまり血色の良くない唇だけがぼそりと動いた。

「犬」

小さくかれた声をしていた。薄い薄い水色の瞳に見とれてから、その人のまつ毛がないのを発見する。眉もなく、フードに隠れてはいるが頭髪もないようだった。不思議なことに、毛がなく若く美しい人は男か女か判別しづらくなる。

「犬探してんの？ さっきの病気っぽいヤツ？ あー、ヴィルゴツトの犬なのねー」

喉仏からすると男だ、と判断した桐花の頭上で白い人はコクコク頷いている。背後からアイヤイの快活な断言が聞こえた。

「だったら、フィアンセちゃん。あんた死んじゃう」

25・本性見たり

明るく死亡を予言すれば痛くない最期を迎えられる。

そんな迷信でもあるのかと疑いたくなるほどアツサリと、アイヤイは桐花の死を予告した。

「だってヴィルゴットの犬だもーん」

それで全ての説明が付き、この世の未練に諦めがつくと信じているかのようだ。

「誰」

と、白い人は長い袖から痩せた指先だけ覗かせて桐花を指差し、かすれた声を絞っている。猫背でやられると白い死神に指名されている錯覚を起こす。

「ボスの助手兼フィアンセだって。すぐに『助手兼フィアンセだった死体』になりそうだけどねー」

不吉な予測をするなー！

コクコクと頷いてから、白い人は抱えていた金属製の十字架をパカッと開いた。

開くのかソレ、とまじまじ観察すると十字架にはごつい鎖がついていて、どうやらロザリオらしい。教会の屋根から引っっこ抜いてきたようなロザリオにあるまじき巨大さだが、形態はロザリオだ。

その十字架部分は箱になっているようで、白い人はそこから筒状の紙片を取り出すと桐花へそつと差し出してきた。

名刺だろうかと思いつつ広げてみる。ミミズがのたつたようなと言ったらミミズに嘆かれそうな下手くそな文字がもはや芸術的な配列で記されている。

「署名」

と、白い指先がペンを差し出してきた。反射的に受け取りながらミミズ暗号の解読を試みる。

『わたしは死後、わたしの体をヴィルゴット・ヨハンソンに献体す

ることを誓約します』

ラウーの助手は死期間近と同義か！

お断りします、と紙とペンを押しつける。白い人は突き返されたサインのない献体誓約書を見つめ、フラリとよろけ、地に膝を折って嘆き始めた。

何事かと寄つて来ていた野次馬がヒソヒソと囁きながら桐花に厳しい視線を投げてくる。桐花は白い人の飼い犬らしき猛犬に噛まれたうえに初対面で遺体の提供を迫られた非常識を訴えたいが、世間は無条件に美貌へ味方するものらしかった。

冷たい視線に桐花がいたたまれなくなってきたのを見計らったようなタイミングで、白い人は袖で目頭を押さえながら誓約書を差し出してくる。返事代わりに桐花はひどく痛んで痺れて紫色に腫れあがった足を突き出した。

人体として限界そうな薄さの水色の瞳が検分するように桐花の足を眺め渡した。かすれ声でぽつりと訊かれる。

「ヴイルゴットの接吻。あなたの署名？」

足にキスするなら献体してやるという意味ではない！ 迷いもせずにはひざまずいて唇を寄せてきた白い人は、献体のためなら足にキスするくらい厭わならしい。

それより噛み傷に気付け！ このままじゃ野次馬には、美貌の瘦せぎす白ローブを泣かせた拳句に足にキスを命じたサド女に思われる！

「違います！ あなたの犬に噛まれたところがおかしいんです。病気の犬じゃないんですか？」

「ナイ」

白い人はにこりと微笑んだ。神父のように慈愛に満ちた穏やかで和やかな微笑に野次馬がどよめき一斉に頬を染める。拝んでいる人もいる。

誰もが無条件に心を許してしまう微笑のまま、白い人は言った。

「毒の犬」

桐花とアイヤイにしか聞こえない程度の小さな声は、腹話術師のごとく唇を動かさずに発せられた。

透き通るような白い肌は、体中のどす黒いメラニン色素が腹に溜まった結果に違いないと桐花は思った。

「だから言ったでしょー。ウイルゴットは毒薬の専門家だもーん。ほらー身体が毒に晒され続けたせいでハゲちゃって」

「専門家？ そ、それなら解毒剤があるよね！」

白い人はにこりと微笑んだ。

「ナイ」

発声させるのが心苦しいほどかすれた声を絞る白い人だったが、自分の命には代えられない。野次馬を避けて資料館へ引きずり込みつたない英単語を吐き出させ続けたところ、事情が明らかになってきた。

桐花を噛んだ犬は白い人、すなわち毒と生物化学兵器の専門家であるウイルゴット・ヨハンソンの実験動物であること。ラボからうっかり脱走させてしまったこと。

犬に投与された毒は開発中であり正式な解毒剤は存在しないこと。毒だが派手な痛みと腫れ、長時間の麻痺、強い伝染性で敵の無力化を目的としており、命に別状はないこと。

「別状ナイ、祈る」

ひっそり付け足されたのが気になる。

「怖いし、歩けないし、すっごく痛いのでどうかしてください！」
交換条件みたいにいそいそと差し出された献体誓約書を叩き落して踏みしめる。

「困った方だ……」

そこだけやけに流暢な発音で言われ、桐花はおまえがだー！ と日本語で叫び返した。

はあ、と聞こえよがしなため息をつく、ウイルゴットは立ち上

がって外へ出た。ロザリオの人物像の背後に配置された後光を一本抜き取る。人物像の胸部をパカッと開けると、炭のような火種が見えた。何やら実は多機能なロザリオらしい。

抜いた後光の先を火種に押し付け、燃え始めた炎を白く長い指で扇いで消すと、線香のように青白い煙が立ち始める。

ヴィルゴットは太陽を見て、雲を見て、煙の流れをじっと見て、おもむろに倒れた。

「まぶしい……暑い……人ごみコワイ……」

「どんなひよわだー！」

「毎月、死亡説が流れるくらいラボにこもりつきりだもんねー。いつ試験管持ったままミイラになってくれんのお？」

アイヤイが黒い袖でハタハタ扇いでやっている。

「北西の氷穴。冷暗高湿な土地。解毒の苔。探す」

白フードの陰で血の気の失せた唇が息も絶え絶えに呟いている。

「うそー山の向こう側？ ムリ、死ぬ」

「風向きヨロシ」

「風天のあんたが言うなら風向きヨロシなんだろうけどお……」

「」

ぶう、と朱色の唇が拗ねた。

「ボスのフィアンセ見殺しにしたら、花火抱いて散るまで無言で責められそーだから、死ぬのは同じかー。りょーかい」

わたしを助けようとしてくれる人の動機はたいてい不純だ。翻訳とかラウーからの保身とか妹の歡心とか。虚しい。

「驚、二機かつぱらってくる」

「神のご加護を」

地面に倒れたまま、ヴィルゴットはにっこりと十字架を掲げた。

引きこもりくさいのに、白い人の手綱さばきは見事だった。

風や気流を完璧に把握しているようで、優雅だけれどアイヤイ機を振り切りそうなスピードで鷲を操った。度々陽光に目がくらんだり、熱射病寸前で気を失いかける致命的な病弱ささえなければ優秀なパイロットと言えた。

櫛の歯を立てたように細く長く無数に屹立する岩山群を大きく迂回し、城塞都市とは反対側へ回り込む。街でもあるかと思えば、岩ばかりがごろごろと積み重なり生物の気配がない、不毛な岩地と石柱群があるだけだった。

桐花の乗せてもらっているヴィルゴット機とアイヤイ機は連なつて円を描きながら、岩山のふもとへ高度を調整していく。

「いつもは城から山に風が吹いててこっち側に落石するからムリだけども」

アイヤイが声を張り上げている。

「たまーに風向きが変わつた時だけ接近できる氷穴があるわけー」

落石？ と首をかしげた桐花に答えるように、少し離れた岩山の脇を人頭大の落石が通過していった。ひゅおおおん、と戦闘機の通過みたいな音がしたかと思うと、着地点で爆発のように砕け散った。

頂上が雲を直角に突き抜けて消えているような超高山での落石は、隕石にも匹敵する破壊力があるらしい。指先程度の石でも死ねそうだ。見回せばあちこちでズドーンとカーンと落石による土煙が上がっている。

ヴィルゴットはその土煙をじつと観察しているようだった。

「風向きヨロシ」

「風にも負けない巨石が落ちてきたら？」

「神のご加護を」

結局は運任せかー！

二羽の鷲は岩山のふもとにぽつかり口を開いた洞穴へと舞い降りた。洞穴は大きく、人の背丈の三倍はありそうだった。降機し、鷲を洞穴内に引き入れて繋ぐ。洞穴は反対側に通じているらしく、強

い風が吹き抜けていた。

「解毒の苔ってどんなの？」

ヴィルゴットの単語を総合すると、強烈に汚物的なおいがして触るとへドロ色の粘液を分泌し、触れた場所はにおいも色も三日間は消えない苔らしい。

「そーいや最近、とあるハゲな研究者は金食い害虫だとか公言してた財務官が、夜道で白くて猫背な幽霊に謎の液体をブツかけられて三日間クサくて真っ黒な顔で泣き暮らしてたって噂だよー」

「神よ憐れみたまえ」

神父的慈愛の微笑が嘘くさすぎる。

っていつかそんな個人的闇討ちに消費したから手持ちの解毒苔が底をついてたんじゃないのか？

「しょーがないのにねえ。毒の開発は解毒剤と一対であるべき、ってご主人サマの厳命……」

洞穴の奥へ向かってコンコンと反響していた底の分厚い黒塗りの下駄が、ぴたりと鳴り止んだ。

「誰だ！」

傭兵アイヤイは刹那的一瞬で拳銃を構えていた。超ミニの着物の背からはビリビリと、落石を招きそうに空気を震わす強い緊張感が放たれている。

洞穴の入口からの光だけでは銃口の先が何を狙っているのか、桐花には分からなかった。急いで持参したランタンの火を大きくする。

「うそ……あなたは……」

毒犬に噛まれて麻痺した足のせいでもろくに歩けない。せめてと首を伸ばしたとき、アイヤイの震える声が響いた。

「カジヤベ……」

言葉が象形化するならば、その一言は氷河の奥底から切り出したこの世で最も冷たく硬い氷の刃だった。

アイヤイが三度殺しても足りないほど憎い相手。銃口の先にいるのがその相手なのだと、桐花は底冷えのするたった一言で悟った。

カタカタカタと小刻みな音が洞穴内に響きだす。アイヤイの震える下駄。

「ソウヘイ・カジヤベ。こいつはねえ」

アイヤイの声は神経質にうわずっていた。

「帝国軍に指名手配された賞金首よ。火器の売買が専門の武器商人で、あたしの前の飼い主ね。あたしはこいつの客の前で、銃の優位さを誇示するショーをやらされた。相手を一秒でも早く蜂の巣にして、血の海に沈めるためだけの奴隷だった」

桐花はヴェルゴットと同時に息を呑む。

「生け捕りの場合のみ五万ポンド……！」

待て白い人、いま滑らかな発音の美声でカネのことを言わなかったか！　ってというか息を呑んだのそこか！

「ここで密売でもしてたの？　あー、怪我してんの。落石に当たった？　天罰よねー。ねえどんな気分？　あんたの飼ってた奴隷に、あんたの売ってた銃で殺されるって、あはっ」

「私刑、違反」

待て白い人、ただたどしいかすれ声に戻して建前を訴えていないか！

「血、コワイ……」

待て白い人、それで説得できると思ってる？

「うるさい！」

アイヤイの一喝が洞穴にこだます。撃つ気だ。

むきだしに近いアイヤイの肩に力が入り、拳銃を握り直したのが分かった。だめだ、と響き渡る銃声を覚悟して桐花はぎゅっと目をつぶり首をすくめた。

一秒。二秒。三秒。

が、予想された銃撃音はしない。

それどころか、カタカタと鳴り続けていたアイヤイの震える下駄さえ沈黙した。

「困った方だ……」

かれた声がそつと、音を失った空気を動かした。

おそるおそる目を開けた桐花の横で、白いローブの白い指が、投擲を終えた直後の形で中空に留まっている。優雅な形は白鳥の首に見えた。

白鳥の首が見つめる先にはアイヤイがいる。微動だにしない。

何が起こったんだろう？

桐花は片足を引きずりながら慎重に近づく。ランタンをかざして目を凝らすと、アイヤイの足や手首に何本も細い針が刺さっていた。刺さった場所がポツリと赤く腫れている。

アイヤイの銃口が狙っていた、暗い窪地に倒れる小太りの男の身体にも幾本もの針がきらきらと光っていた。大怪我をしているようで、荒い息をする以外は話す気力もなさそうだ。

「経絡に薬を塗った針を打ち込みました。アイヤイも五万ポンドも当分は動けません」

背後から穏やかな微笑を含んだような、滑らかな発音の美声が響いた。

26・奮い立たせるのは

さつと振り返る。が、背筋を凜と伸ばし、白鳥の首のように優雅なフォームで針を投げ、アイヤイと賞金首の動きを封じたはずの華麗な毒使いは消滅していた。

代わりに猫背で胸元のロザリオをこそごそいじり、ケホケホと死に際みたいな病的な咳に身体を揺らす瘦せっぽちがいる。

足元に紙幣をばらまいたら治る咳なのではないか。桐花は財布を持ってこなかったのを後悔した。

ヴィルゴットのロザリオから、人物像の後光が角度にして四十五度分くらいなくなっていた。後光に見えていたのは実は細い針の集合で、その針がアイヤイと賞金首の体中に打たれたようだ。十字架の人物像は毒針のピンクツシヨンらしい。

ロザリオは信仰の証かと思いきや、ひどくバチ当たりな使い方をしていることが判明したヴィルゴット・ヨハンソンは、咳を落着けるとかすれた声で言った。

「私刑、違反」

「……このクソハゲ……」

動けなくても話ができるようだ。アイヤイの呪詛には聞く者の肌を粟立たせる壮絶な殺意がこもっている。

「違反？ あはっ、構うもんか。あたしはねえ、こいつを憎んで生きてきたの。密売アジトがアダマス帝国軍に急襲されて、こいつだけ逃げて、あたしは捕虜になって、スマラグダス中佐に拾われるまですつとずつとずーっと、いつかこいつを殺す日だけを夢見て生きてきたの」

低くなったり高くなったり、唾を飲んだり、アイヤイの声は神経質に揺れた。

「ウン違うかも。こいつを殺して初めて、あたしは生まれるの。けど、何して生きりゃいいんだろ？ 憎む以外のこと、ろくにした

覚えがなくてさ」

聞いていて胸が痛いほど、アイヤイのこいつと呼ぶ言葉からは軽蔑と憎悪が感じられる。名前を口にすればその度に自分が穢れるとも思うのか、アイヤイは頑なにこいつと呼んだ。

「ねーヴィルゴット。あたし知ってんのよー。あんたの非常用麻酔針が長く効かないのも、残り少ないのも。あいにくだよねえ、あたしを止められると思ったたら大間違い」

「五万ポンド……」

惜しそうな美声がアイヤイの指摘を肯定していた。

「だからさ、ねえ、立ってよ。殺す前に死なないでよ。前みたいにあたしを罵倒しなよ、唾とばして口汚くさあ。そしたらその口にありったけ弾を食わせてやるからさ。何で言い返しもしないで転がってんのよおおお！」

窪地に倒れている年配の男は後頭部付近から出血しており、岩の床にどす黒い染みが広がっている。失血に加えて吹き抜ける風が容赦なく体温を奪ったのだろう、顔は土気色だった。

桐花が医者でなくても危険な状態だと分かる。

噛まれた足は猛烈に痛みを主張して、氣力をそごうと躍りになった。でも、と桐花はアイヤイの荒ぶる呼吸音に耳を傾けながら足の痛みを追いやった。

いま、救うべき人が二人いる。

「ラウーを呼んできます」

「はあ？ 引っ込んでてよ。ボスもあんたも関係ない！」

「あります！」

負けまいと声を張り上げた。

「アイヤイさんは言いました、ラウーのことサドだって。『助けてから極刑にする念入りなサドだもん』って。あれってこういう状況のことじゃないんですか？ どんな重罪人でもきちんと法で裁かれ

るべきだ、ってラウーの思想を理解してるからですよね？」

スマラグダス八鬼神と名乗るほどのラウーの腹心なら、白魔の理
念を知らないはずがない。ましてやアイヤイは遺言を、一緒に火葬
して欲しい何かを預けるほどラウーを頼っている。

「バツカじゃないのお、呼んでくるってどうやってよ？ 鷲の操縦
も知らないのに、第一、そのキモい動かない脚じゃ鞍から滑り落ち
て死ぬしい」

同意を示してヴィルゴットがコクコク頷いている。足は誰のせい
だ誰の。

「鷲にだって帰巢本能があります。とにかく飛びさえすれば厩舎に
帰るはずです。それから、ヴィルゴットさん」

ランタンを置いた。噛まれていない片足でぴよんぴよんと鷲まで
跳ぶ。乙女にあるまじき脚の広げ方でどうにか鞍によじ登ると、手
綱を両手の掌にぐるぐる巻きつけた。

「この状態を、ヴィルゴットさんの麻酔針で固定して」
そうすれば少なくとも鷲から落ちることはない。

無表情か仮面的微笑くらいしか披露していない表情の乏しいヴィ
ルゴットの顔が、珍しくゆっくりと緩んだ。

「あなたも、スマラグダス中佐の子」

「えーと………助手で婚約者ですけど」

あなたも、というのが聞き捨てならないが問い詰めている時間的
余裕はなさそうなので我慢した。

白いフードは懸念を示すように横へ振られた。指先が桐花の足の
噛み傷を指している。

「毒。麻酔。過多」

噛み傷の毒に加えて麻酔を打つのが身体に負担だという意味らし
い。

それでも自分が行くしかないと思った。ヴィルゴットはアイヤイ
の動きを封じる手立てを持っている。さらに重要なことには、頻繁
に声をかけないと操縦中に貧血で意識を飛ばして滑落しかけるとい

う実績を持っている。単独飛行では無事に基地に戻れまい。

桐花にはヴィルゴットを額かせる勝算があった。まつ毛も眉毛もシミもない美貌に顔を近づけ、囁く。

「五万ポンド」

ブスツ。

と瞬時にためらいのない麻酔針が桐花の手に突き立った。親指の爪の付け根、掌の中央、膝の周辺を幾つか。それだけで桐花の手指と膝は痺れてピクリとも動かせなくなった。

肌が白くて腹が黒い人はいそいと鷲の繫索を解き、洞穴の外へ向かって引き始める。あと一步で洞穴を出るといふ地点でピタリと止まった。

白いフードがぐるりと動いて周囲を見渡したようだった。

「風」

かすれ声で言われて気付く。風が止んでいる。

薄い水色の瞳は眼下の岩地へ視線を走らせている。紺碧の海を突っ切ってきたカモメの群れが岩棚へと隠れ、高く鳴き立てているのをじっと見た。

「海鳥、教える。風、変わる」

風向きが変わる？ それはすなわち、この氷穴の入口が落石の軌道に戻るといふこと？

ぎょつとして問いただそうとした桐花に、ヴィルゴットはにこりと神父の微笑を浮かべた。

「神のご加護を」

蹴り出された。

上司の助手兼婚約者が落石に当たって死ぬ可能性は、五万ポンドの誘惑に負けたりしない。

無事に落石地帯を抜けられても、桐花は喜ぶ気力が湧いてこなかった。鷲の餌といい、硝石製造法と引き換えに人質にされたときと

いい、自分の命が金や食品や情報より軽く扱われるのは少なからずシヨックである。

鷲は蹴られて痛かったのか、怒りを発散するような猛スピードで飛んでいる。往路に見た景色を巻き戻しているのを見て、幸い基地に向かっているのが確認できた。

岩山を回り込むと城塞都市が姿を現す。要塞のような城の上空へ差しかかったとき、一角から二羽の茶色い鷲が飛び立ち、桐花の進路を断つようにまっすぐ向かってきた。

「止まれ！ 我々はアダマス帝国軍の警備隊……こら止まれー！」

「すみません止まれませんー！ ギャー撃たないでー！」

操縦を知らないばかりに制止を無視して領空侵犯する形になってしまった。警備兵が弓を構えている。

非常に不本意ではあるが、桐花はご隠居の印籠並みに効果的な文言を繰り出した。

「わたしはラウー・スマラグダス中佐の婚約者です！」

「なにっ！ あの羅刹のアイヤイの子を海に投げ捨てて高笑いしたという非道伝説の？」

アイヤイの恨みの深さを改めて思い知る。

「非常事態なのでラウーを呼んで、あと救急の手配をお願いします！」

「いや俺は軍付属病院でタイラー師を神隠しにした奇術師だと聞いたぞー！」

「いやいやあれは悪魔の業だ、隠蔽されたのを忘れたのか！ 箱口令を敷いたときの中佐は、愛する者を奪われた怒りを健気に押し隠してらしたという……」

「うおお想像しただけでイケる！」

警備兵が誤解に満ちた会話で騒いだり悶えたりしている間に、三羽の鷲は既舎へと到着した。役割を思い出したらしい警備兵によって伝令が走り、救急箱とおぼしき箱が運ばれてくる。

硬直した手足、紫に腫れ上がり変色した噛み傷、身体のうちこちに刺さった針。駆けつけた驚の世話係や兵たちに不審な目で遠巻きにされ、桐花はまた誤解に満ちた噂が増えるのだらうと確信して泣きたくなくなった。

「桐花」

振り向かなくてもその正確な発音で、厳しいけれど耳には優しい声で呼ぶのが、ざくざくと迷いなく近付いてくる頼もしい足音が誰のものか分かった。

涙が出てくる。

水没したみたいなの視界でも、周囲の兵たちと一線を画す金属鎧のキラめきは間違いようがなかった。

「北西の氷穴で、怪我してるソウヘイ・カジヤベをアイヤイが撃とうとして、ヴィルゴットが針で止めてる」

「了解した」

驚きも聞き返しもしない。スマラグダス中佐は兵士の一人に短く何かを命じた。

それから桐花の脈を取り、額に手を当て、噛み傷に眉をしかめ、麻酔針を調べている。温かい指先と真剣な異色の視線は桐花の涙腺を壊した。

「発熱している。足も痛むはずだ。残って安静にしている」

「やだ、行く」

衆人環視の中で泣きながら駄々をこねるなんて、幼い頃に流行りの人形が欲しくてデパートで父を困らせて以来だった。

だけどラウーの顔を見た瞬間に緊張が途切れてしまった。知らせなければという必死さで薄らいでいた痛みと痺れ、身体の不調と不安が一気に押し寄せてきた。

「一人にしないで」

情けない自分を恥じながら頼んだのに、ラウーの視線はまもった鎧の金属光より冷たい。

「軍人を腰抜けにして未亡人になりたいなら、そうして泣いてすが

れ

乙女が泣いてるのにひどい。ほんとヒドイ人だ、と桐花は自由に
ならない手の代わりに肩口の袖で涙を拭った。

命令を受けていた兵士が走り戻ってきて、弓と小さな包みを結ん
だ矢筒をヒドイ男に渡している。桐花はそれを睨むが、くやしけれ
どヒドイ男の発言が桐花の取るべき言動を示唆することも知って
いる。

「ラウー」

呼ぶと、矢筒を背負っていた手を止めて、ラウー・スマラグダス
は真っ直ぐに振り返った。

桐花はヒドくても澄んだ瞳を見返し、毒だけが原因でない熱に頬
を侵されながら思う。こんなこと言うのは駄々をこねるよりもっと
恥ずかしい、だってまるでプロポーズみたいで。

「わたしを守っていて」

模範解答。

そう褒めるようなキスを額に受けた。

「請われるまでもない」

だったら言わすなー！

周囲の兵士がどよめく中。スマラグダス中佐は桐花の背後の鞍に
ひらりと飛び乗り、麻痺して動かない桐花の指の上から手綱を握り、
瞬時に軍鷲を空高く発進させた。

27・守りたいモノ

渡る雁のように鉤型の編隊をなす軍鷲の先頭をスマラグダス中佐が率いている。

一握りの人間しか知らないことだが、と前置きしてから中佐は話した。

「アイヤイは武器商人の奴隷だった。幼少の頃に主によって去勢されている」

通常、人間に対して使われない単語に桐花は耳を疑った。

「おまえの世界に奴隷を去勢する文化はないのか？ 創造主のビリヤード以前の歴史がこの世界と同一ならば、あつたはずだ。去勢した性を保管、隠匿する主もいる。それと別々に葬られると地獄に落ちるといふ恐怖を植えつけ精神的に束縛し、奴隷の逃亡を阻止するのが目的だ」

「でね、その時に一緒に焼いて欲しいモノをご主人さまに預けてあんの。ソレと一緒にじゃなきゃ焼かれる意味ないから」

アイヤイがラウーに、ラウー死亡時には桐花に託した遺言の真相を理解する。

「文化の善し悪しは論ずるべきではない。だが去勢手術が本人の意思と無関係であること、劣悪な衛生下での死亡率の高さから、回避すべき事態と私は考える。迷信による精神的束縛もだ」

頷く。そして思う。この立派な精神はなぜ、桐花を籠に幽閉し鷲の中へ放り込む時には発揮されなかったのかと。

「帝国軍は武器商人を急襲したが確保に失敗して撤退した。私は弾薬庫が爆発しても逃げようとしないう奴隷たちを見て初めて、その悪しき因習が行われていたことを悟った。奴隷たちに解散を命じたが、アイヤイだけはそれを私に差し出してきた」

生きる術が射撃以外に思い当たらず、弾薬を提供できるアダマス帝国軍に身を委ねることにしたのだらうとラウーは言った。

「ラセツという日本語は、仏教の守護神である羅刹の他にもう一つ意味を持っているそうだ。羅切。魔『羅』を『切』る、すなわち去勢だ。あの男は自虐的にみずからそう名乗るほど、恨みを忘れていない」

不意に、岩山の迂回路を指していた鷲をホバリングさせ、ラウーは桐花の長い髪の一房をつまみ上げた。

「あ、縛ってなくてごめんなさい。背後にいと邪魔だね。帰りは何かで縛るから、海草とかー！」

初めて鷲に乗せられたとき、髪を結ばないなら鯨解体用ナタで首ごと刎れと言い渡されたのを思い出し慌てる。こういう条件反射が刷り込まれることもある意味、精神的束縛ではないだろうか。

が、ラウーの指先はポイと髪を放すと手綱を握り直し、鷲を方向転換させた。

「風向きが戻った。城側から氷穴へ突入する」

仮にも婚約者の髪を風向計に使うなっ。

風向きが戻ったということは、迂回した先の氷穴の入口は落石の危険性が高くなったということだ。

と考えて桐花はふと気付く。

城側にも入口があるなら、風向きが城から山へ吹く通常時はそこから入れるはずだ。だがアイヤイは、迂回した先の入口から風向きが逆の時しか入れないと言っていた気がする。

桐花の疑問に答えるように、背後に続く兵士たちが騒ぎ出した。

「城側から？ 無茶です、中佐！」

「こつち側から入ったが最後、戻ってきた話は聞いたことがありますせんー！」

ものすごく不穏な警告が発せられている。

「どうか風が変わるまでお待ちを！」

「ユピテライズした大蛇の群れに食われて全滅します！」

「桐花、手の痺れ具合はどうだ」

ユピテライズした、なに？ と確かめたい桐花だったが、ラウー

は背後の警告など無視して涼しい素振りで聞いてきた。

「痺れるっていうより、かゆいって感覚になつてきたような……
……えっ、ユピテライズした、なに？」

「薬効が切れ始めているな。アイヤイの麻酔はじきに切れる、急ぐ必要がある」

中佐ああああ！ と背後で絶叫する兵士たちに照明弾を用意しろと命じている。自分に、降りて安静にして待つてると改めて命じてくれないかなあと桐花は思った。

「当機の突入直前に、全ての照明弾を氷穴へ撃ち込め。風向きが変わったら迂回して追いつけ」

無情にも桐花の望む命令は下される気配がない。

「桐花。氷穴はほぼ直線で、驚がすり抜けられる隙間はある。上体を伏せて、救急箱と手綱を固定しておけ。驚は夜目がきくから任せればいい」

むしろ手綱係を命じられた。その間にも岩山に開いた疑惑の城側入口らしき巨大な穴が接近しつつあった。

「えっ？ 直線って、なんで知って……」
入って戻ってきた人がいない入口なのに？

上体を伏せ気味にしたまま振り返る。背後の兵士たちは覚悟を決めたのか、おびたしい数の照明弾を構えて追尾してきていた。その燃え盛る火の玉を引き連れるラウーは、火の鳥カルラを従えた不動明王に見える。

だが弓と矢を手にした不動明王は瞳に澄み切った湖面のような静けさをたたえている。

命を預けてもいいと信じられる目。

「前を向け。確かに、こちら側から進入して戻ってきた記録はない。岩山の洞穴が迫る。背後で一斉に弓の照準を定める、緊迫した気配がした。」

「だが、こちら側から進入して向こう側へ通過した経験ならある。ビスコアとの度胸試しだ。私が勝った。ビスコアは悔し紛れに試合

の存在を伏せたから、記録は残っていないが」

軍の参謀のくせして、ただの度胸試しでアダマス帝国最高指導者の一人息子と巨大蛇の巣に飛び込むアホだったのかこの人はー！

「撃て！」

ラウーと桐花の鷲が洞穴へ飛び込む瞬間、流星群のような大量の火矢が脇をすり抜け、内部を明るく照らした。

桐花は断言できた。

世界中のどんな恐怖の絶叫アトラクションも、もう恐れるに値しないと。

大量の照明弾は洞穴へ吸い込まれながら、入口から奥深くまでを光の輪が通るように高速で照らし出した。

その走馬灯のような一瞬で、桐花は無数にうごめく大蛇のとぐろだの、鎌サイズの牙だの、鮫と同類のどこか無機質な目だの、底抜けの胃袋に手招きしてるみたいなピロピロ波打つ舌だのを大量に目撃してしまった。

照明弾は壁や蛇に当たって光量を削られていき、すぐに暗闇に囚われる。だがそこは超人的記憶力の持ち主ラウー・スマラグダス、わずかな一瞬で蛇の配置を把握しきつたらしい。

桐花の背後でバスバスと弓の連射音がするたびに、鷲の進路からベシンドシーンと巨大な何かが苦しみもがき道を空ける気配が響いた。震動で洞穴の天井から落ちる小石が頭や肩へ降り注ぐ。

鷲は夜目がきくとラウーは言った。だから桐花が必死に手綱を握る必要はないはずだった。それでも握り続けたのは、ラウーの言葉を思い返していたから。

『全ての戦闘本能を持つ生物は、恐怖をよく嗅ぎ分ける』

自分の恐怖を鷲に伝染させてはいけない。鷲の拳動が乱れたらラウーの射撃も乱れる。射手であるラウーに命を預けているけど、ラウーもまた、手綱という命綱を自分に預けている。

誇らしかった。

どうしてわたしはこんなにも、ラウーの期待に応えたいと願うんだろう。尊敬してる、信用されてる、それだけでは片付けたくない。「氷洞部だ」

背後からの指摘で、気温が急激に下がったのに気付いた。

「洞穴の中央部だ。楽にしろ、低温は蛇の生息に適さない」

最後の威嚇射撃のような一矢を放って、蛇の追撃を振り払ったようだった。

洞穴内部が狭くなっているのか風が強い。楽にしろと言われても寒い。

「ここは冷える」

冷たい風を避けるように伏せ続けていた上体を、背後からの手にべりつとはがされた。

仮にも婚約者を風よけにするなー！

と抗議する寸前で抱きしめられた。

「麻酔を打と、おまえが主張したな。ヴィルゴットは優秀だ。許容量を超える薬を民間人に安易に投与したりはしない」

五万ポンドの一言で即決でしたが。それに民間人じゃなかったら安易に投与しちゃうの？ 敵兵を拷問するときか……？
そっか、これは抱きしめられてるんじゃないやなくて、しめ上げて尋問されてるんだ。だって金属鎧は硬くて冷たいし、持ったままの弓がゴツゴツするし、私が温めましよう可愛いフィアンセ的な甘さはみじんもない。

そもそもフィアンセと言ってもラウーにとっては保護の延長だし、と桐花がふつつり口をつぐんだのを黙秘と捉えられたらしい。背後から零下なオーラが漂ってきた。

「鮫の海での辞書。人質時の刺繍。自重しろ、自分の危機に悠長に私を思い出すな」

「すみません、忙しいのにも呼び立てる羽目になって！」

「呼べ！」

わかんない！ 何かといえば呼び出されるのを怒ってるんじゃないのー？

「私を呼ばずに死んだら、冥界から連れ戻して腹を切らせるぞ」
耳元で密やかに脅さないで欲しい。暗闇で背後からの低い囁きと
いうだけで恐ろしさ満点なのに。

冷たい風に切られるようだった頬に、不意に温かな柔らかさが触れた。

「熱が高くなった」

唇で検温ですか、弓で手がふさがってるからって。ラウーの記憶力は体温まで測れるらしい。

「非常時とはいえ浅慮は罪だ。ヴィルゴットの研究費を削減する」
つくしよーい！ ゴホ、ガハアツと血を吐いていそうなくしゃみが遠い先から響いてきた。浪費を咎めた財務官を私刑にした守銭奴に最も効果的と思われる懲罰を察知したのだろうか。

救うべき人が三人に増えた気がする。

28・手のかかる配下たち

暗闇の奥にぽつんと光った点はぐんぐんと輝きと大きさを増し、洞穴の出口を形作った。鷲を停止させるには少々窮屈だったらしい。岩の床を打ち据えるような激しい羽ばたきに、アイヤイの着物の袖も、ヴィルゴットの白ローブの裾もバタバタとはためいている。

「……………白ローブの下が太腿まで素足だったけど、まさか何も着てないわけないよね。」

桐花は、ヴィルゴットの襟からも袖からも下に着ているはずの服が端さえ見えない点について、気が付かなかったフリをすることにした。

「凶事、予兆」

乙女が無理のある知らぬが仏に苦心しているというのに、当のヴィルゴットは騒ぐ裾も頓着せず両の掌をまじまじと見つめ、この世の終末宣言を受けた預言者のように怯えている。

「金欠、不吉。血痰占い、当たる」

「気持ち悪い占いするな！ 見せるな！」

「アイヤイ、銃を下ろせ」

鷲が着地するかしないかで救急箱をつかみ、颯爽と飛び降りていったラウーが窪地に倒れた怪我人を診ている。

「この男は丸腰だ。背後から銃撃されている。戦闘の意思がない。」

この状況でおまえが撃てば、正当防衛と主張する余地は皆無だ」

「手当てなんか……………何ですんの、そいつに手当てなんか！」

手際よく止血を始めたラウーに、アイヤイは悲痛な叫びを投げつけている。

「武器密売の組織。ルート。取引の相手と量。尋問し摘発しなければならぬ。この男が裁かれるのは今、ここで、おまえによってではない。ゆえにアイヤイ。おまえがこの男を撃つ気なら、」

黒塗りの厚底下駄の前へ、小さな包みが置かれた。掌に収まるほ

どの箱を布で包んだもの。桐花が呼びに行つた際、ラウーが兵に命じて持つてこさせたもの。

「その前に解雇する。預かつたものを返そう。遺言は失効する。発砲した時点でおまえを逮捕し、処罰することになる。刑期を終えたらどこへなりとも消えろ」

処置する手を止めず、ラウーは淡々と告げた。惜別も怒りもない。武器商人を裁くと言つたときと同様の、消化すべき手続きを説明するだけのそつけなさだ。

桐花をネイティヴの国粹主義者の人質から救出した際のラウーとアイヤイの連携は簡潔で完璧だった。そうなるまで幾つもの戦地を共にしたはずだ。

そんな腹心の部下をばつさり切り捨てるわけがないと思いたいが、桐花は中佐が有言実行の男だと身に染みて知っている。

神経質な乾いた笑いがアイヤイの喉から漏れた。

「クビ？ おかしくない？ 人殺しはこいつで、あたしは被害者なんだけど」

「殺害されたのがおまえで、報復しないならば、その主張は正しい」「ボス、あたしよりこいつを取るの」

「私は私の信念に基づいて行動しているだけだ。報復するのがおまえの信念なら実行しろ。私はそれを阻止する」

桐花は足より胸が痛くなつてうなだれる。

アイヤイの憎しみも当然だけれど、ラウーの論理も非情なほど真実だ。彼らが憎しみあっているわけじゃないのに言い争うのは悲しい。

「ねえ待つてよ……あたしの銃の腕は世界一だよ？ だからこいつの銃殺ショーでも殺されずに生き延びたんでしょ。なのに消えろつて？ 死に損ない一人にとどめを刺すくらいで？」

「失望させられても意に介さない寛容か、愚鈍な雇用主を見つけることだな」

アイヤイも中佐の有言実行性を知つていて、恐れている。桐花は

感覚の戻ってきた手指をゆっくり開閉させながらそう思った。もう少し早いタイミングで麻酔針を打たれたアイヤイは、しようと決めれば引き金を引けるに違いない。

「……………失望、ねー」

不安を募らすやけに長い沈黙のあと、アイヤイが震える声で呟いた。

「変だね、効くよそれ。知ってる？ 絶望するとねえ、ひたすら眠るようになるんだよ。なんにも感じなくてすむようにね。あたしは奴隷仲間が目を開けたまま寝てるあいだに、こいつをどう殺すかわかり想像し続けてた」

「だけどね、と涙声が続く。」

あの時だけはこいつを憎むこと忘れてたんだ。

アダマス帝国軍がこいつのアジトを襲って、火事になって。あたしたち奴隷は、どこに隠してあるのかわかんない自分のモノが燃えちゃうと思つて右往左往してた。

アレと一緒に葬られなきゃ地獄に落ちるだなんて、バカバカしい。迷信ってわかつてる。でもね、無理。刷り込まれてるもん。アレを持つてる人に隷属する生き方しか知らないもん。

そういうの、見ただけで全部察して、水かぶって燃え盛る屋敷に飛び込んでく中佐なんている？ あたしたち、敵の奴隷だつてば。

てつきりアレを奪って、あたしたちを奴隷に使う気なんだと思つた。

なのに、回収したモノさつさと返ってきて解散しろつて何ソレ？ 何の思惑も下心もなく、敵の奴隷のために身体を張れるつて何？ 他の兵士は誰一人、ボスが何のために何を取ってきたのか、見当もついてなかったし。

ボスにはあたしたちが人間に見えるんだつて思った。人間つて、人間として扱われて初めて、人間になるんだつて思った。ボスの近くで生きてみたいつて思った。

あはっ、あたしつてば生まれ直してたのね、あの時にさ。

あたしのアレをボスに渡したのは、隷属するって意味じゃないのでもね、あたしの出せるものなんて他にないからねえ。忠誠の証つてこと。

それを返すわけ？ で、消えろって言うの？

「こいつを殺さないのはイヤ。けど、ボスの傭兵じゃなくなるのはもつとイヤあああ！」

「おまえはそんな理由で私の傭兵を志願したのか」

予想外だったのか、ラウーはわずかに片眉を上げている。がああ、とアイヤイが洞窟の又シミたいなうめき声をあげた。

「サイテー。ご主人さまってばサイテー。ひとの人生まるつきり変えといて自覚ないのねー？ 奴隷にモノ返したの、特別なことしたなんて思っていないからでしょ。何で帝国軍じゃなくて、ボスとだけ契約結んでる傭兵が多いかわかってんのー？」

「サイテーだからだろう」

「こわっ。ごめんなさいご主人さま、今のマジで怖かった」

ラウーの両眼から流れ出す冷気にあたったらしく、鷲が身震いして桐花は鞍から転げ落ちた。すかさず差し伸べられた手、ではなく献体同意書を睨みつける。

「ボス専属の傭兵はほとんど捕虜上がり。ヴィルゴットも。あたしたちはね、捕虜なんてもんは首を賞金に換えられるか、死ぬまで拷問されるか、家畜小屋で餓えて病死させられるか、そんなんだと思つてた。人並みの食事と治療を与えられるとか、もうね、衝撃よねー」

銃口は相変わらず武器商人へ向けられたままだったが、アイヤイの口調はいつもの調子を取り戻していた。

「投降するならスマラグダス隊、って密かに噂になってるしい。それが捕虜としての処遇にびびって捨て身の特攻しちゃうとか自決しちゃうとか、無駄死にをなにげに防止してんよねー……」

毛を逆立てていた猫が鎮まるみたいに。

銃口から決意が抜けていくのが見えるようだった。だらりと腕を下げ、襟を抜きすぎて肩甲骨まで覗けるむきだしに近い肩で、アイヤイは大きく二度、三度と息をついた。

「ねえご主人さま。そいつ譲ってあげる。だから、極刑にしちゃってね」

「法にのっとって適切な処罰を与える」

「のっとたつて極刑になるに決まってるでしょー！ ム力つくう」
武器商人の怪我の処置は終わり、念のために手足に縄をかけている。血にまみれた指を拭って、改心した傭兵の雇用主はやっと立ち上がった。下駄の足元に置かれていた小さな包みを慎重に拾い、異色の瞳でじつとアイヤイを見据える。

「これは従来通り私が預かっておく。よく我慢したな、アイヤイ」
「やだもう、あんな突き放しといてム力つく・・・・・・ム力つくよねえ、このオトコ」

同意を求めて振り返ったアイヤイは、へにゃつと力の抜けた泣き笑いに朱色の唇を歪めた。

「でもね、何が一番ム力つくって、よく我慢したなんて褒められて浮かれてる自分よねー。覚えといてよフィアンセちゃん、ご主人さまの毒気をこれ以上抜いちゃダメ」

「ご心配なく、大蛇の群れも弓で蹴散らす毒気が常人に抜けるとは思えません。」

その毒気の塊がざくざくと歩み寄ってきた。まだしっかりと力の入らない膝のせいで岩の床にへたり込んでいた桐花の横へと膝をつく。

「次はおまえだ、ヴェルゴット」

紫に変色して腫れあがったままの噛み傷がようやく手当てされる。「ここへは解毒作用を持つ苔を採取しに来たのだろうが、桐花の傷および麻酔の過剰投与、そして足の筋肉と無関係な針を打った過失について弁明があれば聞いてやる」

疑いもなく劇薬指定の視線が降臨なされた。

あたし苔を探してくるねー。とアイヤイは自分に刺さった針をはたき落とすと、猛ダツシユでヴィルゴット審問への参加を放棄した。それまで暇そうに突っ立っていた白ローブは急に身を屈め、ケホケホと肺を痛めたような咳の下から枯れた声を絞り出した。

「持病の癩……」

「癩とは胸部あるいは腹部の疼痛だ。咳ではない」

「……仮面持ちに仮面は通用しないのでしたね」

シャキーン。

アイヤイの下駄が遠ざかるのを見計らったタイミングで、白ローブの猫背がぴんと立った。完璧な発音、耳に心地よい美声、優しい微笑は神父が天職だろうと思えた。

「我が主の助手兼婚約者様、悪気はございません。会話など面倒の上ないだけなのです。会話で財布は膨らみません」

人嫌いで腹が真っ黒でさえなければ。

「犬が狼藉を働きましたとお詫び申し上げます。ラボから新鮮な空気を求めて散歩に出た犬は、婚約者様のおみ足を大変気に入ったようでございます。美しさは罪、と世間は言うそうですね」

謝ってるけど、最終的には噛まれるのが悪いと言っていないか？

「過剰投与につきましては、我が非とおっしゃるのは心外でございます。賞金首生け捕りの五万ポンドが欲しいと恫喝……失礼、愛らしくおねだりになる婚約者様に逆らう術など、持ち合わせておりましょうか」

あの『五万ポンド』はそういう意図じゃないー！

「桐花は冥界の入口で他人の心配をする娘だ。おまえの研究費を五万ポンド減額する」

「計十萬ポンドの損害……」

意識が遠くなったように、ヴィルゴットの白い上体がふうっと揺

らいだ。

「商談を提案致します、我が主」

瀕死の様相でヨロヨロしていたヴィルゴットは、なぜかひざまずいて桐花の足をがつきとつかんだ。

「こちらの針で十万ポンド、いかがでしょう」

痩せた白い指は膝の、膝というより膝に近い腿の内側に打たれた針を指し示している。

「先刻のご指摘は正解にございます。こちらの針は麻酔なし、足の筋肉とは無関係。女性特有の器官の血流を促進し高揚させます。婉曲に申し上げれば『愛されたい』モードに入るということでございます」

待て。

よくわかんないけど、何を勝手に人の身体にやらかしてくれたんですか？ なにそのモード？

「婚約者様の毒に感染した足、過剰投与された麻酔。我が主がご覧になれば我が非と断じ、氷の十字架を背負わすかのごとき視線の責め苦をお与えになり、か弱き我が身が服毒自殺を遂げるのは必定にございます」

「おまえに効く毒などない」

にっこりと神父笑顔になったのは肯定らしい。

「我が主には婚約者様の『愛されたい』モードをご堪能いただけた様子にございます。医者ならば安静にさせるべき患者を胸に抱き添わすなど、どのような愛らしいおねだりを」

「もういい。研究費削減は撤回する。賞金首の五万ポンドはアイヤイと山分けにでもしろ」

神父笑顔が一瞬、ニタリと勝利宣言したのを見た。

「えっ？ ちょっと待って、何で納得しちゃうのラウー！」

きつぱりと顔を背けて立ち去られてしまった。苔を探しに行ったようだ。片足では追いつけない速さだし、金属鎧の背からは完全な質疑応答拒否オーラが放たれている。

だめだ、これは教えてもらえそうにない。

針がどうやって『愛されたい』モードとかいうものを引き起こすのか、説明されてもよくわからなかった。でもその怪しげなモードには心当たりがあるような気がしてきた。

ラウーを呼びに行った時。やけに人恋しくて、どうしても誰かにそばにいて欲しくて、妙に情緒不安定だったような。

その誰かにラウーを名指しして、守っていてとか口走ってしまったような。

まさかあれが『愛されたい』モードの仕業？

あの大人数の兵士、すなわちラウーの同僚たちの前でわたしつてば、そんな怪しげな『愛されたい』モードを全開にしてしまったのだろうか！

ギャー！ 穴があつたら入りたいー！ もうすでに洞穴の中にいるけど！

「困った方々だ……」

隣でぼそりとかすれた呟き声があった。見れば白ローブは猫背に戻っている。まつ毛も眉毛も頭髪もない、けれど白磁よりも美しい肌をした毒使いは慈愛に満ちた微笑を浮かべた。

「困った方ではございますが、婚約者様には献体に匹敵する利用価値がございます」

しかし腹は黒いままだった。

風向きが変わって応援部隊が到着すると、アイヤイとラウーが解毒の苔を探し当てて戻ってくるのは同時だった。

苔は乳鉢でゴリゴリ潰されたり漉されたりしている。クサクてヘドロ状の、飲むなどと罰ゲームとしか思えない液体になりつつあった。

「それ飲むんだ……」

「いや」

塗るんだ、よかった。

「注射する、尻を出せ」

あんぐり。

「最も効果的な方法だ。飲むのは日常生活に支障が出る」

確かに、触ると三日間クサくて真っ黒になる液体を飲んだりしたら、その三日間は誰も会話してくれないだろう。

「最たる被害者は私だ。私が飲むも同然だからな」

「じゃ、じゃあヴィルゴットさんにやってもらおう!」

「医者は私だ」

「そうだけど、わたしにとってはラウーは医者じゃない方が大きいって言うか」

今までさんざん診ているだろう、って睨まれたけど。

お尻を出したことなくないじゃん!

ああまずい、ラウーの視線がどんどん絶対零度目指して降下している。

「わかりました。洞穴の奥の真っ暗なところでお願いします」

「私が夜目のきく鷹ならば容易だろうな」

このままじゃやられる。ラウーなら躊躇しない。傭兵二名と応援部隊数名の面前でわたしのスカートをまくり上げ下着を下ろして突き立てる。

「讓歩します。あの岩陰で!」

薄暗く、兵士たちからは死角になる岩陰を指差すと、返事を待たずにそこへ片足跳びで転がり込んだ。

苛立たしげについてきたラウーの手に光っていたのは、見たこともないぶつとい針。注射器の筒の部分はなみなみと黒い液体で満たされている。

「うそっ! そんなに太いの入らない!」

思わず叫ぶ。洞穴の入口付近で怪我人を鷲の鞍へ固定する作業に没頭していた兵士たちが、ヒタツと静まり返ったのがわかった。

「これしかない。黙って尻を出せ、暴れるなら縛り上げるぞ」

「わかったおとなしくするから。入れるとき言ってね、そんな凶悪
な覚悟がいる……」

「いくぞ」

「いたっ、痛い、ラウー、痛いつてばっ」

細さも鋭利さも今ひとつな針。この世界の注射針は遅れてる、と
桐花は涙にくれながら呪った。

兵士たちがゴクリと喉を鳴らし、おののいている気配が聞こえて
くる。

「毒に侵された婚約者様をさらに犯すとは、鬼畜極まる……」
「！」

「さすがルテナンカーネル、毒をもって毒を制すか！」

「あの怪我で厩舎に飛び込んできた豪胆さには感心したが」

「こんなプレイで鍛えられていたんだな！」

ラウーのヒドさについて語ってくれてるらしい。

針はなかなか抜かれる気配がない。巨大な注射器だったから、解
毒液の量も多いんだろうけど。

「こんなおっきいの初めて……全部入った？ まだ？」

「力を抜け、もう少しだ」

「早く終わらせて。息できない、死んじやいそう」

「よし、入った。終わったぞ、身体に染み込むまで安静にしている」
乙女として守りたかった何かを奪われた気がしてならない。

けれど兵士たちの面前で恥ずかしい姿を晒すだけは免れた、そ
れでいいと思わなくちゃ。変な噂が増えるのは困る。

「なんと早い早さ！ 一瞬だったぞ」

「おいたわしい、ルテナンカーネル……」

「いやあの『守っていて』は俺でも腰にきた。今まで我慢してらし
たんだ、無理もない」

「いやいや名器をお持ちのようだった」

あの注射時間でも早かったの？ 名器って、注射器？

服を整え、痛むお尻をさすりながら岩陰を出る。

兵士たちはやけに感心し、かつ前屈みになりながら怪我人を搬出する作業を再開していた。

ラウーは名器と呼ばれた注射器を惜しげもなくポイと救急箱に投げ戻すと、隅でポケットと座り込んでいたアイヤイを視線一つで起立させた。

「アイヤイ、ソウヘイ・カジヤベの護衛につけ」

「うへあつ？ あたし？」

アイヤイはのけぞった。

「どーゆー嫌味！ 死んで欲しい男を守れって？」

ラウー・スマラグダス中佐は傭兵アイヤイに武器商人の護衛を命じた。潜めた声で続ける。

「この洞穴は仲間割れには不適切な場所だ。取引相手の口封じと考える方が納得できる」

着物の黒い袖をぶんぶん振って全身で表明される不服を一顧だにしない。

「鉱物資源に乏しいアダマス帝国で、銃の使用者は極めて限定的だ。所持者は火力において圧倒的な優位にあるため厳しく監視され、銃や弾薬は軍の管理下にある。だがカジヤベを銃撃した者は扱いに熟達していない。急所を外している」

「ひっ、カジヤベの奴隷だったら一発の無駄撃ちにつき一日メシ抜きよー」

そーいう一発で死に損なっただんなら皮肉な話、と朱色の唇はぎこちなく笑った。

「初心者に密売したってことねー。しかもナメた話よね、こーんなアダマス軍の目と鼻の先で」

「取引中の不在を周囲に不審に思われたくないならば、落石の危険を冒してもこの洞穴を取引場所に指定する利点はある。不在になる時間を最小限に留められる」

「ん？ うそっ、ボスってばまさか身内を疑ってんの？ 取引相手が帝国軍人って？ あー逆かもね、帝国軍にスパイがいるのかも」
会話はほとんど息だけのやり取りになっている。

アイヤイの説得に成功しただけで一件落着な気分だったのに事態は深刻な方面に急展開して、桐花は不安になる。

彼らの休息と命は常に、海風に晒されるろうそくのように揺らぎやすいのだと。

「軍医として膿みは排斥する。カジヤベには取引相手を吐かせねば

ならない。極刑に処したいおまえならば、やすやすと刺客に殺させたりしないだろう。行け」

「りょーかい、ボス」

「あの出血では長くはもたない。ヴィルゴット、死ぬ前に吐かせろ」「御意。千尾の毒蠍の名にかけて」

許容量を超える薬を民間人に安易に投与したりはしない。適切な処罰を与える。

その良識を蹂躪する命令だった。

三度殺しても足りないほどの憎悪を、逆に護衛に利用する。毒と麻酔を自在に操る毒使いに瀕死の容疑者を拷問させる。軍の非常時には理念をまげる。

搬出される武器商人と、その先に待つ血の現実を迎撃しようと睨む異色の瞳は、人としての体温を失っていた。桐花が後じさると背中中は硬く冷たい洞穴の壁に阻まれた。

この人は誰。

出会った瞬間から、無体な人だと知ってた。

だけど残酷だと感じたことはなかったのに。

人々がルテナンカーネル・スマラグダスと恐れおののくのを、むしろ大げさなんじゃないかとさえ思っていたのに。

「あの娘を私の家へ。安静にさせる」

応援部隊の一人に命じている金属鎧の背中が見知らぬ人に感じる。すぐそばでケヘケホと病的な咳が聞こえた。猫背の白ローブが、アイヤイと武器商人に打った使用済みの針を拾い集めている。ヴィルゴットはラウーを仮面持ちと言った。

アイヤイの羅刹の仮面。ヴィルゴットの毒蠍の仮面。

ラウーにはアダマス帝国空軍中佐の仮面があるのだと信じたかった。

熱が上がった。

桐花を送り届けてくれた兵士は衛生兵だと言い、ジャブと名乗った。ひよろつとして親切な黒人青年で、何度も様子を見に来てくれた。

不意の冷たい感触に目を覚ます。

周囲はすっかり暗く、室内は半濁の水晶の窓に阻まれた月光でほんのりと青白い。

眠れていたらしい。熱が上がったときには煩わしかった額の絞りたての冷たい布が、心地良さに変わりつつあった。

「ありがとう、ジャブ」

眠さとだるさによく回らない舌でもにもよと感謝を述べた。

「礼を言う相手を間違えるな」

ガバツ。

「起きてる」

反射的に言った。

目覚めて眼前にラウー・スマラグダス中佐がいた場合、起きていと激しく主張しなければ驚の餌にされるという恐怖の経験則が桐花には刷り込まれている。

上体を直角に起こしたせいで、額の布がポトツと腿へ落下した。

ラウーが換えてくれたらしいソレを無駄にするのと、横になって起きてる主張が無駄になると、どちらが睨まれずに済むかと考えた。でも熱と眠気で脳みそは答を出すのを放棄する。

月明かりを頼りにそろりと窺うと、ラウーはベッドの枕元に腰かけ、乙女の背中を踏みつけた前科持ちの脚を高く組んでいた。

違和感があると思ったら、裸足だ。金属鎧を着けてないのを見るのは初めてだ。軍服の襟は緩んでいて、石鹸の香りがする。

「婚約者が初めて帰宅して言うのが部下の名前か」

忘れていたけどそういえば今日から毎晩四時間、帰宅と就寝を確認しに戻るとか宣言されてたっけ。

ってというか風呂上がりっばいけど、ホームウェアまで軍服なのこの人。

「えっと……おかえりなさい、ラウー」

命は惜しいけど、偽装婚約者に亭主閑白されるのも面白くはない。「でも部下じゃなくて、元彼の名前かもしれないじゃない」

しかし月光を吸って妖しさに満ちた翡翠の瞳は一ミリも動じなかった。

「ベッドの中央で寝る女が元彼などと主張したところで、説得力は皆無だ」

なにそれ？ 寝る位置で彼氏がいるか、月が教えてくれるとか？ 「恋人と寝るのに慣れてる女ならば、無意識に半分を空ける習慣がついている」

うつつ、そんなの思ってみたこともなかった！

桐花はど真ん中を占領している自分を見下ろした。月占いよりも強力に説得性のある断言に返す言葉もない。

ラウーは眉根を寄せた顔を伏せ、眉間をつねるように長い指で押さえている。覚えのあるポーズだ。笑っているとかいう噂の。

それからランプを持ってきて、足の包帯を換えてくれた。紫色の腫れは薄らいでいる。痛みも減ったと伝えると、異色の瞳の端に柔らかなさが載った。

半日ほど前にぞつとするような残酷さを見せた軍人とは思えないのに。

包帯を巻き終えて、ラウーはよしと立ち上がった。

「寝ろ」

「うん。あ、でもベッド使うんじゃないの？ 腹筋かなにか運動に使うって、アイヤイさんが言ってたけど」

腕を組んでベッド脇に仁王立ちしているラウーとのあいだに、妙な沈黙が流れた。

「強いて言えば腕立てだが、今は時機ではない」

腕立てに適した時機というものがあるらしい。

しかし寝ると言われても、見下ろされながらじゃ気になってしょうがない。しかもものすごく睨まれている。どれだけ腕立てしたか

つたんだろ、ベッド占領しちゃってすみません。
でもないならしないで、リビングの椅子に寝に行ってくれてい
いんだけど。

もそもぞと上掛けに潜り込み、ぬるんでしまった布を額に載せな
がら無言で居心地悪さを語ってみるが。

「就寝を確認しに戻っている。おまえの寝つきが悪いとその分、私
の睡眠時間が減る」

ひい。睡眠を恐喝されるなんて思ってみたこともなかった。

ふと目が覚めた。

大理石の配色が優美な室内を満たす空気は、月光の青より朝陽寄
りの白を帯びていた。まだ弱々しい光量と静けさで、かなり早い朝
に思えた。

もうひと眠りしようと思いを打ちかけて、硬直する。

至近距離にラウーの横顔があった。

瞬きしてみる。

強めにしてみる。

何度瞬きしても消える様子はない。

息を詰め、そろりと首を伸ばして状況を確認してみた。自分はき
ちんとベッドの中央を占領している。

一方のラウーは桐花とベッドの端の中間にいる。縦より横が長そ
うな巨大なベッドだから、ひと一人が横たわるスペースは充分にあ
る。とはいえ配置が不自然すぎた。

リビングの椅子で寝るんじゃないの？

ラウーは仰向けで両手を腹の上に載せ、実に寝相がいい。そのま
ま棺桶に移して使える。寝顔は寝ているというより黙考しているよ
うで、あまりリラックス感がない。

上掛けも枕もないまま横たわっていて、言っただが死体的で
ある。

その死体がいきなり目を開けた。

「うわー！ びっくりしたあ」

「足を診せる」

なんで目覚めた直後から働けるんだろ。最新のパソコンだって起動するのにもう少し時間がかかるのに。

「まさか寝てないとか？」

「充分だ。さつさと診せる、時間の浪費だ」

「ひゃっ」

つい変な声が出てしまった。傷の腫れ具合を検分しようと触れてきた指が冷たくて。

珍しい、と思ったところでハツとした。起きた時に取りのけた額の布を急いで探す。枕の横でへニヨツとしてた布は、まだわずかに冷たさを残していた。

その冷たさが桐花の胸を熱くする。

「もしかして、看病してくれてたの」

「私は医者だ」

シンプルな答が返ってきた。

うん。そうだったね。わたしはラウーの大事な翻訳機なんだった。飯にも私の婚約者だからな、なんて答は期待しようがないんだった。「軽快しているな。私は出かけるが帰りが遅くなる。しばらく安静にしている。体調に不安があればヴィルゴットをラボから引きずり出せ。おまえに傷や何らかの後遺症が残れば研究費を削減すると通告してある」

「わかった」

「それから、おまえとの約束を書類にしておいた。助手としての勤務時間、給与、」

「どこにサインすればいいんですか？」

話を遮られて、機嫌悪く睨んでいる気配がする。黙って差し出された数枚の書類の、黙って指差された場所に、黙ってサインをした。「何を怒っている？」

「怒ってません」

ニコリと慣れた営業スマイルを作った。不審をあらわにする厳しい異色の瞳としばし、せめぎ合った。

「……時間だ、出かける」

「いつてらっしゃい」

毎朝父にしていたように、仕事へ向かう人を見送る礼儀は持ち合わせている。玄関まで見送ろうとしたら、ベッドから出る前に手で制止された。

「ここにいろ」

噛み傷のある足は軽く引きずるものの、もう歩ける。それでもやけに真剣な眼差しで止められた。

「いいな、ここにいろんだ」

「うん」

手早く支度をして、金属鎧を着込んで、振り返らずにラウーは出て行った。ガチャリと玄関の錠が下りると同時に、桐花はぱたんと枕へ倒れ込んだ。胸の辺りをさする。

私は医者だ。

あの一言が痛かった。心臓がひしゃげたかと錯覚するくらい。

血が冷えたのがわかった。

書類を出されて、改めて宣告されたと思った。おまえは保護すべき助手だ、と。婚約者の仮面を与えただけなのだ。

「たまに優しいと忘れるじゃん、バカッ」

ラウー・スマラグダス中佐を含むアダマス帝国軍が西方の島国を急襲したと知ったのは、その夜の公式発表を号外として叫びながら走っていった見も知らぬ少年によってだった。

31・ 押してだめならゴリ押しで

しばらくここで安静にしている。

というラウーの命令に、桐花は逆らった。大急ぎで着替える。ラウー出兵の真偽を自分で確かめないと気が済まない。信じられない。だって何も聞いてない！

逆らったりすると後が怖い。が、出兵が事実でラウーが不在なら、桐花が何をしようがバレルはずがない。構うもんか。

しかし桐花のもくろみは、玄関扉を引き開けた瞬間に、屋敷から一歩も出ることなく破綻した。

「出かける気ー？ だめー。フィアンセちゃんを見張ってるって、ご主人サマに言われてるからあ」

けだるげに、いかにも面倒くさそーな仏頂面の舞妓もどきが立ちはだかっていた。とつぷりとした夜の中、ランタンの橙の光に下から照らされた顔が怖い。

「びつくりした……あれっ、アイヤイさんはいるんだ」

出兵は？ スマラグダス八鬼神を名乗る腹心が、主の戦争に参加しないはずない。

険悪に歪んだアイヤイの眉間で、してはいけない質問だったと悟った。

「ごめんねえ戦力外通告でー。カジヤベ死んでフヌケて使い物になんなくてごめんねえー！」

グレている。

「えっと……こっちこそごめんなさい……亡くなつたんだね、武器商人」

「ごめんって言いながらズケズケ聞くし」

大雑把に結い上げた長い黒髪をダルそうに揺らすアイヤイは疲れが見えた。髪は大雑把というより崩れているし、黒い着物はシワが寄っているし、顔色は冴えない。

「誤解しないでね。あたしはキツチリ、ボスの命令守ったんだから。カジヤベは失血で死んだ。ヴィルゴットの針が死期を早めたかもしれないけどね、どうせ数分も変わんなかったよ」

落ち窪んで充血した目に睨まれた。

「わかつたら部屋に戻ってくれない？ あたし機嫌が悪いの。すごく、おーく悪いのー」

昭和のドラマで見たことある気がする、ヤンキーにからまれるこんな感じのシーン。

迫力負けしかけた自分を叱咤する。まだ引き下がれない、平成組にも根性はある。

「ラウーが出陣したって本当？」

「あー『鉦山獲り』ね。カジヤベから銃を買ったのがボル・ヤバルに買収された兵士でねー、軍幹部暗殺計画が発覚したもんだから作戦が練り上がったけどさ。行くのなんてわかってたでしょ」

鉦山獲りって？ ボル・ヤバルって？ こっちの世界の政情なんて知らない。

ラウーは出陣する素振りなんて全く見せなかった。出かけるが帰りが遅くなる、って何気なく言っただけ。

本当に戦争しに行っちゃったんだ。自分がのうのうと休息していたあいだにも、今この瞬間にも、命を晒して戦ってるかもしれないんだ。

弓の正確さは捕鯨銛で、指揮官としての統率力は人質救出で、一軍人としての勇猛さは蛇穴特攻で、もう二度と味わいたくないほどの超実戦で思い知らされてる。

だけど。それでも。

「ボル・ヤバル侵攻のために呼び戻されたのに戦力外なんて、あーもう情けないったら……ヤダあぶなっ、ちよっとしっかりしてよ」

ガシャンと耳障りな音が、ランタンの落下音だと気付いた。取り落としてしまったランタンをつかもうとした指が空振りする。距離

感がおかしい。

どうしよう。自分と空気の境目がわからない。足元の床は石のはずなのに、ふわんふわんと波みたいで。

ドアの石枠をつかんでぎゅっと目を閉じ、気を鎮めてくれそうな記憶を漁った。

『軍人を腰抜けにして未亡人になりたいなら、泣いてすがれ』

何度も何度もラウーの言葉を祈りのように反芻する。

「ラウーが行ったのは危険なところ？」

「あそこは独裁者の恐怖政治だから、軍だつてもろいもんだけどさ。ボスはどこに行つたつて、他の軍人よりよっぽどリスクを取つてる。白魔の精神なんて聞こえはいいいけどね。敵を殺さないつてことは、捕虜にするまでは抵抗されるわけ」

助けようとする相手に殺される可能性。

ラウーが戦いを挑んでいるのは、そこなのかもしれない。

「返り討ちにされる寸前に仕方なく殺す時のボスは怖いね。一片の容赦もないね。アレは見せしめだもん。残兵が真っ青になって白旗振る慌てっぷりが笑えるくらい」

「……腹立ってきた」

はあ？ と間抜けな声が降ってきた。

「仮にも婚約者に黙つて行くなんて。助手に仕事リストも渡さずにサクツと行つてくれちゃつて。すっかり騙されたじゃん。中佐とか医者とか婚約者とか、どんだけ仮面使い分ける気なのあの男おお」

「それ日本語？ もしもしフィアンセちゃん？」

「一人で仮面かぶつてカツコつけてっ。ラウーがその気なら、わたしだつてやつてやります！」

「あー……なんか壊れてるっぽいけど。あんたつてば、ほんつとに身分保証が欲しくて婚約したわけじゃないのねー……」

ラウーがアダマス帝国空軍中佐の仮面を着けて出陣したのなら、わたしはアダマス帝国空軍中佐の婚約者の仮面を着けて待つてや

る。

信じて、毅然として、顔を上げて。

心臓からぐずぐずと身体が潰れ崩れていきそうな心配など、押し隠して。

しゃっきりと背筋を伸ばして胸を張った。

よし、仮面装着完了！

ところでなぜ見張られてなければいけないのかと聞いてみた。

「抜け抜けとなにい？ ネイティヴに人質にされたり、毒まみれで驚ごと基地に突撃かけてきたりしといて。それにボル・ヤバルの手先がまだ帝国内にいるだろーし。ヤツらの仲間を処罰したボスに報復するなら、フィアンセちゃんをミンチにするのがお手軽じゃない？」

三分間クツキングみたいに言わないで欲しい。

「そっか、ありがとう。玄関先に立たせとくのも悪いから、中に入つて。お湯も使えるし」

「はあ？ モノがないからって油断してない？ 夜中にノコノコ上がってバスルーム使ったりしたら、ご主人サマに殺されるってば。完全装填した銃でロシアンルーレットさせられたかないって」

護衛は屋外にいるべしという血の戒律でもあるらしい。

安静にしていると言われても、この世界にはテレビもネットもDVDレンタルもない。

暇だ。

ブーブー文句を垂れるアイヤイを説き伏せて、資料館から本をどっさり持ち帰った。微熱に下がった時は翻訳をして文字に埋没することで、心配してしまう時間を極限まで減らした。

そんな日々が一週間も続くとさすがにキツイ。

精神的エネルギーは、食事みたいに簡単に補給されてくれない。

アイヤイが教えてくれる軍の公式発表では、アダマス帝国軍は迅

速にボル・ヤバルを制圧したようだった。帝国軍は政権を掌握、ボル・ヤバルを一国からアダマスの一地方として支配下に置いた。

死傷者もいるようだが、桐花の元へ訃報を届けに来る者はいない。外出したい、とアイヤイに申し出た。

「げっ、ヴィルゴットのラボ？ やだーどんな毒が充満してるかわかんないのにい。他の医者にしてー」

即座に却下されたけど。

ラウーは長期不在のあいだの仕事を示していかなかったから、自分の判断で毒や伝染病関連の翻訳をしていた。その中にヴィルゴットが犬経由で桐花の体内に残っていた毒に当てはまるものはなく、完治したのか知りようがない。

嫌がるアイヤイを拝み倒して基地内にあるヴィルゴットのラボへ案内してもらった。

迷路のような何重もの柵を通り、瀕死のミミズが悶絶したような下手くそな字で『超危険』『本当に猛毒』『敷地内での死亡について責任は負いかねます』『献体・寄付歓迎』と繰り返して訴えてくる看板群を抜ける。

海へと落ち込む断崖絶壁の手前にぽつんと建っていたのは、紫水晶で作られた巨大なドームだった。エスキモーが圧雪ブロックで作るかまくら状の構造で、煙突がついている。

煙突からは赤紫色のいかにも毒々しい煙がもくもくと流れ出していた。風が強いにもかかわらず刺激臭が漂っている。岩山に育つ植物は生育力が強いのが特徴だが、見渡す限り周囲の草木はみな立ち枯れていた。裏手には墓標らしき傾いた十字架が累々と連なっている。

ドームの地下あたりから、わおおおーん……と物悲しげな犬の遠吠えがフェイドアウトで聞こえた。

ゾンビと魔女の住処のイヤなところを足して二をかけたような場所だ。

袖を防毒マスク代わりに口へ押し当てながら、先へ進むか迷う。

ここにいてただけで新たな毒に侵されそうな気がしてならない。しかも複数、致死の。

帰ろっか。ねー。

アイヤイとアイコンタクトで会話が成立した。

この合意があと一瞬だけ早ければ、何事もなく魔窟から離脱できたはずだった。

しかし見てしまった。

正確に言えば見られてしまった。

紫水晶の壁に片手を沿わせ、もう片方の手には鳥かごを持ち、とぼとぼとドームの円周を回っている兵士。

ぐるりとドームの裏側を歩いてきたらしい兵士はたたずむ桐花とアイヤイの姿を発見して、明らかに救いの神に出会った顔をした。

「羅刹のアイヤイさま！ スマラグダス中佐の婚約者さまああ！」

面倒ごとに巻き込む気満々なのが、逃がすまいと執念さえ感じる鼻息に表れている。

身元がバレていては逃げ出すこともできない。なぜ身元が印籠になる時は主張しなければいけないくて、バレたくない時にはバレているのだろうと桐花は密かに嘆いた。

「入口を探していたのですが見当たらず、建物の周囲を回っておりまして、中から動物の……動物だと信じたい、動物らしき悲鳴ですとか、イヒヒヒヒヒと狂気の笑いですとか、結核のようなひどい咳が聞こえてきたり、そういうするうち鳩が死にそうにっ」

まだ少年の幼さを残した兵士は、ぐずぐずとすすり泣きながら訴えた。手にした鳥かごには灰色の鳩がグツタリと横たわっている。

「へー伝書鳩。ヴィルゴット宛て？」

鳥かごを覗き込んだアイヤイの指摘で気付いた。鳩の赤い足には小さな筒が付けられ、蠟で封じてある。

「ヤダこれ、ご主人サマのスタンプリ！」

封蝋に目を凝らしていたアイヤイは、叫ぶといきなり少年兵の頭にハイキックをかました。

「アホ！ 前線からの通信持ったままウロウロしてたわけ？」

「だ、だつて入口が」

白目になりかけた少年兵がやつとそれだけ言う。

私刑だけでなく体罰も軍で禁止すべきだと桐花は思った。

「ヴェルゴットー！ ボスから緊急通信ー！」

厚底の黒塗り下駄がガンガンと紫水晶ドームの壁を蹴りつける。

しかし反応はない。

「あぁん、もう」

と朱色の唇を尖らせながらアイヤイが前帯から取り出したのは金屬の筒。ジャカジャカと手際良く組み上げるとそれはバズー力的な形になった。

「えーつとアイヤイさん、それ何かなあ……」

「徹甲弾ランチャー」

胸元に手を突っ込んで取り出した砲弾を装填し、ドームに向かってランチャーを担ぐ。

「入口なんか、なけりや開ければいいのにね！ ハイ下がってー」

「待つて待つてアイヤイさん、汚染される、爆破なんかしたら薬物が漏れ出すからー！」

チエルノブイリ原発事故が頭をかすめ、桐花は慌ててアイヤイに飛びついた。

「それより中の方が死ぬと思います……」

少年兵もおおずとまともな応援をしてくれる。

桐花にはヴェルゴットを引きずり出す勝算があった。ラウーは言っていた、桐花に傷や後遺症が残れば研究予算を削減すると。

大きく息を吸い、紫水晶の壁の向こうへと声を張り上げた。

「ヴェルゴットさーん！ この少年が献体したいってー！」
パカッ。

語尾が終わらぬうちにすぐ脇の水晶ブロックが開き、白い袖がに

ゆつと出て、少年兵の足をがつきとつかんだ。キヤアアアと恐怖に怯えた悲鳴ごと少年がドーム内へと引きずり込まれると同時に、カコーンとブロックは閉じてしまった。

さながら人間アリ地獄。

鳥かごを手放さなかったのは褒めてやりたいが、少年兵に再び会える機会は永遠に訪れないような気もした。

「ごめん。だつて壁越しに問診されて、傷も後遺症も残らなさそうだと判断されたら、出てきてもらえないじゃないか。

「……ファイアンセちゃん。あんたつてば、ボスのファイアンセに向いてる気がしてきた」

ぼつりとした呟きに、ありがとうと返すべきか迷っていると。

先刻とは別のブロックが開いて、ペツと少年が排出されてきた。

虚ろな瞳で座り込んでいる。空の鳥かごを抱えているから、どうやら任務は果たしたようだ。

「うつされた……きつと結核をうつされた……僕
はもうだめです。せめてあなた方は逃げて下さい！」

アイヤイは素早く風上に逃げて行ったが、桐花は少年兵を助け起こしてやった。

「大丈夫、ヴィルゴットさんの咳はたぶん」

演技。

と言いかけたところで、シー、と制止が聞こえた。

少年兵の背後に猫背の白ローブが現れる。痩せた長い指を血の気の少ない唇の前に立てていた。

キヤアアアと叫んで少年兵が逃げ去る。こけつまろびつの背中に協力、感謝とかすれ声が囁いたということは、献体同意書のサインは強奪済みらしい。

結核で思い出した。

毒と伝染病関連の翻訳の写しを、専門家であるヴィルゴットにあげようと持ってきていた。綴じてずっしりと重い冊子になった皮紙を手渡す。

はらはらとページを繰ったヴィルゴットが息を呑んだのが聞こえた。

「あの……診察してもらおうと思っただけで、忙しそうだから出直すね。それ、診察料代わりに」

話の途中で、ヴィルゴットは何かを桐花の眼前に突き出した。例の献体同意書かと思ったが小さな筒だ。鳩の足に付いていた筒。封蝋は破られている。

軍の通信文。

いいの？ と目で訊くと、薄い薄い水色の瞳は頷いた。

薄い巻紙を取り出す。見覚えのある几帳面な字がびっしりと連ねてあった。

ラウーの字。

ラウーがちゃんと生きてる。

目頭がじわつと熱くなつて、慌てて吹き抜ける風に当たって冷やそうとしたら、刺激臭を含んだ風がしみて余計に涙が出てきた。瞬きで視力を再起動し、巻紙を読む。

ボル・ヤバルで伝染病が発生し、多数の兵士が罹患している。生物兵器の可能性もある。病名と感染経路の特定のため至急の出勤を要請する。

そして伝染病の症状が細かく説明されていた。桐花は翻訳したばかりの、その症状を呈する伝染病の名前を覚えていた。

ポリオ。

脊髄性小児麻痺とも呼ばれるが、小児でなくてもかかる。

「ヴィルゴットさん。わたしも連れてって。家庭用レベルだけど、医学書を持つてる。看病も手伝える」

だが頭髪のない頭を覆う白フードは横に振られた。

「我が主の婚約者様を戦場へお連れするなど」

「献体同意書を出さない。連れてってくれるならサインします」

「仰せのままに」

にっこりと神父笑顔になって、ヴィルゴットはすでに準備してい

た献体同意書を差し出してきた。

32・愛を力ネに換える錬金術

ヴィルゴットの咳は人よけに絶大な効果を發揮する。

そのおかげで桐花がこの人嫌いと言驚に同乗する損な役回りに立候補するはめになった。咳は演技としても、操縦中に意識を失いかけるのは演技ではなさそうだったから。

ヴィルゴットは身体の色素が人一倍、薄い。頭髪がない。日光を反射する白い服を着込んでいても、上空の強い日差しの光と熱は、ヴィルゴットには毒に違いなかった。

空は濃いトルコ石のように青い。威容を誇る城砦は背後に林立する岩山と、赤メノウのマーブル模様が鮮やかな木星を従えている。

この岩山ばかりの土地から外へ出るのは初めてだった。ネイティヴの死出の小船で外海へ流されたことはあるが、あれを旅にカウントしたくはない。

ヴィルゴットと桐花にあてがわれたのはキリリと黒い胴に純白の頭を持ったハクトウワシで、鋭く賢そうな瞳で太陽を仰いでいる。

この驚に乗ってラウーのいる鉾山の島、ボル・ヤバルへ行くのだ。

驚と並んでドキドキと胸にこみあげるものを抑えきれずにいると、補給物資の陰で丸まっている白ローブの猫背の呟きが聞こえてきた。

「人ごみコワイ……ボル・ヤバル暑い……おえ」

ヴィルゴットは喉にこみあげるものを抑えられなかったようだ。

目的地までの数時間、驚の鞍という逃げられない場所でヴィルゴットの前に座らねばならない桐花は、自分の背中の純潔を心配した。

ボル・ヤバル目指して青い海を渡っているあいだ、世間話を「財布は膨らみません」で拒否された。会話で意識を保って背中を汚されないよう、桐花は仕事関連の話題で食い下がる。

「千尾の毒蠍って名乗ってたけど、ヴィルゴットさんもスマラグダス八鬼神？」

「呼び名は風天のヴィルゴットでございます。蠍は我が忌まわしき

過去」

聖書を朗読するように、静かにヴィルゴットは語った。

敵に劇薬を、民に死の病を、土に根を枯らす毒を。生命の輪廻を確実に、迅速に、無差別に刈り取る死神の鎌を研ぐことに、我が手を穢した時期がございました。

国のため、家族のため……否。我が探究心のため。

事実、我が故国が滅び敵軍に召し抱えられた時さえも、故国に我が毒を撒かれた時さえも、研究が続けられるなら資金提供者が何者であろうと無頓着だったのでございます。

しかし敵国の暑さに辟易いたしました。我が故国は一年の半分を純白の雪に覆われ、研究に不可欠な清冽な湧水に満たされた、我が生存に最適な地であったと知ったのでございます。

その頃には我が毒は故国を染めきっております。人々は死に氷の土地に暮らす知恵は絶え、森は枯れて雪崩が山河を壊し、湧水の汚染は生物を滅ぼしたのでございます。

氷と死骸しかない故国に立ち、恥じました。壊すだけ壊して、我が手には草の苗ひとつ植えるすべさえ備わってはおりませんでした。氷の国にしか適さぬ我が身を我が手で灼熱の地獄へ追放する、それが我が因果応報でございましょう。

故国へ毒を撒いた軍での研究を拒否し幽閉されてまもなく、その軍はアダマス帝国軍に降伏いたしました。

そしてラウー・スマラグダス中佐が我が前に立たれ、こうおっしゃいました。

無害な毒を作れ。

我が耳を疑いました。後遺症の残らぬ軽度の麻痺や戦意喪失、そうした効果で敵兵を殺傷することなく無力化する毒を作れと。そして必ず解毒剤を同時に開発せよと。

大地を汚染する毒は人類の発展を脅かすから、サンプルだけ残して廃棄せよと。

知識は持てる者により毒にも薬にもなり得る両刃の剣。毒の剣で

命を斬り捨てたと悔いているなら、毒蠍の尾は私の命令があつた時だけ振るえ、そしてその度に私を恨めと。

できましようか。我が毒蠍の尾を振るわせる度、我が主は何者かを恨んだりなさるでしょうか。

「……風天と呼ばれるのは催眠、催眠、幻覚などの効果を持たせた煙を風に乗せて敵軍へ撒くのが、戦場での主たる我が役割だからでございます。敵軍にそうした攻撃を受けない布陣の進言もいたします」

我が主のおそばにいれば、と穏やかな美声で言った。

「いつか解毒剤を抱き許しを請いに、故国へ戻れると夢見ることができるのでございます。否、夢でなく、その日を手繰り寄せられると信じられるのでございます」

ざんげを語り終えたヴィルゴットは敬虔な信者のように頭を垂れた。

教会のような静けさだった。

鷲の翼が風を切る音だけが、ひゅうと耳を抜けていく。

青い海の波頭で陽光がきらきらと輝いている。

ヴィルゴットはまだ頭を垂れている。

「わー気絶してる！ 日射病？ 貧血？ しっかりしてっ」

ボル・ヤバルの気候は亜熱帯に属しているようだった。

海の色が明るさを増す。水平線に現れた低い山脈には緑が豊かに生い茂る。だが山麓で緑は剥ぎ取ったように消失し、人為的に削られた暗い色の台地が断面を晒していた。土砂の山からトロッコを載せたレールがレンガ造りの無粋な四角い建物へと伸びている。

鉱山獲りとアイヤイが言ったように、ボル・ヤバルにはそうした採掘場がいくつもあるらしかった。

やがてなだらかな丘陵地帯に出る。

地面に木箱を置いたような質素な町並み、それを小高い丘から白

亜の宮殿が睥睨している。高さの違う円筒をぎゅっと束ね、それぞれの円筒にキスチヨコを載せたような愛らしいシルエツトだ。

しかしそのキスチヨコ部分はゴテゴテと金で塗りたてられ、周囲の貧困との落差に嫌悪をもよおさせる。

最も高い塔には巨大なアダマス帝国軍旗が翻り、占領を力強く宣言していた。

迎えに出てきた茶色い鷲に先導され、ヴィルゴットは宮殿の離れへと鷲を旋回させる。悪趣味な金ピカキスチヨコ屋根の円筒は三本扇形で芝生の美しい中庭ごと、急ごしらえの柵で二重に囲まれ隔離されている。危険を警告する派手な旗が立てられていた。

旗のなびく様子と周囲の地形を見回して、ヴィルゴットが満足気に頷いている。

「隔離病棟に好適な立地。我が主は我が進言を正確に再現なさる。光栄でございます」

呟きながら鷲を芝生の庭へ着陸させようとして、上空数メートルの高さでいきなり降下を中止した。

どうしたの？ と背後のパイロットを振り返るまでもなく、桐花は芝生の上にその理由を見る。

巨大な弓を引き絞ったラウー・スマラグダスがいる。照準は、異色の瞳とほぼ視線が合うから、わからなくもない。

「桐花の帯同を命じた覚えはない。ヴィルゴット、おまえのロープを真紅に染め直したいなら着陸を強行しろ」

「血、コワイ……」

一週間ぶりの再会がコレか。

生きてるかとか元気かとか怪我はないかとか、訊くまでもない。

亜熱帯も氷雪気候へ大変動させる極寒の視線が健在すぎて、こっちの命が危うい。

「違うの、ラウー！ わたしが連れてってって頼んだの！」

「ここは伝染病の感染地域だ。身体の弱ったおまえなど格好の餌だ。新たな墓を掘る労働力を浪費させるな」

ギャラリーがヴィルゴットしかいないからって！ 仮にも婚約者なんだから、おまえにうつつたら心配だくらい言えー！

「いくら積んだ？」

さすが雇用主。頼んだくらいで守銭奴ヴィルゴットは動かないと熟知している。

ラウーからもらっている助手の給料を買収に使ったと誤解されたくない。

「お金は払ってない。献体しただけ」

給料は浪費してない。えへんと胸を張ってみせた。

なのに氷の視線で刺殺されそうなのはなぜ！ 勢いを増した冷気に驚が怯え、不安定になったホバリングはむしろロデオだ。

後続の補給部隊が降りるに降りられずに遠巻きに様子を見ている。野戦病院および隔離病棟である宮殿の離れからも衛生兵らしき兵士が何事かと出てきた。

それらの視線を猫背でかいくくりながら、ヴィルゴットが痩せた指先で桐花のサイン入り献体誓約書をつまみ出した。

「こちらでございます。我が主、買い取りに応じる用意はございます」

「私に桐花の値段をつけるというのか」

ラウーは弓を収め、鎧の下の軍服のポケットから小冊子を取り出した。サインして切り取った一枚を矢に結びと、その矢を手で投げて超越した。

ヴィルゴットが長い腕を伸ばして矢を掴む。

「望む金額を書き込め」

白紙の小切手！

「取引成立でございます」

小切手の代わりに桐花のサイン入り献体誓約書が結ばれた矢が地上へ投げ返された。

こら待てラウー！ ギャラリーが増えた途端にそれか！ おまえの体は壊れても痛手ではないとか散々宣告しておきながら、婚約者

パフォーマンスのためなら守銭奴に白紙の小切手を切るのかー！
腹立つー。腹立つー！ ラウーがその気ならわたしだつてー！
「もう一つ取引を。ヴィルゴットさん、わたしがその白紙の小切手
を買い取ります」

しーんとした沈黙が広がっていた。

驚愕や感心の類ではない。明らかに、何言ってるんだこの娘とい
う痛い沈黙だ。

アダマス帝国軍中佐が切った白紙の小切手を、ただの小娘が買い
取れるわけがないだろう。しかもその小娘は中佐の婚約者。小娘に
払えない場合、払うのは婚約者である中佐。

結局は中佐自身が自らの切った白紙の小切手を買い取る羽目にな
るといふ狂った構図。

呆れと、頭の中身を心配する憐れみの混合視線を振り払うべく、
桐花は声を張った。

「この世界に予防接種の技術はないでしょ？」

翻訳でたまたま知った予防接種の歴史、そして結核を恐れる少年
兵の様子でそう判断していた。

「伝染病予防のために、人工的に免疫を作っておく方法です。わた
しの世界から持ち込んだ予防接種の情報全てをヴィルゴットさんに
提供しますから、技術を確立してライセンス契約で軍に売るんです」
そうすればアダマス帝国軍中佐の弁済可能額などはるかにしのぐ
巨額の金が、ヴィルゴットの懐へ転がり込むだろう。

「わたしは結核、風疹、はしか、破傷風、水疱瘡、ポリオ、その他
の予防接種を受けています」

現代日本の医学に感謝！

「だから結核のヴィルゴットさんとこんなこともできるし！」

鞍の上で身体をひねり、白ローブにぎゅうっと抱きついてみせた。
たぶんヴィルゴットさんの咳は人よけの嘘だけど、ここは演技する

ところ！

「症状からしてここで流行ってるのはポリオみただけど、その予防接種も受けてるから、」

ぴょん。

もつ色々と賭け。

ラウー目指して鷲の鞍から飛び降りた。

下は芝生だから無視されて墜落しても骨折程度で済むだろう。だけど今はギャラリーがいる。ギャラリーの面前でラウーが婚約者を受け止めないはずがない！

毒蛇も裸足で逃げ出す劇薬視線を浴びたけど、ラウーは見事に受け止めてくれた。両腕で抱き止めながらダンスみたいにターンして優雅に衝撃を緩和させている。

よかった、下敷きにしちゃったらスマラグダス中佐の婚約者の非道伝説がまた増えてしまうところだった。

「こんなこともできるし！」

と言いながらラウーの首に腕を回し、ぎゅうっつと抱きついてみせた。ついでに耳元に潜めた声で報告してやる。

「身体測定してみてください、弱ってないからそれからまた声を張り上げる。」

「こんなこともできます！………検温してみてください、治ったから」

「検お………？」

いぶかしげに訊き返そうとした唇を、問答無用で塞いでやった。習った通りのスマラグダス流キスをたっぷり披露してみせる。

ラウーが伝染病にかかっていたら感染確定の長いキス。

離れようとしたラウーの顔を両手で挟んで確保する。高く抱き上げてくれていた腕に力がこもるのがわかった。逆に唇は緩んだから、キスの長さにも深さも加えちゃう。

「わたし、アイヤイさんやヴィルゴットさんの気持ちがちよっとわかる気がするの」

予防接種の効果見せますキャンペーンのキスを続けながら、唇を触れさせたまま言った。

「ラウーのいない一週間、わたしはただ食事をして、眠って、仕事をして……暮らしていただけ。ラウーがわたしを生かしてくれなきゃ、この世界に生きてる理由がない」

桐花の世界からもたらされた膨大な情報。

使い手によつて毒にも薬にもなる知識は、渡すのが知の時代の先導者・ラウーでなければ、翻訳せず隠したかもしれない。ネイティブがずっと刺繍として隠してきたように。

そうなればこの世界での桐花は、何の技術も持たないただの小娘だ。すぐにのたれ死ねる。

「でもね、ラウーが戦ってるのに、わたしが安全に生かされて保護されてるだけなのも情けないの。だから自分で考えて行動もする。

ここに来たみたい。ラウーのパートナーになりたい」

言われたことを単純にこなす助手じゃなくて。

もっと本質的にラウーの役に立ちたい。そばで生きて、ラウーの造る知の世界を見せて欲しい。

学校の勉強なんて、いっとうやっつて何の役に立つか想像もせず、成績を上げるために習ってきた。体育以外なら成績がよければ両親が喜んでくれたから。

そうやって単純に蓄積した知識がラウーに生かされ、この世界を変える力になっている。

きっと、あつちの世界だって同じなんだろう。卒業して、もっと勉強しながら仕事して、世界をよりよくする礎になる。その仕組みが見えていなかっただけ。

両親が喜んでいたのはいい成績じゃなくて、わたしが未来の礎になる力を蓄えてたこと。だったらラウーの役に立つことは、両親もきっと喜んでくれる。何の説明もなくトカと入れ替わって戸惑ってるであろう両親も。

周囲がどよどよと騒いでいるのが聞こえてきた。

「中佐がいなければ生きていけないと……！」

「なんと熱い愛の告白！」

「こんな戦地の、しかも隔離病棟に駆けつけてまでプロポーズをっちがう！ ちがう！ 助手の話なんだー！」

わああ否定したいのに、ラウーが唇を離してくれない！ 誤解を婚約者パフォーマンスに利用する気だなっ。

「我が主の婚約者様。そのご提案、たいそう魅力的でございます。取引いたしましょう」

離せ離さないで無言の攻防を繰り返していると、すぐ後ろにウイルスゴットの穏やかな美声が聞こえた。どさくさにまぎれて着陸したらしい。

やっと解放してもらえて振り向くと、補給部隊も着陸して救援の医療物資を運び始めていた。

「患者を診断しなければ断定いたしかねますが、この伝染病の症状はポリオと一致いたします。水はけの悪い地質と貧困による衛生環境の悪さゆえに、ボル・ヤバルの風土病とも言える病でございます」

周囲を気にしてか、ウイルスゴットは猫背でゴホゴホ咳をしながらも、潜めた声で流暢に話す。

「予防接種については理解した。だが桐花。おまえが伝染病にかからないという保証は。証拠は」

身体の免疫の中に抗体がありますと言っても、顕微鏡さえなさそうなこの世界でどう証明しろと？

冷や汗も凍る冷徹視線を見ないフリをしながらウーンと首をかしている。

「我が主の婚約者様は、水疱瘡の予防接種を受けたとおっしゃいました。あれは水ぶくれにより皮膚に跡を残すことができます」

限界まで潜めた美声が進言してきた。

「来い」

補給物資の日よけ用か、大型の三角屋根のテントが芝生に張られていた。その一つを引き倒し、ギャラリーとのあいだに布の壁を作

つてからラウー・スマラグダスは高らかにのたまった。

「裸になれ」

「ぽかーん。」

「早く脱げ、おまえの肌を隅から隅まで調べ尽くしてやる」

あつ、そうか。水疱瘡にかかった跡があつたら、予防接種を受けていないか、受けても効果がないという証拠になるから？

だからって！

「やだ！ 明るいし、芝生がチクチクするし」

「あいにく診察台はふさがっている」

う、場所より大事な問題があつた。

「女医さんとかいないのっ？」

「女医と二人がかりでされたいのか」

そうじゃなくて、調べられるなら女医さん一人にお願いしたいと

！

ばたばたと抵抗していると、布の向こうから兵士たちの声が聞こえてきた。

「予防接種とはすばらしい技術だな！」

「ああ、恐れることなく恋人と愛し合えるんだな！」

「どんなにやっても大丈夫だと、中佐のフィアンセさまが証明してくださいさるんだな！ なんといやらし……いや情熱的献身なんだ！」

「しかし診察台と女医希望の件は予防接種と無関係なご趣味のよう
に思えるが」

兵士たちの声は弾んでいる。

うん。ハグもキスも看病も、予防接種を受ければしてあげられるよ。

看病してもらえらって嬉しいよね。額に冷たい布を載せてくれる、それだけで舞い上がれるくらい。その布が乾いてしまっても手放せずにいるくらい。言いそびれたお礼を伝えたくて海を越えちゃうくらい。

どうかヴィルゴットさんが早く予防接種を開発してくれませうように。

この世界にはいるかわからないけど、心の中で八百万の神様に手を合わせた。

じゃないとラウーが破産します。

キスチヨコ形の屋根の向こうに大きな月が浮かんでいる。暗いシルエットになったボル・ヤバルの宮殿はキノコの城みたいで幻想的だ。

大きな窓を通してぼんやりと異国情緒に浸っていた桐花は、カツカツと聞き覚えのある尊大な足音にビクリとした。家庭用医学事典、和英辞典、紙とインクが広げられた大きな木机と、豪華な布張りの椅子のあいだでシャキンと背筋を伸ばす。

戸口に現れたのはやっぱり、長身の隅々まで常にシャキンとしたラウー・スマラグダス。特に目の周辺は常に殺人的にシャキンとしすぎている、と桐花は思う。

「起きてる」

「では最後の文章がヴィルゴット並みのミミス筆跡で途切れている理由は何か」

ラウーの言葉は、無駄な抵抗はやめると脳内変換されて聞こえた。でもポリオの説明、感染経路、治療法についてはできるだけ丁寧に正確に訳し終えたつもりだ。最後の一文を除けば。

その丁寧に正確に訳したつもりを紙を一瞥するとラウーはペンを手に取り、ザカザカと添削を入れ始めた。aとtheの使い方まで直されている、あっそのスペルミスはついうっかり！

原文が残らないほど添削された翻訳文に打ちのめされて、桐花は椅子に身体を沈めた。

デカイボル・ヤバル人が使っていたのだろう、椅子といっても桐花にはスペースの余りある一人掛けソファだ。普通に座ると座高の問題で、机は胸の高さになってしまう。尻の下にクッションを重ねて翻訳していたため、座面を正しく使うのは数時間ぶりだ。

ラウーは添削した医療情報を背後に控えていた兵士へ渡し、至急に写しを十部作れと命じた。兵士が下がりながらおやすみなさいま

せと言って初めて、桐花はラウーが鎧を脱いでいるのに気付いた。

野戦病院の隔離病棟である宮殿の離れ、その一番高い塔の一番見晴らしの良い部屋がラウーに割り当てられていた。そこを借りて翻訳作業していたのだ。

つまりラウーは自室に寝に戻ってきたことになる。

部屋に椅子はひとつしかない。

桐花は唯一の椅子から滑り降り、部屋の主であるラウーにそこを譲った。ラウーがどかりと座るとスペースは余らないし机もちょうどいい高さで、深く腰かけても床に足が届かないなんてことはない。腹の立つソファめー腹の立つ体格差めー。

「お疲れ様でした。それでえっと、わたしはどこで寝れば？」

腹の立つ長い指が、黙って腹の立つ長い脚の間を差した。

「は？」

「傷病者用の寝台に使える家具は全て移動した」

つつこみたいなのは寝るのが椅子なのか、というところだけじゃないのですが。

「我慢しろ」

ランプの火を消されてしまった。室内は開放された大きな窓から入る、青白い月光の影に沈む。亜熱帯の温かい夜風がするりと腿を撫でていった。

「予防接種の効果を立証したいんだらう？」

ラウーも二日前にポリオらしき微熱と背中中の痛みがあったが、麻痺は起こさず治ってしまったらしい。それでも立派な保菌者だ。

水疱瘡の跡がないことで証明しろと迫られたが、断固拒否してあった。そうなることややはり密着しても感染しないことで証拠とすしかない。

暗くて足元がおぼつかない。慎重に足を進めて椅子の前に立った。ラウーの脚の間にどう座るか思索しているあいだに、肘をつかんで引かれる。

ガシガシと何やら乱暴に方向転換をさせられる。靴は脱がされ放

られていった。上体、腰、足とあちこちデカイ手で姿勢を修正され、最終的には横抱きされる形に整えられた。ラウーの腕の中で横向きに丸められた感じた。

ラウーの息が額にかかるほど顔が近い。身体の半分はラウーの体温に包まれている。

亜熱帯で暑苦しい寝方じゃないだろうか、これは。ホラすでに顔が熱いしつ。

つい石棺のひんやりした寝心地を思い返す。

「ボル・ヤバルに石棺はないの？」

「この土地は木材が豊富で、棺は木製だ。……私と寝るなら死んだ方がマシという意味表示か？」

いえいえいえ寝心地の問題ですから！

ハイと答えれば噂の木製棺に詰めて生き埋めにされそうな殺気を感じて、必死に首を横へ振った。

「あれは？」

もももぞと姿勢を微調整していると、額に質問が降りかかった。

「窓際の花瓶だ」

「あ、桐の花です。わたしの名前はこれなの。ここの庭の隅に桐の木があつて、ちょうど咲いてたから枝ごと折ってきちゃった。アダムスでは見たことなかったから懐かしくて。わたしの家には桐の木があつたんだ」

今はもうすたれてしまった習慣だけど。

昔、日本には女の子が生まれると桐の木を植える風習があつた。

桐は生長が早いから、女の子が嫁ぐ頃になると切つてタンスを作るほどになる。それをその子の嫁入り道具に持たせる。

父は桐花の誕生と同時に桐を植えてくれたそうだ。

桐の木はぐんぐん育つて、桐花の部屋の窓に届いた。初夏になると薄紫の、百合の花がそつと身を寄せ合ったような花を咲かせた。

家紋で桐花紋と言えば天皇や大臣が用いた由緒正しいものなのだが、桐花の名前に興味を示すのは競馬ファンしかないのが悲しい

現実だったりする。

ラウー以外には正しい発音で呼ぶ人さえいないアダマスでは、そんな悲しい現実さえ懐かしい。最近はトカと呼ばれることもなく、婚約者さまとかフィアンセちゃんとか、ラウーのオマケ扱いだ。

異国の開放的なムードの中で開放的に文句を垂れるうちに、意識は睡魔に食べられてしまった。

寝苦しくて目が覚めた。

大きな窓からさんさんと陽光が、ぬるりと亜熱帯の風が入ってきている。暑い。

キスチョコ形の金ピカ屋根が反射する太陽がまぶしい。ああそうだ、ボル・ヤバルに来てるんだった。野戦病院の隔離病棟に。

カンカンとこだます音は何かと窓の下を覗いたら、月桂樹や桐の木があつた庭の一角が伐採されて補給物資置場が設営されている。もうみんな起き出してる。

少し寝坊したかもしれない。だって慣れない椅子なんかで寝たから。椅子なんかで………。

「あれ？ ラウーは」

影も形もない。とつくに働いてるのかもしれない、アイヤイはラウーが鎧を着たまま仮眠しただけで働く仕事中毒だと言つてた。

慌てて水差しから濡れた布を作って顔を拭く。寝汗をかいた体も拭きたい。

二分後。

桐花は塔の長い階段を駆け下り、兵士に聞き回って、吹き抜けの広いホールをまるまる使った病室でラウーの腕を捕まえた。

「どうしようラウー、わたし、病気にかかったかも」

本当にどうしよう。声が震えてしまう。

診察していたラウーは、脈を取っていた若い兵士の手首をペツと打ち捨てた。デカイ手を額に当ててくる。

「熱はないようだが。頭痛や嘔吐は？ だるさはあるか」

「ない。けど、発疹が出てるの」

ワンピースの胸元を開いて見せた。首筋に、胸に、柔らかいところを狙ったように発疹が散らばっている。

一瞥したラウーの眉根の深い山脈がさらに深くなった。顔を伏せ、指をこめかみに当ててしばし沈黙する。

「……それは病気ではない」

まず診察中だった若い兵士が倒れていびきをかき始めた。

ポリオにそんな症状あつたっけ？

「でもわたし、風疹とはしかの予防接種は受けてるけど、天然痘は受けてない。わたしの世界にはもう存在しない病気なの。天然痘だったらどうしよう。ち、致死率は四割とか、書いてあつて、」

「落ち着け、桐花。それは発疹ではない。私が保証する」

何事かと首を伸ばしていた周囲の患者も、衛生兵も急に倒れていびきをかき始めた。

「だってラウーは天然痘を見たことあるの？ これが天然痘じゃないって断言できる？」

「できる。何故ならそれは私の責任だからだ」

桐花とラウーを爆心地に、いびきの合唱が同心円状に広がっていく。こんな光景をどこかで見たことがあると思いつつも、悪魔の病気と恐れられた伝染病への恐怖が先行する。

「ラウーの責任？ ノミでも飼ってるって言うの？」

「……血を吸うのが目的ではないが、行為は似ているな」

歯切れの悪さは何かを隠してる！ 患者には病名を伏せとく配慮とか？

「ちゃんと教えて！ 怖いよ」

「今ここでは教えられない」

先生からお話がありますからこちらへ、のパターン？

「わーん！ 命に関わる病気なんだ、絶対そうだーっ」

「それはただの内出血だ、じきに跡形もなく消える」

「いきなり内出血するってなに？ 白血病？ わーん」

「おまえは知識と経験の偏りに問題がありすぎる」

「ばしん！」

両手で両頬を挟まれた。というか、ぶった？ ぶったと言うほど痛くなかったけど。

とにかくそのイキナリな保定にビックリして、ぽかんとラウーの顔を見上げた。茶と翡翠の瞳は不機嫌そうだが、死の病に侵された病人を前にした深刻さはない。

半ば呆れたような鼻先だけのため息は、医者 of 仮面とは感じられなかった。

「騒ぐな。すぐに教えてやる。大したことではない、いずれ当たり前にしてやる」

「当たり前前って、この変な発疹が？ やだ」

「内出血だ。変ではない。嫌とは言わせない」

なんだろう。なんだかものすごく、これ以上は質疑応答却下の強制オーラがラウーの目から放たれている気がする。

おとなしく黙ろう。とにかく、伝染病にかかったわけではないらしいし。

ノミに刺されるのが当たり前の環境なんて絶対イヤだけど。

いびきをかいている周囲の兵士たちが寝言やうわ言を呟き始めた。

「中佐……………ファイトであります……………！ ムニャ」

「ふ……………その病の名は愛……………」

「淫魔のような処女のような……………さすが白魔は落とすものが違う……………ぐびー」

「部下のため、高度医療にエンターテイメントまで体を張ってくださる中佐……………命預けます……………」

恐れられてるだけかと思ってたなら、ラウーはなかなか慕われているらしい。

「この機会に告知しておく、横になつたままで構わないから聞け」
吹き抜けの広い病室にラウーの声が朗々と響き渡った。

「今朝の辞令で昇格した。併せて私事となるが、」
「わっ？」

いきなり、腿を抱えて高く抱き上げられた。広間が一望できるほど高く。

「紹介する。トーカ・スマラグダス大佐夫人だ」

おおおお、と歓声が空気と広場を震わせた。累々と昏倒していき、びきをかいていたはずの患者および衛生兵が飛び起きる。嵐のような拍手が湧く。

何かなんだかわからない。

ラウーが大佐に昇格したのは理解した。だけど抱き上げられて紹介なんかされて、し、しかも夫人って何ソレいつどこで誰が誰のっ？

「気をつけーいッ！」

落雷の勢いで号令が空気を正した。号令をかけたのは衛生班長の腕章をした兵士で、ビシツと踵を鳴らすと患者と衛生兵たちがダン！ と一斉に直立不動の体勢をとった。

「あ、だめ、足に麻痺きてるのに立つちやだめ」

あわあわと真っ白になつてたけど、衛生班長の号令があまりに大声だったからハツと我に返った。

ポリオにかかって足が麻痺している壮年の兵士がいる。昨日、家庭医学事典の図解と睨めっこしながらマッサージしたから覚えていた。

その兵士が隣の兵士に肩を借りて立ち上がるうとしている。

「ラウーは寝たままでいいって言ってるのに」

「中佐のフィアン……失礼いたしました、トーカ・スマラグダスさま、どうかあなたに最上級の礼を」

その名字、待てーっ！

「故郷から遠く離れた戦地で謎の病に侵され、このまま死ぬのか。死ぬ前にもう一度故郷と妻子の顔が見たい、しかし伝染病ではそれ

も決してかなわぬ望み。そう打ちひしがれていたところにあなたは、病の名と看護法と、さらには予防の希望まで届けに来てくださった」
「イヤアアそんな感謝の目で見ないでー！」

「翻訳しただけだから、医者でも何でもないので、医学事典の受け売りだからーっ！」

「だけ、とおっしゃるそのことが、我々にどれほどの希望である」とか。礼を捧げるためならば、たとえこの足を失おうとも構いません」

兵士なんだから構えバカー！

「受ける、桐花」

おろおろしてたら下から声がした。腕に載せるように抱き上げてくれてるラウーが仰ぎ見ている。

見上げてくる茶と翡翠の瞳が誇らしげに、優しげに輝いている。

ええっ錯覚？ 笑ってる？ 微笑んでるっ？

恐ろしい！ どんな天変地異の予兆？ ラウーのそんな表情、見たことない。珍しい上からのアングルだから、いつもの表情がそう見えるだけ？

「ラウー・スマラグダス大佐とトーカ・スマラグダス大佐夫人に、大音量で響いた衛生班長の号令に、桐花は慌ててラウー観察を中止し背筋を伸ばした。広間は見渡す限りの総立ちだ。」

「敬礼ッ！」
ドン。

拳を胸に当てる敬礼は、何十人も兵士の合奏で魂まで震わす最上の音楽になった。たった一音なのに深く長く余韻を残す。

「感謝する」

ラウーが敬礼を返していて、桐花も急いでそれに追随した。

「時間を取らせた。各自、任務とベッドに戻れ」

がやがやと笑顔で、患者と衛生兵たちが持ち場に戻っていく。

ラウーの腕で床に下ろされながら、アレ？ と思った。

敬礼を受けたということは。しかも返礼したということは。

スマラグダス大佐夫人とかいう寝耳に水な立場を認めちゃったってこと？

「ラウー！ わたし結婚した覚えはないんだけど！」

軍医としての仕事でだったのは承知だが、とにかく病室から引きずり出して問い詰めた。

「おまえは婚姻届にサインした」

「してません！」

亜熱帯でいつそう身に染みる氷結視線。うとう寒い。シベリアから出土したマンモスの死に際の気持ちがよくわかる。

さっきの微笑はアングルの罠だったんだ、間違いない。

「ボル・ヤバル出征の朝だ。約束を契約にすると言っただけだ。不服ならば、説明を遮り、書類の内容を確認せずにサインした自分を告訴するんだな」

確かに二ヶ所にサインした気がする。助手の契約だけかと思つたら、もう一つは婚姻届だったのか！ 一度遮られたからって婚姻届だぞ、挫けず説明しろバカーッ！

「戦場では常に何が起ころうとも不思議ではない。ボル・ヤバル戦で私が殉職した場合、婚約者という立場ではおまえに補償は下りない必要な手続きだった」

うわーまたそれ言うんだ。保護。

妻の座が、何でも与えると言つたラウーの最大級の誠意だつて知つてはいるけど。

「怒った！ しばらく話しかけないでくださいっ」

「おまえの迂闊の結果で私が不便を強いられる道理はない」

言い捨てて逃げ去ろうとした背中に、淡々と事務的な口調が追いかけてきた。

ものすごく正論なのがものすごく腹が立つ。

「二、三度はよくよくと空気を噛んでから言い返した。」

「じゃあしばらく話しかけないからっ！」

子供のケンカか。

34・放電できない電気椅子

「ボル・ヤバルはトロナ鉱石という良質のソーダ灰、すなわち殺菌剤を豊富に産出する」

「はあ、と鼻をつまみながら半分ため息で桐花は答えた。

「トロナ鉱石の活用によって、ボル・ヤバルの風土病とも呼ばれるポリオを劇的に沈静化させることが可能だろう」

「はあ、と目を背けながらほぼため息で桐花は答えた。

「おまえの翻訳によるとポリオは主に感染者の糞便から伝染する。ゆえに隔離病棟の糞便はソーダ灰で殺菌処理させている」

「それでなぜ、わたしがその鼻の曲がる糞便殺菌処理場を見学させられているんでしょうか。」

「隔離地帯の隅では病棟から搬出される排泄物にソーダ灰をぶっかけて殺菌し、作業に従事した兵士は処理後に衣服を焼却するのだそうだ。」

「ラウー・スマラグダス大佐は、処理の完了した糞便がたまった大きな穴の縁に立って衛生管理の説明をしている。」

「宮殿の影に切り取られた月光はスポットライトのように明るい。」

「この世界の月は大きい。満月に近い夜ともなると日没前後くらいのもるさがある。それが眠い目に痛い。」

「勝手に、いやラウーによると勝手ではないらしいのだが、勝手に婚姻届を出されてしまって怒っていた。ラウーの部屋の隅にクツシヨン寄せ集め、そこで丸まって寝ていたら、文字通り担ぎ出されてなぜか糞便処理場を見学させられているのだ。」

「おまえは予防接種の効果を立証しなければならぬ。有効ならば予防接種は国家的事業となり、莫大な予算を準備する必要が生じる」
「ワクチンを守銭奴ヴィルゴットがライセンス生産するとしたら、当然な話だ。」

「つまりおまえをポリオ感染源に曝露するのは軍医としての使命だ。」

私から離れて就寝したいのならば、最も効果的な感染路であるこの糞便プールで」

「いやあああ！ 抱いて寝てー！」

近辺を巡回していた兵士が急に不自然な方向転換をし、早足で立ち去った。

深夜の隔離病棟に響き渡るような大声で熱望させられたとおり、ラウーの腕に巻きつかれて就寝となる。

どんなに怒っても、糞便にまみれて就寝するよりマシだ。

ソファとラウーの腕の中でもぞもぞと姿勢を調整していると、慣れぬものを発見した。軍服の襟に縫い付けられた刺繍が今までと違う。

「記章が変わった」

しまった。話しかけないと宣言したのに、つい。

「大佐の記章だ」

一足す一は？ 二。

それくらいの淡々とした、事実だけを述べ何も期待されていない答に気まづくになった。こんな子供じみたケンカするためにはるばるボル・ヤバルまで来たはずじゃないのに。

「昇進おめでとうございます」

結婚騒動で言いそびれていたお祝いに、できるだけ心を込めた。

「おまえが受け取る補償額が増えただけの話だ」

事務的な口調が心臓にキツイ。

「あの。結婚がイヤなわけじゃないんです。ラウーが提供できる最高の待遇だっけ理解してる。感謝してます。だけど不必要だと思う」
頭上に不穏な気配が渦巻きだした。鳴り出した雷雲の下で避難場所を探し回ってる気分。

「ラウーが万が一殉職するか翻訳が終わったら、もうできることないから元の世界に帰る。そしたら補償はいらないし、入れ替わりで

戻ってくる紡ぐ家のトカが知らない間に人妻でしたじゃ困るだろうし」

「私をここに留まる理由にしろと言ったはずだ」

蓄電するラウー、その膝に座っているこの構図。わー人間電気椅子。

「家同士の取り決めでとか、玉の輿とか借金のカタとか……結婚する理由は色々あると思うけど。わたしにとって結婚は、好き合ってるものなの。憧れてた。生活保障の誠意としてじゃなくていつのまにかサインさせられてたとかじゃなくて」

「私がその誠意とやらを盾にしているとは感じないのか」
盾？

もしかして、ラウーって……

こつちの世界じゃ結婚適齢期を過ぎてるんだろうか。何でもいいから奥さんが欲しかったんだらうか。

そんな自業自得に巻き込まないで欲しい。遠目には好青年でも顔が北極圏だし、家庭をかえりみそうにない仕事中毒だし、乙女を物理的にも精神的にも踏みにするサドだし、そんな結婚できなくて当然じゃないか！

睨みつけると睨み返された。

えーいくそう、なんで白人ってこんな奥目なんだろ、眼窩の影が怖いじゃないかー。しかも軍人として軍医として働き詰めなのだろう、さすがに頬がやつれて見える。怖いじゃないかー。

「死ぬ気はなくても、いつどこでどうやって死ぬかなど知れたものではない。私の遺言として聞け。私が死んでもパートナーとして遺志を継ぎ、ビスコアの保護のもと、知の時代へアダマス帝国を導け」
パートナーになりたい発言を逆手に取られている！

パートナーって言ったって、空軍大佐で知の時代を志すラウーが活かしてくれるからこそなのに。わたし一人じゃ無理だよ。

「おまえは知識を受け売りしているだけだと言った。だがどんなに下手であれ英語に翻訳できること、翻訳しようとする本の内容を理

解するだけの基礎知識。それはまぎれもなくおまえの財産であり能力だ」

「どんなに下手であれ、のさりげない一言が刺さる。」

「教育を授かりながら活用しないのは、文明を築き繋げてきた先人たちへの侮辱であり怠慢だ。おまえを帰す気はない。助手の契約期間は私が死んでも一生涯と記してある」

「ええっ？」

助手の約束は翻訳が終わるまでって話だったじゃないかー！

「もう一度言うが不服ならば、説明を遮り、書類の内容を確認せずにサインした自分を告訴するんだな」

座禅でもしようと思った。

どんな文言にも冷静でいられるように。

「配偶者ならば私の遺言を遂行する義務が生じる。結婚は撤回しない」

「知能犯、インテリヤクザ、中佐の皮かぶった悪魔っ」

「大佐だ」

座禅はやめよう。百年あぐらをかいたところで、ラウーより冷静になれる自信がない。

「どうでもいいけど皮かぶりっ」

「語弊と誤解を含む単語を叫ぶな。どんな誤解かその身にねじ込むぞ」

仮面と理論で武装する横暴を告発してるのに。

すごーく痛そうな体罰をされる直感がしたので黙った。

「タイラー師から私が受け継いだように、私の遺志を継げ。安心して、私としても死は最優先で回避すべき事項だ。ユピテライズだ、簡単に死にはしない。出世し、より強大な権力をもって知の時代を築く」

「ラウーはユピテライズじゃありません」

左右で色の違う瞳。前髪に一筋だけ混じった色素の抜けた髪。そうした組み合わせが夢でなければあり得ないという思い込みが誤解だったと、医学事典を引いてみて初めて知った。

虹彩異色症は遺伝子疾患として生まれ持つ場合もあるし、虹彩の炎症や損傷で発現する場合もある。中でもラウーの症状はワールディングブルグ症候群という常染色体性優性遺伝に当てはまった。

「聞き取れない。何だった？」

あ、理科で習ったメンデルの遺伝子のエンドウマメ実験。あれはこの世界ではまだ実現されてないんだ。ラウーには初耳な単語を並べてしまった。

「……単に発音をとがめられたのかもしれないが。」

「兄弟とか両親とか祖父母とかに、ラウーと同じ特徴の人がいたんじゃない？」

「いた」

短い、感情を汲み取れないほど短い答は何を秘めているのか。変わった外見によって差別を受けたのかもしれない。避けられるにしろ崇められるにしろ、本人が不快を感じるなら差別なのかもしれない。それを問うことさえも。

きれいだなんてのんきに眺めていた自分を恥じてモジモジする。

「ってことは、他の人より死にくいってこともないと思うの。だから眠って、食べて、休んでね。偉そうにわたしの身体測定なんかしたくせに、頬がやつれたよ。タイラーおじーちゃんに会ったら言いつけてやるから」

恥じてはいるんだけど、やっぱりきれいだと思ってしまう。茶と翡翠の瞳は窓からの月光を含んで磨き上げられた貴石みたいだ。

男のくせして女の自分より圧倒的に美麗な部分があるなんてずるいぞ。

「ラウーにとって昇進は、タイラーおじーちゃん理想をより確実に実現させる手段なんだよね。だから昇進、おめでとう。これもおじーちゃんに会ったら言いつけておくね」

「盾だ、桐花」

ひっ。

なにその呻いてるみたいない声！ 殺気はないけど妙にドスが！
思わずラウーの腕の中で身を縮める。追いかけるようにラウーの
顔が寄ってきて、さらに縮こまる。

「私が入みだとかわかってるなら、私にも人並みな感情が備わっ
ていると覚えておけ」

ああ、そうか。

「覚えてるもん……」

思い出した。まだタイラーおじーちゃんがこの世界にいた頃、ラ
ウーの過労を案じるおじーちゃんに心配無用だと伝えろと言われた
ときの表情。

「面と向かって心配されると、シャイ・ガイ・モードに入ること
でしょ？」

ギヤー、デカイ手で口を塞ぐなー！ 今度は殺気がっ。息ができ
ない、ソファとラウーの腕の中じゃ逃げ場もない、名実ともに口封
じ。電気椅子が窒息死を執行するのは反則だー！

そうやって押さえつけられてたら、てん、と額に温かく柔らかい
感触が載った。

「夜の検温だ。発熱はない」

熱がなくてなにより。でも窒息死したら体温そのものがなくなる
よ？ 力というか怨念のこもったラウーの手指をぐいぐいと引っぺ
がした。

「ポリオの潜伏期間は七日から十四日程度だそうだな。二週間はこ
のまま我慢しろ。暑いだろうが」

このまま。予防接種の効果を立証するため、ソファで密着して過
ごす夜のまま。

ラウーは絞るように呟いた。

「………苦行だ」

暑がりなのはヴィルゴットだけかと思ってた。

35・花咲く夜

予防接種の効果を立証するための軍医による強制密着二週間は、ポリオを発症することなく無事に終了した。

謎の発疹が出たが、あれもボル・ヤバル滞在初日の翌朝だけだった。三日目にヴィルゴットに焚いてもらった虫よけの燻煙が効いたんだと思う。

「ユピテライズした巨大猛毒スズメバチを一掃した実績ある配合でございます」

ラウーの部屋にありったけの軍服と装備を吊るし、窓と戸口を目張りして、害虫退治に有効だという薬草を焚きしめてもらった。作業代は小切手買取価格に上乘せされた。白紙の小切手に上乘せしたって白紙であることに変わりはないんだけど。

燻煙が終わる頃に部屋へ向かうと、階段の風通しのいい場所で白ローブがグツタリと涼んでいた。目張りは外され、役目を終えた爽やかで苦いような煙が風に運ばれている。

「終了でございます」

ヴィルゴットは息も絶え絶えだ。バナナの葉で作ったうちわで扇いでやった。

「大丈夫？ 暑いもんね」

「否。熱帯の風も凍てつかせる氷の視線に恍惚としております。人身大のノミが一匹、睨んで行ったのでございます」

「ええっノミまでユピテライズしてんの？ キモッ！ どこどこに逃げたのっ」

スズメバチを退治した煙も効かないノミとは一体どんな体力バカなのか！

こわごわ室内を覗いたが、不機嫌そうなラウーが窓の目張りを蹴破っているだけだった。怪物ノミの行方は知れないが、幸いにして誰からも被害は聞かない。どこかで息を潜めているのだろう。

アダマス帝国軍ボル・ヤバル駐屯地におけるポリオは終息を迎えつつあった。軽度の麻痺が残った者、ポリオより怪我がひどくて亡くなった者もいたが、全体として予後は悪くない。

看護法と衛生管理の冊子がまとめられ、軍と民間両方の病院へ配布されるにあたって、軍医としてのラウーの駐屯も終了した。

ラウーと同時にダルジ大佐も昇格して少将になったそうだ。ボル・ヤバル統治にはそのダルジ少将があたるらしい。補佐役になったという生真面目そうな大尉がすがりつくような目で追ってくるのをバツサリ振り切り、ラウーは帰途につくべく軍鷲にまたがった。

不本意ながら夫人である桐花はスマラグダス大佐の鞍に同乗すべきだ。が、ヴィルゴットの同乗者をめぐって帰還予定兵が前線に赴くかの悲壮な顔つきで抽選を始めるのを見て、今回も立候補せざるを得なかった。

軍鷲の編隊はV字を描き、アダマスへと続く青い海を悠然と見下ろしながら滑空する。

海の色が濃さを増し、風の含む太陽熱が和らぐと、それまで塩盛りナメクジのようにげっそりしていた後部座席のヴィルゴットがやや生気を取り戻した。

「大蛇を退治して、岩山の氷穴にラボを移したらどうかな。暗くて涼しくていいんじゃない？」

「魅力的な案でございます。ですがその立地ではうっかり犬を放し、無作為に実験体を得る計画が頓挫いたします」

街の人で合意なく強制的に人体実験してるってことじゃないか！

全然うっかりなんじゃないぞ！

あれっそんな被害には身に覚えがあるような………。

「それより」

「それより、で流していい話題じゃないと思うんだけどっ」

振り返ったら、まつ毛も眉毛も倫理もないヴィルゴットがにっこりと神父笑顔で出迎えた。

「我が内には、我が主の命令に背く企てがございます」

面倒ですから単刀直入に申し上げます、という不遜な一言で始まったヴィルゴットの話はこうだ。

自衛しろ。

アイヤイを奴隷に使役していた武器商人、カジャベから火器を購入した人物は、アダマス帝国軍内に潜んでいる可能性があった。

「カジャベと直接取引した人物から芋づる式に拷問……失敬、聴取しておりましたが、動きを悟られたようでございます。軍の厩舎への強行着陸などという騒動が起きなければ、内密に事を運べたでしょうに」

これっぽっちも悪気を感じさせない爽やか笑顔で嫌味を言われた。ヴィルゴットが拷問……聴取して吐き出させた次なる容疑者は、逮捕する前に殺害されていた。この黒幕の口封じにより、芋づるは断絶した。

「そこで我が主は、自らのお命をおとりになさったのでございます」
ボル・ヤバル前政権を独裁していた女王を捕縛する際、ラウーは女王を全裸にし、剃髪させ、体の隅まで調べ尽くした。女王としては死よりもはるかに屈辱。

「あれは我が主にとって、敵に対し常に行う武装解除に過ぎません。体のどこにどんな暗器を仕込んでいるか。我が主は傭兵の武器の多様さから些細なこともあなどらず、武装解除を徹底的に行います。相手が老人であろうと婦女であろうと無関係でございます」

桐花も初対面のボディチェックで裸になれと言われた。実にやりかねないと頷く。

けれど、そうと知らない者には、ラウー・スマラグダスが女王を辱めたと同義。

女王は取り巻きから熱狂的に崇拜されていたそうだ。洗脳して非道な、命知らずな任務をさせて成立した独裁国家だった。アダマス帝国軍に潜む内通者も女王の信者となったに違いない。

ラウーは辱めと曲解できる武装解除の様子を帝国軍に流布させた。その行為に激昂し、報復を仕掛けてくるであろう内通者を迎撃するつもりでいるらしい。

ところがラウーの身内・桐花に残した護衛のアイヤイは少々頼りない精神状態。

そこへ伝書鳩が届き、ヴィルゴットは思いついた。この機に乗じてむしろ桐花を隔離病棟に幽閉してしまえばいいではないか。伝染病を恐れる暗殺者なら近付けないし、何と云ってもラウーがいる。

事後承諾だが、ヴィルゴットはこの案についてラウーの了承を得た。しかし病をも恐れぬ狂信的暗殺者が隔離病棟へ入り込む、あるいはすでに潜入されている可能性があった。

「そこで大佐夫人の披露が行われたのでございます。我が主の強気な賭けでございました。目的はまず、注目されることで暗殺の機会を減らすこと。そしてあの披露の瞬間に冷静でいた者を見分けることでございます」

上官の昇進、そして冷酷無比の代名詞ラウー・スマラグダスの結婚。これを歓喜も驚愕もないさめた眼で迎えるのは、心の内でラウーを標的と定めている者。

告知の一瞬でラウーは一人の兵士を見出し、監視を重ねて裏切り者と断定したという。

「合併症を併発して死亡したことになっているその患者は、我が毒と共に糞便処理場に沈んでおります」

そうやって始末した一人も氷山の一角に過ぎないでしょう、とヴィルゴットは淡々と嫌なことを言う。

「ヴィルゴットさんが予防接種や翻訳のマスさにかこつけてわたしの周りにウロウロしたのは、警護してくれてたからだったの？」

「暗殺されて痛んだ献体は使いづらいですし、予防接種事業の利益を失うのも痛手でございます」

ここまであけすけに下心を明かされるといつそ楽だ。自己の利益や保身が理由かと嘆くのもそろそろバカらしくなってきた。

「隔離病棟から出た今が暗殺者には絶好の機会でございます。警護がいても自衛していただくのが最善」

「気をつける」

「我が主は、夫人を警護せよと命じられました。ですが暗殺者の狙いは二人。我が主とその夫人。人の掌がすぐえるモノは有限でございます」

理解を促すような一拍の沈黙。

「あ、そうか」

分かってしまった。ラウーを尊敬しラウーに従う傭兵が唯一、ラウーの命令に背く条件が。

「ヴィルゴットさんは、いざって時はわたしよりラウーを助けるのを優先するってことだよな」

「ご明察にございます」

返事は明瞭で迷いがなかった。

なんか新鮮だ。順位や主役を決めるのを良しとしない風潮さえある桐花の世界ではそうそう味わえそうにない、明確な順位付け。

ヴィルゴットは科学者でもあるけど、傭兵。一瞬の判断が生死を分ける。だからこそ優先順位を定めておく必要があるんだろう。

しょうがない。心細い、でもヴィルゴットの言い分はあまりに理解できてしまう。ヴィルゴットが毒で侵してしまった故国を救う希望は、ラウーにしか見出せないのだから。

わたしが元の世界から持ってきた毒に関する知識はもう翻訳してヴィルゴットに渡してある。その中に彼の求める解毒剤の答がないのなら、わたしには利用価値がないのだから。

故国を清める目的の前には、予防接種のライセンス生産による実利など小さなものだろう。

「うん、当然と思うよ」

のしかかる心配と不安と、少々のさびしさ。それ以上に黒く暗くたちこめるのは虚しさ。

昇進と結婚を報告したときの総員での敬礼は、桐花の胸を打った。

なのにあの瞬間、ラウーは暗殺者を見分けようと軍人のリーダーを
研ぎ澄ませていた。

落胆のため息をつく。

いくらため息を吐き出しても、胸の暗雲は排出されてくれなかつた。

アダマス帝国軍基地へ帰還するなり、衛生本部のお偉いさんに感謝状を授与されてしまったり、佐官や将官の奥様方による怒涛の挨拶に目を回したりして、解放してもらえた頃には日が傾いていた。

ラウーと並んで屋敷へと向かう。

基地内を連れ回されたせいで、すれ違う兵士という兵士に戦勝、昇進、結婚を祝福されてしまった。ラウーは涼しい顔で受けていたが。

あんなに大人数に祝われてしまって、今さら「 unnecessaryなので結婚やめちゃいましたー」なんて状況に持つていけるわけがない！ そういう心理にさせるラウーの戦略？

でももしかして連れ回しながらまた暗殺者選別してるのかもしれないと思うと、屋敷へ戻りたいなんて言えなかつたし。

ラウー・スマラグダス大佐にとって結婚は、助手の保護と敵対者選別装置。文明を守り帝国のために命を張るのは立派だと思つし、協力もしたいけど。

結婚をそれに使って欲しくはなかつた。

外そうとすると肉がはがれる、肉付きの面なんて怖い言い伝えがあつたつけ。これはまるで心付きの面。妻の仮面を着けるのも持て余す、外そうとすれば心が痛む。

交互に機械的に進む爪先をぼんやり眺めながら歩いた。

空中都市であるアダマスの地面は石板が敷き詰めてある。階下の海面を住居とするネイティヴに配慮して、陽光を通すよう水晶で作られている部分もある。

その水晶の地面が夕焼けを含んで柔らかな暖色に光り、滑走路のように家へ続いていた。

石造りの空中都市で見られないもの、草木。なにしろ土がない。緑溢れるボル・ヤバルから戻ってみるとアダマスの季節感のなさ、人造感とも言うべき硬質な無機質さが目立ったりするのだが。

そのあるはずのないものを前にして、足を止めた。

桐花はラウーの屋敷をぐるりと取り囲む木々に呆然とする。二週間前にこんな生垣はなかった。

木々は土を入れた石製の巨大プランターに植えられている。天の恩寵を抱き止めようとする腕みたいな大らかに開いた枝、濃い緑の丸みを帯びた葉、百合がそっと身を寄せ合ったような薄紫の花。

それらは全て桐の木だった。

「どうして……」

道を間違えたかときよるきよるする。周囲は見慣れた家々だ。

「私が運ばせたのは、隔離病棟の庭にあったこの一本のみだったが」
玄関のアルコーブのすぐ脇にある、樹形のひときわ整った一本を仰ぎながらラウーが言う。

「でも十……二十本以上はあるよ？」

「隔離病棟を退院してから聞きつけた兵士が次々と、桐の木を探して掘り出しては植えに来たそうだ。基地では桐の木を担いだ兵士が毎日のように帰還するのがミステリーとして語られていたようだ」

よく見れば、木々の枝にはプレートが下がっていたりリボンが結んであったりした。

『トーカ・スマラグダさまへ感謝を込めて』。『スマラグダス大佐夫妻のご結婚を祝して』。続く寄贈者の名前には覚えがあった。隔離病棟の入院患者たち。

一本一本に添えられたメッセージを確かめながら屋敷の周囲を歩いていく。ボル・ヤバルでの二週間のうちに顔なじみになった兵士たちの顔が脳裏へ鮮やかに蘇ってくる。

ラウーは黙って背後をついてくる。

昇進と結婚を告知したとき、ラウーには思惑があったかもしれない。それでも暗殺者一名を除いた兵士たちの敬礼は本物だった。こんなかさばる荷物を鷲に載せ、ボル・ヤバルから遠路はるばる謝意と祝福を届けてくれたのだ。

気落ちしたりしちやダメだった、と桐花は自分を叱る。

どうしよう、胸が熱い。目が熱い。プレートを確かめる指が震える。

本の受け売りをしたただけでこんな感動をもらえるなんて、悪い癖になってしまえそう。

「私は、おまえの父親の代わりにダンスを作つてやることは出来ない」

背後から仄いだ静かな声がする。

「だがおまえは『わたしの家には桐の木があつた』と言つた。おまえは私の妻だ。おまえの家はここだ」

だから、桐の木を植えてくれたの？

ここが居場所だと実感させるために？

脅迫でも命令でも財力でもないこんなやり方、ラウー・スマラグダスらしくない。唇や指先が優しくして温かいのは、心とは真逆だつて驚いてたはずだった。

『おまえは私を、ここに留まる理由にしる』

あの言葉が、助手の約束を指しているんじゃないと思えてくる。

ラウーの微笑も幻じゃないのかもしれないって。

「ありがとう。ほんとに」

桐の木肌を撫でる。

「わたしね。服も家も、息をして吸う空気まで、こつちの世界は全部借り物だと思つてた」

旅行先で泊まるホテルみたいに。

手に出来るなんて考えてみたこともなかった。

「でも、いてもいいんだって気がしてきた」

「今日がどんな夜か知っているか」

不意に不思議な問いを投げられて振り返る。

夕焼けはどんどん明度を落として紺色の闇に空を明け渡そうとしている。ラウーの表情は桐の葉と建物の影になって見えない。

「禁の解けた夜だ」

禁。軍医の拘禁？

そっか、予防接種の効果判定は終了した。今日からベッドで自由に寝られるんだ！

「うん、知ってる。嬉しい」

ボル・ヤバルでの抜き打ち婚姻発覚から二週間。その間に細くなつた月を背負うラウーから、有無を言わせぬ濃密な気配が漂ってきた。

35・花咲く夜（後書き）

第三部ボル・ヤバル編、終了。

お付き合いくださった方々、ありがとうございます！

次の第四部で完結してもいいかなーと思ってるんですが、あれースマラグダス八鬼神がたったの二人しか………！

36・白魔の赤い魔方陣

注意一秒、怪我一生。

幼い頃から慣れ親しんだ交通標語を、バスルームの石の天井を見上げながら、桐花はぼんやりと思い返していた。

隔離病棟の元入院患者たちからのプレゼントである桐の生垣。全ての寄贈者名を確かめたかった。もう日が暮れてきていて、ランタンでメッセージと名前の書かれたプレートやリボンを照らした。

そんな暗さだから気付かなかった。

「下がれ！」

緊迫したラウーの警告も間に合わなかった。桐の木の根元から不意に褐色の縄が飛んできて、肩口に絡みついた。

ランタンが地面に落下して光と影が激しく揺れ動いた。太陽が暴れるような混沌とした視界の中で、ラウーが縄を叩き落とし、帯刀していたナイフで地面へ串刺しに貫くのが見えた。

「噛まれたか？」

ナイフに撃墜された縄はうねうねともがいていた。黄褐色の胴体に黒い縞模様、三角形の頭、縦に切れた不穏な瞳孔。普通、縄にはそんな装飾も動力もない。

蛇だった。

噛まれたかどうか、目で確認する必要なんてなかった。右肩の激痛が雄弁に叫んでいた。痛みが血管を焼きながら広がりはじめた。

返事するまでもなく、視線が合っただけでラウーは答を知ったようだった。

ラウーの行動は早かった。

桐花とランタンと蛇の死骸を抱えてバスルームへ駆け込む。肩より心臓に近い場所を押さえる。咬み傷を洗い、口で強く吸っては毒を吐き捨てた。

咬まれた場所はすでに腫れ始めていた、そこに生まれた小さな点

に桐花は見覚えがあった。

「発疹……」

ボル・ヤバルでの最初の朝に首や胸元に現れた発疹と同じだ。

バスルームの冷たい床に転がりながらラウーを仰いだ。懐かしい構図だと、場違いなことを思った。初めて会った時もこんな風に、よく回らない頭でラウーの瞳を見ていたっけ。

「発疹ではない。内出血だ」

茶と翡翠の瞳は真剣だ。傷から胴体へと毒が流れるのを阻止しようと胸元を押さえてくる手の圧力が増した。毒とラウーが交戦する戦地へと視線を転じた。ラウーの唇の下に生まれた内出血はすぐに赤紫色の腫れに飲み込まれていった。

なんてタイムリーなんだろう、と桐花は思った。

ヴィルゴットのために毒や伝染病の翻訳をしたばかりじゃないか。日常会話でさえ辞書片手に四苦八苦なのに、医療情報を訳すのはひどく苦勞した。間違えてはいけないから、内容を覚えてしまうほど何度も何度も推敲した。

だから自分に何が起きたか分かった。これから何が起こるかも知っていた。どう処置すべきかも覚えていた。さすが軍医、ラウーの初期治療は的確だった。

でも吸い出しきれなかった毒が哄笑しながら焼け付く痛みをばらまいていた。血管が痛い、という感覚を初めて味わった。皮膚のものと深い場所での、細胞が縮みひきつるような痛みだ。

ヴィルゴットが開発中の無害な毒とは狂暴さがまるで違う。心までねじれさせる。

「ハブって、こんなところにもいるんだね」

百科事典でも医療事典でも写真を見ていたから自信があった。クサリヘビ科と呼ばれる由来でもある独特の鎖状の模様はマムシやハブのものだ。

少しでも痛みから気を紛らわせたくて、何とかしゃべった。

「草木のない都市部は生息に適さない。加えてあれはボル・ヤバルの固有種だ」

ラウーは気休めを言うつもりはないようで、あっさりと認めた。

毒蛇はバスルームの端で緩慢にのた打ち回っていた。ナイフで息の根を止められたのに、筋肉はまだ活動している。精力剤になるわけだなあと桐花は妙に感心した。

「桐の木についてきちゃったのかな」

「樹上性ではない」

「やっちゃった」。

アダマスにいないはずの、木に巻きつく性質のない毒蛇が、桐花が必ず近付くであろう場所に潜んでいた理由なんてひとつしかない。

「ごめんなさい……」

自衛しろって言われてたのに。武器を持った暗殺者がこの姿を現して殺しに来るだなんて、どうして思い込んでしまったんだろう。こんなクラシックな方法は忘れてた。

「私の責任だ」

違う、と言いかけたところで息苦しさに邪魔された。ラウーが毒の侵入を阻むために胸元を押さえつけてくれるけど、それとは異なる肺の圧迫感。

ハブの毒は激痛、腫れ、皮下や内臓の内出血を起こす。蠍やフグのような神経毒と違って出血毒と呼ばれるこのタイプの毒は死亡率が高いわけではない。

「が、死に至るケースはある」。

桐花は翻訳した出血毒の項目を思い返した。

咬み傷を中心に大きく腫れあがるため、手当てが遅れ組織が壊死した場合は手や足の切断など、重度の後遺症が残る。まさに注意一秒怪我一生だ。

さらに咬まれたのが首や胸だと、壊死以前に腫れのために心臓や呼吸器官が圧迫されて窒息してしまう。

クレオパトラは毒蛇に乳房を咬ませて自殺したと言われている。その蛇の毒が致死率の低い出血毒タイプだったとしても、心肺に近い乳房を咬ませれば死ぬる可能性を高めることができたんだ。なんて賢いんだクレオパトラ。

自分が咬まれたのは肩だけど、これってセーフ？ でも息苦しいのは肺が腫れてきてるって証拠だったりする？ どうなのなのなの？

「おまえがヴィルゴットに渡した、毒と伝染病に関する翻訳は私も目を通した」

ラウーが空いている手で顎をつかんできた。ぐいぐいと調整され、無残に腫れあがった患部から視線を引きはがされてしまう。

代わりに視界を支配した異色の瞳は恐ろしく凧いでいて、静かだ。鷲に二人乗りして蛇穴特攻させられた時もこんな眼差しをしてたっけ。つまり、重大な局面。

そんなの理解しちゃうほど対ラウー経験も蓄積されてたらしい。

「ラウー」

激痛の範囲は広がり、肺の圧迫感は強まり、刻々と毒に侵略されているのが分かる。症状を伝えなくても異常な腫れ具合の進行を見れば、毒の優勢は誰にだって分かるだろう。

なのに軍医は決戦に臨む目をしたまま、それ以上の手を打とうとしない。

だから訊かずとも答えは知れた。

「まだ、ここに血清の技術はないんだね」

「そうだ。だから私が引導を渡してやる」
は？

ノーの答えは予想してたけど、後に続いた物騒な台詞は何ですか？ 聞き間違いかなーなんて楽観的希望は、ラウーがどこからか取り出した小刀で砂粒並みに打ち砕かれた。胸元を押さえて毒の防波堤となっていた手は、ゴツイ軍靴の底に差し替えられる。

そうやって空いた両手でワンピースの胸元を引き裂かれた。

ギヤーと叫びたくても肺が苦しくて、せいぜいカハツと不発な息が漏れるだけ。

蛇の毒で窒息しそうな乙女を文字通り踏みにじった拳句、とどめを刺すつもりですか？

うわラウーっては何を始めたんだろう、小刀使って自分で自分の指先切ってる、その指で晒された胸をなぞってくる、刺す場所に目印でもつけてるの？ 魔方陣？ あるいは死化粧とか？

待て待て、まだウネウネしてる蛇を腹に安置してきたりして何の儀式？ 白魔のくせに黒魔術的な、とにかくへんたい！

アダマスの葬式はこんな気味の悪いものだったのかー！ アイヤイがアダマス軍式の葬式を嫌がるのも当たり前だ！

飛び起きて逃げたくても踏みつけられてて動けない。

「苦痛を長引かせたいなら暴れている」

軍人による一瞬の刺殺で比較的安楽に死ぬるとしても、服を破られ蛇の死骸を載せられた変態的死に際よりも、尊厳ある窒息死を望みます！

「桐花」

尊厳死を却下する氷の視線が見下ろしてくる。瀕死の乙女を足蹴にし仁王立ちする姿が似合いすぎる！

「何でも与えると約束した。自由をやる」
抵抗を忘れた。

「助手の契約と婚姻を破棄する。おまえは私を愛していない。ゆえにおまえを束縛するものは何もない」

咬み傷の激痛は忘れられない、でもどうでもよくなった。
どうして？

一瞬で脳が真空になったみたいだった。思考が動けない。もつたりと分厚い宇宙服にまとわりつかれて、上も下もなくふやふやと迷走します。

どうしてそんなこと言い出すの。あれほど強引に確保したがった

助手なのに。

死ぬ前だから解放するの？ 死刑執行前に許されるタバコみたい
に？

それに、なに？

おまえは私を愛していないって、なに？

「……これ以上、時間を浪費させるな」

無情な通告は、酸素の供給を停止しますと機械的に読み上げるア
ナウンスにも聞こえた。

ラウーがゆっくりと右手の小刀を構えた。指先から伝った血が刃
の先からぼたり、ぼたりと滴っている。下からランタンの灯に煽ら
れる、異色の瞳に宿る凄絶な光が桐花の背筋を凍らせた。

「行け！」

微塵の迷いもない刃が振り下ろされる、ひゅっという風切り音に
思わず目をつぶる。

そのまま痛みか、衝撃かが来るのを待った。
でも違った。

「ギヤアアアどうしたのトカちゃん！」

聞き慣れた声が絶叫する。

「やだ怪我してるの？ 大丈夫なのトカちゃ……桐花ちゃ
ん？」

聞き慣れた母の呼び声がする。

「桐花ちゃん！ 待ってねすぐ救急車呼ぶから！」

電話のボタンの電子音。テレビがニュースを伝えている。救急車
のサイレンが近付いてくる。どかどかと急いた複数の足音が駆け寄
ってくる。

その中にあの尊大で横暴な、けれど頼もしくてどうしようもない
足音がないのが悲しかった。

37・神の手と、人の手と

キャンセル権についてラウーと話し合ったことがある。

トカと桐花が互いの世界をトレードするスイッチとなったのは、トカの絶望だった。民族の人柱にされこの世界にいられない、いたくないという強い願いがきっかけだった。

もう一度トレードが発生して元の世界へ戻ったのは、桐花が帰りたいと願ったから。

トレードが起きる瞬間に聞こえた、少年とも少女ともつかない不真面目な声が出ていた。桐花が望んだからキャンセルになったのだと。

ここからラウーは『トレードされた側がキャンセル権を持っている』と推定した。正しければトカが起こしたトレードは、相手である桐花が願えば即時に解消される。

だからラウーは仕向けたのだ。束縛を断ち切って、脅して、桐花がキャンセル権を発動するように。血清が存在する世界へ桐花が帰るように。

命が助かるように。

ラウーにとつては桐花がラウーの世界で死のうと、桐花の世界で生き延びようと、助手を失うことに変わりはない。だからあのまま桐花を留めておいても構わなかった。血清がなくても生き延びることに望みを繋いでもよかった。

『おまえの体が壊れても痛手ではない』

有言実行の男がそう宣告し続けてきたんだから、桐花が蛇毒の後遺症を背負おうが痛手ではなかったはずだった。

不意に額を触れられて、びくりとした。

「起こしちゃった？ ごめんね、寝汗を拭こうとしたんだけど」
母が覗き込んでいた。

合成樹脂の白い天井。金属レールに吊りめぐらされた生成色の力

ーテン。点滴台。ナースコール用のボタン。ほっとして、でも困ったように笑う母の顔。

元の世界だ、と桐花は少々の落胆と共に思った。

「大丈夫よ。血清が効いてるって。ラウーさんの手当てが良かったのね、感謝しなくちゃ」

ちよつと待って。

こつちの世界でラウーの名を聞くなんて！

「どうして……」

「ふふーん。トカちゃんから聞きだしたもんね。桐花ちゃんが軍のものすごおおく怖い人と無理矢理婚約させられたって」

「わわ、それはその理由があつてその……えっ？」

あれっ。トカとわたしが別人って、知ってるの？

トレードの話聞いて、信じてくれるの？ 二重人格になったとか、妄言を話したとか思わないの？

「あのね。さつきもね、汗を拭いたらね。桐花ちゃん、寝ぼけながら『ありがとう、ラウー』って言ったの」

これこそ母という存在のなせる業だと思う。頑張ったのね、分かってるわよ、大丈夫よ、って優しい目尻ひとつで包んでくれる。

常識をすつ飛ばして、ありのままを受け入れてもらえたんだ。

取り繕おうとした言い訳も不安も氷解してしまう。

「トカちゃんは泣いて怖がってたけど、ラウーさんって優しい人なのねえ。桐花ちゃんを大事にしてくれたんだな、桐花ちゃんにとって安心できる人なんだなあ。それだけで分かつちゃった」

うーん。

数々の無体な仕打ちが尽きることなく脳裏をめぐって、素直にうなずけない。

しかもすつごく恥ずかしいんですけど。

うにやうにやと言葉を濁していると、母は携帯電話を取り出した。見せられたのは一枚の写真。

無様にワンピースを引き裂かれた胸元に血が散っている。そうだ

った、と桐花はラウーの奇妙な儀式を思い出す。写真はまるで刺殺死体みたいで我ながら気持ち悪い。

「拡大して読んでみてね」
読む？

「何を……」

問いながら拡大を操作して、返事を待たずに何を読むのか知った。白魔の魔方陣でも血の儀式でもなかった。血文字だった。

蛇の種類。受傷した時刻。施した手当て。血清の要請。軍医として引き継ぐべき事項が、ラウーの血というインクを使って几帳面な字で肌書き込まれていた。蛇に至っては現物つき。

ラウーはカルテを作ったんだ。必ず誰かの目に留まる場所に、必ず目に留まる方法で。弓の使い手として命にも等しい指先を傷つけてまで。

そして最後に、ラウーが桐花を元の世界に送り返した理由が記されていた。

『私の妻を救え。私は振り向かない。ラウー・スマラグダス』

いつだったっけ。

そうだ、ネイティヴの国粹主義者に誘拐された時だった。ダルジ少将に説教たれてた。

『ぜひお心おきを。運命とは我々の将来を預けるに値しない不確実性です』

毒蛇に咬まれて死ぬかもしれない運命を、ラウー・スマラグダス空軍大佐は容認しなかった。

『運を天に放任すれば可能性、知恵を尽くして制御すれば確実性。実現率を変えられるならば、人の知恵は運命という絶望を凌駕し支配できる』

生存の可能性を確実性に変えるためにしたことなんだ。蛇に突き落とされた冥界から確実に妻を連れ戻すため、振り向かず背を向

けた。

背っていうか刃物だったけど。

ラウーは何も諦めてないんだ。蛇毒からの生還も、助手も、結婚も、最初から。

そうだ、だって刺そうとしながら『行け』って言った。『帰れ』じゃなかった。

どうしよう。あんな人、世界がいくつあったって、他にいるわけないよ。

「ごめんね、お母さん」

涙も鼻水も全開。この際いつそ心も全開しちゃうんだ。

「わたしね、うくつ、治ったら・・・ひっく」

しゃっくり止まれー、しゃべれないじゃないかー！

「そうね」

母はティッシュの箱を差し出しながら苦笑している。

「さびしいけど、娘なんていつかはお嫁に行っちゃうものよね。地球の裏側に駆け落ちしたとも思うことにしようかな」

わーん！ 実はすでに結婚させられてるってバレたー！

「介護してもらえないのねえ、何のために女の子を産んだんだか。でも孫はハーフね。いいわぁ自慢できるわぁ」

もしもし、お母さん？

「どうにかして孫だけでも会いに行けないかな」

孫だけか！ 娘はいいのか！

「そうそう、あつちには蓮花ちゃんが生きてるんだってね？」

母と娘の今生のお別れシーンかもしれないのに、あつという間に話題転換ですかー！

頭がふらふらしてきて枕に沈んだ。

「うん、大工さんしてる。可愛くて姉思いの子でね、力が強くて丈夫そう。帝国総統の一人息子に気に入られてるのに、今は仕事一筋って相手にしてない」

「まーわたしの娘たちったらモテるのね。感謝しなさいよ」

抗う気力も起きず、はあ、と曖昧に答えておいた。

「ね、桐花ちゃん。どうして世界がいつぱいあって、たまに入れ替わったりするんだと思う？」

急に真面目なことを言われた。

「幸せになるためじゃないかなーって思うの」

考える前に言葉を継がれた。

「神様がルーレットに玉を投げ込むみたいに、魂を世界に放り込むの。たくさんの世界が載ったルーレットの円盤で魂はくるくる回って、幸せを探すの。蓮花ちゃんはこの世界じゃ幸せになる機会を与えられなかったけど、別の世界で幸せになるの」

「えっとー……魂は一人につきひとつじゃなくて、いっぱいあるってこと？」

「さあ？ わかんない」

母の理論は穴だらけです。

知ってはいたけど、理論武装で波状攻撃してくる某大佐と過ごした後では、差が激しすぎて。

「だけどね、そうとでも思わなきゃ桐花ちゃんを手放せないでしょ？ トカちゃんはトカちゃん。娘がもう一人出来たのは嬉しいけど、桐花ちゃんは桐花ちゃんだもの」

「うわーん、お母さーん！」

「トカちゃんって偏食なのよねー。あれこれ神経質すぎ。トカちゃんに隠れてお肉を食べる生活も終わりにしたいわっ」

母と実の娘の絆の確認シーンは、お肉に負けたんですかー！

めそめそと枕を濡らしていたら、看護婦さんが様子を見に来てくれた。

胸の血文字は当然ながら清拭されていて何も残っていない。咬み傷から広がったひどい腫れは、大学病院から緊急輸送されたという血清のおかげで収まりつつあった。けど、皮下出血した赤紫色の肌が我ながら痛々しい。

そういえば。

ラウーが毒を吸い出してくれたとき、発疹……じゃなく
て内出血したっけ。

あれって毒のせいで皮下出血が始まってたんだ。ボル・ヤバルで
ノミ被害にあった時の内出血にすごく似てたから、深く考えそうに
なっちゃった。まぎらわしいなーもう。

夜遅く、救急外来からあっけなく退院できてしまった。

お医者さんの話によると比較的強い毒が比較的大量に入ったらしく
いものの、血清の効能は神の手かと思えるほどにめざましかった。

うっん、神の手なんかじゃない。ラウーが番人を名乗る、人類の
叡智の結晶。

知識と知恵を風化させず、発展の礎にして、大事な人を守るため
の手段にできるなら。

わたしはその場所として、ラウーの隣を選びたい。

十何年ぶりに親子で川の字に寝て、明け方まで話をした。

大丈夫。母が産み育ててくれた丈夫な体と、父がエプロンとはたきで示してくれた精神があれば、どこの世界だって生きていける。

両親が繋いでくれたものを世の中に返していこう。そう思えた。

ところで、と桐花は重大な問題に頭を切り替えた。

どうやってあっちの世界に戻ればいいのか。

トレードを発生させるには、この世界への絶望が条件らしい。それは無理だ。両親がいて友人がいる、生まれ育った世界。絶望どころか愛着がある。ラウーがいないからといって、申し訳ないけど絶望まではできなかつたりする。

つまり戻れない。

親子三人して涙と笑いの旅立ちおよび嫁入り前の、手の握り合ひなんてしちゃったというのに。帰れませんアハ八で出戻り状態になるのは一生レベルの恥ではないだろうか。

両親は両親ですかすかと寝ている。大みそかよりも長い半徹させちゃって、開店までに起きられるといいんだけど。あつ、お父さんってば白髪が増えてない？ わたしのせいだつたりして。

もちろん、父の白髪増量くらいで絶望なんてできない。

遮光カーテンの隙間から朝陽の主張が強くなる。レトロなベルアラームの短針は七を回った。

咬まれてトレードをキャンセルしてから半日が経ってしまった。

ラウーが心配……はしてないか。激怒、それもちょっと違うな、絶対零度を突き抜ける不機嫌で待ち構えているんじゃないだろうか。

早く会ってありがとつって伝えたいのに。助けてくれてありがとつ、いてくれてありがとつって。

ギヤー照れる！

枕にばふんと顔を埋めた瞬間。

「えーまた君たちなのーしつこいなー、忍耐つてもん学びなよ」
少年とも少女ともつかない、間延びした声が聞こえた。ハツとして頭を上げる。

あの人だ！ トレードが起きるときにブチブチ文句をつける、やる気のない仲介者。

トレードが発生するんだ。絶望なんて必要なかった、乙女の恋が勝ったんだ！

「こつちだつて暇なわけじゃーな」

「いやあああ！ あなたなんか大っ嫌い！ 帰る、こんな世界もう二度といやー！」

「……いんだよー？」

ヒステリックな絶叫に邪魔されたが、仲介者はめげずに不平を述べきった。

あの叫びはトカ？

なんだー今回もトカの絶望が引き金なのかー恋の力じゃなかったのかー、恋は絶望に負けるのかー。

「愛で渡る人もいるよー？ 愛が足りないんじゃないのー」
うわー読まれてるし。足りないらしいし。そ、そっか足りないのか。

「まー要するに人は人の想いの強さがどんだけの扉をブチ破れちゃうものなのか、過小評価してんだね。こつちとしては楽でいいけどー。あふ」

トカの号泣が聞こえてるといふのに、不真面目な声の主はのんびりと講釈している。

「君たち少数派。トレードしても元の世界に戻ってくもんだよ？
トレードした側とされた側で希望が食い違って、目も当てられない面倒極まりない事態になるより少数派」

確かにそれはややこしい事態だろうけど、この仲介者は放置しときそつだ。

「うん正解。だって基本的に君たちの運命は君たちがどーにかするもんでしょ。ってことで泣かれんのウザいし、じゃーまーもう一回いつとく？　せーのお」

枕が消失した。

肌触りのいいシーツは粗いフェルトに変貌し、柔らかなベッドはごつごつした丸太の感触になった。両親の寝室はネイティヴのゲルへ姿を変え、そして両親は。

殺気をみなぎらせ喉元にナイフを突きつけてくるラウー・スマラグダス空軍大佐になった。

なんだろー、別れ際とそっくりの刺殺一秒前なこの構図。

デジャヴに記憶を探せば、ボル・ヤバルに駆けつけた一週間ぶりの再会でも弓で狙われてたっけ。なぜわたしが会いたいときに限って殺意満々で出迎えるの？

会えたらまず、ありがとうって言うつもりでいたのに。

組み敷かれ、頸動脈に刃を当てられ、ゲルをかまくらに改築中の極寒視線でかつてないほど睨み下ろされている状況では、非常にアブない発言に解釈されそうな気がする。

あの、桐花ですけど。ただいま戻りました、物騒なモンしまってくださいと視線で訴えてみた。

黙ってナイフが引っ込み、靴底だの膝だのによる制圧が解かれ、引き結んだ唇は無言のうちに報告を要求してきた。

死の淵から生還した仮にも妻を抱き起こすとか、ないのか。そっかギャラリーがないし。そもそも結婚しちゃったから婚約者パフォーマンスは必要ないしね、くっそー。

「えっと……おかげさまで血清、打ってもらえました」

「診せる。呼吸は。息苦しさはあるか」

「大丈夫。皮下出血が消えたら何も残らないだろうって」

ちっとも驚いてない。物事に動じないだけじゃない。ラウーにと

って、この結果はシナリオの範囲内なんだ。わたしが元の世界に行き、血清を打ち、治癒して戻ってくるのが全てラウーの計算通り。

ほっとする。助手解雇も結婚破棄も嘘だったんだ。

もそもそと上体を起こし、パジャマ代わりのゆったりしたＴシャツの襟を伸ばして咬まれた場所を出す。軍医はランタンの火を大きくして、肌の状態を念入りに確かめている。

その間に周囲を見回した。

ここはトカのゲルだ。二回目のトレードが起きて、ネイティヴの国粋主義者に誘拐されたときにいたゲルだから見覚えがあった。入口から尻の下にかけ、床のフェルトがなぜかぐっしより濡れている。どうしてこんな場所で、ラウーに首切られかけてたんだろ？

「もしかして、トカが絶望してトレードが発生するように脅した・・・・・・？」

「責めるなら自力で帰還してからにしろ」

帰りたくても帰って来れなかったのが見透かされてる。反論の余地は皆無だ。巨大な借りをカウントされたんじゃないだろうか。恐ろしいから忘れよう。

「あの・・・ありがとうございます、助けてくれて」

傷を確認し終えた温かい指先が離れた。ラウーは片膝をつき、腰を落とした体勢でじっと睨んでくる。

「おまえを救ったのは血清だ」
むー。

わたしとしては感動的再会なのに、ひょうひょうとしちゃって。

アイヤイが唸ってたのも理解できる。ラウーは助手確保と夫の役割を実行しただけで、特別なことやり遂げたなんて感慨はないに違いない。

ひとの気持ちをどれだけ揺さぶったかも知らないで！

「でも、ラウーがいなかったら血清にたどり着かなかった。わたしね、なぜかあるとき、血清のある元の世界に行くことを思いつかなかったの」

ここにはないんだ、って思っただけ。

「束縛され始めてたかも。助手の契約や婚姻は破棄できても、その……だから……破棄できないものもあつたみたいっていつか……」

じつと黙って睨み続けないで欲しい。

告白されたことはあつても、するのは初体験だつたりする。心臓がっ。こんな勢いでバクバクしたら筋肉痛になる！

硬質な金属鎧がランタンの橙色の光を受けてきらりと輝いている。淡い金の前髪に混じる一房の白もオレンジ色に染められている。

右手の指先に巻かれた包帯が見えた。血文字でカルテを書いた名残り。

ラウーの存在を特徴付けるものを順々に眺めて、少し気を落ち着けた。

勇気を振り絞って顔を上げ、視線をもらつ。茶と翡翠の瞳は睨みつつ、濃密な気配をこぼしてくる。床を這って腰に絡みながら立ち昇ってきてそうな、意思のある気配。

その気配の熱気に頬を撫でられながら、思い切つて言った。

「ここで生きてたい、です」

うわあああ声震えすぎ！ 酸素！ 酸素ー！

「だから結婚も前向きに……」

パンパンパンパン！

突然、爆竹のような派手な音が遠くから響いてきた。

「なにっ？ 爆発？ 銃撃？」

きよるきよるしたが、ゲルの中を見回してもしょうがないと気が付いた。外の様子を見ようと入口の木戸へ立ち上がりかけたところで、背中に覚えのある衝撃が走った。濡れた固い床に転倒する。

ちっ、と頭上から舌打ちが聞こえた。禍々しいほどの苛立ちぶり
は、天空を飛翔する龍さえ落とすそつだ。

「ボル・ヤバル戦勝祝賀会を知らせる空砲だ。出席しなければなら
ない」

めでたいじゃないか。お祭りごとは嫌いなのだろうか。

絶賛告白中の乙女の背中を軍靴で蹴倒した空軍大佐は、国の祝賀行事をかつてないほどの忌々しい口調で罵倒した。事実を述べているだけだが、明らかに罵倒した。

なにこれ玉碎？ 普通、告白が迷惑じゃなかったら踏みつけたりしないよね？ ううん、迷惑だとしても踏みつけたりしないよねー！ いやいや告白されてなくても、踏みつけるっておかしいよねーっ！？

「外へ出るな。おまえの姿を見られるのは作戦上の不利益だ」

物理的にも重圧をかけられた背中の中の数センチほど上から厳しい軍人の声が命令してくる。作戦ってなに？

「婚姻は失効した。おまえはもう死んでいる」

ずいぶん昔に流行ったという漫画の名台詞が降ってきた。

つまりはこういうことらしい。

暗殺者の目を欺き、桐花と入れ替わったトカの身の安全を確保するため、桐花は毒蛇で死亡したと偽装する。極秘にネイティヴ流の葬式までして、軍の書類も内密に死亡へ訂正させた。

ネイティヴは閉鎖的な社会だ。居住地によそ者が入り込めば必ず目撃されるし、監視される。トカをかくまっておくには最適な場所だった。

というのはトカに対する名目。

実際は、ターゲット死亡を確認しに葬式や書類を調べに来るであろう暗殺者をおびき出すのが目的。

名目の事情を聞いて協力したトカは、安全なはずの自分のゲルでラウー・スマラグダス参謀に頸動脈を狙われ、強制トレードさせられた。

トラウマにならないといいけど、と桐花は激しくトカに同情した。それにしても参謀の仮面め！ 妻の死までも暗殺者の釣り餌に使

うのかー！ とつさの判断が冴えすぎてる。アダマス帝国軍に敵対する勢力は全て即刻、降伏するのを勧めたい。

「それで、暗殺者は特定できたの？」

ラウーは黙って唇の前に傷のある人差し指を立てた。

口をつぐんで耳を澄ませば、チャプチャプと軽快な水音が近付いてくる。イルカだ。水音は迷いなく接近して木戸の前で止まる。

ご苦労様、とイルカの労をねぎらう声は母に似ていた。

「おはようございます、大佐さん、姉さん」

体の幅の分だけ開けられた戸からするりと入ってきたのはレンカだった。トカの妹であり大工であるレンカは、今日もチャイナドレスと網タイツを足して二で割っちゃったようないでたちだ。手に見慣れぬ道具を握っている。

「集う家を通じての伝言、承りました。デーデは潜行が長く体を冷やしていましたが、ご指示通りゆっくりと温めています」

「了解した。早朝に呼び立ててすまない。即刻、ゲルを解体して私の家へ運べ」

「はい、大佐さん」

言われる前からレンカはすでに作業に取りかかっていた。壁紙代わりのフェルトが巻き取られ、格子状に木を組んだ骨組みが姿を現す。

「ネイティヴでは死者のゲルは解体するのがならわしだ。その際、妻に死なれた男が遺品を持ち帰っても不思議はない」

啞然としていると、壁紙フェルトでぐるぐる巻きにされてさらに啞然とする。

すまきにされて東京湾。

そんな光景が頭をよぎってしまうのは、過去に恐喝まがいの取引をしたラウーの自業自得だと主張したい。

「順序は前後するが、クレオパトラにならうとしよう。蛇に咬まれ、巻物に隠れて敵の目を欺く。舞台も役者もそろえた」

死亡およびクレオパトラ偽装は了解しました。ところであの、思

い出して頂きたいんですけど、乙女の告白はスルーですか？

「行くぞ、桐花。戦争は終わっていない、虚飾の祝賀は国家予算の浪費だ」

桐花はフライトアテンダントの気持ちになった。

どなたかお客様のなかにお医者様はいらっしゃいませんか？ 機内

に重度の仕事中毒患者がおります！

39・煙にまくか、まかれるか

「ボル・ヤバル戦勝祝賀記念、火器デモンストラーションを開催致します」

国家予算の浪費とコキ下ろしたくせに、ラウー・スマラグダス空軍大佐は涼しい顔で開会の辞を述べた。

軍の演習場は低い岩山の谷間をならしてどうにかスペース作りました、という趣の窪地だ。初夏の陽光の照り返しにより朝だというのに気温は高い。山間の行き場を失ったつむじ風が砂埃を舞い上げていた。

「木材および硝石を豊富に産出するボル・ヤバルを領地としたことで、帝国軍には驚異的な火力を誇る火薬を安価に入手する道が開けました」

戦利品を披露するイベントか、と桐花は理解した。

「会場の収容人数の都合上、列席を制限させて頂きました。ご臨席の方々には初見の衝撃となる威力を存分にご覧ください」

間髪入れずにアイヤイの徹甲弾ランチャーが火を噴き、ドオン！と岩山の一角に巨大な穴を穿った。

硝煙の中を石つぶてがバラバラと降り注いでくる。ずらりと並んだテントから鑑賞する帝国軍幹部たちが、おおおと驚嘆の声を上げた。

家型のテントは屋根と側方に帆布が張り巡らされ、デモ会場に面した一面だけが開放されている。屋根だけにすればいいのに暑いぞ、と思っていた桐花は跳ね飛んで側面にもバチバチと当たってくる石つぶてに納得した。

「暑い……人多い……徹夜明けによりダメージ倍増、うぷ」

「ここで吐くのはやめてー！」

しかし氷の国出身のスマラグダス八鬼神、風天のヴィルゴット・

ヨハンソンにはこたえるらしかった。

スマラグダス大佐用のテントにはデモ用資材と称して木箱が積んである。桐花とヴィルゴットはその木箱の一つに潜んでいた。呼吸と視界のための隙間を除けば密閉された小空間で吐かれたくはない。「吐いたら、無差別人体実験してることラウーに告発するからっ」

「研究費削減……不幸……！」

会場はアイヤイが嬉々としてブチかます火器の轟音と爆発音、石つぶてがテントを叩く雨音、軍幹部たちの興奮した声と拍手で溢れていて、ひそひそ話程度なら桐花たちの潜伏が露見する心配はなさそうだった。

告白をスルーされ、木箱に詰められ、嘔吐を浴びる危険に晒される。久々のひどい扱いに桐花は嘆息した。ひどくても命の危機を感じないだけマシか、と場慣れしてきて人権基準が著しく低下している自分も情けない。

木板の隙間からまぶしい金属鎧の主を眺めた。ラウーは降ってくる石つぶてを小型の盾であしらい、乱暴に鼓膜を突く轟音にも悠然と直立を保っている。

行くぞ、桐花。戦争は終わっていない。

なんて言うから暗殺者退治をするのかと思えば、ラウー主催の祝賀行事に隠密出席させられただけだった。アダマスで桐花の護衛にあたるアイヤイはデモンストレーションの主役で不在になる。ならば警護対象を密閉しとけという単純明快にして人権無視な決定がされたらしかった。

ふと、気付く。

ラウーはラウー自身の人権も考えてないんじゃないか。

誰にだって好きな人と結婚し、人生を共にする自由な権利があるはず。ラウーは理想のため、助手保護のために自由を放棄してしまった。ラウーが犠牲になつて提供する妻の座に、平然と居座れる？ 他の人に座られちゃうのはイヤだ。でも。

「私が人並みだとわかっているなら、私にも人並みな感情が備わっ

ていると覚えておけ』

ラウーの人間らしい感情を踏みにじりたくない。

アイヤイは大砲まで曳いてきた。砲身にまたがり、鼓笛隊の音楽に合わせロデオのようなパフォーマンスを披露している。武器商人の下で銃殺ショーをした経験なのだろう、魅せ方を心得ている。

アイヤイを超ミニの異国の服を着た少女と誤解している軍人たちはえらい盛り上がりようだ。

男性なのになーという桐花の内心の呟きが聞こえたかのように、一瞬だけ朱色の目元にガンを飛ばされた。敵を欺くならまず味方から、が信条のアイヤイとしては誤解を誤解のままにしておきたいのだろう。

大砲がうっかり誤爆して、身を隠した木箱がそのまま棺桶になるのは避けたい。口外しません、と桐花はテレパシーを送った。

「興奮は呼吸数の増加をもたらします」

大量に火薬を消費し、会場には硝煙が立ち込めている。アイヤイの姿が霞んで目を凝らす桐花の横で、ヴィルゴットが不意に呟いた。「我が主のショーの幕開けにございます」

メイインイベントが始まるらしい、と桐花は木板の隙間に張り付き直した。

風の影響で、ある一角の数棟のテントに集中的に煙が流れていた。咳き込んでいるのが聞こえる。一人の年配の軍人が気分が悪い、と申し出た。

「私が診察致しましょう」

「すまないね、スマラグダス大佐」

「軍医として当然の務めです」

「吐き気とめまいがするのだが」

主催者兼軍医であるラウーは患者の鎧を脱がせ、軍服の前を開いて手早く診察している。熱中症です、と断言して涼しい場所で休ま

せた。

「気分の優れない方は、すぐに私へお申し付けください。ではデモンストレーションを再開致します」

大砲がズドーンとドカーンと盛大な音と煙を撒き、岩山を派手に破壊する。もうもうと湧いた白煙をかき分けて、また一人の軍人がラウーの診察を受けに出てきた。熱中症です、と断言される。

「ここ、盆地だもんね。かわいそうに、あそこだけ熱風が集中しちやうて」

「我が風天の名をお忘れてございます。集中させているのでござい、うぷっ……研究費っ……ぐぐ」

アダマス帝国内で常に最も暑気あたりがひどそうな人は白い袖で口元を必死に押さえていた。

不自然なほど煙が充満する一角には三人しか残されていない。うち一人がよろめきながらラウーへと助けを求めた。

「熱中症です。風通しのいい涼しい場所へ」

「席を移動してくれんかね。この煙には我慢ならん」

突然、ラウーの指示を遮る強い抗議が湧いた。

煙に耐えていた最後の二人の片方だ。壮年の、小柄で口ひげをたくわえた赤毛の軍人はラウーへ歩み寄りながら、厳しい表情で煙を払っている。

賑やかだった鼓笛隊がしんと静まり返った。居丈高な口調と会場内の注目を一身に集めた様子から、赤ひげ軍人はかなりのお偉いさんに思えた。

「申し訳ございません、グレンツ中将。じき風向きが変わりますので、しばしのご辛抱を。安全なテントへお戻りください」

大人しく座ってる。

ラウーの口調は丁寧だが、言外では明らかにそう告げていた。

「ほう、テントが安全？ ああ煙たいテントがかね」

赤ひげはムツと唇を歪め、嫌味たつぷりに噛み付いている。

やるな赤ひげ、氷山級に取り付く隙のないあのラウーに食い下が

った！

「熱中症は直射日光と高温多湿により」

「医者の説教はいらん、君の診察は信用ならん」

「誤診とおっしゃるのですか」

軍医は不快と上官に対する礼儀の混合された、傲慢さのにじんだ表情を見せている。

珍しい、と桐花は意外だった。おまえを救ったのは血清だと言ったように、知識に対してラウーは常に謙虚だった。

「これは熱中症です。グレンツ中将、席へお戻り願います。アイヤイ、続行しろ」

「我々を殺す気かね。付き合いきれん、帰らせてもらおう」
「中将」

金属鎧が赤ひげ軍人の退路を断って立ちほだかる。

見下ろす顔から礼儀も不快も霧散していた。静かな、けれど確実に魂の奥底まで見通し手づかみにするような審判者の視線に、赤ひげが返事をし損ねた。

「硝煙が吐き気、意識障害、ひいては死を招く事実を何者が貴官に教授しましたか。三週間と二十二時間前、貴官が私用と称して軍務を離れ密会した、武器商人ソウヘイ・カジヤベです」

赤ひげの一瞬の虚を言葉の矢が射抜く。

背筋を戦慄させる沈黙が、祝賀イベント会場が処刑場へと変貌したのを告げている。

「風向きが変わりましたでございます」

不穏な空気へ一変した会場の隅で、風天のヴィルゴットは満足げに呟いた。

「ボル・ヤバルの隔離病棟の糞便処理場に沈めた裏切り者から吐き出させた黒幕の名は、グレンツ中将でございます。しかし証拠がなく、厄介なことに我が主より役職が上でございます」

中将という軍の上級職を糾弾するには、密輸した火器の現物や白といった動かぬ証拠で軍幹部を納得させねばならない。失敗すれば上司を告発する不穏分子として、逆にラウーが処分されてしまう。方法に詰まっていたところに、ノミ駆除燻蒸事件が起きたのだという。ラウーは硝煙の性質を利用して、軍の害虫をあぶりだすことを思いついたそうだ。

「硝煙は有害。我が主とて承知。ですが開会の辞にございましたように、出席者は全てそうと知らぬはずの、火器取扱い登録のない者のみでございます。硝煙など焚き火の煙と大差ないと思うのが通常であります」

だから軍人たちは硝煙を浴びて気分が悪くなっても、熱中症と言うラウーの診断を疑わなかった。

「我が主はボル・ヤバルの伝染病を沈静した名誉ある軍医。誤診の疑いをかけるなど、軍幹部として明白な不自然でございます」

「密輸入した銃の発覚を恐れるならば」
イベント主催者から処刑人へ変化したラウー・スマラグダス大佐が会場の沈黙を破った。

「肌身離さず携帯する。グレンツ中将、貴官は私の診察を受け鎧の下を覗かれるのを恐れた。かといって硝煙を吸い続ければ昏倒し、いずれにしろ診察されるのは不可避。誤診と難癖をつけて会場から逃げ出そうと画策したが、口を滑らせた」

殺す気か、と。

硝煙の及ぼす害を正確に知っているると自供する、その一言を口にしてしまった。

誤診と言われてラウーが見せた表情、あの傲慢さのにじんだ、ついでムツとして一言文句をつけたくなるような顔はおとりだったのか。桐花は心にメモをする。大佐夫人披露時の笑顔といい、ラウーの珍しい表情には裏があると思わねば。

「スマラグダス大佐！」

赤ひげは一喝に近い威圧的な声を張り上げた。鎧の背から気炎が

昇っているのが見えるような、激しい怒り。桐花は思わず木箱の中で身を縮めた。

「発言の撤回と謝罪を要求する。事実無根のでっち上げで中将たる私を貶めるのは君のためにならんぞ」

「事実無根とおっしゃるのなら、ボディチェックを受けて頂きます」
「拒否する、無意味な侮辱だ！」

会場内は半信半疑で事態を見守っている雰囲気だ。中将が服を脱ぎ、身の潔白を証明してみせるのか。それとも中将の権威が勝って、大佐の世迷言で片付けられてしまうのか。

ラウーが不利だ、と桐花は思った。硝煙の有害性については火器を扱う知人や部下から聞いた知識だとか、言い逃れる余地はいくらでもある。不意を突くことには成功した。でも赤ひげが気を取り直したら握り潰されてしまう。

「密輸品を出せないのならば」

ラウーが指先で合図すると、アイヤイが会場の隅から革製の大きな袋を引きずってきた。袋の口は紐で厳重に封じてある。

「出して頂くまで」

袋はビチビチと元気にうごめいている。

言っていることは豊臣秀吉だ。鳴かずとも鳴かせてみようホトトギス。

しかし中将の足元にブチまけられたハブの山は、明らかに織田信長の所業だった。

40・ラウー王子から眠り姫へ

「ボル・ヤバルにてハブを大量に捕獲せよと、昨晚、超特急の夜間飛行で往復を命じられたのでございます」

赤ひげグレンツ中將は腰に帯びていた刀でハブを叩き斬ろうと半狂乱になっている。

それを木箱の隙間から眺め、眉毛もまつ毛もない作りかけの陶器人形みたいな顔で、ヴィルゴットは爽やかな神父の笑みを浮かべつつサラリと恨み言を連ね始めた。

「帰路の鷲の鞍で、蛇の毒腺を除去する作業に徹しました。我が体力は限界にございます。視界が霞みます」

残業代を請求してやろうという執念を感じる。

桐花は白ローブから顔を背けつつヴィルゴットの嫌味を整理してみた。つまり目下グレンツ中將を襲っているハブに、毒はほとんど残っていない。

「否、背後を取って咬むのです、左が空いております！ 臨床例！

臨床実験体っ」

セコンドばりのハブへの応援にヴィルゴットが徹夜で働いた動機が見事に表れている。

視界が霞みますとか言っというて遠くの蛇の動きまでよく見えてるじゃないかっ！ 臨床例にできる程度に毒を残してあるんじゃないかっ？

「無害な蛇相手に奮戦する必要は皆無です、グレンツ中將」

淡々と忠告するラウー・スマラグダス大佐はある意味、真実を述べている。だが毒のない毒牙を剥く多数の蛇に応戦する赤ひげは答を返す余裕もない。

「中將はそれを、アダマス軍が進軍しなかったボル・ヤバル森林部にのみ生息するハブだと誤解しているように見受けられます。ならば、貴官がその蛇に関する知識を持つ理由を問わねばなりません」

蛇の生息しないアダマス都市部に暮らす者が知るはずのない毒蛇。これは硝煙と同じ仕組みだ、と桐花は気付いた。シラを切つて動かずにいれば死ぬ。毒蛇だと主張すれば、ボル・ヤバルの内通者と自供するに等しい。

赤ひげはギチギチと音が聞こえそうに歯を食いしばりながら、黙秘を決め込んだらしい。無言のまま大量の蛇との対戦を続けている。「無害だという証拠をご覧にいきましょう。桐花！」

いきなり名前を呼ばれて、思わずビツと直立した。頭で木箱の蓋を吹き飛ばす形になったが、痛いとしゃがんだりしたらその倍以上に痛い視線で胸に洞穴が開通しちゃうのは経験上、よく知っている。振り向いた赤ひげと目が合った。ひげの下の唇が呟く。

「なぜ生き
ているのか。」

途中でへし折るように言葉を飲み込んで遅かった。成り行きを見守っていた演習場の軍人全てがそれぞれの武器に手をかける、緊張した不協和音が響き渡った。

桐花の葬式は極秘事項。

桐花は死んだと確信している者にしか、その発言は不可能だ。

「咬傷の牙痕数と形状から、咬んだ蛇の種類を特定できる。その蛇に咬まれた私の妻はこの通り生きています。安心して咬まれるか自供するか、選択肢を与えてやる」

死ぬか自白するか迫ってるよ？ 死ぬのを選んで蛇に咬まれても致死量の毒は入ってないから、中將は生き恥をかかされるだけだよ。ね。やること怖いよ？

赤ひげの構えるナイフの先が震えている。瞳は憎悪と屈辱にドス黒く燃えている。威厳ある軍人だったはずの人物は、生理的に目を背けたくなるような悪意の塊と化していた。

迎える異色の瞳には炎も消し飛ばすブリザードが吹き荒れている。

色と温度の違う強力な嵐が衝突し、刃となって空気を切り裂くのが見えるようだった。

「昨夜、ネイティヴ流の葬式である死出の小船が浸水で沈むのを確認していたことに関しては証言者がいる。おまえは自家用機であるカラスの上から、船の近くにイルカの群れがいたのを見たはずだ。デーデー！」

凜とした指名に、スマラグダス大佐用テントに積まれていた別の木箱の蓋が吹っ飛んだ。

長髪を後頭部で一つにくくり、すとんとした若草色の民族服を着た、よく陽に焼けた筋肉質の青年。アジアンスターのような憂いのある端正な顔を引き締め、棒のように硬直している。

「僕は集う家のデーデーと申します！」

体育会系の元気良さで名乗った。が、声が裏返っている。

久しぶりに会ったけど、正義の味方風のかっこいい登場だけど、相変わらず詰め甘い人だと桐花は哀れしか感じなかった。

「昨夜、イルカの群れに隠れ、死出の船を観察するシロエリオオハシカラスおよびグレンツ中將を見ました！」

そういえば。

トカのゲルを解体しながら、レンカが言ってたっけ。デーデーは潜行が長く体を冷やしていたが云々。

「そして沈んだ船から、死体のフリをしていた紡ぐ家のトカを回収しました！」

それでトカのゲルの床がびっしり濡れていたのか。

暗殺者にカラスの上から観察され、小船が沈没してもじっと死体を装う。身の安全のために命がけの演技を終えてゲルに戻ってみたら、ラウーに頸動脈を襲撃されたと。

トレードの際、トカはこんな世界二度と嫌だと号泣してたっけ。

無理もない。

「また、大佐の指示により、低空飛行していたカラスの羽をF e t c hしました！」

そう言つてデーデは腰紐に挟んでいた巨大な黒羽を二枚、空高く掲げた。抜けるように青い空へ突き上げられた羽はVサインみたいで、勝利の確信に満ちている。

Fetch、取つて来い。デーデの飼つてるイルカに教えた遊びだ。死出の船に近付いたカラスの羽を、イルカにむしらせたらしい。「鳥の翼には風切羽が並んでいます。あの、聞いてますか中将さん」
どうにかハブを鎮圧し、せえせえと肩で息をつくグレンツ中将は汗だくで鬼の形相だ。

「反アダマス感情の強い……ネイティヴの……証言など！」

僕はそうでもないですけど、と真面目に答え始めたデーデは話の横道を斬撃する氷の大ナタ視線を浴びた。首筋にガラガラと汗が流れ落ちるのが見えた。

相変わらず空気の読めない人だ、と桐花は嘆きしか感じなかった。「か、風切羽は三つに分類できます。翼の先にある初列風切はほとんどの鳥類で十一本と数が決まつてて、これはその初列風切の九番と十番です。えっと、翼の外側から数えて二枚目と三枚目の二枚です」

そうか、何で詳しいんだらうと思つたら、集う家つて動物の飼育や調教をする職業集団のことだった。デーデ「多少頭の残念な人、という脳内メモを桐花は『少々』に訂正してやった。

「ユピテライズしたカラスは軍機に転用可能なため、一羽残らず登録管理されている」

証言を継いで、頭が残念でなさすぎる人が記録を読み上げるように話した。

「アダマス帝国内で自家用機として使用されているカラス百六十八羽のうち、シロエリオオハシカラスは二十三羽だ。今朝、全てのシロエリオオハシカラスを当たったところ、九番と十番の初列風切を欠いたものは」

一拍。

証人と証拠で追い詰めた容疑者の心肺が凍るのを見届けるような、傍聴人さえ戦慄させる一拍のあとにラウー・スマラグダスは告げた。「グレンツ中将の所有する一羽のみだった」

赤ひげ中将がゆっくり首をねじって周囲を見渡す。

演習場の軍人たちが赤ひげに向ける目は、中将ではなく、容疑者でもなく、罪人に対するものへと塗り変わっている。

覆しようなない断罪の視線の重量に、ガクリと赤ひげの片膝が地に崩れ落ちて敗北を認めた。

「私とトカの結婚は、数十年来続いてきたアダマスとネイティヴの不和の時代が終焉した象徴だ。ダルジ少将とネイティヴの結婚が検討されたほどの国家的、歴史的、政治的な意味合いは大きい。その破滅を謀るだけでも国家への反逆であり、」

判決文を読み上げる裁判官の気高さでラウーが言う。

「私への挑戦だ」

国家反逆罪とラウーへの反抗が同列で語られていいの？

くそつとか、死ねとか、呪詛も罵声もなかった。

唐突に赤ひげの手が突き出され、握る拳銃の先はラウーの顔へ定められていた。

「いや！」

思わず叫んで駆け出そうとして、バスタブサイズの木箱に行く手を阻まれた。

パアン、と軽い音がこだまして視界と意識を白くする。

デモンストレーションで披露されたどんな火器より軽薄な音。あんな音で人の命が飛び散ってしまうなんて。間違ってる。指先一つが、悪意が命を強奪する手段になり得てしまうなんて。

そんな狂暴な悪意の先に大事な人が立ってるなんて。

こんなことあっていいはずがないよ！

大勢の早い足音がする。取り押さえる、確保、と怒声が飛び交っ

ている。それがノイズの中で近付いたり遠のいたりして、気分が悪くなる。体のあちこちに硬いものがぶつかるのが分かる、衝撃は強いのに痛みなんて全然ない。

「あーあ、ファースト・レディちゃんってば。あたしが早撃ちで初心者に負けるとでも思ってたんのお？」

「桐花！」

誰かに呼ばれてる。

頬がベチベチと打たれてる、でも不思議、痛くない。

「救急箱を持ってこい」

これラウーの声？ 無事だったの？

視界が慌しいけど、何が映ってるのか分からない。だって上下の見当もつかない。浮いてるのか落ちてるのかも、魂が体にくっついてるのかどうかも。

迷子になってる、誰か、こっちだよって手を引いて。

あ。キス。

ふわふわしてた感覚が、一気にその一点へ収束した。

柔らかくて温かな、あの冷徹な風貌と真逆の優しい弾力が押し当てられてる。

ラウーのキスが好き。他のキスなんて知らないけど、絶対これが世界一。世界がいくつあっても、せかいい……。

「ギヤー、苦いっ！ ピリピリする、何これっ？」

意識が引っぱたかれたみたいに覚醒した。

舌が熱い、しびれる、うえええ酒くさーっ！

「気付けた」

超至近距離で覗き込んでいたラウーが平然とお答えくださった。

その答える唇からも同じお酒のような香りが落ちてくる。

えっもしかして気付け薬を口移し？ キスじゃなくて？ 世界一と思っただキスは医療処置かー、ときめきを返せー！

「私は医者ではない」

ラウーがおかしなこと言ってる。私は医者だって言葉を何度、頼

もしく、腹立たしく聞いただろう。

「患者が出て満足を覚えるなど」
なにそれ？

じつと睨み下ろしてくる茶と翡翠の瞳が何を言いたいのか見上げていたら、顎を砕いてやろうかという勢いでつかまれた。

「おまえの頭の鈍さに効く薬はないのか？」

ひいっおかわりいらぬ、気付け味の舌を入れてくるな、もう頭はばっちりシャープに起きてるのに、苦いっしびれるっ酒くさいっ、
……あ、甘い。

気付けとは逆効果のラウーの味がする。

ごめんね、ラウー。

もう少し、気付けが残ってないことに気付かないでいて。

41・人類みな魔性

「呪ってやる」

キス、じゃなかった口移しで気付け薬を流し込まれ、失神しかけて鈍いと叱られた頭もすつきり爽快。寝かされていた地面から起き上がるうとしたら、そんな不気味な声が出た。

片膝をついて低くなっているラウーの肩越しに、赤ひげグレンツ中将が山盛りの軍人たちに取り押さえられているのが見えた。アイヤイがラウー・スマラグダス大佐流の武装解除をしているらしく、半裸に剥かれている。

「呪われる、ラウー・スマラグダス！ 恨みを買って、蔑まれ、孤独のうちに惨めな死に方をしろ。それが貴様の受ける当然な天罰だと覚えておガゴツ」

「あ、ごめん下駄が滑っちゃったあ」
下駄が滑ったくらいで前歯が折れるほどの衝撃になったりするんだらうか。

「悪魔め、殺されても呪ってやる……」
アイヤイの横槍にも負けず、赤ひげは折れた前歯を吐き出して、なおも怨嗟をがなり立てている。物理的にも地を這う、悪夢に再現されそうな濁った陰惨なうめきだった。

思わず、両手でラウーの両耳をふさぐ。

「気にしちゃだめ」

グレンツ中将を振り返ろうとするラウーの頭をぐいぐいと押し留めた。

「あんなの記憶しなくていい。大丈夫！ 呪われてもわたしはそれ以上に祈るから。ラウーが無事で、理想を叶えることが出来るように、いっぱい祈るからね！」

たとえ祈りと引き換えに自分の命が削られていくとしても、そうするだけの価値がある。

取り巻いていた軍人たちがザワリと騒いだ。

「呪い返しを施すと……!」

「伝染病の病魔さえ操った。スマラグダス大佐夫人はやはり高位の魔女か？」

「白魔も魂を抜かれるわけだ！」

なぜそうなる。

気絶しかけたかよわい乙女が、ラウーの魂を食らって生きてる魔女だとでもー!

「呪いも祈りも非科学的で無意味だ」

白魔という非科学の権化な異名の持ち主はきっぱりと、仮にも妻の祈りを否定しやがった。どうせなら妻の魔女疑惑を否定しろ!

「だが呪いや祈りが心身に影響を及ぼす時、それらは初めて効果をj得る。ならば、おまえ以上の祈禱師は存在しないし、あの男は呪いを返されても無傷なほど役立たずだ」

気にしてないよ、で済むものをどれだけ回りくどく表現すんの? 国語力なさげな軍人が、白魔も認める祈禱師だとか畏敬に震えるじゃないかー。妙な噂が増えたじゃないかー。

恨みをこめてラウーを睨む。あ、恨まれるという赤ひげの呪いを実現しちゃった。

しかし呪いの効かない合理主義者は立ち上がると、背後の無能な呪術師へ静かに告げた。

「私の肉体が失われようと、私の精神が受け継がれる限り、私は滅びない」

受け継がれる限り、の部分でラウーは手をつかんでくる。継承者が誰であるかを教えるように。

意志を継いでも実現するのは不可能だと思ってたし、今でも思う。なのに誇らしさに足が震えてどうしようもない。どうにか出来るんじゃないかなんて思えてくる。

「民族も国家も文明も同様だ。だからおまえを裁く。安易に殺すなど解決ではない。誰にも引き継がれることのないよう、犯罪の宿る

肉体ではなく犯罪の精神そのものを滅する」

取り巻く軍幹部たちの中には、物言いたげな視線を取り交わす者もいる。謀反人を見せしめに殺すべきだと考えているのかもしれない。それでもその場は沈黙によって、ラウーの言葉は一応の支持を得た。

桐花は握ってくる指の強さに、ラウーが相手取るものの果てしない大きさを知った気がした。

ラウーが戦いを挑んでいるのはきつと、敵味方も超えた、人の中に棲む魔性なんだ。

「わわ、血、血が出てる」

指を伝って岩地へばたばたと赤い花を咲かせるものの正体に気付いて、慌てた。軍医の端正な眉の間に人類登頂不能な山脈が隆起した。

「診せろ、傷はどこだ？」

「わたしじゃない、ラウーの指！ 強く握ったりするから、人差し指の傷が開いちちゃったんだよ」

山脈が一瞬にして平地に戻る。ラウーは血まみれの包帯を見やつて、白けた顔をした。

白ける場合か！ 患者が出るのは満足なんじゃなかったのかっ！
「夜になれば」

アタフタと止血を試みていると、患者はのんびりと、でもどこか真剣な口調で言いだした。

「おまえは、傷ついたのが中指でなくて幸いだったと思うだろう」
確信的に告げる唇から、覚えのある濃密な気配がこぼれ落ちてくる。

ラウーの中指が元気でわたしが得をすることなんてあるの？

正体不明の気配に触発されたように、周囲の軍人たちがザワツと浮き立った。

「俺も今夜、彼女と中指で！」

「燃えますな！ 戦地帰りですしな！」

「いやいやわしも衰えはしたが、テクニクなら若い者に負けんぞ」
「そうか、夫婦対抗デコピン大会でも企画されてるんだ。ラウーっ
てばやる気満々、優勝するつもり？ ひいつ、足を引つ張らないよ
うにせねば！」

と緊張したら、止血のために縛った紐を締めすぎた。

「締めるの、キツすぎる？ 指、痛くない？ どうすればいいかな」
「考える余裕など与えない」

本能のままに止血しろって？ 医者がそんな動物的でいいの？

縫合はしてあるけど消毒は？ 消毒まで動物的に舐めて終了とか。

「縛ったり舐めたりするだけじゃなくて、ちゃんと最後までケアし
てね」

傷の心配してるのに、なぜ超絶に睨まれなければいけないんだろ
う………。

ボル・ヤバルの二週間でも毎晩この、殺気のない殺視線を浴びた
っけ。目が合ってるようで合っていない。ラウーの視線は目を通して
て身体の内奥で、わたしの知らないわたしを探り回ってるみたい。

その間にも周囲の軍人たちが騒がしい。

「止血どころか激しく充血させてますな！」

「わしも、うっ血がひどいから失礼するでしょう」

「俺も、たまった血がうずくのでっ」

急に血液循環障害を発症したらしい軍人たちが前屈みに帰路につ
く。体調不良のくせに、やけに足早だ。頑張れよ！ とか励ましあ
ってるけど、お大事にっつて言う場面じゃない？

「患者さんたち、帰らせちゃっていいの？」

患者が出るのが嬉しいはずの軍医は、あっさり彼らを見逃した。

「治療できるのは私ではない」

各家庭に秘伝の民間療法でもあるんだろうか。

42・発熱する体温計

アイヤイの護衛つきで帰宅して、爆睡した。血清治療の疲れもあったし、親子の対話で徹夜だった。もちろんそんな言い訳があの寝坊に驚の餌上司に通用するわけないんだけど。

物音に目を覚ました。半透明の水晶窓で弱々しい青白い月光が立ち往生していて、室内はすっかり暗さに沈んでいた。聞こえているのが水音だと分かると同時に、隣接するバスルームの扉からランタンの橙色の灯りが差した。

炎を極限まで絞ってあっても、金属鎧を着ていなくても、スパルタ上司のすらりとしてキビツとしたシルエットは見間違えようがない。

ぱつと跳ね起き、ベッドの上に膝立ちで直立した。

「おかえりなさい」

おかえりなさいに過去形がないのが救いだ。

「おまえには護衛対象者の素質がある」

石鹸の香りを漂わせるラウーは、さっぱりしたーとでも吹き替えなくなる爽やかさで、嫌味だか褒め言葉だか追及したくないことを言った。

ぐーぐー寝ててすいません。デコピン大会、終わっちゃったかな。ざくざくと裸足でも尊大なのがむしる感心な足音で歩み寄ってくると、ラウーは床にランタンを置き、ベッドの端に腰を下ろす。

濡れた髪は金色の毛束の先を無秩序に散らしていて、そのラフさがいつもより歳が近いように感じさせる。それでも軍服だ。大佐仮面の武装解除はしない気なの？

「家にいる時くらい、軍服を脱げばいいのに」
ぬぎつ。

あまりに簡単に脱がれてしまって、啞然とする。

「ちよっ……えええ、ちよつと何やってるのー！」

「おまえが要請した。脱いでいる」

冷静にお答え下さる間にシワひとつない、お偉い大佐の記章つきシャツが打ち捨てられていった。

違う違う違う、脱げっというのは着替えるって意味で、リラックスすればってことで、ほんとに脱げっってことじゃなくて、わあああ、お父さんのトランクス姿だっけ見たことないのに！

上掛けに潜りこんで視界の防衛に努めても、あっけなく引き剥がされた。手首をつかまれたらもう、必死に目を閉じるのが最後の砦。オツケー、百歩譲って脱げとは言った。でも見せろとは言ってない！ 見ない見ない見な・・・ギャー、なんでわたしがラウー・スマラグダス大佐流武装解除を施されてるのー！

数え切れないほどの暴れる捕虜を裸に剥いてきたのである。う熟練の手業に抵抗し、身を縮める。動きを封じる時には背中を蹴倒されるのが常。ぎゅっと目をつぶったまま背中への衝撃を覚悟して身構えてたけど、違う場所に違うものが来た。

・・・・・・検温？

検温にしては妙に念入りというか熱心というか、なぜ全身で退路ふさがながら何度もあちこち計りなおす必要が・・・・・・？

そろりと目を開けて軍医を見やる。

落ちてくる唇も触れてくる指も、幾度となくまとわりついてきた、あの濃密な熱で溢れている。ゆっくり移動する唇を額の濡れた毛先が従順になぞっていつて、くすぐりたいような不思議な感覚が肌の下を走った。

「待つ・・・・・・」

打ちまくる心臓に胸が占領されてしまっ、ろくに息もできない。でもそんな中途半端な呼吸じゃラウーの唇を押し返せない。

「待って、あの、こっぴうことは！」

これ、検温じゃない！

恋人同士にはキスの先があることは知ってる。映画や小説ではベッドに倒れこんで曖昧に暗転していくもの。

裸で組み伏せてくるラウー・スマラグダスが構図的にそうしたがつてるみたいって、さすがに分かったけど。うそーなんでっ？

「えっと、こういうことは、好き合っつてするものだと思う……」

曖昧さを明らかにしていくキスが一時中断する。でも逃走を封じてくる手指の力は緩んでくれない。

見下ろしてくる茶と翡翠の瞳はランタンの光に煽られて燃え揺れている。不転、というものが形を持ったらきつとこの目になる。

「私は合意している」

私の精神が受け継がれる限り、私は滅びない。そう宣言して手を握ってきたのは、継承者がわたしだからじゃなくて、継承者をわたしに産ませるからですかー！

ついでにアダマスとネイティヴの平和の象徴を結晶化しちやえ、つてことですかー！ 軍服脱いでも思考はアダマス帝国万歳な軍人モードですかー！

そんな魂胆聞いてない、という抗議をラウーが聞いてない！ イヤアアア下着かえせー！

「だめ、ほんとやめて、だつて！」

薄暗くたつて見えちゃうもん。右肩から胸にかけて広がる、赤紫色の皮下出血。

蛇毒の腫れは血清のおかげで治まったけど、内出血は自然治癒を待つしかない。打ち身と同じで、消えるまで何日もかかるはず。医者だから診せたんであって、ラウーには見られなくなかつたんだから！ そのへん察して欲しい！

胸とか皮下出血とか色々腕で隠しながら睨んだけど、迷わすことさえ出来なかつた。

「言っただけだ」

毒牙のキスを受けたその場所へラウーの唇が重なる。上書きしようとするみたいに。

「おまえの体が壊れても痛手ではない」

そういう意味だったの？

体のどこをどれだけ怪我しても翻訳する頭脳さえ無事ならどうでもいい、って言われてるんだと思ってた。

ううん、それも含んでるんだろうけど。

容れ物がどんな姿だろうと、何も変わりはないってことだったの？

ああもうどうかしてる、唇の温かさで皮下出血が治ってく気がしてる。ダメだイヤだと抵抗する意志まで吸い取られてく。

ラウーが敬愛する本に触れる時の、長い指先のうやうやしき。同等の丁重さで肩へとひざまずいていた唇は、いきなり気品をかなぐり捨ててガブリと噛んできた。

「なっ、痛い、何っ!？」

草食系男子なんて言い方があったっけ。あの分類で言えばこのひと、肉食どころか人食系だよ！

「おまえの世界のキスにならっただけだ」

視線も超越さず、けろりと答えて人食系青年は皮下出血治療を再開した。

噛むのがわたしの世界の？ 吸血鬼じゃなくて？

そういえばファースト・キスの時、ムカついてて噛み付いてやったんだっけ。あれをわたしの世界のキスだと誤解してるっぽい。わたしの世界流に合わせてくれたつもりなの？

冷静な情熱で我流を貫き通す、あのラウー・スマラグダスが・・・

待て、野蛮人めいた行為に胸がきゅつとするとか、ヤバくないか自分！

うわあ、ラウーを見下ろすようなこのアングル、やっぱり畏だ！笑ってるように見えるもん！

まじまじ見つめてたら、防御と隠蔽に徹してたはずの腕が取り崩

されてるのに気付かなかつた。でも抵抗したら、ラウーの貴重な表情が逃げてしまいそうで。

弓を引き、ペンで指示を出し、患者の脈を診る指と同一とは信じがたい動きが止まってしまいそうで。

一瞬ごとに立ち現れる初めてのラウーを追わずにいられない。

好き合つてするものなんて理想が、現実的幸福という誘惑にこんなに簡単に屈服しちゃうなんて知らなかつた。

ネイティヴの妻を持つアダマスの夫という役割を果たそうとしてるんだとしても。

結局、何をされてもラウーならいいと許しちゃうのがバカだと誰に笑われても。

後悔なんてするわけないと信じられた。

三時間と五十七分後、アイヤイの予言より二分延長した後、「時間だ、出かける」と突然に体をほどかれ放置されるまでは。三分で身ぎれいにして軍服着て鎧着てブーツ打ち鳴らして颯爽と出て行かれるまでは。

こんなのありかーっ！

何ひとつ身ぎれいでもなく、何ひとつ着てないまま呆然とした。

ついさっきまで、世界の深遠にある真理で満たされたようだったのに。突然の嵐に根こそぎさらわれた更地かと思えるほど、がらんとした部屋の薄っぺらい空気が痛い。

なにこの落差。

今はもうすたれてしまった習慣だけど、その昔の日本には後朝の歌といって、男性が別れを惜しみ再会を心待ちにする詩を贈るという風流な気配りがあってだなー！

うっん、凝った詩なんていらないけど、せめて何か優しい一言とかないんですか！ その言葉を思い返すだけでこの「一人になつちやった感」が「また二人になれる感」になるかもしれないのにつ！

と、脳内で激烈に文句を垂れてみたが、相手があこのラウー・スマラグダス仕事中毒大佐じゃ予見できた結果ともいえる。ものすごく

熱心に夫としてのお仕事を遂行したといえる。アダマス万歳とか言い残されなかっただけマシかもしれない。

ラウーの人間らしい感情を踏みにじりたくなかったのに。助手の保護だの和平の象徴だのって嘆きたくないのに。胸を張ってラウーの隣に立ちたいのに。

ただ一方的に好きでいるだけじゃ、流されてちゃダメだ！ 努力しなきゃ。よし！

「はっつ」

気合を入れて起き上がったら体のあちこちが悲鳴をあげて、現実にも悲鳴が出た。そろりそろりとバスルームへ移動して、タオルに手を伸ばしかけて、ためらった。

全てを覚えていられるラウーがうらやましいと初めて思った。

肌の記憶まで流されそうで、身ぎれいにしちゃうのをためらうなんて、ほんとに自分がヤバい気がする。

43・旗を揚げて進め

寝不足とあちこちの痛みには負けず、桐花はいつも通りに資料館へと出勤した。閲覧室の屋根、半透明の黄緑色の鉱石を抜けてくる朝陽が暴力的に目にしみる。

弱った目で少なくなってきた皮紙の在庫を数えていると、警備兵が来客でさあと告げて誰かを通した。

執事来たかと思った。

せかせかと、軍人にしては重量感のない速い足取りでやって来る痩せた青年。青年というよりは青年に近い少年が、青年の格好をしようとしているように見える。

黒髪はきれいにオールバックに整えられ、片眼鏡を左眼にはめている。シルクハットをかぶってたら紳士、コート着てたら執事でイける。だが軍服だし、第一若すぎる。

そもそも紳士や執事は、鼻先が付きそうなこんな至近距離で初対面の顔をガン見したりするものだろうか？

細い眉、シャープなフェイスライン、白目まで青みがかった薄青の瞳。執事より委員長とでも呼びびたくなる端正さと根暗さを備えた人物は、薄い唇でいきなり言った。

「＝」

「さ、3・14？」

しんとした一瞬の沈黙があった。

片眼鏡の奥の目が細くなった。

「小数点以下二桁ですか。紀元前にアルキメデスが証明してから二千年以上が経過して、スマラグダス大佐の助手ともあろう方が二桁ですか」

なんだこの人はー！　ぶしつけに円周率投げつけて、桁数で人物評価されたー！

「さつ、3・141592！

5＝2・2360679！」

「5の平方根まで聞いておりませんが」

富士山麓オウム鳴く、の語呂合わせで覚えた数字を繰り出してみたが逆効果だったらしい。

「女性にしては学のある方のようですね」

「なんだかトゲのある言い方だぞー」

「自分はスマラグダス大佐の副官で」

男性優位の香り漂わす少年以上青年未満は、桐花の無言の反発に氣付いていない様子で名乗り始めた。

「カルロ・レオンという者であります」

副官とは上級役職について事務を補佐する秘書のようなものだ。

鎧を着けず、胸から肩にかけて銀色の飾り紐が渡されているのは文官の証らしいと桐花は認識した。

「大佐からの預かりものを持参しました」

レオン円周率委員長はそう言つて、脇に抱えていた翡翠色の長い石筒を手渡してきた。蓋には封蝋が施されている。

桐花の心臓がとくんと高い音で鳴り出す。

もしかして、これって後朝の歌みたいなの？

だって今まで、仕事のリストはラウー本人が直接メモを渡してきた。こんな風に部下がうやうやしく……うーむ部下そのものにならうやしさはないけれど、部下が手紙を捧げ持つなんて優雅な配達は一度もなかった。

ラウーの薄い方の瞳の色を映したような、滑らかな緑色をした筒をそつと開けた。指先で触れただけで上質と知れる皮紙を引き出し、はやる心を抑えながら広げる。

几帳面に整った、見覚えのある字が並んでいた。

『下記の二名の婚姻を証明するものである。ラウー・スマラグダス』
ものすごく事務的な手紙。いや書類。

婚姻届。

あれ？ と桐花は首をかしげてみる。

そつだ色々あつて忘れてたけど、暗殺者グレンツ中將をおびきだ

すために桐花死亡工作が行われて、ご丁寧にも軍の書類も桐花死亡・婚姻失効にされたんだっただような。

あれ？ つまり昨晚というか今朝というか、人食青年のお食事の際は夫婦じゃなかった……ってこと？

乙女の告白はスルーした拳句、ちゃっかりフライングで召し上がって、イエスの返事織り込み済みな婚姻届に部下経由でサインしろと。

愛がなさすぎるー！

ないのは最初から分かってるけど、なさすぎるー！ 眼力どころか愛情も絶対零度か！ 告白の時に黙って睨んでたのは、ノーは言うまでもなく返事をする必要性すら感じないって答だった……のか……ん？

「大佐はボル・ヤバル出征以来、常に過労気味でいらっしやいました。苛立ちを募らせ、触れれば凍傷を受けそうでありましたが」
待て待て。

告白をスルーされたと思い込んでたけど、そもそも、わたしってば告白したんだろうか？

「今朝は大変にご機嫌でありました。疲れてらしてもそう、心底から満足しておいでで、聖餐を口にしたように清々しく安らかなご様子でありました」

真っ白に近い記憶を掘り起こしてみれば、あの告白めいたモノは、この世界で生きてたいですと伝えただけであって。好きですとか、ラウーの気持ち教えて下さいとか、返事を必要とするような内容じゃなかったよう……気が……。

「大佐にとってボル・ヤバル戦は、謀反者を逮捕し裁きの壇上へ導き、ようやく終戦を迎えたのであります。あの気高さは全アマス軍人の誇りであります！」

わああ告白未遂だったのか！ スルーされたとか、もしかして万が一ひよっとして超ありえないけど、ものすごいシャイ・ガイ・モードを発動して黙って睨んできてたんじゃないかとか考えてたのが

アホすぎる！

ふらふらとベンチに腰を落とし、ペンをつかむ。

片眼鏡の委員長は陶酔しながら何か言ってたけど、ゴメン聞いてなかった。

机の上へ婚姻届を広げる。ラウーのサインの下の空白へとペン先をあてがい、一気に書いた。

「ボル・ヤバルへ行かせて下さい。何でも与えるって言ったよね。しばらく一人でやらせて下さい。その後にラウーが結婚したいって思ってくれるならサインします。それまで、和平の象徴として対外的には夫婦でいいです。つきましてはボル・ヤバル滞在の資金と手配を……」

「助手殿はずいぶんと、長い名前なのですな」

カリカリ無心に書き殴っていると、部屋の入り口で待機していたレオン副官が怪訝そうに聞いてきた。

サインをもらう用事だと知ってたなら最初からそう言うて欲しかった。そしたら後朝のなんてバカな期待をしなくて済んだのに！ につこりと恨みの営業スマイルを向けてから残りを書き終えた。

請求書と化した婚姻届を筒に収納し、副官へ託す。

数分後、副官は雪嵐をまとって現れたラウー・スマラグダス大佐の背後で真っ青になり胃を押さえていた。

「私と別居したいそうだな、桐花」

レーザーの逆でモノを凍らす光線があるとしたら、今間違いない。ラウーの瞳から大砲級の口径で最大出力で放射されている。あの金属鎧に抱きついたら貼りついて二度と剥がれなくなるんじゃないかな。

でも負けない！

「別居って普通、それまで同居してた夫婦が別々に暮らすことだよな？ わたしたちは同居もしてないし夫婦でもないから、別居じゃ

ないよね」

「なぜトーカー・スマラグダス夫人だと言ってくれなかったんですか！ 婚姻届と知っていたなら自分は、別居通告なぞ受け取りはしなかったんです。決して！ 副官生命に賭けて！」

悲痛にヒステリックに叫んだレオン副官は冷や汗で眼鏡が滑つたらしく、落下防止の鎖の先でブラブラと揺れるレンズをあわあわと捕まえようとしている。

「夫人じゃないもん」

「ならば訂正しよう。私との婚姻を保留したいそうだな。今朝のおまえの態度と一貫性を欠く理由は何だ」

氷の湖面よりフラットな口調が怖い。

副官は冷や汗をかきすぎて、オールバックだった髪が湿気に負けてはらはらと崩れてきている。

桐花は座っていて良かった、と思った。腰を抜かしてもバレないから。

「ボル・ヤバルで製紙したい」

雪山で辞世の句を詠んでる気持ち。

「それから活版印刷をやる。あと製本。書店か、それが早すぎるなら図書館をやりたい。本で自活できるようにしたい。ラウーに保護されなくてもいいようにしたいの」

ダイヤモンドさえ凍結粉碎しそうだった氷の魔王様の光線が、わずかに緩んだ。

「非効率だ。おまえが持ってきた本の知識を利用すれば、書店を経営するよりはるかに迅速に、はるかに巨額の利益が得られる」

「受け売りはイヤ。軍にとっても悪い話じゃないよね？ 教育を行き渡らせることができる。わたしの国では誰もが円周率π 3.14だって知ってる。知識は、応用したり発展させたりする教育された人たちがいて初めて根付くものだと思うの」

ゆっくりした瞬きで、光線攻撃が鎮まる。豪雪の災害をもたらす白魔から知識人らしい顔に戻ったラウーは、桐花の言葉を吟味する

ように沈黙していた。

「木が原料の紙は安価に大量生産できるでしょ。狭い土地しかないアダマスでは、原料の羊を大量には増やせないから」

「夫人、皮紙の」

夫人？

片眼鏡を眼窩に収めながら発言しかけた副官をギツと睨んだ。

「む、失礼しました、でしたらトーカ女史。皮紙の原料は羊ではありませんが」

「じゃあ牛？」

答を聞くことは出来なかった。瞬時に復活した魔王光線に舌を凍結された副官は、軍服の胃のあたりをつかんだまま硬直していた。ダイニング・メッセージは『皮紙』に違いない。

桐花の胸に嫌な予感が渦巻き出した。

「ちよつとラウー！ この皮紙の原料は何？」

「忘却も才能の一つだ」

「まさか人……」

「違う」

桐花の世界には、弾圧した民族の脂肪で石鹸を作ったとまで噂された独裁者が存在した。恐るべき残虐性だが、同時に、当時の人体実験が医学発展の一翼を担った皮肉も否定できない。

忘れる、答えて、とやりあう視線がしばし交錯した。

「ほんとに人……」

「違う」

諦めたように、ラウーは鼻先だけでため息をついた。それから桐花の背後に回り、いきなりデカい手で物理的に口封じをした。

「レオン副官、耳を塞いでいる。養殖場を見せたはずだ。皮紙の原料は、あの巨大な虫だ」

「もう絶対に、絶対に、絶対にボル・ヤバルに行く！ 木が原料の

紙を作る！ 二度と皮紙には触らない！ 黙ってたなんてラウーの意地悪、教えてくれてたら皮紙に突っ伏して寝たりしなかったのに――」

マスクのように塞いでくるラウーの手に妨げられながらも叫びまくって、泣きわめいて、かれた声で文句を並び立てた。

「婚姻届も、皮紙だったら絶対にサインしない！ 一生しないー！」

「承諾した。ボル・ヤバル行きを手配する。資金を用立てる」

背後から言い含めるような、呻きに近い声が降参を告げてきた。同時に両腕が破壊的な強さで巻きついてくる。

ぐえっ苦しい、肺から空気を押し出して黙らす気だな！

「望みどおり書店の娘になれ」

極めて合理的に黙らされてグツタリしたところへ、囁きが落ちてくる。耳たぶを噛まれそうな近さで、濃密な気配を注ぎながら。

「そして正式に私の妻になれ」

「………うん」

こんな優しい命令を受けたことがない。

何度でも何度でも繰り返し思い出せるように、心の一番熱い場所へ染み込むのを待った。

「それがおまえの自己実現ならば貫け。人々が自由に自己実現を目指すとき、知の時代が開花するだろう」

はい？

ラウーにちゃんと好かれたい、そのために自分に自信を持ちたい。そんな不純な動機が何だか力強い話になってきたよ？

「私にとって知の時代は風のようなものだ。吹き寄せてくるのは感じるが、木々や雲の様子で間接的に判断するしか出来ない。タイラ―師の言葉から推測するしかなかった」

桐花はゆっくり頷く。

文明の風化。知識の運用基準。人の中の悪意、魔性。文明の番人が戦うものは常に不可視だ。

「だがおまえは知の時代の娘だ。おまえがいると私は明瞭に将来を

思い描ける。桐花、アダマスに知の風を吹き込め。風の行く手を阻むものは私が排除してやる」

えっと？ 単なる個人的恋愛的願望が、知の時代の旗手にされるよ？

そろりと背後のラウーを仰ぐと、異色の視線に捕まった。豊饒の大地と瑞々しい新緑の色。見ているだけで、温かなものを生み出せる予感が満ちてくる。

ああこれいつもの罨アングルだ、微笑んでるように錯覚するもん。誇らしげに見守られてる気がしちゃうもん。

アングルの罨じゃなく、正面から向き合ってもそんな顔をしてもらえる日が来るように。

わたしはペンを剣に、本を盾にして、ラウーが挑むものへと共に進んでいけるはず。

43・旗を揚げて進め(後書き)

『青い鳥ルーレット』本編終了！ 更新を楽しみにしてくれた皆様
ありがとうございます！

続編については、書ければいいなーと考えてみてはいるんですが、
本編で書きたいことをほぼ書いてしまった気がしてるので、ちよっ
と充電してみたいと思います。

1. あなたは使えません

発見された場所や時代の科学水準から逸脱したモノをout of place artifacts 時代錯誤な工芸品 オーパーツと呼ぶならば。

と、ラウー・スマラグダス、アダマス帝国空軍大佐は婚約者を見下ろして満足そうに続けた。

「おまえはout of place person、オーパーソンだ」

現代日本の英語教育を受けた江藤桐花^{えとうとうか}にとって、out of . . . で始まる熟語でまず思い浮かぶのはout of order 故障中 である。

悪印象なout of 判定を言い渡した婚約者を仰ぎ、桐花は自慢の営業スマイルをキメた。両親が営む書店を手伝って育った桐花の熟練の技だ。

「白魔なんて人外なあだ名の外道さんに、錯誤とか言われたくないです」

ラウーには理解不能な日本語で言い返す。自分の腸で首を吊れと自虐的懲罰を食らわなかったための反則技だ。

しかし熟練の技が必殺技とは限らない。対戦相手は、スルーという究極の必勝スキルをマスターしていた。聞き返すどころか、眉毛一本動かさない。

「レオナルド・ダ・ヴィンチ。ガリレオ・ガリレイ。アインシュタイン。おまえの世界に存在した傑出した頭脳は、科学の進歩した並行世界からの渡来者だったという可能性も面白い。おまえのように偉人への冒涇だよと呟きながらも、桐花はなるほどと思う。

『書店の娘は清楚なガリ勉じゃないとダメなんだ！』と父が熱弁するから、桐花は学校名を言えば感心してもらえる程度には勉強してきた。清楚かどうかは別として。

とはいえ、所詮ただの一学生。歴史に燦然と名を刻む偉人と同列にしようものなら、学問の神様にたたり殺されても清々しく絶命できそうなほど小さな頭脳だ。

そのささやかな頭脳がオーパーソンなどと持ち上げられてしまう理由を、こう呼んでいる。

トレード。

桐花は、世界はひとつだと信じていた。人類みな兄弟的な大らかなものではない。千葉か東京か不明な場所にあるおとぎの国でしかそうした博愛精神に触れない桐花の世界は、真逆の意味で小さな世界だった。

世界が他にあるとすれば見果てぬ宇宙の知的生命体のいる惑星か、あの世か、そうした実体のない曖昧なものだと思っていた。

そんな認識は、変形した地球へと唐突にブン投げられて崩れ去る。世界を替えたいという切なる願望によって、桐花は『紡ぐ家のトカ』という並行世界の自分と世界を交換、すなわちトレードさせられた。トレード先の地球は数百年前、木星と月の移動によって大規模な地殻変動を起こしたという。

人類滅亡の危機から這い上がってきたその地球において、ラウー・スマラグダスは強大な軍事力で領地を拡大するアダマス帝国の軍人だ。正確無比な矢で敵機である巨大鳥を撃墜し、戦場へ白い腹をさらして散らしていくさまは白魔 豪雪の被害をもたらす厳冬の化身 と評されている。

桐花もその白魔の矢の片鱗を間近に見た。が、脳に施錠できるならば封印したい恐怖体験である。

ラウーは一方で、かつて壊滅的損害を受けた文明の再興に情熱を燃やし、文明の番人を名乗っている。

ちなみにこの番人は番にとどまらない。信念のためならば女子供や老人さえも、軍靴と裏取引と極寒目線で蹴り伏せる。人道より信念を優先する外道は、妻の椅子さえ知識の伝達者・桐花への厚遇として差し出した。

あんな人、世界がいくつあったって、他にいるわけないよ。

不覚にも好意的方面にまでそう確信してしまった桐花は、ラウーの妻という椅子への誘惑と反発に揺れた。結果、単身にてボル・ヤバルという広大な島で自分を磨く宣言をした。費用を婚約者に請求する矛盾は小さな頭脳から追い出した。

宣言から五日後。五日ぶりに現れたラウーは、人材と工場用地と費用と滞在先を準備したと告げてきた。

もともと険悪な目尻に険悪な疲労をにじませるラウーの背後で、カルロ・レオン副官が立ったまま白目で睡魔に丸呑みされている。どんな職権濫用の突貫作業が行われたのか、小さな頭脳は考えることをあえて放棄した。

「皮紙でない紙を成立させた者として、おまえはおまえの作った紙に姿を留めるだろう」

製紙の歴史に名を残す。トレードの時についてきた百科事典の内容を再現するにすぎず、自力の発明じゃない。なのに、自分磨きになるの？ そんな不安を抱く桐花に、淡々とした敵命が下った。

「二週間で完了しろ」
この世界の一週間は何日間だったか、桐花は真剣に思い出そうとした。

「異議を唱える合理的な論拠があるならば、二十秒与えてやる」
何しろ木星のマーブル模様が視認でき、月が落ちてきそうなほど接近している地球だ。桐花のいた世界と暦が違っていても不思議はない。

「あのおう、一週間って七日で合ってたっけ？」

「そうだ。今の質問で八秒の浪費だ」

「ギャー！一秒の長さも正確に記憶してるのっ？」

「そうだ。論拠がないならば残り時間は没収する、出発しろ」
ラウーの頭脳は驚異的な記憶力を誇る。

「記憶容量に圧迫されて気遣いの回路が死んでるんだ！絶対そうだーっ」

日本語で悪態をつく桐花だったが、

「制限時間はあと十三日二十三時間五十九分十五秒」

と氷河のように冷静さが堆積した声音でカウントされ、慌ててポル・ヤバル行き軍鷲によじ登ったのだった。

「あれから四日……」

発声よりも嘆息成分がはるかに多く含まれた言葉の発信源を、カルロ・レオン副官は片眼鏡越しに眺めやった。

トーカ女史。机に山積する紙の試作品を前に、ドンヨリと思い悩んでいるようだ。

毛羽立ってきめの粗い紙たちの上へ皿が置かれている。鎮座する軍食堂のランチ、白身魚のフリットはとっくに湯気を失い、油を吸ってドンヨリしている。

ああまたっすか女史、また食事を忘れて没頭したんすか。あれを秘密裡に処理しなきゃ、厨房のアントニオとかいう若造にトングで小突かれる。あいつの方が年上？ 知ったことか。昨日は不意打ちだったからやむを得ない、次は華麗によけてみせる！

いや落ち着けカルロ。いやスマラグダス大佐付副官カルロ・レオン、たかが食堂の小物など構うな。問題はトーカ女史だ。大佐との婚姻届へのサイン受領は副官としての初仕事だったのに、紙が虫だとかいうクソ馬鹿らしい理由で拒否された。

ウツ、あの時の大佐の責め苦オーラ、『入水して出直して来い』
的無言の圧迫を思い出しただけで胃が焼き切れそうであります！

かくしてカルロは、たった数分で完了するはずだった初任務を遂行するため、はるばるポル・ヤバルまで飛ばされたのだった。宮殿を中心とした基地の片隅の製紙工場で、技術顧問であるトーカ女史を補佐している。

滑り出しは順調だった。トーカ女史の指示で事前に準備された原料は粉碎され、煮溶かされ、添加物を混合され、漉かれて見事に紙

となった。

アダマス帝国の首都が置かれた城塞都市はもともと、ネイティヴと呼ばれる民族の土地だった。ネイティヴの居住地である海上を侵さない約束で、空中都市が建設された。だが文化の違いが様々な軋轢を生み、帝国と先住者は長きにわたって不和な共存関係にあった。

ネイティヴは情報を刺繍で保存するという。数百年前の木星と月の大移動による天変地異で人類の知識は拡散あるいは消失したが、ネイティヴの刺繍は耐えた。アダマス帝国が保有せず、かつ欲している、優れた科学技術情報を秘匿していると言われてきた。

その不和と情報獲得をネイティヴ・トーカ女史との結婚という形で一挙解決してしまったのが、スマラグダス大佐だ。結婚後のスマラグダス大佐の躍進には、ネイティヴの情報開示が作用しているのは間違いない。

噂通りにさすがネイティヴ四千年、紙は出来た。

だが、とカルロは片眼鏡をきちりとはめ直した。視界は整ったが、視界の中心たるトーカ女史はドンヨリ顔のままである。

出来た紙はきめが粗く、インクがにじんで皮紙より使い物にならない。婚姻届になり得る紙質とは言いがたかった。

「あつちの世界と植物が違うのかなー気候の違いかなー」

と白身魚のフリット放置で、女史は意味不明なことを呟いている。ネイティヴは血の赤い動物を食べないと聞いている。今日は放置しているが、女史は白身魚も鯨も食べる。一方、ネイティヴの主食である食用虫の皮紙を嫌う。つまり女史はネイティヴらしくない。

だが、女史は奇行で有名だ。小船で沖へ出奔して遭難したり、体中に針を刺して軍鷲の厩舎に飛び込んできたり、毒蛇に咬まれても死なない祈祷師だとも聞く。おかしな言動を追及しても無意味なのだろう、とカルロは考えた。

アダマス帝国発展のため、そんな故障した奇人を妻に迎えようというスマラグダス大佐の愛国心、自己犠牲精神は尊敬に値するッ！
「カルロ・レオン副官、入室致します」

感動で潤みかけた眼が乾くのを待つて、カルロはようやくトーカ女史の部屋へと踏み入れた。

宮殿の離れはボル・ヤバル占領直後に伝染病の隔離病棟として使われたため、今でも近付くのを恐れる者が多い。だからひどく人気がないが、立地的には特等である。女史はこの離れの最上階に滞在するのを許されている。

女史は慌ててドンヨリと寄りかかっていた頬杖を外し、背筋をシヤキツと伸ばした。緊張して瞬きを繰り返す黒い瞳は、カルロに継父を思い出させて落ち着かない気分させるのだが。

「3・14159265358979！」

と一気に数字を吐き出し、どうだと挑戦的に反応を待たれると、怯えた継父の面影など霧散してしまう。

カルロはイラツとして答えた。

「円周率の暗記は女史の業務にないと思いますが」

「わああむかつくー！ 褒めてもらえと思ったのにー！」

アダマス人には馴染みのない日本語だったが、桐花の悪態は思いつきり顔に出てバレたらしい。レオン副官は不快そうに細い眉をひそめている。

円周率の桁数で初対面の学力を判断してきたレオン副官に一矢報いようとしたのだが、桐花の企ては『業務外』の一言でもろくも崩れ去った。

「そりゃあ現実逃避だつて分かってるけど」と、クズ紙という現実を睨みつける。

百科事典の記載を復元した製紙法は壁にぶち当たっていた。どうやら、インクにじみを軽減するために混ぜる樹脂に問題があるらしい。松ヤニが代表的な素材のだが、ボル・ヤバルには適当な松がなく、代替品として使ったヤニがうまく働いていないらしいのだ。

書けない紙はトイレットペーパーとして好評を博した。だが桐花

は自分磨きとして製紙に取り組んでいる。自分でなく人の尻を磨いてどうするんだ、とトイレトペーパー、いやクス紙の山を前に嘆いていたのだ。

「……………それを処分してもらえらなら、」

不愉快そうな目でレオン副官がそれと呼んだのは、昼食になり損ねた白身魚のフリットのようだ。

「助言を差し上げたいと考えます」

冷えて油を吸い、ドンヨリとベタついたフリットは瞬時に桐花の胃袋へ格納された。

「む。食べて欲しかったのではなく、捨てたのは女史と分かる方法で捨てて欲しかったのです」

補佐する相手の栄養状態は、どうでも良かったらしい。

レオン副官は出会った当初から女嫌いの雰囲気を漂わせている。

嫌いなのが女性全般なのか桐花個人なのかは、桐花の精神衛生上あえて問い詰めたくなかった。

「吐こうとしなくていいです、汚いのでやめてください。仕方ないですね、言いますよ。東部にアマゾナスという大河があります。河

口には日系コミュニティがあります。彼らは手先の器用さから

「行く！」

「……………器用さから加工技術が高く、コミュニティは職人村と呼ばれています。ボル・ヤバル産の樹脂の特性について詳しい者を探して呼びつけ」

「行くー！」

レオン副官の薄青の瞳は、ドンヨリしたフリットを眺めるより数倍、不愉快そうな色を濃くした。

「……………呼びつければヒントが得られる可能性があります」

「行くつてばっ！ ついてきて！」

「それは……………」

不機嫌そうな沈黙が降りた。神経質な気性から、遠くない将来M字を描いて後退していくに違いない副官の額の生え際がヒクついて

いる。

「失言でありました。同行はお断り致します。職人村については聞かなかったことに」

「どれだけ女嫌いなんだー！」

青年になりかけの少年。髪をオールバックに整えて片眼鏡をかけ、委員長的な大人感を備えた副官は、ものすごく子供じみた理由で助言を撤回した。

「えっと。ラウーとの婚姻届にサインしなかったのを怒ってるのは分かってます。レオン副官はわたしのせいで本来の仕事を離れて、製紙の手伝いすることになっちゃったんだもんね。迷惑かけちゃってますみません」

「ここは自分が大人にならねば、と桐花は思った。

「だからこそ成功に向けて出来るだけ努力します！ 二週間以内に完了させます！」

「どうせ基地からの外出は許可されないでしょう。女史は民間人ですし」

「治安が悪いの？ だから同行したくないの？」

「む。そう、そうであります。ゲリラも活動しているとか。女史の身に何かあれば本官が責任を問われます」

「嘘くさー」。

桐花がじーっと見つめると、紫外線に慣れてなさそうな白い顔はフーツとあらぬ方向へ逃げて行った。が、言葉で追いかける。

「行くからっ！」

トレードが発生して初めて、桐花が知ったことがある。ホームシツクは一に人、二に食べ物、以下三も四も五も食べ物なのだ。

鯨ステーキは美味しい。白身魚のフリットも好物だ。けれど日系コミュニティと聞いた瞬間に脳裏を舞い出したおにぎり、漬物、みそ汁はハリケーンの威力で大和魂を直撃した。

「ダルジ少将に直談判するから！」

ビスコア・ダルジ少将はアダマス帝国總統の自称輝かしき一人息

子で、ボル・ヤバルを統治している。大佐であるラウーより存在も地位も上だ。

だが空軍を主戦力とするアダマス軍人たちにとって、弓の師弟関係は大きいらしい。彼らは同一の師匠に師事している。だから兄弟子のラウーはダルジ少将と親しいし、地位の差に関わらず態度がデカイ。

製紙事業はラウー主導の国家事業として立ち上がった。だから桐花は製紙会社の社長ではなく、製紙プロジェクトの民間からの技術顧問という立場になっている。

単に製紙事業の費用を私財でまかなえなかったただけだろうけど、と桐花は推測した。白紙の小切手を切らせて大佐の私財を食い潰した張本人については、小さな頭脳から丁重に退出願った。

要するに桐花は軍に属さない民間人だ。副官は民間人の便宜は図られないと言っている。

その時ちようど窓の下を、ざくざくと重量のある軍靴たちがランニングする足音、朗らかな軍艦マーチが通りかかった。

「驚にまたがり雲より高く、おおー木星をも退けて、進めアダマス帝国軍チャッチャラー！」

「イエッサー！」

バカでかく底抜けに陽気な声の主が誰か、アダマス軍関係者ならば知らない者はいないだろう。桐花は窓に駆け寄って身を乗り出した。

「ダルジ少将！」

塔の下を通過しかけていた一団は、「i」の字をしていた。先頭の点であるやたらデカイ軍人が、ん？ と首をめぐらせる。

駆け足にマッチョな体が揺れるたび、まとった石鎧の赤い石板がゆらゆらと燃え立つ炎のように輝く。磨かれた銅色をした肌に、くせのある黒髪。濃い眉の下の黒い瞳はきよるきよるした後、がっちり桐花を捕捉した。ニカツと笑われると白い歯がまぶしい。

ダルジ少将は太い腕を、どっかのひよわな副官なぞ片手でくびり

殺せそうな太い腕をブーンと振ってきた。

「ようう、ラウーの恋女房！」

こいによ………?

振り返そうとした桐花の手は固まる。ぱちくりしながら周囲を見渡してみる。背後に、敬礼で硬直しているカルロ・レオン副官がいた。

うん、キャッチャーはピッチャーの女房役と言うし、と桐花は考えた。ラウーの副官はラウーの女房かもしれない。でも男性の副官に恋という字が付くのは明らかにマズい。

「どーした！ 単身赴任で寂しいなら俺が相手してやるぞー！ 何でも言うこと聞いてやるぞー！」

「ほんとですかっ？」

不貞！ 不貞でありますっ！

iの字の棒部分を成していた兵士たちが不穏にどよっと騒いだのを、トーカ女史は不思議そうに首をひねっている。ああこれが知れたら、ダルジ少将に夜のお相手を許したなどとスマラグダス大佐に知れたら。

『首が落ちても会話が可能か、知りたくないか？』

などと言われて、ねじ切れるまで首をひねらされることにっ！

奇人変人であろうと女史は和平の花嫁。もげた首の会話可否報告者はまさか、不貞を防げなかった自分ではなからうか。

副官生命を上司の妻の不貞問題で断たれるとはイタタ胃液が沸騰しそうだ。

「じゃあお願いがあるんですけど、」

軍服の腹部をつかんでヨロめくカルロをよそに、胃痛の元凶は元気に声を張り上げた。

「アマゾナス河口の職人村の調査に行かせてください！」

「はっはっは、なんだそんな事か！」

と少将が太陽神の鷹揚さで笑顔を咲かせる。

「ダメー」

が、太陽神は瞬時に眉間を曇らせた。

「ダメだダメだダメだ！ おい笑うな野郎共、十周追加だ、行くぞついて来い！ おお我らの矢羽は勝利の翼、進めアダマス帝国軍チヤッチャラー！」

「イエッサー………」

ランニングを再開した一団をぼかんと見送りながら、女史はしばらく硬直していた。やがてそろりと振り返る。

「えっと……皮紙じゃない紙を作ればいいんだったよね。

完成したのがトレットペーパーでも、紙は紙だよね？ 少将がダメって言ったらダメだよね！」

そうですねという答を期待する目で詰め寄られる。が、婚姻届に足る品質の紙が完成しなければ、初任務さえ遂行できない三流副官の烙印がウウウ首より前に胃がねじ切れる！

「You're out of order」

異議を却下します、という表現をネイティヴは知らないのだろうか。トーカ女史は、故障してると言われたようなシヨック顔をしていた。

ふ、あながち外れてもいないっすね。

無益に増えた胃酸を薄めるべく水を求めて、カル口は部屋を後にした。

2・名前は大事だよー

「職人村に行っちゃいけない理由は何ですか！」

塔の階段を駆け下り、ランニングする隊列を追いかけて、桐花は食い下がった。

「ああ？　んなもんアレだ。アレだからだ」

何だっけな？　の顔でダルジ少将は背後の兵士に視線を投げる。

「潮流であります、サー！」

意外な答が返ってきた。

質疑応答終わり、とばかりにランニングが続行される。なんてつれないっ！　よしここは笑いを取る方向で！

「なぜ潮？　波に乗って巨大イカが人に卵を産み付けに来るとか？」

「何イあいつら卵で生まれんのか？　怪物の身分で生意気だな！

おい知ってたか？」

「イエッサごぶへっ！」

知っていたと答えかけた兵士は、瞬速でスピードアップした背後の兵士たちに踏み倒されて消えた。

「いいえ、全く知りませんでした！」

「てつきり巨大イカは、深い海底に溜まった魚の死骸から湧くものかと！」

「卵で生まれるなどと夢にも！」

っていうか、誰も巨大イカ存在を否定してくれないんですか？

「あいつらの迷惑は人を食うだけで充分だ。ま、沖しか出没时间がない」

だからアダマス・ボル・ヤバル間には船便がないのか！

「あそこらへんは航海がめんどくせー。歩いていくとか言うなよ、森は巨大ヒルの住みかで陸の孤島だ」

足の多すぎる生物はイヤだが、足のない生物も同等にイヤだ。

「うっ……じゃあ、鷲で職人村へ」

「ああ？ んなもんダメだ。理由はほら、アレだ」

何だっけな？ の顔でダルジ少将は背後の兵士に視線を投げる。

「えー、驚不足であります、サー！」

「そぞ。ボル・ヤバルのユピテライズした鳥は撃墜しちまったからな、驚が足りねんだよ。徴収したカラスを返却しちまったのはラウーの失態だな！」

桐花のいた地球と違い、トレードしてきたこの地球には突然変異を起こした生物が目立つ。多くは巨大化で、接近により視覚的に巨大化した木星にちなんでユピテライズと呼ばれている。

巨大化だけでなく、見慣れぬ特徴をユピテライズで説明しようとするところがある。ラウーの左右で色が違う瞳は遺伝子疾患と考えられるが、遺伝子の解明されていないこの地球のダルジ少将は『あいつはユピテライズだ』と言っていた。

「こつ、これは一応、国家事業、でして、」

鍛え上げられた軍人たちのランニングは見た目以上に速い。全力疾走に近い桐花の息は乱れてきた。

「ああ？ ダメなもんはダメだ、アレだから、なあ？」

何だっけな？ の顔でダルジ少将は背後の兵士に視線を投げかける。

「えー、あー、」

返答を丸投げしてない？

疑う桐花から顔を背け、少将の視線を受けてしまった兵士はしばし目を遠泳させていた。

「えー、国家事業にも優先順位があるのであります、サー！」

「そぞ。クソ拭き紙の生産なぞ、つまらん」

クソ拭き紙じゃなくて婚姻届です！

上がった息で何の反論もできず、桐花は隊列から脱落した。

「ああっトーカさま、しっかり」

「どうぞ我が手におつかまりください！」

「いいえ我が手に」

芝生に座り込んでせえせえと息をつく桐花に、兵士たちの手が次々と差し伸べられた。

わたしのせいでランニング十周追加になったのに。なんて騎士道精神に溢れた人たちなんだろう。アダマス軍万歳！

「ありが、とう、ぜえはあ」

服の股に巨大鍔が貫通してても放置しとく某大佐とは大違いだ！乙女を石棺に詰め、軍靴で蹴倒し、壁紙ですまきにする超反フェミニストなラウーとは、あつハツキリ言っちゃった。

感激する桐花の手を、兵士たちはぎゅうつと握ってくる。戦場で救いの女神に出会ったかのようなキラキラしい瞳で覗き込んでくる。

「これくらい何でもありません」

「そうですとも、尻の痛みに比べれば」

「驚乗りの敵は尻にあり、と言いました！」

……は？

桐花を囲んだ兵士たちは、ウンウンと激しく頷いている。

「我々が少将攻略のヒントをお教えしましょう」

「成功の暁にはぜひ、クソ拭き紙を我らに」

「クソ拭き紙を我らに！」

クソという下品な単語をこれほど真剣に連呼されたことはない。

言葉でクソまみれにされながら、その必死さで桐花は彼らの抱える問題に思い当たった。

痔か！

こいつら、わたしが痔に優しい尻拭き素材に見えてるのかー！失礼なっ！

ラウーに好かれたという可憐な乙女心、健気な恋心で婚姻届用紙を作りに来たんだ！痔に優しい紙のためと言われて助言を受けるとでも？わたしにもプライドはあります！

「ぜひ教えてくださいっ」

ガツ、と音立てて桐花は兵士の手を握り返した。

『書店の娘になれ。そして正式に私の妻になれ』

ラウーとの約束が全てに優先してしまう。失望されたくない。出来ることをやらずに、出来ませんでしたと言えるわけがない。

クソ拭き紙を我らにーと呪文のように唱える兵士たちが教えてくれた助言は、大した事なかった。ダルジ少将の興味をそそるモノで釣れ、それだけだった。

陥落すべき相手は追加の十周を走り終えた兵士を鷲の鞍に立たせている。鷲をけしかけロデオ状態になると、兵士は尻から芝生へと転げ落ちた。悶絶している。取り巻く兵士が沈痛な面持ちで十字を切っている。

「鷲を乗りこなせずに弓が撃てるか！ 俺の手本を拝め！」

と、少将はデカい体に似合わぬ華麗な平衡感覚を披露している。

戦時であっても鷲の鞍で立って撃つ場面なんか絶対ないんじゃないだろうか。待て待て、あれが得意ってことはダルジ少将もひよつとして、待て待て待てまさかラウーも？

「良く見とけ、膝を使えよ！」

「イエッサー！」

幸いにも、俺スゲー、なパフォーマンスを終えた少将は機嫌が良さそうだ。疑惑は脇へ押しやって、チャンスと桐花は走り寄った。

「少将、こういうのはどうでしょう！ 職人村へ連れて行ってもらえるなら、少将のご興味のある事柄について百科事………ネイティブの知識を総動員して情報提供を」

「ああ？ そいつぁ無理だな。俺の今の最大の興味は銃火器の量産だからな！」

基本戦闘が弓であるアダマス空軍で、銃の使い手はほんの一握りらしい。所在も出現も知れぬ武器商人から、恐ろしい値で買い付け

るしかなかったそうさ。

兵士の助言はあつけなく無駄に終わった。銃火器製造法など百科事典に載ってるわけがない。遠巻きにする兵士たちの、「クソ拭き紙……」という恨めしげな呟きが風に乗って聞こえた。

「よしラウーの愛妻、」

デカい声で事実でないことを叫ばないで欲しい。愛でもないし妻でもない！ そうなりたい自分が突っ込むのは虚しい！

「あの、桐花と呼んでいただければと」

「へえ、そんな名前だったのか」

覚えてなかったのか。だから嫁候補とか面倒な呼び方をわざわざしてたのか！

「はい、覚えてもらえたら嬉し……」

「やだね。名前が増えると、女を抱いてる時つい間違える」

サイテーこの人サイテー！

そういえばラウーはあの夜、わたしの名前を連呼したつけ。息を切らせ、余裕なく低く、何度も。ハイと返事したら、呼んでいない言っているだけだ！ とものつすごい睨まれ方をした。

律儀に返事したのに、言ってみただけー、だなんて。小学生かつ！
「まあいいや、おまえ」

それでも名前を覚えてもらえないよりマシかもしれない……
。。
「俺のコレクションを見たいだろ？ 見たいよな、来い！」

正直、銃には興味がない。でもこれもクソ拭き……婚姻届用紙のため、ご機嫌取りのため！

佐官でもなかなか入室を許されないといいありがたき執務室に引きずり込まれ、少将の有能そうな副官たちに生温かい目で見送られ、奥の武器コレクション庫へと連行された。

部屋の四面はとろりと重厚なツヤを放つ木のボードで囲まれている。二面は弓で、一面は刀で、残りの一面には拳銃が所狭しと飾られていた。

「見る、何語か知らんがこの銘が入った銃は特に出来が良くて、精度が高い！　これがやらしくてなー、分解しても分かりづらい場所に彫ってあんだよ。早いとこ武器商人を捕まえて、こいつの出所を白状させたいところだ」

「はあ。銃を作ってる人をアダマスに取り上げちゃおうってことですね」

「おいおい、召し抱えると言え。まーそうなたら商人どもは商売あがったりだ、玉石混交のをドンと売ってサーツと消えやがる。その中にこの銘があつたら宝を掘り出したようなもんだ！」

「はあ……あ？」

しぶしぶとお付き合いで視線を落した銘を、桐花は読むことができた。見慣れた言語だった。

『請救助 太市』

こうたすすけ　たいちさん………なわけは、ないよね。

「ダルジ少将。日系コミュニティの職人村に興味はありませんか？　これ、日本語です」

3・白魔で死神で閻魔

明日、職人村へ船を出してやる。男と女の約束だ！

そうダルジ少将が約束してくれた、とトーカ女史は喜色満面で報告してきた。約束の後半が不安と胃痛をかき立てる。

以降、女史は宮殿離れの自室にこもっている。書く仕事があるそうだ。試作品のトレットペーパーではインクがにじむからと、虫の皮紙を運び込んだ。クソ暑いのに、肘まである手袋をはめてまで婚姻届も手袋はめてサインしてくれないっすか？

で、ついでに夕飯のB定食、食べるか捨てるかしてくれないっすか？

しかしサインも食事の気配もないまま、基地は夜に沈んだ。司令部である宮殿は中肉中背のキノコが密集したような形をしている。金箔がゴテゴテと貼られた塔の屋根が月光を反射し、夜光する毒キノコのようなのだ。

波に翻弄される小船から、遠ざかるこの毒キノコへ別れを叩きつけた夜があった。もう二度と見ることはないと思っていたのに、今や見るどころか中を歩いてさえいるとは。

カル口は頭を振って、過去の記憶を振り落とした。一日の業務の締めくくりとして挨拶をするべく、離れの階段を上がって行く。亜熱帯のボル・ヤバルでは風通しを確保するため、ドアを閉めないことが多い。来訪を気付かせようと、わざと足音を立てて登った。

「失礼しま・・・」

素早く声を飲み込んだ。
寝ている。

カル口には妹がいる。血は半分しか繋がっていないが、妹は妹。世話もした。寝ている子を不用意に起こすのが面倒な事態に発展するのは身に染みて知っていた。

机に突っ伏す女史が、起こしても面倒でない年齢なのは分かって

いる。奔放にさらけ出された白い首筋とか肩口とか、妹にはまだあんな曲線はない、あつてたまるか、だが妹ならばすぐに叩き起こしてみだりに肌を見せるなど叱るところだッ！

ランタンは点けっぱなし。軍の資源の無駄遣いだ。消したい。

が、上司の表向きには妻である女性の眠っている部屋に立ち入ったと知れば、寝た子を起こすより面倒な事態に発展する。

B定食は、ああこれも面倒だ、全く手をつけられていない。む、胃が。胃酸がつ。水ッ！

女史は問題ない、放置しても風邪を引くような気候じゃない。ずるずると兵舎に戻ると、ロビーの水差しは空だった。小さく呻いてから夜道を引き返す。

食堂は常に開いている。片眼鏡で矯正しきれていない視力を精一杯駆使して、厨房の夜当番にアントニオがいないことを確かめた。別に避けたいわけじゃない。会ったら大佐夫人は美味しく食べてくれたかなどと聞かれてウザいだけだ、それだけだ。

並んだ水差しから注いだ水を一気に胃へと流し込む。息をついていると、不意に声をかけられた。

「やあレオン君、相変わらず胃痛かい」

慌てて踵を揃えて敬礼した。ダルジ少将の副官頭、シュレイダー氏だ。穏やかな笑顔をした壮年の氏は豊富な知識と経験、主を補佐する手腕から副官の鑑と称えられている。

食堂の一角からダルジ少将の朗らかな笑い声が響いてくる。酒盛りする少将に言いつけられたのか、シュレイダー副官はたつぷり入った水差しを厳選して手に取った。

「無理もない、突然だったからね。まあ覚悟したまえ、少将は旧友の来訪に飲み明かす気でいらっしやる」

少将の友人来訪で、なぜ自分が覚悟する必要があるのでしょうか。ようか。

「む……失礼ながら、来訪とはどなたが」

シュレイダー副官は穏やかな笑顔のまま、カル口が手にするコッ

ブに水を注ぎ足した。

「参謀長の急病のため、明朝の会合に代理出席なさるそうだ。酒宴を中座して離れへ向かわれたよ、君のスマラグダス大佐は」

ガシャーン。びしゃー。ヒヤツ！

どこかで何かが砕け散る硬質な音、中身の液体が派手にブチまけられた水音、妙に裏返った声がした気がして、桐花はふと目を覚ました。

いけない。翻訳してて、またつい寝ちゃってた。だけど。

うたた寝しても、ここには叱る人がいないんだもんね！

正確には叱られるわけじゃない。叱られる方がはるかにマシだ。

起きていると激しく主張しないと、投げ落とされたり驚の餌にされたりした。この恐怖の経験則とはもうサヨナラだ！

しかも百科事典を枕にしたぞ！ 虫皮紙に突っ伏してなかったぞ！ えらーい！ すごーい！ 学習してる！

感動に浸りつつ、ニヤける頬を押さえていると。

「あれ？」

銃火器について調べようと翻訳した皮紙たちに、異変が起きていると気が付いた。

添削されている。

容赦の一片もなく文章を切り裂き、ダメ出しを示す線。原文を留めないほど訂正を入れてくる、几帳面に整った字。

「あれえー？」

額が、背筋がひんやりと汗を帯び始めるのが分かる。レオン副官が翻訳に関わったことはない。字を見たことはある、もっとクセが強かった。

じゃあ誰が添削したのかなー？

誰か来たことさえ気付かなかったよ。

誰かがネチネチ添削している間、わたしってばぐーぐー寝てたの

かなあ。

誰か……えーいラウー以外にいるか、来てたのか、不意打ちなんて卑怯すぎるー！

そ、それに起こさないで添削だけして行くななんて怖い、怖すぎる、もしかして椅子から立った瞬間に天井が落ちてくる罫とか仕掛けて行っただんじやないだろうか。

わーん学習してなくてごめんなさい、恐怖の経験則お久しぶりです会いたくなかった、助けてー！

タタタ、タ、ヨタツ。

呼応したように、窓の下を遠くから重量のない駆け足が近付いてきた。階段を上がってくるが、時折ヒュウヒュウと気管の音だとしたらかなりヤバそうな息継ぎが入る。乙女を助けに来たヒーロ―にあるまじき弱々しさだ。

でもまあ良かった、あれがラウーの足音であるはずがない。ラウーならもつと尊大で、高らかで、格闘技の入場BGMか警告音が鳴り響く幻聴がする。

部屋の戸口に現れたのは、外れた片眼鏡をブラブラさせ、髪を乱し、青いんだか赤いんだか妙にドス黒くくすんだ顔色のカルロ・レオン副官だった。

「ヒュウウ……た……大佐はツ？」

「あ、やっぱ来てるんだ……」

どこに？ と疑問を貼り付けた顔で見合った後、桐花と副官は階段に突進した。

「イヤアアア通して、起こさずに帰るラウーなんてありえない！

怖いよー！ 明日で世界が終わるんだー！」

「馬鹿な……ことをツ、ヒュウウ、今日でありますツ」

体力は自慢でなさそうな副官の脚は、ここへ来るまでに限界を迎えたらしい。階段を下りられずにガクガクしている。生まれたての小鹿なら可愛いのだが、キラつく目で肘をつかんでくる青年はただの足手まといだ。

「待つ、自分が先にツ、行かねばヒューコホー、副官たるものツ」
主の帰還を誰より早く出迎える、それこそ妻よりも。執事ばりの副官魂を見せるレオン副官の腕を、桐花はごめんねーと軽く振り切つて階段を駆け下りる。

「か、髪！」

断末魔のような叫びが降ってきて、桐花はすでに見えない階上の副官を仰いだ。

「髪を解いて、いく、べき、ですッ……………」
静かになった。

ボル・ヤバルは暑い。髪はネイティヴ風に後頭部で一つに結んでいた。でもそれをほどいたところで世界の終焉を免れるとは思えないので、無視しておく。

幸い夜空は晴れ渡り、桐花の世界より大きな月は煌々と硬質な光を降らせている。金箔屋根をつやめかせる宮殿へ、桐花は走り出した。

『宮殿へ歩いて行かれ……………』

『食堂へ向かわれ……………』

『ダルジ少将と……………』

誰が、と固有名詞を挙げる者はいない。桐花が焦つてきよろきよろしているだけで、近辺の兵士が素早く教えてくれた。素早い割に最後まで言い切らずに赤面し口ごもるのが謎だ。

しかし迫り来る不可視の吊り天井に追いついて、桐花は礼を叫び返しながらか軍食堂へと駆け込んだ。

前政権の夜会場だったという広大なホールは、贅沢の名残を豪華な天井画、壁や柱の凝った装飾などに留めている。かつてきらびやかな靴たちがステップを踏んだのであろう床には、質実剛健な長い木製テーブルがずらりと並べられている。

勤務を終えて談笑する者、夜勤前に食事を取る者、タバコや酒を

手にする者。夕食時が過ぎていても食堂はざわめき、軍服が行き交っていた。続きの間を改装して作られた厨房からは、肉と油の濃厚な匂いと湯気が湧き出している。

奥の一角は優美なアイアンレースのパーティションが立ち、佐官以上の高級士官専用ラウンジがしつらえられている。そこから食堂に響き渡る朗らかな声に呼ばれた。

「よう、ラウーの体形的幼妻！」

ケンカ売ってるんですね？

桐花は熟練の営業スマイルを炸裂させる。

職人村行きの約束は取り付けた、もうご機嫌取りをしなくてもいいんだ！

「こんばんは、アダマス帝国總統の輝かしき一人息子さま！」

「おう何だ、いまさら。あーそうそう、レンカちゃんは元気か？」

効いてない。しかも少将お気に入り姉の名前はすっかり覚えてるのを主張しやがった。負けた。

力が抜けてパーティションの端につかまった時、また呼ばれた。

「桐花」

典型的に幼い胸の奥底が揺らされて、思わず一瞬目をつぶる。

桐花の名をアクセントまで完璧に記憶し再現する者は、トレードしてきたこの世界には一人しかいない。

長身を金属鎧に包む白人青年兵士。淡い金色をした髪は軍人の見本みたいにきれいに撫で付けられているが、前髪の一房だけは色素が抜けて白い。鷹を思わせるキリリと上がった眉。

その下に配置された目は左右で茶、緑と色が異なる。が、異色であると気付けない者もいるほど、眼力が残念極まりなく冷徹である。死神が予告なく現れても耐性できて怖くないに違いない、と桐花は思った。

人の形をした死神より怖い生物が、黙って隣の席を指す。そこが冥界の入口ですか？

「えーと、製紙事業は順調です！ 添加物に小さな不具合はあるん

ですが、」

冥界の入口席に腰を下ろしながら始めた報告は、即座に死の生き神さまの大鎌に斬撃された。

「私も再会を喜んでいる。当然、健康状態は良好だ」

おお・・・・・・何という切れ味でしょう。

猫には九つの命があると言っけれど。人間にも九つあるとしたら、そのうちの一つが今、刈り取られたよ？

ダルジ少将を筆頭に軍人たちの注視が感じられる。対外的には新婚の妻が、数日ぶりに夫に会ってまず業務報告すべきじゃなかった！

「いえあのっ何度でも言っちゃいます、会えて嬉しいです元氣そうで嬉しいですよ！」

ビシツとスマイルを決めてラウーの首筋に抱きつく。恥ずかしいけど、これ以上命を減らすのはイヤだ！

ラウーの腕が背中に回り、しっかりと抱きしめてくれる。緊張するのに安心する、周囲の喧騒は遠ざかるのに自分の鼓動とラウーの息遣いだけは鮮明に聞こえる、不思議な空間に囚われる。

急襲にパニックっちゃったけど、会えて嬉しいのは本当なんです・・・・・・

「おまえは痩せた」

ギクー。

「胸囲が減少・・・・・・ぐ」

卓越した記憶力を、抱擁時の感覚で胸囲を測るなんてことに無駄遣いするなっ！ と日本語で小さく罵りながら、具体的な数値を言いかけた喉を絞めてやった。

「だって、寂しくて食事が喉を通らなかつたんです・・・・・・」

おおー。と周囲は感嘆と羨望の入り混じった歓声で満たされた。

我ながら見事な言い訳を思いついた！

「・・・・・・そうか」

静かな答え。

言葉の端は満足の封殺に失敗したように浮遊していた。この演技

派めー！

桐花の胸がツキンと痛む。

演技うますぎだバカ………！！

「適切な自己管理を命じてあるはずだ」

急に声量を落したささやきが耳へ滑り込んできた。

「仕事に熱中して忘れた食事回数および遅すぎる就寝時間は、レオン副官から日誌で届いている。舌を噛めば自害できるといっものは迷信に近いが、惑わす嘘をつくおまえの舌で検証させてやってもいい」
あつ命が刈られ………。

4・知らぬが道化

上気で曇るレンズに白金の輝きがにじむ。アダマス軍広しといえど、溢れんばかりの知性を内包する金属鎧の主はただお一人でありますッ！

スマラグダス大佐の隣には生氣のないトーカ女史が椅子に沈んでいる。まるで完璧な満月にかかる雨雲だ！

「スツ、ヒュコー、スマ……ダス大、佐ッ」

脚と肺が制御不能だ。いいのだ副官の本領は体力ではないのだ。前髪がバラバラと崩れてきて視界に黒い筋を作る。

「レオン君、一休みしていきたまえ。お寛ぎのところ、お目汚しだよ」

高級士官専用ラウンジへたどり着く前にやんわりと、しかし厳しい制止をくらった。くそッ不公平だ、トーカ女史はあんな姿でも大佐の隣を許されるというのに！ あんな……。

「ここのステーキはうまいぞ。おい料理長、ラウーに一皿持って来い」

「結構です。適量を適時に摂取していただきますので」

フーン、とダルジ少将が顎を撫でながら興味深げな視線を滑らせる。

「つまみ食いはしたくせに？」

ああ見られてた。当然つすよ目立ちますよ、食堂の軍人全員どこるかシェフたちまで頷いて注視している、トーカ女史のうなじから肩にかけて散在する赤い試食跡を。

だから髪を解けと言ったんすよっ！

魂が抜けていた女史は凝集する生ぬるい視線に気づいてきよとんとしていた。説明を求めて仰ぐのを無視して大佐は、

「別腹です」

と涼やかに答えている。

さすがアダマス軍の誇る参謀、和平の象徴たる順調な結婚を激烈に印象付けていらつしやる。が、方法が少しばかり刺激のかと懸念するのでありますッ！

料理長が、運んできたステーキを大佐に出すべきかテーブル脇で迷っている。湯気の立つ皿は少将の手に奪われて、大佐の前へドンと置かれた。

「食えよ、ラウー。兵士どもが暑さにやられて肉が余ってたんだよ。上が率先して手本を示すべきだろ」

「天変地異を避けたいなら、部下想いの発言は謹んでください」

召し上がることにしたようだ。ざくざくと手早く大佐の口へ収まるステーキを女史が欲しそうに凝視している。はしたない、夕飯のB定食を食べないからっすよ！

「なあ、ラウーの新妻」

そんな女史の腕をつかみ、ダルジ少将がいともたやすく引き寄せ。陽光をたつぷり吸い込んだ明るい銅色の肌、波打つ黒髪でニヤリと企み顔をすれば、海賊が女をさらう犯行現場そのものだ。

「耳貸せ。こう言え、大きな声でな」

「はい？」

ぼそぼそと耳打ちされて怪訝そうにしていた女史は、「何でもおごつてやるから」の追撃にあっけなく陥落した。黙々と機械的な食事を続ける婚約者へ華やいだ笑顔を咲かせ、凜と声を響かせた。

「男の食べ方は男の象徴ですね！」

食堂は異様な静寂に打たれている。

ダルジ少将に要請された女つぽい笑顔……かどうかは見る者の判断に委ねられるが、本人としては精一杯女つぽいつもりで笑顔を継続したまま、桐花は静寂を不審に思った。

男兄弟のいない桐花にとって、軍食堂はカルチャーショックだった。青年兵士たちはろくに噛みもせず、味わいもせず、顔ほどもあ

る肉を飲むように消滅させてしまうのだから。豪快な食べっぷりに男の人とはこういうものかと驚嘆した。

だからとっても実感こめて、男の象徴ですねと感心してみせたのだが。

この、息詰まるのにどこか熱い沈黙はどういうわけだろう？

視線が矢ならば致死級の注目を浴びる中、ラウーがゆっくりとフオークを持ち上げた。ものすごく睨んでくる。視線が矢ならば三回死ぬ。意思を持った粒子が舞うのが見えるような、濃い気配を首筋から立ち昇らせている。

ラウーの舌がフォークの先の肉を捉える。舌先で円を描きソースをじっくり舐め取ってから口腔深くへ押し入れ、グツと強く噛みしめた。

そういえばラウーの食事風景は初めてだ。初めてのはずなのに、何だかデジャヴだ。

「料理長」

奥深くで肉汁を絞り出し、様々に噛みごたえを堪能するような咀嚼のあとに、ラウー・スマラグダスは言った。

「追加で二皿持って来い」

「イエッサー！」

料理長は頬を紅潮させ、ビシッと敬礼をする。どたとたと前屈みで厨房へ走り戻る、その大きく丸い背中にダルジ少将が声をかけた。

「俺には四皿な！」

「よ、四皿………イエッサアア！」

すると兵士たちは一斉にダン！と軍靴を踏み鳴らして立ち上がり、我先にと厨房へ殺到した。

「俺もだ、料理長！ 夜はこれからだっ」

「オレもだ！ つゆだくで頼む！」

「俺にも長くもつのをくれ！」

「夏バテが何だ、腰が砕けるまで食ってやるっ！」

熱気に沸き返り厨房へ、肉へと群がる兵士たちに、桐花は自分の大失敗を知った。

あれじゃフリットを注文できないじゃないか！

厨房に『肉 終了』の石板が掲げられるまで、ものの数分もかからなかった。料理長はトーカ女史の手を握り、

「ありがとうございます！ アダマス兵の健康と子宝は守られましたぜ！」

と感涙にむせんでいたが、女史は「はあ、あの、フリット残ってますか」とそれだけが気がかりのようだった。隣では大佐と少将が挑戦的に睨み合いながらステーキに己のナイフを突き立てているというのに。

アダマス帝国発展のため、こんな淫婦を妻に迎えたスマラグダス大佐の愛国心、自己犠牲精神は尊敬に値するッ！

「これだけ食うと実際、皿数分の運動が必要だな」

「まったく。おいシュレイダー、キャスを部屋に呼んどけよ」

完食した両雄はさすがに苦しげに顔をしかめつつも、意気投合していた。腹ごなしにどうぞ、とシュレイダー副官が強めの酒にカールドを添える。

女史が懐かしいものを発見したように楽しみに眉を上げて、妙なことを言った。

「あ、トランプ」

「・・・トランプ？」

「トランプですよ？ ほらっ」

クッキーをかじりながら、カードの図柄を覗き込んで確認する女史。シュレイダー副官は穏やかな微笑を深くした。あれは小さな子供を見守る親父の目だ。

なんで誰も彼も女史に甘いんだ？ 首にキスマーク盛って男を挑発する子供がいてたまるかっ！

「ネイティヴの方は trump と呼ばれますか。アダマスでは playing cards でございます。トランプはカードゲームにおける最強の札、つまり切り札の意味でございます」

「へえー、ひとつ賢くなった！ と無邪気ににこにこする大人な子供。英語はネイティヴにとって第一言語であるはずなのに！ 頭と胃が両方痛くなってきた。」

「おいラウーの女房」

「なんで自分を見るんすか、女史？」

「おまえだよ。ポーカーは出来るな？ 入れ」

「えっ？ あつわたし、調べ物があるから戻らなきゃ。お先に失礼しまーす」

カルロは飲みかけていた胃酸対策水を吹いた。

世界で最も強大な軍事国家、アダマス帝国提督の一人息子ダルジ少将の誘いを断るだーツ！

「一礼して去ろうとする女史へ手を振って、戻れと必死に合図した。幸い警告が伝わったらしく、ハツとして顔を青くしている。」

「あつ………えつと………おやすみなさい、ラウー」

「一転、頬を赤く染め、ギクシャクと大佐の額におやすみのキスを捧げようとしている。ちがーう！ 少将の誘いより新婚カモフラージュのキスが重大なのかッ！ 誰か井戸ごと水をくれ！」

「だがスマラグダス大佐はわずかに首を反らせて、婚約者のキスをおかわしてしまった。」

「不要だ」

「へ？」

「私は何皿食い倒した？」

「三皿………」

「そういうことだ」

「亜熱帯の夜の汗が、肌の上で急に存在を主張しだす。ねっとり重たい花の匂い。遠く響く、鳥や蛙や獣の鳴き交わす求愛の声。居合わせる者たちの瞳が軍人から男へと還っていく。」

「は、おまえはすぐに解放しないぞ、ラウー。始めるぞ」

カード好きな佐官が呼ばれてダルジ少将がカードを配り始める。

女史は首をかしげながら自室へ引き返していった。

「なあ、俺の参謀」

足元に高温多湿な緊張感が漂う中、手札を眺めながらダルジ少将はのんびりと口火を切った。

「あなたではなく軍の参謀です」

「同じことだろーが。で、俺の参謀。俺は思うんだよ、ポーカーは有限のカードからとつかえひつかえ、己に有利な手を集めて相手を打ち負かすもんだ。人生や戦争に似ているな」

珍しく同感です。とポーカーフェイスでチップが積まれる。

「だがどーも最近俺は、おまえがとんでもねージョーカーを隠し持つてる気がしてならねーんだよなー」

「レイズ」

「そいつは道化のフリして、長い黒髪のクイーンだ。コール」

「だとすれば、私は幸運なのでしょう」

ゆっくりとした会話と逆に、プレイヤーたちの手元は投げるようにカードを繰り、チップを滑らす。

「チャンスの女神には前髪しかないと言われますが」

「ああ？ あー、通り過ぎたらつかめないからか。いくら女神でも後頭部ハゲは食えんな」

「長い黒髪なら、つかんで引きずり倒すことが可能です」

「ふん。俺からかすめ取って、妻にもできるしな？ レイズだ」

ダルジ少将の石鎧が灯に照らされて赤く揺らめく。赤の映り込んだ黒い瞳は高熱を含んだ炭火のようだ。種火を差し向ければ燃え上がりそうな気が満ちている。

「俺はワイルド・ポーカーを許した覚えはねーぞ」

通常のポーカーではジョーカーを使用しない。だがワイルド・ポーカーと呼ばれるルールにおいては、ワイルド・カードという万能札を使って役を作るのが認められる。ワイルド・カードの代表格は

ジョーカーだ。

「どんだけネイティヴが博識つっても、おかしーだろ？ ボル・ヤバルの僻地でしか使われない日本語まで知ってるってのは。知る必要性がねーし」

必要性。その単語にカル口は息を詰めた。

幼い亡命者たちが言葉の通じぬ石鎧に囲まれて心身を震わせた、暗黒の夜が脳裏に蘇る。一人の若い兵士が呼ばれてきた。彼はあらゆる言語で『抵抗を捨てるならば、命を与えてやる』と通告することができた。他とは違う彼の鎧が放つ白金の輝きが、強く目に焼きついた。

「どうやら」

さらりと冷えた声が現実へ引き戻す。カル口は嫌な汗を含んで崩れていた前髪を、慌てて指先で直した。

「少将は私の妻について、誤認があるようです」

そりゃそうだ。結婚していないのだから！

自白と動揺を誘う少将の試みを巧みにすり抜けて、大佐はチップを積み足した。

5・二つ名を持つ無名戦士

おにぎり、みそ汁、お漬物！ だってお箸の国の人だもの！

「進め和食はメタボの救世軍チャツチャラ……あふ」

桐花の和食行進曲は睡魔に飲まれて消えた。ステーキ三皿分の力ロリーを浴びたせいだ。軍港まで早足で先導していくカルロ・レオン副官の痩せた背中を、あくびを噛み殺しながら追いかける。英和、和英の分厚い辞書を入れたカバンが重い。

船旅日和の朝だった。

軍港は海から垂直に切り立った崖に作られている。崖の断面は地層が折り重なり、海原に岩色のミルフィーユを浮かべたみたいだ。

崖を削り込んで、上から下までジグザグを描いて続く階段やスロップが何本も設けられている。月が近いこの地球では干満差が大きく、数十メートルにも及ぶ。階段があれば船は潮位がどこであろうと接岸でき、乗降が可能になる。

上腕が桐花の腿くらいありそうな荷役が、乗るべき船を教えてください。乗船経験のある巡視艇タイプではなく、船体が石板で装甲された小型ながら戦艦の雰囲気バシバシするものしい船だった。「うわ、そっかゲリラがいるんだもんね」

「む……最近、ゲリラの銃火器による武装化が急速に進んでいると聞きます」

船を目指して岸壁の階段を下りていくと、細部が明らかになってくる。アダマスにとっては新兵器である大砲を配備した砲座が船舷に不気味な口を開け、手入れをしている兵士の姿が見え隠れした。

「こんな怖い船で行ったら、職人村の人たちに逃げられそう」

日本人なのに黒船サイドに回ってしまった。

「向こうが友好的とも限りません」

今朝のレオン副官は、いつもに増して雰囲気剣呑だ。

「食事を出されても手をつけてはいけません」

「えー」

食べるなだなんて、樹脂精通者召喚ではなく和製銃調査にこじつけた意味がっ！

「そこだけ食い意地をはらないでください！ 普段は食事をおろそかにしておいてっ」

「おろそかにしてるんじゃないもん、忘れるだけだもん……」

「ぼそぼそと日本語で反抗してみたが口調や表情は万国共通、漏れていたらしい。ジロツと陰湿に睨んだあと、レオン副官は「それでは自分はここで」と踵を返して戻って行ってしまった。

「お目にかかれて光栄です、スマラグダス大佐夫人」

艦長の海軍大佐はシブい短いひげをたくわえた、はにかんだような笑顔が優しいラテン系のオジ様だった。丁重に出迎えて艦内の案内までしてくれる。捨てるように睨んで去っていったどっかの副官とは大違いだ！

海の男らしく焼けた肌と白い軍服の対比が鮮やかだ。高いマストに体軀を持ち上げ、長い甲板を磨き、荒波に逆らい操舵輪を堅持する、そんな頼もしい光景が目には浮かぶ隆々たる筋肉。

たかが一民間女性を僻地へ送迎するために最新型戦艦を駆り出されたというのに、笑顔絶やさずこの厚遇。かつこよすぎるっ。

……そろそろ学習しました。さあこい下心！

「時に夫人」

羅針盤や操舵輪がぴかぴかに磨き上げられ、伝声管が電子回路のように巡らされた操舵室で、艦長は意を決したように勢いつけて向き直ってきた。

「基地で噂を耳に致しましてな」

コホンと咳払いと共に、艦長のはにかみ度が急上昇している。きたよーきたよー。

「我々海軍はですな。時には何ヶ月も、船上で生活するわけですから、これがもう切実な欲求となるわけです。おわかりですな……」

「わかります。故郷の味は離れてから、身を切るように襲ってくるんですよね……！」

「……もちろん、食も生理的欲求ですとも」
ハズしたような間があったのが気になる。

「他にもありますな、オホン、えー、乗組員の中にはですな。男のみの閉塞した状況を、男同士で打開する者がおりましてな」

ちよつと意味がよく……。

「単刀直入に申し上げれば陸を離れてから、尻の穴を切るように襲い合う者が」

「わかりました！ トイレットペーパーですね！ それ以上言わなくていいです！」

「ありがたい！ 海軍を代表して御礼を申し上げます！」

艦長は目にも留まらぬ速さで、全ての伝声管のふたを開放した。

千手観音？

「全乗組員に告ぐ、我々は後方被弾による内なる持久戦と決別する！ スマラグダス大佐夫人に、敬礼ッ！」

艦内のあちこちから歓声と、踵を打ち鳴らし胸へ拳を当てる敬礼の音が聞こえた。艦長が嬉々として霧笛を鳴らしている。港中の軍艦が答えて大合奏になっている。

澄み渡った朝空に響き渡る歓喜に桐花は、二週間の期限や婚姻届なんて小さな問題に思えてきた。

紙を作ろう。

書ける紙を。

このまま白紙の天使としてアダマス軍史に刻まれるのはイヤだー！

ようやく霧笛が鳴り止んだ船が、また騒がしくなってきた。言い

争うような声がする。

桐花が艦長に続いて甲板へ急ぐと、その騒がしい行列が乗り込んで来るのが見えた。先頭は男性だ。彼の足元へまとわりつき、背後へと長い列を作る鶏、ヤギ、豚、ガチヨウ……。

やっぱり世界の終焉は今日で、これはノアの箱舟だったのか？

ガアガアブヒブヒコケッコーと好き勝手に甲板を歩き回る動物たち。追いかけては逃げられる乗組員たち。その輪の中心に佇み、狂騒をにこにこ眺めている人物には見覚えがあった。

「デーデ？」

デーデはアダマスの水上いかだゲル民族、通称ネイティヴの青年だ。動物の飼育、調教などを生業とする『集う家』の一員。桐花と世界をトレードした『紡ぐ家』のトカとは旧知の仲だったらしい。

筋肉質とはいえ、ダルジ少将の爆発系とは異なる東洋人らしい細さがある。柔和で爽やかな笑顔はアジアンスターの趣で、見る者を癒す。

だが、桐花の前に立つ青年は細部がデーデと違った。デーデはネイティヴ伝統衣装であるフェルト素材の膝丈ワンピースを着ていたはずだ。この青年はアダマスの軍服。ネイティヴは男女共に長髪を一つに結んでいるが、デーデもときはそれを数十本の三つ編みにしている。

せつせと最新の一本を編んでいる少女を肩に乗せていた。

「おはよう！ 十年ぶりだろうか」

スポーツマン風の礼儀正しい大きな声もデーデそっくりだ。

「大きくなって……ないかあ、ハハハ！ 嬉しいよ！」

胸部を見て言わなかったか？

ネイティヴは簡潔な線が好きだ。髪型、衣服、住居であるゲルに見られるスッキリ好みはボディラインにも適用されるらしい。すといんとした体型はネイティヴ的には美人なのだ。

チチチチチ、と小鳥のさえずりがして、

「あーっ、当ててあげる！ ねね、体型的幼妻でしょそうでしょっ

！」

と肩乗り少女がキャッキヤと笑う。

アダマス的には貧弱なので喜ぶに喜べない。

「っていつかネイティヴ流には褒めてて、アダマス流では失敬なこの人たち誰ーっ？」

「おはようございます。あの、わたしは桐花・江藤……」
「ほっ、桐花・ス……スマラグダスといいます。製紙事業に参加してまして、」

「合ってた！ くふふふっ」

肩乗り少女もアジア系だった。レースをふんだんに使った可愛いドレスを着てツインテールの黒髪をくるくると巻き、日傘を小脇に抱えている。貴族の小さなお嬢さん風だ。

でも、頭に巻いた幅広リボンの蝶結びで目隠ししてるのはなぜ？

まるで仮面舞踏会の蝶マスク！

「あたしロザリア！ ガツテンは名前なくしたって言うからね、あたしが付けてあげたんだー！ ガチョウ連れてる神様なんだよ。んふっ」

目を覆い隠すりボンの下で、ピンクの唇は得意そうだ。

「だから月天と、あたしが多聞天。知ってる？ スマラグダス八鬼神でーす！」

きやはは、と子供特有の軽くて高い笑い声が乾いた耳で増幅されて、脳を揺らしたように感じた。

ずっと不思議に思ってた。

ラウー専属の傭兵集団、スマラグダス八鬼神の名付け親は誰なのか。

姿は舞妓、中身はガンマンである羅刹のアイヤイは日系人の下で働いた過去がある。が、日本語をほとんど知らない。羅刹をかううじて知っていただけのアイヤイが、仏教神の名やその性質を汲んで傭兵仲間の二つ名にしたとは考えにくい。

鬼神たちの名付け親はもっと日本語と日本文化に詳しいはずだ。

もしかしたらボル・ヤバルの日系コミュニティ、職人村の出身者じゃないだろうか。

もしかしたら目の前のデーデ似青年の肩ではしゃぐ、十歳にも満たない幼い少女が。

6・人類だから挑む山

急いで戻らねば、参謀会議に出席されるスマラグダス大佐をお見送りできない。女史の補佐も任務の内とはいえ、女史を送り出して大佐を送れなければ本末転倒だ！

軍港の階段を上がりながら、昨夜の大佐探しで筋肉痛の太腿を叱咤している。

「おーおまえ、ラウーんとこの小姑」

階段を下りて来た一団に道を譲るタイミングが遅れた。脳天がガシツと震動に見舞われ、一団を率いていた人物に頭をつかまれる。衝撃で片眼鏡が外れたが構ってられない、最優先で敬礼する。

脳天を覆った手に力が入り、上を向かされた。首の骨がグツキリ鳴ったが構ってられない。

小姑などと妙な呼称も構ってなど……………こつ……………

小姑とは心外でありますッ！

「おはようございます、ダルジ少将！」

眼鏡が外れたせいで視界はぼやけてしまったが、覗き込んできた黒い瞳にみなぎる豪放さ、生物としての圧倒的優位性は本能が知覚する。注視せずとも特定できる数少ない一人だ。

「吐けよ。女史と呼ぶ理由だ」

足元が抜けるような恐怖を感じた。野生の獣王が鼻をうごめかしている。昨晩のポーカーの場でも、勘の鋭い獣は秘密の切れ端を嗅ぎつけていた。落ち着け膀胱、締められ尿道ッ！

「た……………単なる慣例であります。初対面が助手としてでしたので。以後、大佐夫人と改めますッ」

「おまえのなまり、聞き慣れねーなあ」

「緊張しておりますので……………！」

「あの娘は緊張しねーが、似たようななまりでしゃべる」

遠くなりかけた意識でふと納得した。ダルジ少将とスマラグダス

大佐では緊張と恐怖で死ねる質が違う。少将には本能を、大佐には理性を試される。

「×××な×××のコウモリ狩り。知ってんな？」

妹には決して聞かせたくない単語で侮蔑されたのは、ボル・ヤバルを独裁した前女王だ。脳に押し込めた記憶が眼前へ崩落してきて、カル口の視界を暗くする。

女王が自身の神格化に利用したのは土着の民間信仰だった。

蘇った死者が人血を欲して夜を彷徨う。そうした魔物の伝承は人々に黒やコウモリを忌避させた。コウモリは棺のように暗い洞穴に住処とし、種によっては吸血もするからだ。

夜の黒は嫌悪すべき色。太陽の金は黒を払拭する清浄の色。体に黒を持つのは魔物に近い劣った人種。神の祝福を受け豊かな金髪を授かった聖女王が、民に代わって魔を掃討する。崇めよ！

ボル・ヤバルの日系人たちはコウモリ狩りと呼ばれた迫害を逃れて僻地へ、陸の孤島へと追い立てられていった。流浪の中で固定した農地を持たず、加工技術を身に付けた。職人村ができた。

アダマス軍がボル・ヤバルを侵略する際、空軍中佐であり参謀だったラウー・スマラグダスは、女王が利用した政策をさらに利用した。

貨物輸送や民間乗用機であるカラスを徴集し、軍鷲と共にボル・ヤバルへ投入した。白魔の異名を取る中佐が率いた戦隊は月夜、黒い翼で空を覆い尽くしたという。

恐怖でパニックに陥った女王軍は崩壊。女王は宮殿の隠し通路から地底の鍾乳洞を使って逃亡を図った。広大で迷路より複雑、地下水のために探知犬さえ追尾できない洞穴で、中佐は短時間のうちに女王を発見し拘束したという。

中佐が用いた搜索方法は明らかにされていない。追隨した兵士でも洞内の暗さに詳細を確認できなかったそうだが、「小鳥のさえずりがずっと聞こえていた」と言う。

カル口は複雑な想いでそれを伝え聞いた。小さなコウモリが女王

を狩ったのだ……。

歴史的戦勝への貢献を認められ、スマラグダス中佐は大佐へ昇進した。

「××××のコウモリ狩りから逃れようと、」

同時に大佐から少将へと昇進したビスコア・ダルジの明朗な声がカルロの回想を吹き飛ばす。

「ボル・ヤバルから決死の脱出を試みるヤツもいたって話だぞ？」

トーカ女史を亡命者と疑っているのか。

女史とスマラグダス大佐の結婚はアダマス帝国にとって政治的な意味がある。ネイティヴの娘でなければ、和平の花嫁という大義が損なわれてしまう。

「あいつは俺の兄弟子で友人で部下だ。ポーカーなら真っ先に手札に確保すべきジャックつとこだ。左右の目で違うもんを見ている文明と軍。二者の利害が衝突する時、あいつはアダマスを優先してきた。だがな」

少将の手はカルロの脳天をつかんだまま逃がさない。黒い瞳から放射される灼熱に、防衛本能を焼き尽くされるように思えた。

「俺はあいつの弟子で友人で上官である以前に、アダマス帝国総統の息子だ。どんだけ有用なジャックだろーと、役の邪魔なら切り捨てるぞ」

ヒヤッ、どさっ。あーあ。

妙に裏返った声と、昏倒するような衝撃音と、呆れたようなダルジ少将っぽい声が階段上から降った気がした。が、二つの大いなる問題に直面していた桐花の耳は、それを左から右へと塵も残さず通過させた。

最初の問題は動物連れ総三つ編みデーデ似青年、おそらくネイティヴな月天の再会の挨拶にあった。

『十年ぶりだろっか』

全く覚えのない人に久しぶりと挨拶されたら、どうするか。

一、何食わぬ顔で久しぶりーと返し、会話の中からヒントを探る。無難。

二、ごめーん誰だったっけ、と申し訳なさそうな顔で忘れたことを白状する。正直。

三、記憶喪失だから許せと開き直る。そつと絶縁される。痛恨。

桐花は、ぜひ避けたい三の選択肢しか残されていない状況を恨んだ。容姿が酷似した桐花とネイティヴの『紡ぐ家のトカ』が並行世界のトレードをしたことはラウーしか知らないし、信じないだろう。だからアダマスでネイティヴとすれ違った、ユピテライ・・・と腫れ物にさわるようなぎこちない笑顔で逃げられても我慢しているのだ。

記憶喪失はイタイが心神喪失を疑われるのはもつとイタイ。

「本日、護衛を命ずるにあたって」
不意に問題の月天が口を開いて、桐花はそれ以上に口を開けることになる。

「ひとつ留意点がある」

ちよつと待てー！　しゃべってるのは月天なのに、声がラウーなんだけど！

「きやははは、そつくりー！」

肩乗りロザリアが両手を叩いて大喜びしている。そっか、声真似なんだ。つられて拍手する。激ウマ声真似名人はさらに続けた。

「私の妻は記憶に多少の混乱と喪失がある。だが他に顕著な異常はない」

顕著じゃない異常ならあるってのかー！

「以上だ。質問がなければ終了する。ザッザッザッザッ」

うおお去つてく足音まで激似だ！　速くて尊大で高らかなラウー

独特の軍靴の音。これ声真似のレベルじゃないよ！　声帯模写だよ！

惜しめない拍手を送っていたらダルジ少将一行が乗船してきて、艦上は慌しくなった。帆が揚がり霧笛が鳴らされると、港の兵士た

ちが敬礼で送ってくれた。

果てのない青空に浮かぶ木星は、メノウ色のマール模様鮮やかだ。海も負けじと紺碧を広げてみせる。その海面を突き抜けてそびえたつ、呆れるほどの岩壁。

絶壁を彫り込んだ階段には真っ白な軍服に身を包んだ海軍兵が立ち並び、吹き付ける海風に胸板を張っている。完璧に風を捉えた帆にはアダマス軍の紋章が染め抜かれている。石板装甲された船首が水飛沫をあげて波を切り裂いた。

圧倒的すぎるサイズの大自然にたくましく挑む人間の姿がそこにあった。人類が他の動物と決定的に違うのはここなんだ、と桐花は思った。挑むか挑まないか。

自分が人類の絶え間ない挑戦の遺産である快適や利便を享受しているなら、礼として、自分もそこへひとつ積み足さなくちゃ。

それがたとえトレットペーパーだとしても、誇りを持って。

二つ目の問題はあっけなく終了した。

「ロザリアさんは、」

「さん、だつてーきやはははっ！ 姫って呼んでいいよ！」

格上げを許可された。

「姫は日本語しゃべれるの？ まさかラウーに教えてたりする？」

「しゃべれたけどー、教えてないよ」

「ありがとう、一生教えないでね！」

「ねね、クッキーちょうだい。カバンに入ってるでしょ」

バタークッキー四枚で幼い少女を買収し、問題は解決した。ダルジ少将におごってもらったクッキーだから、実質タダだ。

それにしても、なんて鼻のいい子なんだろ。

またどこかで近くでチチチチ、と小鳥がさえざつた。デーデ似の声帯模写青年、月天が連れ回す動物に小鳥は見当たらない。この世界の鶏、ヤギ、豚、ガチヨウのどれかはさえざるんだらうか？

「分けっこしてあげるね。おなか空っぽみたい」

眠くて朝食をパスしたんだ。自己管理しろと叱る本人が、朝食も食べられない睡眠不足に追い込むのは矛盾してると思う。

細かいけれどフィニッシュと柔らかさを残した可愛い腕が伸びてきて、クッキーを一枚返してくれた。四枚の半分って一枚だけ？

「はい、これ月天の」

ロザリアはクッキーを三人で分ける気だったらしい。青年に二枚渡してから命じた。

「一枚はあげる。もう一枚は0.3333333333、ずうっと続く循環小数だからね、33333...で等分しなきゃダメなんだよ」

「ハハハ面倒だよ、姫」

和やかだ。こんな和やかな人たちが傭兵だなんて信じられない。

アイヤイは銃撃、ヴィルゴットは毒のスペシャリストだから、月天とロザリアも特殊技能の持ち主なんだろう。

でも、ロザリアはちっちゃな子。ドレスにパラパラこぼしながらクッキーにかじりついてるような子。桐花のいた世界の日本なら、友達と一緒に遊び回るだけでいい年頃なのに。

ラウーはこの子を戦場へ連れて行き、戦争のために利用するんだろうか。お金を払って。

「ねねね、姫ね、いいこと思いついちゃった！先生のお手伝いしてるんでしょ？ 頭いいんでしょ？」

先生「ラウーだとわかって、桐花は頷く。頷いてからロザリアのリボン形アイマスクに思い当たり、慌ててウンと口で答える。頭がいいかは流しておこう。

「じゃあさ、文殊だね！ 知恵の神様なんだよ。文殊って名乗っていいよ！」

傭兵とわたしは同じなんだ。

桐花は甲板が傾いた気がした。こんな幼い子にも明白な、お金をもらって戦争に加担しているという事実の重さで。

紙は教育にも役立つと思った、けど、トイレットペーパーに変わって兵士を鼓舞した。

使い手によつて毒にも薬にもなる知識の二面性には気づいていたはずなのに、わたしは助手という脇道に隠れて責任をラウーに押し付けている。

「おいガキ、そりややめとけ」

急に背後から声がして、桐花は物理的にも飛び上がった。振り向けば、ダルジ少将の赤い石鎧が海上の強い日光を反射してすごくまぶしい。

「軍の科学技術部に放り込めばいいものを、ラウーがわざわざ助手だの民間招聘の技術顧問だの、面倒くせー立場にしとく意図はなんだ？ 簡単だ。ラウーはそいつを軍から離しときたいんだ。利害の衝突が起きたとき、優先順位を間違えなくてすむようにな」

ダルジ少将が難しい話をつ？ 嵐が来るからやめてください！

「ガキじゃなくって姫だもん！」

「あーわかったわかった。とにかくさっきのはダメだ、いいな？ ガキ」

「ガキじゃないもん！」

「十年経ってデカくなつたら姫って呼んでやる。よく食つてデカくなれよ！ キヤス並みに！」

と銅色の指先が指名したのは、甲板にデッキチェアを広げて優雅に日光浴している美女だった。青い海を背景にピンクのてらてらワンピースの裾を危ういところまでひらめかせている。すらりと白い脚の先でブラブラとピンヒールをもてあそばさば、グラビア雑誌のページだ。

美女はダルジ少将の一行に混じつて乗船してきていたが、誰と関わるでもなく海を眺めていたから、話しかける隙もなかった。

ダルジ少将の指先は正確には、その美女の巨乳を示していた。

仰向けでも流失する気配がないとか、わたしには鼻しかそんな場所ないんですけど？

「ハハハ、牛だね」

悪気なさげな月天のコメントに慰められる。チチチチ、と小鳥のさえずりも同意と信じたい。

「おまえそれでも男か！ 男は山に登るもんだ！ 生まれた時からだ！」

「えー、あんなのおかしーもん」

ロザリアはリボンマスクの下で唇を尖らせている。顔の上半分を覆い隠す巨大な蝶リボン形アイマスクの下で……あれ？

見えてるの？ ガッツリ目隠しされてるのに。

うわああ超能力者だこの子、透視してるんだー！

「艦長せんせー、あそこ、海の中におっきい岩あるよー、ぶつからないでね！」

海面下の暗礁まで見えてるよつ。人間ソナー！ この子とマグロ釣りに行きたーい！

その後も職人村への海路は暗礁、巨大渦潮、浮島、密集間欠泉など難所の連続だったが、艦長は見事に回避した。

「面舵いっぱーい！」

ブリッジから艦長の勇ましい声が響く。

「アイアイサー！」

「本艦はまもなく目的地のアマゾンナス河口、日系人居住地沿海に到着、停泊する！」

7. 一つわたしにくださいな

絶壁から海へと放出される大河の河口。と聞いてナイアガラの瀑布を期待していた桐花の眼前に現れたのは、超横長の白糸の滝だった。乾季で水量が少なく、満潮を控えて落差が小さいのが迫力に欠ける原因らしい。

桐花が海外旅行を国内旅行に縮小されたような残念感を「おにぎり、みそ汁、お漬物」の呪文で立て直している間に、艦は帆を畳まれ停泊した。搭載されていた輸送機、巨大カラスに鞍が装着される。一羽で上陸者をピストン輸送するらしい。

第一便は月天とやかましい仲間たち。肩乗りロザリア、鶏、豚、ガチヨウなど。不要だと文句を言って鶏を降ろそうとした兵士は、額に強烈な鳥足蹴りの連打を食らって甲板に沈んだ。鶏は鶏でも闘鶏だったようだ。

「ナイスキック、いい腿だ！」

月天がグツと親指を立てる。

「今夜はローストチキンだな、ハハハ」

親指は食べ頃フラグだった。

親子丼がいい、と桐花は胃をさすりながら呟く。朝からクッキーを一枚と三分の一しかもらってない胃はそろそろ限界だ。

第二便に桐花がよじ登る。後部座席へダルジ少将が搭乗すると、額の鳥足跡から流血する兵士が止めに入った。

「まず先遣隊を派遣し、安全確保されてから上陸なさるべきです。あと半時間もすれば満潮ブゴヘツ！」

鳥足跡に軍靴跡が上書きされ、カラスは離陸した。滝を越えて陸地へ向かうという桐花の予想と違い、ひたすら上昇していく。

広大なアマゾナスの河口が開けた。ブロッコリーを敷き詰めたような濃緑の森のじゅうたんを、河はイチヨウの葉形に切り抜いて三角江を形成している。上流には険しい山が壁のように立ちはだかつ

ている。山、森、滝に包囲された陸の孤島ぶりが見て取れた。

「敵の敵は一時の味方」

「はい？」

遊覧飛行気分で眼下を眺めていた桐花は、不意の発言に慌てて後部座席を振り返った。

「コウモリ狩りにウンザリしてても、黒い働きアリは金の女王アリに対抗する武力を持たない。そこで最強の兵隊アリに工作員を送り込み、情報を与えて女王アリを潰させる」

いきなりアリの社会性を説かれても答えようがない。はあ、と曖昧なあいづちを打っておく。

「自由を得た働きアリは古巣に帰る。不安定な共同生活に耐えてきた兵隊アリの巣に亀裂を残して、な。こんな恥知らずなアリがいるなら、兵隊アリは食い殺すべきだよなあ？」

海賊風巨漢とはいえ、白い歯を覗かせてニカツと笑うと無邪気だ。アリの共食いなんて唐突で少々エグい話だったが、少将の笑顔につられて「そうですね」と笑顔で答えた、次の瞬間。

ガブ。

「ギャー！」

背後から肩山をかじられて、桐花は反射的に少将のベレー帽をぶつ叩いた。ズレた略帽を直しながら、少将はガハハと豪快に笑う。

「予行演習だ！」

「そういう変態プレイは愛人さんとしてください！」

海を底辺とする三角江の頂点付近に日系人居住地はあった。マンガロープの林を伐採し石垣で固めた台地に数十棟の住居が点在している。正倉院を想起させる高床式の木造建築だ。

少将は着陸地点を検分している。武器を携帯しているとはいえ少人数で、交流も土地勘もない民族の懐に飛び入るのだ。やがて適地を見出したらしく、マンガロープの木陰に身を潜める月天たちに指

示してから石垣の隅へ着陸、合流した。

「非常時はマングローブの切れ目を通って河へ出る。流れに乗って海へ戻れば艦が拾う」

滝の上から海にダイブする、という危険行為がすつ飛ばされた説明じゃないだろうか。白糸の滝でよかった、と桐花は思った。ナイアガラ級だったら自分を水葬してしまう。

頷いたロザリアが月天からガチヨウを受け取って抱える。救命胴衣だったんですかソレ。

「動くな！」

そこへ日本語が響いた。村への道を遮るように、日系人たち数名が走って来る。

「止まれっ、あんたたち何者だ！」

桐花は思わずまじまじと観察してしまった。

甚平に革の銅鎧を着て、手にしているのは竹槍や鍬。極貧な足輕だってもう少しマシだろうと思える超軽武装だ。豪壮美麗な鎧をまとったダルジ少将と対峙すれば、領主と一揆覚悟で直訴に来た農民みたいな迫力差だった。

「ナガタテオ二の仲間か！」

怒鳴ってくる声が震えている。何か妙な分類をされかけている。

桐花は慌てて両手を挙げ、丸腰を示した。

「わたしたち、アダマス帝国からの調査団です！ 戦う意思はありません！」

日系人たちは顔を見合わせた。

「日本語だ」

「日本語が通じた」

「なまっちよるが日本語じゃあ」

色々突っ込みたかったが、桐花は我慢した。日系人たちの戦意レベルが下がったのが感じられる。

「樹脂と、太市さんという方について教えて欲しくて来たんです！」

「ひんでえなまりぞな！ なんつつちよるかハアわがらね」

「太市って言わなかったか？」

「言った言った。なまってるけど言った。太市のねーちゃん呼んできな」

誰かが誰かを呼びに村へと走り戻っていく。つかの間の休戦状態にホッとして、桐花は隣を見上げた。ロザリアはじつと黙り込んでいる。村の出身なら何か反応を見せるかと思っただが、河の方へ意識を向けているようだ。魚群探知でもしてるんだらうか、と考える桐花の腹が鳴った。

「太市の姉、鞠でございます。愚弟にご用だそうで」

現れた太市のねーちゃんは質素ながらキリリとした着物姿の若い女性で、盆を持っていた。

「はい。あの、わたしは桐花・ス……スマラグダスと言います」

「お客人としてお迎えする用意はございます。まずはこちらを」

桐花は息を飲み、出された盆に目を奪われた。縁はさざ波を切り取ってきたような流麗な細工で、その表面はとろけるようなツヤ加工が施され、底は幾層にも重なり繊細に作られていて、中身は桃を煮たものらしくバターと砂糖の甘い匂いを漂わせる、盆の上のパイに。

違和感はモリモリだ。竹皮の上でどーんと鎮座する三角形と見えばおにぎりだ。でもお菓子だってステキじゃないか！ クッキー一枚と三分の一しか入っていない胃としては大歓迎だ！

「合いますかどうか。いかがでございますしょう？」

太市のねーちゃんは、姐さんと呼び改めなくなる気迫で勧めてくる。

毒が入っているかもしれない。友好的とは限らない、手をつけるなとレオン副官に注意された。でも試されてる感が伝わってくる。

断りはるならこの話、ご破算やでえ。

と、姐さんの心のタンカが聞こえてくる。桐花は盆に載った楊枝を握った。

なめられたらあかん。アダマス組、受けて立たせてもらいますわ！
楊枝をパイに突き立てる。

「いただきます！」

正直、収穫ナシで基地に戻った場合のラウーの反応の方が怖いんじゃない！

アガツと大口を開けてかじりつこうとした瞬間に、姐さんがさらにドスをきかせて聞いてきた。

「中は全体的に何度でございましょうか？」

もぐ、と一口噛んでから考える。

「常温なら二十七度くらい、ですか？ おいしいですね」

後半だけはキツパリ答えた。炭水化物と糖分が枯れた胃壁に染み渡るっ！

「左様でございますか……」

姐さんがウツフリと微笑む。好感触に、桐花もニッコリと笑みを返した。

「行商人から聞きました。女王が東からの敵の軍門にくだったと。それがこんな脳なしどもだったとは嘆かわしい」

猛毒な単語は聞き間違いかと思いたかった。が、姐さんの背負うオーラは物騒なものに変わっていて、桐花の笑顔が凍る。

「あなた方も幾何学の父ユークリッドの名を汚すのですか！」

なんか似たような罵倒を過去に浴びたことがあるような……
・と桐花は記憶を探ろうとしたが、答えにたどり着く前に姐さんがハツと一歩後退した。

「お待ちを。スマラグダス……？ まさかあなたはあの『月を葬る暗黒の翼』、スマラグダス中佐の縁者ですか」

白魔の次は暗黒ですか。遂に天体まで撃ち落としたんですか。

桐花はアダマス軍によるボル・ヤバル侵攻の詳細を知らない。直後に昇進したのだから、ラウーが活躍したのは推測できる。

けれど文明の番人を名乗るラウーが、軍の非常時には理念をまげて非道を行うことを知っている。こんな僻地にさえ噂が及ぶほどの『あの』呼ばわりされるような非道を。

「違います」

思わず否定した。脳なしに非道を足されたくないし、嘘は言っていない。ラウーはいま中佐じゃなくて大佐だもん、妻じゃなくて婚約者だもん、と心の中で開き直る。

「左様でございますか」

姐さんはふうと息をついて首を振った。

「残念です。わたくしたちの救いの神、スマラグダス中佐にゆかりの方ならどんな助力も惜しまぬものを」

逆効果ー！

脳なしと嘆かれた桐花の脳はのたうち回って後悔した。占領した島国の僻地でラウーが救世主だなんて、そんな展開読めるかー！

「あなた方がなぜ太市の名をご存知なのか、わたくしたちには知る権利がございますよ」

再びドス混じりな声に戻った姐さんが懐から短刀……やなくて、帯から細い棒を抜き出した。火箸にしか見えない。でもバカにしちゃいけない、間諜であることを隠すため、武器を携帯しないくノ一もいた。代わりに日用品を鋭利に削っておき、緊急時にはそれで戦ったとか。

竹槍は明智光秀を倒したし、鎌だって鎖鎌とか実在した格闘技じゃないかーっ！

「目的は何です？」

日本語のやり取りが分からなくても、ダルジ少将は姐さんと一揆軍の不穏を察知したようだ。音もなく強弓を手にする。一触即発の緊迫があたりを満たした。

桐花は腹をくくった。情けなくも持ったままだった食べかけパイをカバンに確保してから、背筋をシャキンと伸ばす。これはもう、真実に訴えるしかない！

「おにぎりです！」

姐さんと一揆軍の視線を負けじと睨み返す。

「わたしの目的はおにぎりですっ！」

青空へ高く響く真意の表明。嘘のない心は必ず、ストレートにダイレクトに伝わるはず。

腹割った。ほな、答え聞かせてもらいまひよかつ！

一揆軍が顔を見合わせた。

「おにぎり、とな」

「鬼斬りだと」

「鬼退治に来ただと！ ありがてえ！ 酒だ、馳走でもてなすんじやー！」

わー、と一転して歓声をあげ喜び舞い踊る一揆軍。鞠姐さんも土下座でお詫びとお礼を言っている。いやいやいやちよつと待ったー、心は通じたけど言葉が通じてないよー！

桐花の願いも虚しく、事態は待ってくれなかった。

「来ちゃった」

月天の肩でロザリアが呟いた直後、村の奥から突然、半鐘が打ち鳴らされるカンカンとけたたましい音が鼓膜を突いた。怒声と悲鳴が上がる。

「鬼だ！ 鬼が来たぞー！」

うわあああ、と一揆軍がバラけて一目散に逃げていく。残された鞠姐さんがシャツと衣ずれの音も高く袖をたすきでまくり上げ、裾をからげ、鎌を握った。ごっごくごう……

「いい脚してんなあ」

のんびり鑑賞する少将。まさかこっちも食べ頃フラグっ？

「おのれ鬼ども、太市だけでは飽き足らず、まだ盗むつもりですか。桐花殿っ」

「はっはいいいっ？」

姐さんは鎌の刃にヒュツと短く息を吹き込んだ。まるで自分の念を乗り移らせるように。刃の魂に命を捧げるように。

それから振り返ってウツフリと微笑む。

「可愛い弟のためにわたくしもまた、鬼となる。わたくしが異界へ墮ちた時はどうか、あなたが太市を救ってやってくださいませ」

「遺言だ、と思った。」

8・ワーカホリック・ホリック

バシューーン！ ばたたたつ。

少将の強弓から赤い煙を吹く矢が撃ち放たれるのと、月天の胸ポケットから鳩が飛び立つのは同時だった。矢は河口へと高く弧を描き、放物線の頂点で炸裂してさらに高く煙を上げる。鳩は空を切り裂き森へと一直線に飛んでいった。

桐花は一人の日系人へ駆け寄った。増水対策であろう高床式の家並みは鬼ごっこには不向きだ。逃走ルートが丸見えになる。柱にピタリとはりつき柱の幅に体を縮ませて気配を消そうと必死な男に事情説明を求めた。

「鬼だ。龍が昇る日は長盾鬼が出て、人を盗んでくんだよ！」

それって盗みじゃなくて拉致ですよ。で、鬼の次は龍？ なんてワンダーランドな。

「太市もやられた。前は金品や女だったのに、近頃は鍛冶屋ばかり取られないだ！」

『おのれ鬼ども、太市だけでは飽き足らず』

鞠姐さんの怒りに満ちた声が耳にこだます。

請救助 太市。拳銃の内部に密かに彫られた銘はコウタススケ
タイチさんのフルネームじゃなくて、やっぱり救援メッセーじだったんだ。

「ここに銃はありますか！」

「じゅ、じゅう？ なんだそりゃ、あんななまりヒドすぎんぞ」

「鬼はパーンと音の鳴る飛び道具をいませんか？」

「あつ、見たことあんど。あいつらそれで殺生しやがんだ！」

日系人は銃を持っていない。鬼に対して鎌や鍬を手に逃げ惑うばかり。つまり職人村では銃を製造していない。鬼が日系人を拉致して銃を作らせている、と桐花は推測した。

「それに馬鹿でけえ盾を持ってて、歯が立たねえ」

高床住居の支柱群のはるか奥に、追う者と追われる者の攻防が見えた。追う方は十数匹いて、全部が盾を持っている。身長ほどもある細長い楕円の盾が長盾鬼の名前の由来らしい。

だが鬼自体は人間っぽい。日系人より体格はいいが肌の色は赤でも青でもなくむしろ白いし、角やトラ柄パンツなど鬼アイテムも見当たらない。

「人間の山賊じゃないの？」

「昇龍の日は道をふさぐし橋も落とす！ なのにあいつら、足跡も残さずに出没しやがる。河から湧いてんだ！」

「船で来てるっ？」

「だから湧いてんだって！ 物見やぐらで見張ってたって、船なんかどこにもねえ。そもそも船は龍に飲まれちまうだろうが！ ウウウなんまんだぶなんまんだぶ」

神出鬼没、うっん鬼出鬼没。それを聞くと鬼に思える。でも、と桐花は奥歯を噛みしめた。

銃を製造する近代化した鬼なんていてたまるか！ 鬼なんてもんは金棒で満足しときいや！

柱と同化を試みる男を解放して、桐花は周囲を見回した。目立つ赤い石鎧をすぐに発見する。ダルジ少将は近くの民家の屋根の上に立ち、遠い喧騒を観察していた。

「襲撃してきたのは日系人を拉致する鬼で、少将お気に入りの太市さんが過去にさらわれているそうです！」

日本語で聞き出した内容を英語で伝える。

「銃の銘は銘じゃなくて、救助を求める隠れたメッセージでした。たぶん鬼が太市さんに銃を作らせてるんです！」

「へー」

どっかりと腕を組んで波打つ黒髪を風になびかせ、ダルジ少将は動く気配を見せない。村の奥の交戦に眼を据えたままだ。

すぐにアクションを起こすと思っていた桐花は戸惑って継ぐ言葉を失う。

「で、」

隙を突くように、少将は振り向きざまにいきなり聞いてきた。

「日系人の加勢をしてアダマスに利益はあるか？」

「・・・・・・はい？」

「言つたら、俺の興味は銃の製造なんだよ。なら、太市を抱え込んでる鬼と手を組めば済む話だろーが？ この村を保護する必要がどこにあんだよ。視察に入った途端に鬼が攻めて来る？ 笑えるねえタイミング良すぎて」

『軍から離しときたいんだ。利害の衝突が起きたとき、優先順位を間違えなくてすむようにな』

艦上でのダルジ少将の言葉が何度も行き来する。利害の衝突。軍の利益と人道の衝突。これはラウーが内心で常に孤軍奮闘しているはずの紛争なんだ。

ラウーは軍の非常時には迷わず軍を選択し、非道な行いに手を染める。知の時代を実現する権力と資金の確保には軍での立場が必要だから。知のために血を流す矛盾を背負ってる。

この場にラウーがいたらどうするだろう。日系人を見捨てて鬼と契約するだろうか。救世主だと感謝を述べた鞠姐さんの遺言を無視して。

しないと信じたい。

視線は破滅的に冷え切っているのに、驚くほど温かい指先と唇。守っていてと頼んだら、請われるまでもないと即答してくれた。結婚報告の時は誇らしそうにしてくれた。痛がるたびに深呼吸を待ってくれた・・・・・・待つだけでやめてくれないけどっ！ あれも利害の衝突かも。

そんなラウーが心に積み重なっているから、理念をまげる時には悔しがってるって信じたい。

「軍が忠誠を誓わせるのはなんでだ？ 優先順位を教えるためだ。」

葛藤させないためだ。俺の決断で死ぬヤツがいてもいいが、俺の迷いで死ぬヤツが出たらアウトだ」

日系人を保護しないと宣言した少将をヒドいと感じることが出来なかった。少将は少将の理念で動いている。理念を守ること軍を守り、兵を守っている。

「だから聞くぞ。おまえが忠誠を誓ってんのはなんだ？」

あっけらかんとした口調でも、聞かれているのは自分の根幹に、もしかしたら命に関わることだと直感した。

「ネイティヴか？ アダマスか？ 日系人コミュニティか？」

「ラウーです」

すんなりと答えは出てきた。

「ラウーを見ていたいから、ここにいます」

何に忠誠を誓うか、理念は何かだなんて、桐花がトレード前の世界で真面目に問われることは一生なかったかもしれない。堅苦しい時代は終わった。自分が第一。一生懸命はダサい、うまくやればいい。そんな風潮に浸っていた。

でも生きてく上で利害の衝突は必ず起こる。そのとき何を選択するかを決定するのは理念なんだ。

堅苦しくなくて、自分が大事で、一生懸命やらなくても、それでも必要なもの。

国とか軍とか命とか文明とか。少将やラウーに比べたらスケールの大きさが違うけど。生まれ育った土地、家族、友達、それらと断絶されることになってもラウーの造る世界を見たかった。自分もその一部になれるなら何だってできる気がした。

ほんとのことだから恥じ入ったりしない！

背筋を伸ばしてダルジ少将の視線を見返した。その黒い瞳で魂が覗けるなら覗けばいいと思った。

「ぶはつ。ぶははははは！」

いきなりの爆笑が天を衝く。少将は鎧の腹をばんばん叩きだした。「そうきたか！ 笑える、面白すぎる。あいつが恋愛結婚とかフザ

けんな、オツズどんだけだと思っただよクツソー、大損じゃねーか」

爆笑から一転してムクれている。

「ラウーの野郎、試合に負けて勝負に勝ったっつーか、ム力つくな！ いや負けてんだから引き分けだな。よし、追及は後にしてやる」
オツズは賭けの配当率。ラウーの結婚は賭けの対象だったらしい。となると桐花は思いつきり当事者だ。誰が何にいくら賭けたのか知りたい！

うずうずと体を揺らして少将の視線捕獲に努めた。が、少将内では話題が片付いてしまつたらしく、河口を振り仰いでニヤリと口角を持ち上げている。得意げな視線を追って、桐花はマングローブの生垣の向こうへ目を向けた。そしてそこにあるはずのないものを見る。

戦艦。

乗るより見る方が壮観だ。帆にはアダマス軍の紋章がくつきりと染め抜かれ、船体は石板の装甲を施され、船舷には黒々とした砲門が並んだ威風堂々たる戦艦が河に姿を現していた。

「ええっ？ 何で戦艦が河に入つて来れるんですか？ 滝はっ？」
船が滝を乗り越えられるわけがないのに！

「驚いたか！ そうでなきゃな、満潮狙つて来た意味ねーっつーの」
呆れた声が桐花の脳をぐるぐる回す。満潮を控えて、河と海の境目は落差の小さい白糸の滝だった。月が近いこの地球の干満差は大きい。満潮で上昇した海面は滝を埋め、河との行き来を可能にした。カラスに乗つた月天とロザリアが艦を先導している。乗り上げないよう、川床の深い場所を教えているようだった。

日系人と長盾鬼たちの競り合いも途切れがちになり、忽然と現れた戦艦を呆然として眺めている。

「捕まえた武器商人をシメて口を割らせた。銃の製造元、鬼つてこにしとくか。鬼が、反政府ゲリラと親しい商人へ優先的に売りさばいてやがる。内戦が激化すりゃアダマスにもゲリラにも武器が売

れて儲かるからな。消耗戦は国益に反する」

ヘラヘラした笑顔に騙されてた、と桐花はダルジ少将のヘラヘラした横顔を凝視する。もし音声を消して表情だけにしたら、誰も少将が戦争の話をしているなんて当てられないだろう。

「敵の敵は一時の味方。日系人に加勢する利得はねえ。ねーけどな、アダマスが鬼を支配下に置くつもりなら、形勢としちゃ日系人の味方ってことだ！」

ドオンと大気を揺るがす轟音が響いて戦艦の砲門が煙を吹き、村の手前に巨大な水柱が上がった。

次々に上がる水柱を最短距離で迂回して、カラスに乗った月天とロザリアが戻ってきた。

「戦艦は威嚇砲撃を含めて二十分で撤退させる。遅れた場合、海面が降下して座礁する」

月天がラウーの声で言う。

「………つまりこれ、ラウーの作戦なんですね？ 少将」

「鬼が逃げる、追え！」

無視するってことはイエスだな、と桐花は判断した。ラウーは職人村視察と聞いて情報を集め、有事の際の対応を少将と打ち合わせしておいたのだろう。ポーカーしながら酒の肴に戦略立案か、ワーカホリックめ！

長盾鬼は日系人の拉致を放棄して、退散を決めたようだ。盾を脇に抱えて河岸へ駆けていく。

桐花は首をめぐらせて姐さんを捜した。弟の消息を聞きだそうと鎌で鬼と交戦を挑んだに違いなかった。上流に位置する村の奥へと日系人たちの流れに逆らって走り出す。乱れた多くの足跡が残る広場に、見覚えのあるたすきが落ちていた。

血に濡れている。

そこから点々と連なる血痕は河へと向かい、石垣を降り、マング

ロープの密生する林の縁で水の中へと消えている。水位が上がって沈みそうな茂みの間に、動かず横たわる女性が見えた。

「姐さん？ 鞠姐さん！」

石垣を飛び降りて河へ踏み入れる。柔らかい泥と水が足首をつかむように邪魔してくる。それをばちゃばちゃと蹴り返しながら姐さんへと手を伸ばした。

「文殊、行っちゃだめえっ！ 先生に怒られるでしょ！」

ロザリアの制止は正しかった。

伸ばした手を握ったのは、姐さんじゃなかった。節くれだった手にきつくつかまれ、悲鳴を上げる。マングロープの葉陰で待ち構えていた鬼が出てきて、桐花に銃口を突きつけた。

「捕まえたぜ！」

英語だった。

「おら来るんじゃないよ、デケエの！ そっちの二人もだ、殺すぞ！」

背後から首を抱き込まれ、河へズルズルと引きずられる。デケエのと呼ばれたダルジ少将は住居の支柱を遮蔽にして、その裏で呆れ顔だ。

「またかよー、おまえ人質になるの好きだな！」

そんなDMな趣味はない！ と叫び返したいが、引きずられてるせいで首が絞まって叫べない。

でもどこへ逃げるつもりなんだろう。鬼はやっぱ人間、白人の荒くれ者たちに見える。水中に異界への帰路がある鬼ならまだしも、船もないのにどうやって逃げるのか。前には日系人、河口には戦艦というまさに背水の陣だというのに鬼たちは迷わず河へ入っていく。「ねね月天、今日って満月かなあ？」

桐花はもう腰まで水に浸かっている。足先が川底を空振りして転びそうになる。目の前で護衛対象が溺れまいとアワアワしているというのに、ロザリアの興味は月見にあるらしい。透視でお月見もできるのかー、と桐花が投げやりなツツコミを入れたとき。

「じゃあ、龍が来るよ。昇ってくる」

ロザリアの言葉尻にかぶせるように、ゴゴゴゴゴ、と地鳴りのような音がし始めた。川面がダブダブと不規則に揺れる。音の正体を求めて桐花は辺りを見回した。

「全力後退！」

「アイアイサー！」

戦艦のブリッジから艦長の命令が風に乗って聞こえてきた。

「海嘯に九十度を保て！ 来るぞ！」

「アイアイサー！」

バーンと船尾で派手な水飛沫が散る。重そうな戦艦をぐらりと揺らし、それでも全く勢いを削がれることなく、海からの高波は真っ直ぐ桐花たちへと攻め上がった。

「ポロロツカ」

ようやくその単語を思い出し、桐花は呟く。

干満差の激しい大潮の満潮時、盛り上がった海面は川の流れを押し戻して河口に侵入する。特に三角江では逆流した潮流が奥へ進むにつれて凝集され、津波のように川を遡上する。重力を覆すように川を駆け上がる奔流は、見えない龍が昇って行くかの驚異なんだろう。

ここにいたら高波に飲まれる。桐花は焦って足をバタつかせた。

「ウゼえ。大人しくしてりゃいいんだよ！」

イラついた鬼の声と同時に、桐花のみぞおちへ乱暴な衝撃が食い込んだ。一瞬息が止まる。意識がゆらりと遠のく。視界がぼやけ、そのまま気絶……しなかった。

「下手くそだな。もーちよい上だろ」

ダルジ少将の呆れた声がする。敵に指南するなバカ少将ー！

桐花が痛む腹を抱えてゴフゴフと咳き込んでいると、舌打ちが降ってきた。今度は後頭部に打撃が走る。頭が揺れ、グラリとよるめき、そのまま気絶……。しなかった。人間って意外と丈夫だが、これ以上殴られるのはイヤなので、とっさに気絶したフリをす

る。

鬼は騙されてくれたらしく、桐花をマフラーみたいに両肩に担いだ。鬼は大柄だが、桐花にだってそれなりの体重がある。こんな状態でどうやって高波から逃げる気なんだ！

薄目を開けて観察すると、鬼たちには逃げる算段があるらしく迷わない。次々と長盾を川面に手放している。木材なのか、浮かんだ盾の上へと鬼たちが飛び乗る。腹這いもれば、桐花を担いだ鬼のように正座もいる。そして背後に迫る高波を睨みながら、両手で川面を漕ぎ始めた。

「乗れ、乗れ、乗れねえヤツは置いてくぞ！ イヤツハイ！」

鼓膜を痺れさすような激しい水音と共に、高波が押し寄せる。鬼たちは興奮した喚声で吠えながら立ち上がった。

盾じゃない、と桐花はここでようやく気づく。鬼たちが担いでいたのがサーフボードであることに。

9・鷹が油揚げをさらわれた

体重をかけた足の膝から急に力が脱走し、空振ったようにバランスを崩した。荷物をかばったせいで肩から無様に床へ転がる。回転する視界にいた兵士たちが急にブレて、ぼやけた軍服色の塊になった。

ああクソっ、また片眼鏡が飛んだ。

体を起こし、大事な荷を膝に挟んで確保する。襟に留めたクリップの鎖を手繰ってレンズを捕まえ、乱暴に眼窩へはめ込む。荷物を抱えなおすと、カルロは宮殿の廊下を再び駆けだした。すれ違った兵士が叫ぶのが聞こえた。

「その副官を通せ！ 伝書鳩だ！」

鳩舎で待機している、と命じられていた。カルロは埃っぽい鳩舎が苦手だ。袖で鼻をガードしながら耐えること二時間弱、一羽の鳩が帰り着いた。飼育員が籠に入れて渡してきた鳩の足には、スマラグダスと打刻された革のタグが付いていた。

日系人居住地へ赴いたトーカ女史には、スマラグダス大佐の傭兵二名が同行した。月天は読み書きができないし、ロザリアは視力を失って久しい。伝書鳩に通信文を託すことは不可能だった。だから鳩の帰着が意味するところは一つ。

『異状アリ』

カルロは鳩の入った籠を抱えて鳩舎を飛び出した。宮殿のアプローチ階段を一段飛ばしで駆け上がり、ホールを走り抜け、幾度か転びながら大会議室へと急ぐ。扉を守る衛兵は、鳥籠を認めるや否やカルロを通した。

会議は即座に打ち切られ、スマラグダス大佐はその場で鷲十五羽編成の中隊の指揮権を与えられた。そうするよう、軍幹部はダルジ少将から事前に内々の通達を受けていたらしい。

「レオン副官、通訳として帯同を命じる。来い」

連日の猛ダツシユに脚がへ口へ口なカル口だったが、投げ込むように乗せられた鷲の鞍から脱兎の如く逃亡した。地面へ転げ落ちながら叫ぶ。

「じ、自分は若干、若干でありますが高所が苦手でありましてッ！」常人離れした記憶力を持つ大佐はあらゆる言語で降伏勧告ができた。日本語も含まれている。何しろこの耳で聞いた、完璧な発音だった。自分が通訳について行く必要はないと思われまッ！

「男はみな雄に飼われている」

背後からの静かな声が不可視の手となり襟首をつかんできて、カル口は動けなくなった。

「私の雄は行けと命じている。闘えと咆哮している。守るべき者を守るために。だがおまえの雄は留守のようだ」

淡々と告げる口調に責める響きは感じられない。遺憾も軽蔑もない。

だがカル口の心臓には音を立てて亀裂が入った。お兄ちゃん、と脳裏に妹の声が響く。額のリボンを蝶結びしてやるたびにくすぐったがってキャツキャと笑う、妹の高い声が胸の亀裂を揺さぶった。

拳をググツと結んで心臓の亀裂を接着する。

「行きますッ。大佐、自分を行かせてください！」

離陸体勢に入って翼を広げる鷲の鞍の前部に、黙って一人分のスペースが空けられた。そこへよじ登りながら、カル口は回想に飲み込まれる。

おまえの妹は耳がいい。エコーロケーションを知っているか？音の反響を利用して周囲を感知する方法だ。視覚障害者は程度の差はあれエコーロケーションを利用する。私の傭兵の一人が動物に詳しい。洞窟に生息するヨタカがこの方法を用いて自由に飛び回ると聞いた。

私に妹を預け、彼のトレーニングを受けさせる。成功すれば、おまえの妹は闇を見通す奇跡の鳥として孵化するだろう。その目を買ってやる。敵国からの亡命者で知識も技術も持たない子供が、安全

保障と生活基盤を得る方法が他にあるのか？

悔しければ学べ。知識と経験を積んで、私から妹を取り返せ。おまえには数学の素養がある。軍立の文官養成学校へ推薦書を書いてやってもいい。空虚な自尊心は前途の落とし穴だ。現実で埋め立てなければ先へは進めない。

鬼の首に干されたようにぶらさがること、二十分は経過しただろうか。一秒の長さまで記憶しているラウーじゃないから分からない。気絶した人間って、何分くらいで意識を取り戻すものなんだろうか。軍医のラウーじゃないから分からない。

時間経過が分からないのだから、覚醒する平均値が分かったところで役に立たない。これって三段論法とかいうヤツだろうか？ 理屈っぽいラウーじゃないから分からない。うんでもきつと違う。

桐花は大人しく人質にされていて、暇だった。延々と続く河岸の深い森を薄目で眺めてじっとしていた。暴れば河へ逃げられるだろうけど、津波まがいのポロロッカに落ちたら命まで落とす。チャンスを待とう。川沿いに下っていけば日系人村へ帰れるはず。

鬼と不本意ながら密着してるから、恐怖でバクバクしたら気絶してないのがバレル。心臓を落ち着かせてたら、不思議と心も落ち着いた。傭兵二名とダルジ少将も機会を待っているらしく、密かに尾行するだけだ。

カラスに乗った傭兵たちは高い上空で鬼と太陽の間をキープし、逆光を利用して姿を消している。まぶしいのを我慢して見れば太陽の中に影があるけど、鬼たちが気づいた様子はない。

ダルジ少将はリバーサーフで逃亡を始めた十数匹の鬼たちの最後尾を射止めていた。長盾を奪うと不安定ながらも波に乗る。すぐにコツをつかんだらしく、鬼たちと距離を取り死角に入っただけだ。

デカイ図体に似合わず器用にバランスを取る姿をどこかで見たと

思ったら、立位驚ロデオだった。痔が回りまわって実戦に役立つなんて。俺スゲーなパフォーマンズだなんて侮ってごめんなさい、無事に帰れたらお礼にトイレットペーパーをプレゼントしますね！ほのかな花の香りつきで！

などと細かなところまで気が回るほど暇だった。ボル・ヤバルに製紙しに来てからというものの、こんな暇な時間があったらどうか。いやない。これが反語法なのは合ってるはず。

二週間で完了しると厳命したラウーに怯えて働き詰めだった。数え切れないほど試作を漉いたし、手が動いてない時も頭は動かされた。鬼の居ぬ間に洗濯というけれど、鬼に担がれて川で心の洗濯とは皮肉な話……だ……。

高波の奥に見え隠れするダルジ少将のさらに奥に、その編隊は現れた。ブルーインパルスの航空ショーみたいにキッチリ等間隔を保つ組織化された野生の渡り鳥は、多分いない。

偵察らしき一羽だけを離脱させ、残りは超低空飛行で河岸の森の梢にまぎれて追尾してくる戦略的な野生の渡り鳥は、多分いない。

ポロツカの波の速さと進路を見極め、ダルジ少将のサーフボード先端に超ピンポイントで矢を撃ち込める野生の渡り鳥は、いてたまるかーっ！

望遠鏡というものに初めて触れた。

噂は知っていた。スマラグダス大佐が幽霊船調査で発見し、科学技術部が復元と改良を重ねて実用化したばかりだ。軍は一分隊につき一台を配備する計画を立てたが、レンズ研磨に高い技術力を要し、そのための優れた眼鏡職人が不足して量産が遅れているという。

カルロは自分の片眼鏡の作り手を思い返した。同じ私塾の門下生で、彼らは姉弟そろって手先が器用だった。幾何が得意な姉がレンズを磨き、弟は新米鍛冶師のくせに細工までこなした。

二年が経った眼鏡は度が合わなくなってしまうたが、作り直すた

めに会う機会は二度とないはずだった。だからレンズの薄さと矯正力に驚嘆したアダマス人に職人を教えろと頼まれても、死んだと答えるしかなかった。

会えない人間は死んだ、帰れない故郷はなくなったことにして勉学に励み、軍立文官養成学校首席の椅子を……クソ、卒業試験中に胃痛で泡吹いたりしなければ、自分が首席のはずだったんだッ！

カルロは軍の最新機器をギリギリと握っていたことに気づき、慌てて手指の力を緩めた。手には汗も震えもない。驚に乗ってみて、いつしか高所が恐怖でなくなっていると分かった。高所など温かいベッドだと笑えるようになったほどの戦慄発生源は、後部座席で矢を放ったところだ。

ダルジ少将が矢に結ばれた縄をつかんだ。直後に驚は急上昇して、少将を月天とロザリアの乗るカラスの背へ運んだ。賊の死角をキープしたカラスと驚で経過報告が始まる。

「おまえのジョーカーが持つてかれた。喜べ、ババ抜きなら俺の勝ちだ」

「その人称代名詞は誤認を含みますが、私の妻と仮定しましょう」
矯正の必要がない良い方の目を望遠鏡に当てる。大柄な賊の首に巻かれるように担がれているトーカ女史を捕捉した。

「怪我はないようであります、失神しているかと……む、カバンを握っている、起きています？」

「死後硬直って説はどうだい？ 八八八」

月天の奥歯には衣が着せられたり物が挟まったりすることがないのだと聞いた。字どころか空気まで読めないのかっ！

ふと、女史の爪先が緊張したように見えた。

「む？ トーカじよウオツフォン、大佐夫人が身動きを……」

「サッ、と望遠鏡の先を空へ転向する。」

「積乱雲であります。スコールが来る可能性が」

「天気はいーんだよ。ラウーのマゾい嫁を見とけよ」

「い、いえ、申し訳ございません。天気も大事かと」

しどろもどろになっていると、「確認しろ！」とダルジ少将の声に苛立ちが混じった。邪魔なジャックなら切ると脅された今朝の恐怖が膀胱から出そうでありますッ！

「あのなあ小姑、人質救出と遺体回収じゃ作戦が違ってくるんだよ！」

と申されましても、しかし！

「しかし痴漢行為を覗く趣味はありません！」
驚が震えだした。

「オレの見間違いだと思うんだけどよオ……」
くるくる巻き毛だけは鬼っぽい赤毛の男が話を始めた。

ポロロッカに乗ってリバーサーフする鬼の一団プラス桐花は、数ある支流の一本へ進んでいた。川幅が狭くなって鬼同士の距離が近くなると、怒鳴れば声が聞こえる距離だ。

「どーも見覚えのある女がいたんだよなア」

「あつたりめーだろオ、何度も襲撃してんだア」

「やりてえならさらって来いよオ！ オレにもまわせよオ」

「けどよオ、あの船アマダス軍だろオ？ やばくねエ？」

アダマスが氣象観測システムみたいな名前にされている。赤毛頭は中身もくるくるなのかも。

「アニキが話つけるさア。ヤツら銃が欲しいんだぜエ、オレたちがあそこで何やつても見逃すさア」

「だよなア！ 赤毛、おまえその女持ち帰って来いよオ！」

「ヒヤーそれマジヤベーよオ。だって見覚えある女って、アニキのワイフだよオ？」

「なんだってエ！ と叫びたいのを、気絶演技中の桐花は全力で飲み込んだ。」

話に出てくるアニキは鬼たちのリーダー格だろう。アニキのワイフそれは妻、ということは強盗拉致犯の身内。被害者である日系人村にいるなんてマジどういことオ？

鬼たちもギャーギャー騒ぎ出した。

「ちょ、赤毛、それアニキにオ二のように貢がせたあのワイフかア
！」

「どこに卸すか指図して儲けまくった、あの悪知恵女かア！」

鬼にオ二と言われるとは、かなりのイケナイ人らしい。

「アニキのワイフが何であそこにいるんだア？」

「イヤそれがあつち側の女ですつて顔しててさア、だから見間違いかと思つてさア」

「女スパイかア！ いいねエそそるねエ」

なるほどオ、職人村に潜り込んで、強盗や拉致のターゲットを下調べするスパイかア！ と推測したところで、桐花はふと思ひ出す。間諜であることを隠すため武器を携帯しないくノ一もいた、とか考へてた場面がなかったか……。

『わたくしもまた、鬼となる』

鞠姐さんの言葉が比喻じゃなくて真実だったとしたら？ さらにわられた弟を取り戻すため、アニキのワイフになつて二重スパイしつつ機会を狙つてたとか……姐さん、そんなアカンっ！ 姉弟一緒に仲良う暮らさなあかんで！

でも姐さんは桐花を人質に取るのに利用された。あんなに接近しておいて、アニキのワイフだと鬼が認識できないはずもない。うーむ謎だア。

「けどよオ、スパイにしちゃおかしくねエ？ 宝石と有り金全部持つてつたつてアニキわめてたぜエ？」

「オリジナルまで持ち出して夜中に消えたらしいぜエ？」

「アニキ泣きながら『旅に出ただけだア！』つて主張してたぜエ？」

「アニキ酔っ払つて『どこ行つたんだよオー』つて鼻水たらして……」

気の毒だけどさアニキ、現実を受け入れようよ。それは逃げられ
たよ！

同じ結論に至つたらしく、鬼たちの間にしばし気まずい沈黙が漂つた。

「……こえエ！ 女はこえーなア！」

「女にはしてエけど、ワイフにするタイプじゃねーなア！」

「ワイフにするなら逃げねーのがいいなア！」

うんうんと一斉に頷く鬼たち。桐花も頷きかけてアレ？ と思つた。

逃走して海で遭難したのを、軍を動員してまで回収してワイフにした空軍大佐がいたような気がする。白紙の小切手で破産危機に陥らせた浪費家をワイフにした大佐がいた気がする。さらわれてどこ行ったか分からなくなったのを今、太陽の逆光に潜んで追尾してる大佐がいるような……。

ワイフに不向きでゴメンと言うより、苦勞人だったんだねと慰めてあげたくなってきた。

「ワイフかア」

桐花を担いだ鬼がポヤンと浮かれた声で呟いた。

「アニキのワイフとはえっらい違うけどこの女、触り心地いいぜエ？」

腿の間に入り込む節くれだった手に、桐花は悲鳴を上げそうになった。

鷲が挙動不審である。

鳥類の頂点に君臨する猛禽、中でも大型のハクトウワシは威容も運動能力も鳥の王者の名を欲しいままにしている。大佐レベルが乗る軍鷲はエリート中のエリートだ。冷静沈着にして勇猛果敢。燃え盛る戦火も恐れず、鉤爪で敵機を握り潰すこともあるという。

その鷲が怯えてフルフルしている。舌を噛みそうで、カルロは歯を食いしばった。

カルロは鳥の羽の埃っぽさが嫌いだ。前触れなく爆撃してくるフンも嫌いだ。何しろユピテライズした巨鳥だ、フン直撃による死者も年に一人はいる。臭いのも腹が立つ。

けれどカルロは初めて鳥と同調した。背後では戦況報告と拠点制圧案が淡々と話し合われているが、同時に鳥肌も凍らす冷気が吹き荒れているのだ。

「『月を葬る暗黒の翼』、スマラグダス中佐の縁者ですかー？」

日系人村における日本語でのやりとりをロザリアが英語で再現し

て聞かせている。

「違いまーす。残念ですー、関係あるなら助けたのにー」

驚の震動がひどくなつた。食いしばつていても歯がガチガチ鳴る。亜熱帯気候でスコールなら分かるが、ブリザードで墜落死したら戦死判定の審査に通らないのではないだろうか？

「わたしの目的は『おにぎり』です！………文殊つてばなまつてるから、鬼斬りつて誤解されてたよ。おむすびつて言えばよかつたのに、ねー！ お兄ちゃん」

「ガキめ。あだなはダメだ、三度は言わねーぞ。つっーかおまえら兄妹か」

「レ、レレレオン副官と、よよよ呼べとゴリユツ」

舌を嚙んだツ、あああ血の味が、死ぬ、死ぬウウウ！

「えー、副官見習いのくせにー」

それを言うなアアア！

賊の襲撃を受けて、月天とロザリアは戦艦誘導のために村を離れたそうだ。賊と日系人の戦況、トーカ女史との会話をダルジ少将が話します。

「おまえのジョーカーは、拉致された日系人が強制的に武器を作らされてるつて考えてる。村なんぞ潰れてもいいと言つてやつたらシヨック受けてたぞ。そりゃそーだよなあ、おまえら兄妹と同郷だろ？」

「いいえ、少将。『紡ぐ家のトカ』はネイティヴの娘だと断言できます」

大佐はなぜ舌を嚙まずにしゃべれるのでありますか！

しかしあらゆる懲罰に厳正な方だが、痴漢行為にまで正義感を発揮なさるとは思わなかつた。このお怒りようはどうだ。奥歯が粉碎されそうに鳴る原因が揺れなのか背後からの寒風なのか、もはや分からない！

「ご推察の通り、レオン兄妹はボル・ヤバル日系人村出身ですが、伏せさせています」

「まーな。今は併合したけどな、敵国からの亡命者が文官養成学校
次席じゃあな」

卒業試験で胃痛にならなければ首席にイイイ！

「コウモリ狩りなんて内情知らねーアダマス人は、スパイだと疑う
だろーな。その妹が地獄耳で、どんな機密も聞き取れると来たら・
・・・俺なら牢にブチ込むね。っつーかおまえそろそろ教えるよ、
他にどんな傭兵隠し持ってたんだよ」

「賭け事好きの少将らしからぬ冗談を」

スマラグダス大佐は開示要求をあつさり拒否した。

「少将はポーカーが人生や戦争に似ているとおっしゃった。自ら手
札を明かしては、チップというリスクを賭ける意味が失われます」
俺のジャックのくせに生意気だな、とダルジ少将は歯を見せて笑
った。

「それで、少将。桐花が人質にされた経緯は。敵の要求は」

「あーそれが間抜けな話でさ、怪我人がいてさ。マリと言ったか、
脚と度胸のいい女でね。生きてたら愛人候補にしてやるか！」

「ねえ月天、愛人ってなあにー？」

カルロは望遠鏡を落としそうになった。ロザリア、聞いてはいけ
ない大人の事情をー！

月天は数十本の三つ編みを爽やかに風になびかせ、その肩に乗る
少女をいたわるような温かな笑みで包んだ。

「それはね、船で会った牛な乳の女と同じ仕事さ」

「なんとっ、月天が空気を読んだ！ わずかだが読んだ！ 借りは
作りたくないが助かった。」

ロザリアの耳に汚い言葉は入れたくない。本人は語らないが、大
佐の命令で盗聴して恐ろしく醜い世界を散々聞かされてしまったは
ずだ。アイマスク代わりのリボンが濡れていたのは一度や二度では
ない。

「分かった、あの胸がおかしー人ね！」

「キヤスカ。あいつ、『舟遊びつて言うから来たのお。楽しくて優雅なの、期待してたのにい』とか抜かして寝やがって。ボル・ヤバル随一のキャバレーから買ったんだぞ、いくらしたと思ってるんだ。まー四回もやりやあ立てなくてもしよーがねーけどな！」

「ねね月天、やるつてなあにー？」

純真無垢な問いに、男は春の陽光のような笑みで答えた。

「それはね、セツ」

「うわあああ口口口ザリア、そそそれは後でお兄ちゃんが教えゴリユツ」

借りは回収だ！ クソ、一日も早く口ザリアをこの歩く有害図書から引き離さねばッ！

「……………それで、少将。桐花が人質にされた経緯は？ マリという名の怪我人がどうしましたか」

「あー、その女を助けに行ったら待ち伏せされててよー。おまえのマゾい嫁は究極にマゾいな！ 腹殴られて耐えて、頭殴られて耐えてさ、痛みと人質の恐怖を最大限に味わいつくそうっつー根性。すげーよ。俺は感心したね！」

「ねね月天、マゾつて」

「そそそれも後でお兄ちゃんがゴリユツ」

「お兄ちゃん、口から血が垂れてるよ」

おまえのせいだアアア！

いや大佐のせいかもしれない。背後の冷氣排出量に比例して鷲の震えはひどくなる一方だ。鞍の上で尻が跳ねる。いいのだ文官は鷲に乗るのが下手でも、ぐあっ急所が、男の急所が鞍にヒットオオオ……………

「確認するが、少将」

ああもし大佐の言葉を袋に詰めて俺の袋に当てることが出来たら、この痛みがさぞやよく冷えるだろうに。

「待ち伏せしていた×××××な××は私の新婚の妻の腹を殴ったの

か？」

「あいやお待ちをツ？ 大佐の口からありえない卑俗な単語が！

「ねね月天……わーお兄ちゃん血だらけの口ぱくぱくしない
いで、キモいよ」

「なんだよ腹がどうした……あー、おまえ氣イ早すぎね？

俺にはバレてるぞ、おまえらの初夜がいつだったか。おまえめちやくちや機嫌良かったもんなー、当ててやろうか」

「ねね月天」

「ロロロザリアっ、初夜についてはゴリユツおおお兄ちゃんが後でゴリユツ」

ひどい鉄の味がする。あああと一回でも舌を噛んだら死にそうだ。痴漢を目撃したせいで舌を噛み切っても戦死判定の審査に通らないんじゃないだろうか……。

ロザリアは不満そうに蝶リボンの下の唇を尖らせている。神様仏様、妹に大人の階段を登らせるのはまだ早いと思うのでありますッ。いやそんな日は永遠に来なくていいのでありますッ。自分は天への階段を登りかけておりますがっ！

「じゃなくてー。あっちから音がするのー」

慌ててロザリアの指す方向へ望遠鏡を向けた。ガクガク揺れる視界に何かを捉える。行く手に幾筋かの煙が立ち昇っていた。森を拓いて建てられているのは無骨なレンガで出来た工場群のようだ。

「ここに攻撃目標、視認！ ゴリユツ」

11・慣れるより習いたかった

男の手が内腿を滑る。

同じ行為も相手によってこんなに違うなんて。

桐花は生理的嫌悪を叫ぼうとする口を気力で封じていた。せめて頭の中で、やだ、やだ、やだと暴れる。悔しさに心臓が焦げた。

昨夜の手は違った。こんな風にずけずけと入り込んだりしなかった。顔も見ずに一方的に触ったりしなかった。触り心地を楽しむだけの表面的な触り方じゃなかった。肌を通して別のものに触れようとしてくれてたのが、今なら分かる。

昨晚。透明なソースを舐め取られた肉は前回の痛みを覚えていて、ナイフに怯えた。ナイフは肉に分け入る本来の用途を譲りはしなかったけど、深呼吸を待つてくれた。高温の刃先で内側から熱を通され続けるうちに、ためらいも痛みもとろけた。

この手は違う。食事をただ栄養源としかみなしていない兵士みたいに、ろくに噛みもせず、味わいもせず、皿を空にすることに満足を感じるような手。食事が作業な手。食欲を満たすだけの手。

声に出せないから唇だけで、助けて、と繰り返す。

痴漢にあうのは初めてじゃない。通学する電車の中で何度もやられた。両親に『書店の娘は肩を小刻みに震わせ潤んだ瞳で周囲に助けを求めベシツ桐花ちゃん、変態はキツチリ撃退するのよ』と教わった通り、その度に「やめてください！」と言ってやった。

だけど今はたとえやめると叫んで暴れて逃げ出してお風呂に入っても、それで終わりにできない気がする。

昨夜の手に上書きして欲しい。汚い手に触られたところを、全部触り直して欲しい。くすぐったさが肌の下から首筋に走り抜けるよな、あの不思議な感覚をくれる手で。筋肉を締める熱を全身から奪って、繋がったただ一点に収束させてしまおうあの手で。

早くあの手に会いたいのに！

突然、大きく担ぎ直されて桐花は慌てた。鬼たちはサーフボードから岸に飛び移って歩き出していた。不浄な手は桐花の内腿から離れ、荷物の固定役に戻っている。桐花はひとまず安心のため息をつき、にじむ視界でこっそり周囲をうかがった。

森が開拓されて堤防が盛られ、乾いた土地が造られていた。レンガを積み上げただけの無粋な建物がゴタゴタと詰め込まれている。煙突や大きな開口部を持ったものが多く、小さな工場の寄せ集めに見えた。予想を裏付けるような硬質な騒音が聞こえている。

工場群は尖った鉛筆を隙間なく並べたような丸太の柵で囲まれている。行き交う筋肉質な男たちの中には武装してるのがいて、生産品の物騒さを語っていた。

「おー、収穫あつたかア？」

「それがなア・・・」

河から上がった鬼たちが、わらわら集まってきた鬼たちに襲撃失敗を歯切れ悪く話し始めた、その時。桐花の救出隊が喚声と共に大挙してなだれ込み、鬼たちに猛攻撃をかけた。

あれは！

桐花は覚えのあるスレンダーなシルエットに目を見開いた。

鬼の顔面に叩き込まれる鮮やかな飛び蹴り。太くたくましい腿がまぶしい。身軽に着地すると鬼の腕をかくぐり、ダダツと俊足で鬼の背後へ回るとその背を駆け登って、後頭部に強烈なドロップキックをかました。さらに口で鬼の髪を引きむしり、眼球に高速の硬質キス連打を浴びせた。

なんて闘争心。惚れてもいい、彼が闘鶏でさえなかったら！

桐花の種族違いなヒーローは鶏だけではなかった。ガアガアブヒブヒ、ブメエエエエ！ と騒がしく鳴きたてる動物たちが次々と鬼へ襲いかかる。

ガチョウが鼓膜にキンキン響く大声で鬼を怯ませたところへ、豚

がタツクルをかまして転倒させる。ねじくれた角を持つヤギは、「悪魔め寄るなアア！」と鬼に十字架を突きつけられる。場は一気に混乱に陥った。

月天の動物たち！

ペットが非常食だと思っていた月天の動物たちは怒り狂い、野生の攻撃性を剥き出しにして突っ走ってくる。桐花を担いでいた鬼は豚の突撃を受け、パニックって桐花を一本背負いの要領で豚に投げつけた。戦利品は丁寧に扱えコラアアア！

桐花にはブタといえば大人しい養豚のイメージしかなかったが、イノシシみたいなものだと思いついた。牙を剥いた鼻で突進しては鬼の足元をすくってブン投げている。小さな戦車的破壊力に鬼も腰が引けている。

さらに重低音のひづめの音が響いてきたと思ったら、牛だ。荒れ狂う牛たちに追い回され、突き上げられて吹っ飛ば鬼たち。桐花も踏まれそうになって、慌てて走りだした。おかしい、月天は牛までは連れてなかったはずなのに！

暴れ牛が走ってきた方向を見ると、工場地帯を囲む柵が一部壊されている。奥の牛舎らしき平屋から次々に牛を連れ出す三つ編み軍服姿が見えた。月天が牛の耳元に何事か言いつけると途端に牛は興奮し、暴走機関車みたいな勢いで突進していく。

ぞくりとしたものが桐花の心臓を逆撫でする。

月天はデーデにそっくりだ。雰囲気からすると兄だろう。デーデが属するネイティヴの『集う家』は動物を飼育、調教する職業集団だ。だから月天も『集う家』の一員かと思っていた。

でも扱いが違いすぎる。ネイティヴにとって、赤い血を持つ動物は友人のはずだ。食えることさえ許さない。なのに月天は動物たちに攻撃性を与え、体当たりの無謀な戦いに送り出している。まるで使い捨ての兵器みたいに！

奇襲から気を立て直したのか、鬼が動物に反撃を始めている。すでにグツタリと動かなくなってしまうたガチヨウ、銃弾に倒れた豚

なのに月天は見向きもせず、牛を兵器に変え続けている。

視線に気づいたのか、月天はふと桐花を見て手を止めた。体育会系の爽やかで温かな微笑のまま、着ていた軍服のアダマス軍章を指し、自分を指し、肩をすくめた。

『軍が部下にやらせることと、どこか違うかい？ 八八八』

「違う！」

桐花は叫んだ。

「やるのと、やらされるのは違……ギャー牛こつち来ないでー！」

突進してきた軽自動車サイズの牛に追い立てられて、桐花は大きな建物へ逃げ込んだ。

転炉、というその大釜の名称を桐花は知っていた。鉱業関連の翻訳をやらされたから。

レンガ積みの中場内は巨大倉庫みたいにドーンと大きな一つの空間になっていた。中央にデカイ壺形の釜が鎮座している。象だつて煮込めちゃいそうなデカさだ。実際は象じゃなくて溶鋼をグツグツして不純物を除くモノである。

釜は中央両脇を左右からT字の太い柱に支えられている。そこを支点に鉄棒の前回転みたいにグルンと反転、グツグツな鉄を流し出す仕組みだ。

転炉は口を斜め下に向け、一部が接地した状態で固定されていた。片側が地面に刺さった。だ。屈めば中に入れそうだった。

これは暴走牛爆弾から逃れる最高のシェルターじゃないかっ！
鬼から隠れることもできる。この鬼ごっこ、もらったア！

グツグツが取り出されて時間が経過しているのか、熱気は感じられない。桐花が転炉へ走り寄り、身を屈めて潜り込もうとすると。

「ごめーん、定員一名なんだよね」

くぐもった若い男の声と共に、釜の中の薄暗闇から何か突き出さ

れた。凶暴な金属の塊が冷笑する。銃口だ。

建物の外ではブモオオオと猛り狂う牛たちと逃げ惑う鬼たちの狂騒が続いていた。銃口か、鬨牛か、一瞬ビビったものの桐花は言葉の通じる方を選んだ。

「嘘つきっ、まだまだ入れるじゃん！」

でも銃口はつれなかった。

「別んとこ探せよっ、二人だと見つかる可能性が二倍になるだろー！」

「ケチ！ 表面積でいえばわたしの方が小さいはずでしょっ！」

小さな表面積に胸が大きな貢献だちくしょー！

「あーそうかよ、表面積が小さいなら牛に当てられる確率も低いだろー！」

「ここに入れば確率ゼロに出来るでしょーっ！」

と銃口と憎まれ口で対決していてふと、ぽんぽん言い返せている理由に気づいた。

「あれ？ 日本語………」

銃口がひたりと黙った。そして呟いた。

「………そういえば日本語」

「えと………もしかして太市さん？」

「あんた誰？」

薄暗い転炉の中から響く声は急に硬化した。

「あんた日系人っぽいけど、村の人じゃねーじゃん。オレ信じないよ。オレを引き抜こうとした武器商人がいたけど、バレて殺されたって聞いた。あんたそいつの手下かなんかじゃねーの？ カジヤベの」

桐花の脳裏に血まみれの男の記憶が蘇る。ラウーの傭兵アイヤイを奴隷に使っていた武器商人、ソウヘイ・カジヤベ。日系人だつたはずだ。この推定太市は、職人村出身でない日系人を警戒しているようだ。

「オレ殺されんのやだよ。どっか行っちまえよ！」

銃口でシツシツ、と追い払われた。桐花はぎゅつと拳を結ぶ。そんなんで諦めるもんか、無体な扱いは慣れていない！ 慣れたくないけど！

「待って。わたしアダマスから調査に来たの。銃の中に『請救助太市』ってメッセージを彫ってたでしょ？」

「カジヤベの関係者だって読めんだろそんなの！」

「あっ……そうだよね」

「アホかあんだ！」

生ぬるいつ！ そんなんで折れるもんか。天の頂上から地獄の底を這う脳なしを見下ろすような視線には慣れていない！ 慣れたくないけどー！

「鞠姐さんがくれたパイだって持ってます！ 何かあったら太市さんを助けるように頼まれたんだから！」

銃口が揺らいだ。二、三度繰り返された震えは、言いかけては言葉を飲み込む動きに似ていた。

「……パイをよこせ」

にゅつ、と釜の薄暗闇からもう片方の手が突き出される。

桐花はずつと握り締めていたカバンに手をかけた。二冊の重い辞書と一緒にシエイクされて、パイなんてもう粉々のメシヨメシヨ、原形なんて留めてないだろう。けれど信じてもらえると確信していた。

極限状態でも気力を失わず、頭をクリアに働かせ、自分の身を守るために戦うことを教えてくれた人がいる。そんな状況慣れたくないけど、慣れさせてくれちゃった人がいる。その前で迷わず毅然と胸を張りたいと願う、それが忠誠を誓うってことなんだと思う！

異色の瞳を心に抱き、大きく息を吸い、求められたものを叩きつけた。

「パイ！！ 3・14159265358979！」

12・名探偵にならないから助手

ロザリアは多分、日系人村の出身だ。日本語を話せるし、日系人村の立地独特であるポロロッカの現象も、龍が昇るといふ表現も知っていたから。

桐花は自分の推理を記憶と突き合わせて検証してみる。

まずロザリア。戦艦でクッキーを三等分させた時、歳に似合わない知識を見せていた。

『0.3333333333、ずうっと続く循環小数だからね』

それから鞠姐さん。

『あなた方も幾何学の父ユークリッドの名を汚すのですか!』

日常会話に循環小数とか幾何学の父とか出てこないよね。職人村の日系人は数学が得意なのでは？

そしてパイ。

姐さんのパイを素直に食べたなら怒られた。食べちゃいけなかったんじゃない？ だって妙な質問されたもん。三角のパイを出しながら、

『中は全体的に何度でございましょうか?』って。

変なコト聞くんだなーと感じてはいたのに、空腹がいけなかった。頭回らなかった。温度を聞いてると思つて、常温なら二十七度とか答えちゃったけど。あれって三角形の定義を問われてたんじゃ？

三角形の中の内角の和を全て足すと百八十度になる、という定義を。だから正解は百八十度。

ってことは鞠姐さんがパイを勧めた時の言葉も違う意味を持つてくる。

『合いますかどうか。いかがでございましょう?』

お口に合うか、を心配してるのかと思つてた。本当はパイ、つまり円周率の答えが合うかテストされてたのに、円周率を答えるどころかいただきますとおいしく食べた。そりゃ怒られるよ。

あの時正しく答えられていたら、鬼斬りなんて誤解を受けなくて

済んだのにー！

だから今度は間違えない。これでもアダマスの誇る凶悪頭脳、ラウー・スマラグダスの助手。パイをよこせと手を出されても、崩壊したパイを渡したりしない！ 小数点以下十四桁もの円周率をバーンとお答え……ん？

桐花の頭の片隅にイヤな記憶と予感がチラつく。

もう一人、円周率にうるさいヤツがいなかったっけ？

初対面で円周率を訊ねてきた変な人いなかったっけ？

小数点以下二桁ですかアルキメデスが証明してから二千年以上が経過してスマラグダス大佐の助手ともあるう方が二桁ですか、ってアホを見る眼差しを浴びせてきた陰険いなかったっけ……？
「アホー！」

イヤな記憶がイヤな事実を導き出す直前で、現実を引き戻された。
「そーだよ、オレたちは行商人なのか行商人のフリしてコウモリ狩りに来た女王に媚売る脳なしなのか、数学の問題出して判別してたけど今は違うだろ！ 姉ちゃんの手作りパイ出すとこだろー！ アホ！ アホーッ！」

やっぱり脳なし判定なのかーっ！

脳の入っていない頭を抱えていたら、転炉の中に引きずり込まれた。

厚い金属の壁に遮られ、外の喧騒が一段遠くなる。薄暗い場所で腕を引っ張られて、桐花は転びそうになった。

「あつぶねーな。コレ下向きの際は結構不安定なんだからさあ」
支柱から外れた転炉が転がり出したら人間ボウリングができてしまう。ただしボウリングと違うのは、倒れたピンが二度と起き上がらないことだ。桐花は転炉の口の中心にしゃがみこんだ。

怪物の口に飲み込まれたみたいだ。怪物の上歯と下歯の間、転炉の縁と地面との間から外の様子が覗ける。

アダマス空軍が空から参戦していた。上空へ発砲している鬼がいる。その背後に近付いた月天が牛の鳴き真似をすると、鬼は面白いほど飛び上がって逃げて行った。

「あんたはアダマスの人つてことにしとくよ。けどさあ」

桐花と並んで外をうかがうクリツとした黒目は賢そうで柔らかい。大柄ではないけれど必要な筋肉はしっかりある。シャツとツナギにべったり付着するススや汚れ、年季の入った鉤裂きは肉体労働者の勲章だ。身だしなみには興味なさそうなボサボサ頭。

鞠姐さんを姉ちゃんと呼ぶことで太市であると認めたと日系青年は、悟ったような目をした。

「アダマス軍がヤツらをやっつけたって、どーせオレは帰れねんだろ？」

太市の胸中が分かってしまつて、桐花は言葉に詰まる。

自分の意思と無関係に連れて来られた地で想う故郷。そこにいた時には存在を隠していた愛着はふとした弾みに鎌首をもたげ、禁断症状を起こして五感を悩ませる。

「えっと、ダルジ少将は……ボル・ヤバルを統治してる人でね、太市さんの銃をすごく欲しがってた」

「あんな殺生なモン」

太市は唇をへの字に結んでいる。いたたまれずに、桐花は外へ目を向けた。

戦況を見てみると、アダマス軍が武装鬼だけを狙撃しているのは明らかだ。武器を製造する職人は温存したいから。制圧すれば設備と人材をそのまま流用するのだろう。そこには太市も含まれる。

木箱の裏で弾込めしている武装鬼がいる。月天が背後から銃声の声帯模写をしながら小石を投げ付けると、慌てた鬼は銃を手放して降参を示した。さらに月天は武装鬼リーダーを把握、声真似でめちやくちやな指示を飛ばして鬼の命令系統をかく乱した。

「いいよ、オレやるよ」

戦況が完全にアダマス有利に傾いたのを見計らったタイミングで、

太市は言った。覚悟を決めた重みのある、それでいてサツパリした口調だった。

日系人村で元の生活に戻りたいんじゃないの？ 鞠姐さんと暮らしたいんじゃないの？ そう問いたい桐花の視線に、太市はボサボサ頭を横に振る。

「行商人に化けた脳なしを暴けば村を守れると思ってた。けど力で攻められたらこの有様でさ。オレには腕っ節はないからさ。銃を作る見返りに村を守ってくれんなら、アダマスのために働くよ」

太市は日系人村に忠誠を誓ったようだった。作るのが人を殺傷する武器であるという倫理違反より、故郷の安全を選ぶ。それが太市なりの正義なら、桐花には頷くしかなかった。

「聞きたいんだけど、ここのアニキのワイフって鞠さんだったりする？」

「んなことになったら姉ちゃんは自決する！」

「ご、ごめんすぐ説得力あった今の」

お寺の鐘みたいな転炉の中で怒鳴られたら響く。ワウンワウンと反響する音波は、三半規管をぐずぐず崩すような気持ち悪さだ。

気力でどうにか踏ん張る。桐花はリバーサーフ中の鬼たちの会話を記憶から引き出した。

「アニキのワイフが盗んで逃げた『オリジナル』って、もしかして拳銃？ 銃の製造って『オリジナル』を複製することだったりする？」

賢そうな目がくりくりつと驚きを表明した。

「よく知ってんね、うんそう。アニキが肌身離さず持っててさ。オリジナル用の弾は難しすぎて複製できないからさ、前装式にモデルチェンジしてるけど。え、あの女やっぱ逃げたの？ 文句タラタラだったもんなあ、こんなとこあたしのいる場所じゃないって」

「オリジナルは後装式でカートリッジを装填するタイプ？ 火薬は

弾の中に封入されてる？」

「え、あんたガンマニア？ 何でそこまで知ってんの、こえーんだけど」

桐花にはずっと疑問があった。この世界の銃がなぜ拳銃ばかりなのか。拳銃は携帯に便利だけど、射撃精度は低い。兵器として使うなら銃身の長い銃が優秀なはずだ。

昨日、ラウーに黙ってネチネチ添削された翻訳は銃の歴史を調べたものだった。

桐花のいた世界とこの世界はある時点まで同じ歴史をたどっていた。分岐点はこの世界で神々のビリヤードと呼ばれる天変地異。文明が大きく後退を強いられた数百年前、銃はせいぜい火縄銃が登場した頃だった。

『発見された場所や時代の科学水準から逸脱したモノを時代錯誤な工芸品、オーパーツと呼ぶならば』

製紙事業へ出発する時のラウーの言葉が蘇る。

そうだ、『オリジナル』の拳銃はオーパーツだ。完成度が高すぎる。文明の後退なんてなかったみたいに唐突に進歩した状態で出現してる。

誰が。

どうやって。

桐花はヘタリとその場へ腰を落とした。

まだいるんだ。わたしと、ジョージ・タイラー妖木老兵以外にもまだ。トレードをして、元いた世界から拳銃を持ってこの世界にやって来た人が。『オリジナル』拳銃所持者のアニキかもしれないし、そうでなくても、アニキはきっとその人を知っている！

ドオン、と大音響と共に地面が持ち上がった。

「やっべ！ 火薬庫じゃねーの？」

太市が転炉の口から這い出し、建物の外へと駆け出した。散発的な爆発が続く、壁のレンガがばらばらと砕け落ち、巨大な転炉がゆらりと身震いする。

「あんたも川に飛び込め、引火したら吹っ飛ぶぞ！」

叫びながら太市は一目散に行ってしまった。

桐花も不吉なアドバースに従って逃げたかったが、尻に地面の連続アツパーを食らって立つこともままならない。支えを求めて転炉の内側の壁に手をついたら、その壁がゆっくり遠のいた。

ゴオオンとお寺の鐘みたいな大音声が鼓膜を殴りつける。土砂崩れみたいな音がする。落下物が転炉に当たる、ゴンゴンゴン超早送りの除夜の鐘が鳴り響く。思わず耳を押さえた桐花の後頭部になつんと壁がぶつかってきて、桐花は前のめりに倒れた。
くそう。

鞠さんと太市、姉弟そろって脳なしと罵ってくれたけど、脳はある！ ホラ揺れている！ うええ気持ち悪い吐きそう。

でも知ってるもんね。人間意外と丈夫、そう簡単に気絶したりしない、はず……フニャ。

13・ソフトが誤作動しています

ロザリアは耳がいい。音に敏感すぎて大きな音に弱い。火薬庫らしき小屋と周囲の建物が吹っ飛んだ時、爆発音で妹の耳は痺れてしまった。

賊の活動拠点を制圧して捕縛する者は捕縛し、手当てする者は手当てすると、スマラグダス大佐は駆け寄ってきた。どうだ、と訊ねる声が硬い。問われたロザリアは泣き濡れた顔をぶるぶると横に振った。

「耳がじんじんと、音が遠くて……ごめんなさい、先生ごめんなさい」

月天が動物を投入する直前、非戦闘要員だったカル口はロザリアと共に牛舎へ降ろされ、トーカ女史の動向を追うように命じられていた。女史が逃げ込んだ建物は爆発で瓦解した。

「大佐、トーカ女史が！ 建物の下敷きにッ」
「戦域確保が先だ！」

微塵も迷いのない答えだった。軍人として当然だ。この拠点を押さえなければアダマス軍は大打撃をこうむる。銃の供給を断たれるからだ。女史の救出もできない。余計なことを叫んでしまった、とカル口はすぐに後悔した。

だが兵士たちが反応した。女史の危機と聞いてまず尻を押さえ、次に攻撃速度が倍加した。クソ拭き紙！ クソ拭き紙！ と唱えながら、ただならぬ形相で弓を連射し始めた。拠点は陥落した。

ロザリアは歩けない。三年前、ボル・ヤバルの風土病とも言えるポリオにかかって麻痺してしまった。月天に預けられた妹を背負わなくなつて久しい。記憶より重くなった妹を背に、女史がいたはずの瓦礫の山に駆けつけた。

だが耳の痺れたロザリアは、女史の消息を聞き取ることができなかった。先生ごめんなさい、と泣きじゃくるロザリアにすかさず与

えられた言葉は軍令のように短く、合理的だった。

「謝罪とは罪を犯した者がすることだ」

なんと気高いッ！ 我が副官生命を預けるにふさわしきお方でありますッ。

謝罪する必要は無い、という意味が分からずロザリアはキョトンとしていたが、とにかく泣きやんだ。

「桐花！」

いまだに土埃を上げる瓦礫に大佐の一喝が落雷する。

「桐花！」

叱りつけるような怒鳴り声。ひどい沈黙が肺を締め付けた。

大佐の手が壊れたレンガをつかむ。とんでもない罵倒の言葉を吐き捨てて、大佐はレンガの山を掘り始めた。

「イエッサー！」

命令などなかった。だが兵士たちは口を揃えて応えると、大佐にならってレンガの山に取り付いた。

「桐花、トカ、どっちでもいい、返事をしろ」

「ラウーのマズい嫁ー！ 生き埋めとかどんだけマズいんだよ、一人で喜んでないで出て来いよ！」

「大佐夫人ー！」

「トーカさまー！」

カルロは川岸を振り返った。爆発直前に建物から走り出た男を見た、知っていた。同じ私塾の門下生。片眼鏡の鎖を細工した鍛冶師。ずぶ濡れで木陰に潜んでいた男が、ハッと息を飲んで立ち上がった。

「おまえまさか……カルロ？ カルロ・レオン？ 生きてたんか！ うおロザリアもいるじゃんっ」

嬉々として走り寄ってきた太市から妹をフォーメーションCでガードする。

「太市、女史を見なかったか。ここにいただろう」

「へ」

太市はくりつと黒目を回して記憶を漁っていた。
「もしかして円周率小数点以下十四桁のガンマニア？」

ザシユ、ザシユ、ザシユ。

足音にしては緩慢な、土を蹴る音。大丈夫、検疫クリア。横暴で高らかで尊大な検疫対象の足音とは一致せず。横暴なのは足音だけじゃないけど。

あと五分、と呟いて桐花は二度寝に入った。

ザシユ、ザシユ、ザシユ。

近くで足踏みでもしてるのか、奇妙な足音は通り過ぎる気配がない。安眠妨害だ。

あっち行け、と呟いて桐花は三度寝に入った。

ザシユ、ザシユ、ザシユ。

「桐花！」

「起きてる」

反射的に言った。

目覚めて眼前にラウー・スマラグダスがいた場合、起きていると激しく主張しなければ驚の餌にされるといふ恐怖の経験則が刷り込まれている。ボル・ヤバルに来てすたれかけていた法則は、昨日から再インストールされて強力に稼動中だ。

昨晚、深夜にラウーが部屋に来た時も足音で素早く検知。脳内で警告音と格闘家の入場BGMが鳴り響いた。ベッドに膝立ち直立で出迎えたのに、一秒で沈められた。格闘史に残る瞬殺KOだった。

押し倒すなら直立で出迎える反射を刷り込まなきゃいいと思う。恋人と寝るのに慣れた女ならベッドの片側を空けておく習慣がつくものだ、と言われたこともある。声を大にして反論したい。並んでスヤスヤ眠る時間なんてくれないくせに、片側を空けてく必要がどこにあるんだ！

瞬時に色々と憤慨しながら膝立ち直立しかけたが、体に拒否され

た。頭が痛い。揺れる。うええ気持ち悪い。

「いるのか？」

ザシユザシユが中断して、代わりにラウーの声がする。ふらふらする頭をねじって見れば周囲はほぼ真っ暗で、声の方から唯一の光が差し込んでいる。まぶしい気持ち悪い。

「桐花！ 桐花？」

「それって呼んでるの？ 言ってるの………？」

連呼してたラウーの声がぴたりとやんだ。ザツザツ、と土の音がして光が小さくなる。

「埋め戻すのですか、大佐！」

「戦地で監禁とか本格派すぎます、大佐！」

「窒息プレイが大がかりすぎます、大佐！」

「クソ拭き紙！」

またぴたりと音がやんで、再びザツシユザツシユしだした。同時に意識も掘り起こされる。

そつだ、爆発があつたんだっけ。この暗い空間は転炉だろう。支柱の外れた転炉で、お椀を伏せるみたいに閉じ込められたんじゃないかな。横の地面を掘って助け出そうとしてくれるんだ。うええ頭ふらふらする。

「ぶははは面白れーな！ おいらウーの傭兵、」

穴を通してダルジ少将の朗らかな声が聞こえてくる。

「ラウーの声で嫁を連呼してみる！」

「うーん、違う」

「とうか、とうか」

「何が違うのかわからないけど、違う」

デーデ似の声帯模写青年傭兵、月天は『桐花』の発音だけが似ていなかった。日本語的には正確なのに、ラウーの発音とは微妙に違う。

「桐花、怪我があれば申告しろ」

「とうか、怪我があれば申告しろ」

「頭打ったくらいかな。最初のがラウー」

「さっぱりわかんねー！ おいおまえら、賭ける。ラウーのマゾい嫁はラウーと傭兵を聞き分けられるのか！ 小姑、記録しろよ」

壁の向こうはワツと歓声があがり、威勢良く賭け合ってやたらと賑やかだ。ジャラジャラと石貨が飛び交う音がする。もしもし、賭けの前にやることないですか？ 乙女の救出とか。乙女の救出とかっ！

「ハハハ。あらゆる動物の『排除しろ』が鳴けるこの月天、修正は完璧さ。お互い全力を出し切ろう。そうだね、万が一負けた時はトカの望みを叶えてあげよう」

「乗れよ、ラウー。聞き分けられたら製紙、印刷、図書館だったか？ おまえのマゾい嫁に何でも便宜を図ってやる」

「レオン副官。ビスコアの言葉を書面に起こしてサインさせる」

「了解いたしましたッ。『マゾい嫁に』い、いえ『トーカ・スマラグダスさまに何でも便宜を……』」

ラウーがダルジ少将を呼び捨てにして賭けを受けた！ 製紙事業がそんなに大事か。やっぱりトイレトペーパーが欲しい事情があるのか？ 賭けに負けたら転炉がわたしの墓標になるのか？ 無骨な金属の塊にそつと捧げられる一輪の花、たたずむ青年兵士……シブくていいかもしれない。

「桐花、聞こえたな？」

ありえない妄想に逃避しかけたところを連れ戻される。

「間違えてもいい、救出してやる」

花を、桐花含め、愛でるといふ行為からかけ離れたマシンのくせして寛容だ。ほつとする。

「だが鷺が満員だ。河口の艦まで泳いで戻れ」

ポロポロカで増水した河が干潮を迎えれば、立派なナイアガラの完成だ。滝行して転生してこいと。巨大イカに花の命を捧げると。

最初から「助かりたいなら間違えるな」って言えばいいじゃん！

「とうか」

「桐花」

「ぐすっ………後のがラウー」

「とうか、とうか、とうか」

「桐花、桐花、桐花」

「呼んでるの？ 言ってるの？」

ザツザツ。

「埋めるぞ」

「後のがラウー！ 埋めてから予告するなー！」

「桐花はマゾい嫁ではない」

「とうかはマゾい嫁ではない」

「最初のがラウー」

答える度にヨツシャいいぞーとか今月の給料がとか兵士たちは一喜一憂してたけど、その声はだんだん感嘆へ変わっていく。聞き分けられるのが不思議らしい。何でもないことなのに。

月天の呼びかけは語学の教材を聞いてるみたいだ。呼ばれてる気がしない。呼んでいない言ってるだけだ！ とラウーが主張する、夜の謎の連呼の方がずっと呼ばれてる感じがする。

あれってやつぱり呼んでるんじゃないかなあ。昨夜だって連呼直後に「渡すぞ」と、手を使わずに手の届かない所へ配達してきたし。ダルジ少将と月天は粘っていたが、賭けは桐花の完全勝利で終わった。ようやく穴が掘り下げられ、ほふく前進で這い出せそうな通路になった。

「来い」

よく知った手が穴から差し伸べられる。鬼に痴漢された時に渴望した手。握ると手よりも胸が温かくなる手。桐花はその手をぎゅっと握った。

掘られたイモみたいにずるずる引きずり出されるや否や、乱暴に抱き寄せられて金属鎧に鼻を打つ。痛くて涙ぐんだのを見計らった

タイミングで激しくキスされた。涙の再会演出ですか。さすが参謀、新婚パフォーマンスが抜かりない。出たのが涙じゃなくて鼻血だったらどうするつもりだバカー。

取り囲んでいた兵士たちから歓声と拍手が湧く。我らの尻が守られたのだとか感涙してるのがある、でもとにかくお礼を言う。

ラウーが後ろに回って、服に付いた土を払い落としてくれた。どこまでも新婚パフォーマンスが抜かりない。襟ぐりを払う指先が肌に触れると温かい。土をはたく指にしてはやけに長く肌に留まっている気がして、どきどきする。

いきなり、ウツという末期のうめきと共に眼前の兵士が固まった。凍りついた視線から推察すると、桐花の背後にメドゥーサ凍結版がいるらしい。

肩のあたりに異常に冷たい視線を感じる。あれーなんだろこの冷氣………。

冷たい空気は下にたまる性質を持つ。地を這い不穩に渦巻き出した冷気は瞬く間にブリザードへ成長し、亜熱帯を局地的に極地へ変えた。

「犬、蛇の次は男か、桐花。おまえは体に齒形を集めるのが趣味なのか」

マゾい嫁疑惑を推進してどうすんの？

「えっと………月天の発言だったらいいな」

「賭けは終了している。が、ラウー・スマラグダスの発言だ」

「ですよー。うわー正解でも全然嬉しくない。

「撤収すんぞー」

「りよ、了解、ダルジ少将！」

「手の空いてるヤツ、いかだ組め。捕虜を戦艦まで流すぞー」

イエッサー、と兵士たちは逃げるように………ではなく、逃げて散り去った。桐花は去り行く兵士たちをうらやましく見送った。

おまえの体が壊れても痛手ではないって散々宣告したくせに。齒

形ひとつでどうして怒るの？ マゾい嫁だと誤解されるのがそんなにイヤなの？ わたしだってイヤなんだ！ そもそもラウーの妻ならもれなくマゾ容疑がかけられるのは必然の運命だと思うんだ。怒ってるけど自業自得だよな？

なんて反抗したら、「縛り上げた人間と丸太は似ているな。いかなだの材料が不足で困っていた。安心しろ、ピラニアは自分より大きな獲物は狙わない。通常は」とか爽やかに言われそうだから黙つてこう。

ラウーのこの怒りっぷりだと、捕虜といかだで滝下りラフティングさせられちゃうんだろうか。あ、痴漢鬼がいる。あいつと一緒にイヤだなー。う、思い出したら気持ち悪くなってきた、うええふらふらする。泳ぐのも痴漢と同席もすごくやだ。ここは頭を下げて驚に乗せて欲しい。

倒れそうだったから、ラウーの肘に手をかけた。瞳に力をこめて訴えてみる。

「あの中に痴漢がいるの」
「知っている」

さらなる冷気がほとばしり、アマゾナス河さえ氷河にする勢いだ。珍しくラウーが騎士道ソフトを起動させている。よかったインストールされてないんだと思ってた。

「だからお願いラウー、上でいきたい。乗らせて。思い出さなくていいところに連れてって」

おおぅ………と兵士たちが呻いた。同情には浮ついた声だったけど、前屈みで乙女の受難を嘆いてくれている。

ラウーから発生した寒気団も勢力を弱めた。温かく密な微風がとろりと肌を舐めていく。ものすごく睨まれている。これはアレか、痴漢に遭う方も隙があるからだとか言いたいのか、そんなの男の勝手な言い訳だ！

「マゾでない証明に女王スタイルを望むのか？」
はい？

「女王が組み敷かれるのは、あつてはならない事だからだ」

ボル・ヤバルの前女王を踏みつけながら武装解除したと噂された……いや経験上真実だろう、とにかく女王を足蹴にした人が騎士道ソフトを実行し続けている。だんだん怖くなってきた。悪いモン食べてウイルスでももらったの？

「女王役もイケるのか！ 守備範囲が広すぎますっ」

「いやいや大佐の攻撃範囲が広すぎるんだ！」

「今夜、マダム・マリポーサに特注した鞭が唸るんだな……」

「お兄ちゃん耳押さえすぎだよ、痛いよ」

戻るぞ、とラウーは身を翻し足早に鷲へ突き進む。乗せてもらえららしい。桐花は後ろへ続きながらカバンを握り締めた。合成皮革の装丁にビニールカバーの辞書というオーバーツな技術の塊が入ったカバンを。

話さなきゃいけない。

鬼のアニキがトレードに関係していて、オーバーツな拳銃を持っていたこと。

14・接触不良な伝達回路

月天の鳴きで暴れ牛は鎮まり牛舎に戻っていた。が、牛舎前へずらりと並んだ巨大鷲によるご馳走発見の歡喜視線にさらされて、おろおろと足踏みを繰り返している。月天は頼れるお兄さんの和やか笑顔で牛を撫でてやりながら、「ハハハこれが食物連鎖さ」と諦めを説いていた。

駐機する軍鷲の中に、うずくまり手当てを受ける一羽がいた。鬼の銃撃で被弾したようだ。離陸したスマラグダス機を見上げてくる目は悲しげだった。

ラウーの操る鷲は風を捉えて上昇する。武器製造工場群はすぐ、密林の十円ハゲほどに小さくなった。川はテラリと光りながら森をかき分け河口を指す。鷲は流れに沿って滑空を始めた。

弓矢から銃へと主戦力は変わりつつある。弓の使い手であるラウーは時代の潮流に取り残されてるんじゃないだろうか。超レアだった金属鎧も鉱山の島ボル・ヤバルが領地になって価値暴落だろう。銃弾に耐える強度がなかったら眩しいだけの迷惑な鎧だ。

桐花は時代遅れとか迷惑のあたりをボカして銃対策を聞いてみた。「強度および威力と機動性は相反関係にある」

強化装甲の重量、前装銃の連射速度の遅さが気に入らないらしい。やられる前にやる派とも言う。でも。

体をひねり、後部座席のラウーへ向ける。鎧へ指を伸ばして心臓の真上に位置する甲片に触れた。磨きぬかれてぴかぴかの金属は、ラウーの体温を吸って温かいように思えた。

「何でもくれるって言ったよね。ラウーの鎧をください」

「防護服が必要ななら軽量化を施したものを……」

「別に着たくない」

むしろ着ろ。と責め気味な視線は無視だ。

「煮溶かしてアクセサリーにする気か？」

違うんだけどそれもいい。プラチナだったらどうしよう。キャンセル権発動して元の世界に持って帰れば大金持ちだ。製紙会社が買える。誘惑に負けそうだから聞かないでおこう。

「ラウーが着てて。でもわたしのだから、絶対に傷つけないでね」
甲片を撫でる。指先を通して、心臓の上の一枚に幸運を吸寄せたかった。不届きな銃弾が来ても逸れてしまうように。

「ここに穴開けられたりしないでね」

「おまえが言うのか」

ドスの響く低い呻きで凄まれた。素足で地雷を踏んだ気配！

「あつごめん、そうだよ。わたしが鬼の人質になってなかったら、もっと兵士増やして準備して安全に戦えたんだよね！ すみません！」

「おまえは私以外の銃身を受けるな」

背にのしかかるように距離を詰められる。飛行する鷲の鞍に逃げ場はない。もらったはずの鎧に潰されそうになる。

「私以外の銃弾を浴びるな」

ウィリアム・テルか。家族で射的しようとするな！ 正確にはウィリアムが的にしたのは息子じゃなくて息子の頭に置いたリングだし。ていうか鷲の上で馬乗りされるってどうということ、重い重い圧死する！

「あの、それより話したいことが。拳銃のことなんだけど」

唇同士が触れそうな超至近距離で舌打ちされた。ヤクザかつ。うん国家権力中枢にいるぶん、ヤクザよりたちが悪いぞっ！

「射的も鎧での圧殺実験も、人体じゃないものでやって！」

「私の銃身を鎧の中で圧殺しようとしているのは誰だ」

銃を携帯しているとは知らなかった。弓がいいとか言っついて。

「でもラウーの銃が潰れても困らないでしょ」

バサー、バサー、と鷹の羽ばたきだけがしばらく続いていた。南国の生温かい風が髪を梳いていく。ラウーは風に痛恨のボディープローを食らったみたいなの洗面で、やがて絞るように誓うように呟い

た。

「慣れさせている。感度は上昇している。すぐに、潰れたら困ると言わせてやる」

任侠伴優級の凄まじい睨みをきかせながら後退していった。ニブい初心者に射撃を教えているのか、苦勞してるっぽい。何もしてあげられないので、肩をぼんぼん叩いて慰めておいた。

「でね、銃のことなんだけど、ずっとおかしいと思ってたの。この世界の拳銃は進化しすぎてるって」

「歯形をつけたのは誰だ」

いつまで本題を妨害する気なんだろう。

「銃の歴史をすっ飛ばしてるもん。そんな時、子分の『オリジナル』って発言でハツとひらめいてね！」

「歯形をつけたのは誰だ」

精一杯の努力で詰問を流し、アニキトレード疑惑とオリジナル銃論を力説する。

「太市さんも銃の製造がオリジナルの複製だつて認めてたよ」

「まあいい。歯形は見た。話をすれば判別できる」

ラウー・スマラグダスが異常化の代名詞であるユピテライズと囁かれるのは、驚異的な記憶力も大きな一因だ。見たイコール覚えた、を意味する。記憶の中の歯形と対話相手の歯形をマッチングする気がらしい。

噛まれたのが二度と会いそうにもない通りすがりならまだしも、密接に連絡を取り合うダルジ少将だ。バレルのは時間の問題。けれど悪ふざけとしか思えない歯形より、桐花にとってはアニキの方が重大な関心だった。

「オリジナルはワイフに持ち逃げされちゃったらしいけど。アニキに話を聞きたい！」

「目的は何だ」

抑揚と人の気配がない声に心臓をつかまれた。

「実例を収集してトレードの仕組みを明らかにするのか？」

茶と緑の異色の瞳は冷えていて、桐花の継ぐべき言葉を凍土に閉じ込める。

「少将を使って日系人村視察をねじ込んだ理由は何だ。日本文化が恋しいか」

座って寛いでいればただの青年。左右で色の異なる虹彩は桐花には豊かな大地に映るのに、ひとたび軍人モードに入ると血の通わないう仮面になってしまう。そういう時、桐花は自分が氷の檻で隔絶された気分になる。唯一絶対の味方を失いそうな不安に駆られて心臓がざわつく。

「おまえはここに留まる理由よりも、望郷の念の方が強いのか」

「違う……」

ラウーがいる世界で生きると決めてある。ホームシックくらい許して欲しい。トレード経験者と話したり日本文化に触れたりしたいのは、帰りたいからじゃない。たまには一息つきたいだけ。

けれど助手と妻の身分を与え、アダマスの家に桐を植え、誠意をもって戻る場所を作ってくれたラウーには裏切りに映るのかもしれない。

「聴取は不可能だ。アニキと呼ばれていた主犯格の男は、爆発に巻き込まれて死亡した」

無駄のない弧を描いて鷲を降下させ、甲板に帰投したのは白金の金属鎧も凜々しく眩しいスマラグダス大佐だ。ひどく厳しい顔つきで前の座席のトーカ女史を睨んでいる。女史は死んで二、三日経った魚の目で放心している。救出直後にはなまめかしい雰囲気だったのに、様子がおかしい。

女史がおかしいのは日常の現象だが。

「なあにい？ うるさいのお……」

デッキチェアでくったりと日光浴していた女がけだるげに身動きする。ダルジ少将の愛人だそうだ。鷲の羽ばたきが起こした風が、

顔に載せていた傘並みに幅広な帽子のつばをめくり上げる。柔らかいウェーブのかかった金茶の髪があふれ出た。

「髪がモンブランケーキ……」

ぼうつとしたまま、女史が日本語で呟いた。

「世界的名峰は胸だけでいいじゃないか」

降機を失念しているらしく鞍にまたがったままの女史の腰を大佐は両手でつかんで、甲板の海兵に投げ渡した。

「レオン副官、持っておけ。私は事後処理に戻る」

驚はすぐに離艦する。羽ばたきの風を嫌ったのか、ダルジ少将の愛人は苛立たしげに唇を尖らせ、大佐と女史を嫌悪感丸出しで眺め、ハンドバッグをぶらぶら振り回しながら艦内へ引っ込んでいった。

「ねねお兄ちゃん、今のって胸のおかしー人でしょっ。愛人が仕事」

月天の肩に戻ったロザリアの耳にはまだ痺れが残っている。それでもカツカツと耳障りに響いたピンピールの音を拾ったらしい。

「英語で話す時はレオン副官と呼べと言っているだろう」

「見習いのくせにー。じゃあ日本語で話すもん。ねね、教えてくれるって言ったでしょー？ 愛人って何するの？ セツ、まで聞いた！」

「む、そうだな。セツ……セツ……セツ……」

これは都合がいい。日本語ならば当たり障りのない説明をしてもそれが月天にバレることはない。トーカ女史が不平を言うために日本語を使う気持ちが理解できる。

「むむ、せつ……」

「接客」

ポケットとしたまま、女史が呟いた。なるほどあながち外れていない。珍しく使える反応だ。

「接待」

それも良回答と言える。

「接触……説教……接吻……」

ふと、女史の目にわずかな生氣が帰った。

「ああ、そっか接種……」

それは正解すぎて言えないッ！

「日本語しゃべれるくせに黙ってたんだねえ……」

トーカ女史はニツコリと不気味な笑顔で恨めしげににじり寄ってきた。手にワラ人形を持っていても違和感ない。凄腕の祈祷師だという噂が真実なら、自分は今晚あたり吐血し悶死するのだろう。カ
ルロはウツと言葉に詰まった。

カツと見開いた女史の目が、怨！ と雄弁に叫んでいた。

「何で教えてくれなかったの？ わたしの独り言をラウーにチクるため？ どんなコト翻訳してくれちゃったの、首を吊らされるなら
レオン副官の腸を使ってやるから洗って待つといて！」

「グロい話はやめて下さい。第一、腸で体重を支えられるんですか
？」

「ラウーに聞いてよ、絶対知ってるよ！ っていうか問題はそこじ
やなくて、ラウーに日本語を教えたかどうかなの！」

詰め寄ってくる女史から逃げるが、艦上は有限だ。ぐるぐると早
足の逃走・追跡劇が始まる。

大佐が訊いてきた日本語は一つだけだ。妙な質問だったから記憶
している。

『すつごい目、キレー』

氷の鉄人スマラグダス大佐の口から軽薄な女言葉が再生された時
の衝撃はひどかった。数学の公式が二つほど頭から吹っ飛んだ。意
味を知った大佐は眉間を指で押さえ、しばし動かなかった。ご不快
だったに違いなく、以来、日本語を尋ねられることはなかった。

脳天気で命知らずな発言が誰のものか。製紙事業の補佐を命じら
れた際、トーカ女史の日本語の独り言は無視しろと言い渡されてよ
うやく悟った。

あのたった一言など、日本語を教えたくちに入らないだろう。教えてませんと伝えたが、女史の追跡速度は緩まなかった。

「日系人村出身ってことも黙ってたよね……未知の訪問者は数学のテストされること教えてくれなかったよね……鞠姐さんにも太市さんにもすっごいアホだと思われたじゃん！」

「言いました！ 食べ物を出されても手をつけるなど忠告しました！」

「んな不親切な忠告あるか！」

完全に押されている。女史はまるで日本語が母国語のように淀みなく言葉を重ねてくる。一体どこで誰に習ったのか。聞くなど大佐に敵命されているから聞けないが。

「ねえ。腸洗うついでに腹割って話そうよ」

腸提供を前提で話を進めなくてもいい。

「わたしのこと嫌いな理由を教えて。納得できる理由なら直すから別に……」

「わたしじゃラウーに足りないって思ってる？」

いきなり痛いところを突かれて足が止まった。

自分の力不足を素直に受け入れるのは難しい。前進はそこから始まると言われた。それでも難しい。

スマラグダス大佐を前にすると、自分の空虚さに腹が立つ。だから大佐を英雄に祭り上げた。自分が空虚なのではなく、大佐が有能すぎるのだと。ユピテライズにかなうはずがないのだと言い訳にした。

コウモリ狩りの恐怖に怯え、命がけで亡命し、幼くして傭兵になるしかなかったロザリアがいる一方で。ネイティヴであるだけで大佐に求婚され、それを婚姻届が虫の紙だという理由で蹴ったトーカ女史。

女史を嫌うことでは、ねたましさと自分の卑屈さから目を背ける術が見当たらなかった。

「足りないのは分かってるんだ。だから製紙して印刷して書店やっ

て、ラウーに認めてもらいたい。あのね、両親はわたしの幸せを祈ってくれた。でももう二度と会えないような遠いところにいて……

声揺れて、女史は少し間を置いた。

「わたしにはもう、幸せになるしか両親にしてあげられることがない。それがわたし自身で実現できた一つの親孝行なの。だから力を貸してください。ラウーの妻になれるように努力するから」
女史はバカだ、とカルロは思った。大佐に足りる女性が存在するわけがない。実際に有能すぎる方だ。

それでもカルロは了解しましたと呟いていた。

素直であることはプライドが低いのと同義ではないのかもしれない。単純で、だからこそ折られにくい強さなのかもしれない。

「ごめんね、お兄ちゃんがひねくれてて」

桐花が甲板へ戻ると、ロザリアに謝られた。満面の笑みというのは謝罪の顔ではないはずだけれど、実に無邪気な笑顔で謝られた。

「お兄ちゃんって？」

「カルロ・レオン副官見習い」

見習いって言うなアアア！ と遠くでヒステリックな抗議が上がった。

「ええっ！ 似てない。ロザ……姫は陰湿じゃない。名前が日本人っぽくないのは同じだけど陰湿じゃない！ それにレオン副官の目って青いよ？」

「名前はね、ママがラテン系だったから。ママがお兄ちゃん連れて日系人村で再婚したのがあたしのパパ。分かる？ パパの陰湿さが違うんだもん」

陰湿って言うなアアア！ という抗議はなかった。自覚があるなら直せばいいのに。

でもね、とロザリアは舌先をちろんと出した。

「陰湿なプライドを守ろうと必死になって伸びるタイプだから。時々コンプレックスを逆撫でしてあげるといいの。下手にほめると思いつがるからダメなんだからね！ あと、お水をいっぱいあげてね」
お兄ちゃん育成中らしい。難易度高そう。ものすごい同情心が湧いてきた。キヤラ選べないから頑張つて欲しい。

「それとー、あのね」

アイマスクの蝶リボンの端をいじりだし、ロザリアは急に歯切れ悪くなった。

「文殊が閉じ込められてた時、聞き取れなくてごめんね」

「あ、転炉？ あれは自分のせいだから………えっ、聞き取るって？ 透視じゃないの？」

「もー。多聞天つて言ったでしょ。聞いてるのー！」

ぷつと片頬を膨らませてから語られた説明で、初めてエコーロケーションという単語を知った。ロザリアは舌先で小鳥のさえずりのような音を出し、反響の仕方を聞くことで色々分かってしまうらしい。周囲の地形や対象物までの距離、材質まで。

「柔らかいものだと中まで聞こえるよ！ 胃が空っぽだから、おなか空いてるんだなーって」

そういえばクッキーを返してくれる時、そんなこと言われたような。じゃあ便秘だとか脳なしだとかも聞かれてしまうんだろうか！

ああつまさか寄せて上げてるなんてことも、と考えてふと引つかかっていた表現を思い出した。

「もしかして、ダルジ少将が連れてた美人さんの『胸がおかしー』って胸パッド？」

桐花が期待した名峰の盛り土疑惑は、ふるふる揺れるツインテールの黒髪にあっけなく否定された。

「中。病気の人もいるけど、あの人はおかしーの。柔らかいものが入ってて左右対称におつきくなってるっていうか………おかしーの、自然じゃないの」

切れたと思っていた糸が音立てて張る。

豊胸手術だ。そんなもの、予防接種さえないこの世界にまだ存在するはずがない。

モンブランケーキ色の髪、てらてらピンクのドレスを探しに艦内へ急いだ。

トレードしたのはアニキじゃない。アニキの Wife が豊胸手術を受けた世界からトレードしてきて、そして。

「はあい静かにい。大声出したら撃つわよお」

そして本人と一緒に世界を移動したに違いない拳銃、『オリジナル』と呼ばれこの世界の銃の原型になった拳銃を突きつけてきた。

鬼の赤毛子分がアニキの逃亡 Wife を目撃したのは日系人村じゃなくて、河口の戦艦上だったんだ。

口紅がべったり塗られたぶるつやの唇がうふんと微笑む。

「賢くやりましょ。ダルジ少将のお気に入り入手出すなんて、自殺行為よお」

この愛人のお仕事は殺生でしたとか、そんなオチいらない……

15・先入先出法といいます

「ソレがあつたからあ」

空に面した甲板から階段を下りると、砲列甲板と呼ばれる下層に出る。両舷には大砲が並び、階段裏の一角は間仕切られて医務室になつている。密会に適したその個室を覗いた瞬間、銃口と目が合つてしまった。

キヤスと名乗つた美女は桐花の上腕にあるBCG痕を銃口で指した。

「前にねえ、近所に日本人が住んでたの。何の真似かと思つじやなあい？ 針の痕がいっぱい並んでたらあ。聞いたら日本式の予防接種だつけえ？ この遅れた世界にはないわよねえ。うふふ。ないなあい」

口角が勝ち誇つている。逆に桐花は唇を噛んだ。出遅れた。並行世界のトレード経験者だと、こつちが気付く前に見抜かれ待ち構えられていた。

「ああ脅してるんじゃないの。だつてえ、あたしたちつて敵じゃないわけだし？」

拳銃は桐花を黙らせただけで満足だったらしく、ハンドバッグへ戻された。医務室の簡素なベッドですらりと肉感的な脚を組んで、キヤスはうふんと微笑む。

「簡つ単な話じゃなあい？ しゃべんないの」

モンブランケーキ色の豊かな髪の毛の陰で、青い瞳はとつぷりと甘さをたたえて見上げてくる。軍という男所帯に間借りしていた桐花は慣れない色気にあてられてくらくらしした。ゆっくりした口調が催眠術的に思考を溶かそうとしてくる。

気付け薬代わりにラウーの笑顔を想像してみたら、あまりに虚しくてボンヤリから覚めた。

「それは……トレードだけなら誰も傷つきませんけど」

「トレードお？ あースワップねえ」

キヤスは並行世界の交換で人が入れ替わるのをスワップと呼んでるらしい。

「言つとくけどお、スワップがバレたらヤバいのおんたの方よう。

アダマスの人質でしょお？ 民族の安全と引き換えの国家的政略結婚、有名よお」

どす黒い汚物をブツかけられたようだった。胃から嫌悪が逆流しかけるのを必死で我慢する。

信じられない。確かにラウーとの婚約は脅迫で始まったし、ネイティヴの人身御供かもしれない。でも何でそれをこの人に言われなきやいけないんだらう。

「それがなーんの関係もない女だなんてえ、バレたら死刑じゃなあい？ それを黙っててあげるって言ってるのよお」

まぶたをぎゅっと閉じても耳は閉じられない。甘ったるい声にざわざわと寒い鳥肌が立った。

「一緒に驚に乗ってた堅物そーなのお、彼があんたの夫？ あれ相手にハニートラップなんてまあ可哀想、無謀だわあ。うふん、頑張ってねえ」

ピンヒールがゆっくりと脇をすり抜け、部屋を出て遠ざかる。毒を飲んでしまった気がして、桐花は何度も胸元をさすった。

着艦したスマラグダス大佐機から慎重に怪我人が降ろされる。

大佐は軍医の腕章を巻いていた。中隊の指揮権をダルジ少将へ渡して治療に従事、戦艦に傷病者を収容、帰港する旨が艦長へ告げられた。捕虜は満潮に合わせて別の艦で運ぶ計画だそうだ。

担架に移された受傷兵の足は応急処置を施されているが、軍服を染めた血が生々しい。カルロは傷に視点を合わせない努力をしながら担架の足側を持ち上げた。もう片方を持ち医務室へと先導していた大佐の早足が急に止まる。

「診せる。……では用件は何だ」

厳しい問いかけを医務室内の誰かへ放っている。戦艦の狭い通路からは先客の姿が確認できない。

「何があった」

続く質問はさらに厳しかった。いや、あれは質問ではない。何かあったことは察知し前提にして、何があったのか？ 話せ、という二段階を一つに凝縮している。

「ハニートラップって何？」

トーカ女史の声だ。弱々しい。あんな声は二食続けて飯を食い忘れた時しか聞いたことがない。

「主に女スパイが性的な手段で敵を籠絡することだ」

「……はふっ」

妹を持つ身として聞き覚えのある吐息だった。泣きたさを押し留めていた緊張が切れ、詰めていた息と涙とが決壊する瞬間。男を無条件に面倒か焦燥あるいはその両方へ追い込む瞬間だ。

しかしさすがスマラグダス大佐。振り返ったのはいつもの理知的な、我が副官生命を預けるにふさわしき冷静沈着な表情だった。

「レオン副官」

そして数々の難局を服従させた指導者の唇で、短く合理的な命令を下すのだ。

「担架を持っている」

一人でどう持てとーッ！

この担架は隠された台を内蔵しているのか？ いや二本の棒に布を張ってあるだけだ。戦艦には担架の片方をチョイ置きしておくシステムが装備されているのか？ 需要低すぎるだろうそれは。衛生兵なら必ず知っている、一人で担架を持つ画期的方法があったりするのか？

返事に窮してモタモタしていると大佐方面からイラツとした気配が攻めてきて冷や汗が噴き出す。

すると担架に乗っていた患者が寝たままビシツと敬礼した。

「直ちに夫人の元へ、大佐！ 担架なら自分で持ちます！」
自分でどうやってー！

感謝する、すぐ戻ると答えて大佐は担架を離した。カルロは慌ててしゃがむ。患者は受け身を決めて床に軟着陸し、グツと満足げな親指を立てて見せた。

こいつには大佐の合理性が理解できているのか？ 自分には分からない、どういうことだ！

「桐花」

叱るように名を呼ぶたった一言には四段階が凝縮されていたように思える。どんな文脈で言われたのか？ 誰が言ったのか？ 話せ。私の時間を浪費させる気ならば涙腺を結紮するぞ。

しかし答えはなく、押し殺した泣き声だけが聞こえた。

「肩の歯形はダルジ少将だな。経緯は」

「アリの話をされて、いきなり噛まれた」

続く沈黙が大佐の理解の苦しみを語っていた。合理性の神も泣いている。おいたわしい。

「いいか」

呻きより地響きに近い震動がして、カルロの膝が笑い出す。

「ハニートラップの仕掛け人としておまえ以上の不適任者がいないことは、はらわたが煮えくり返るほど私が熟知している。むしろ逆だ」

聞き耳を立てていた担架上の兵士がムハーと身悶えた。

「ハニートラップを仕掛けているのはむしろ私だ、と……」

大佐、熱いです！

兵士の小声の歓喜にカルロは小声で猛抗議する。

「勘違いも甚だしい。大佐はむしろ嫌悪ばかりを感じるとおっしゃっているのだ！」

「おまえは知の時代の娘だ。雑音に惑わされずに仕事に専念しろ。そして」

地鳴りが囁く。

「桐花・スマラグダスに会わせる。早く」

「早くアダマス本土に戻って来いと……大佐、愛が燃えますす！」

「違うッ。速やかに大佐夫人たる人格を形成しろとおっしゃっているのだ！」

カル口の主張を裏付けるように、医務室からはハイイと怯えて涙も止まったような返事が漏れてきた。

廊下の担架に怪我人が横たわっていて、桐花は治療の邪魔をしていたことに気付いた。ごめんなさいと繰り返す。怪我人は必死に上半身を起こしなぜか感激の面持ちで手を握ってきた。

「アダマス軍立病院や隔離病棟での伝説のエンターテイメントをここで拝見できるとは。怪我の功名とはこのことです！」

病気や怪我をすると現れる疫病神みたいな言われようだ。

「ムハアうらやましいです大佐、こんな可愛い夫人の甘く熱いハニーポットにハメまくっウゴッ」

「鎮痛剤が不足している。代替手段を用いた」

軍医の手刀を延髄にブチ込まれた怪我人が医務室に搬入される。

処置の妨害をしちやいけない。場を離れようとしたら呼び止められた。手動麻酔したバイオレンス軍医が包みを投げて寄越した。

「鞠という名の日系人女性の切創は縫合した。全治二週間だ。謝礼を押し付けられたが不要だ、処分しておけ」

「そうだ鞠姐さん怪我してたんだ！ 無事だったんだ手当してくれただ。」

「ありがとう、と言う前に医務室のドアを閉められてしまった。ドア越しにありがとうと叫んだら霧笛に消された。もうすぐ出航するらしい。もう一度ありがとうと絶叫しておいた。」

階段を上がった甲板では朗々と響く艦長の指示に従い、乗組員がキビキビと帆の調整にいそしんでいる。空にはいつの間にか雲がも

つたり垂れていて、限界まで湿気を抱えた風が乱暴に髪をなぶつていく。打ち据えられた帆がばたばたとわめいた。

ハニートラップって何？ スパイが性的な手段で敵を籠絡することだ。

可愛くないと自覚しててもブスと言われれば傷つくのと一緒にだ。偽装結婚も新婚パフォーマンスも、自分で言うから耐えられた。安全と引き換えの国家的政略結婚でアダマスの人質。和平の象徴たる花嫁という美辞麗句だって裏を返せばそういうことだ。

だけどわざわざ嫌味たらしく言わなくてもいいじゃないかー！しかもその人質が性的手段で生き延びようとあがいてる、そんな見方をする人がいたなんて。

いつもならちよつと驚いてちよつと怒って流せたかもしれないけど、タイミングが悪かったと思う。

単なるホームシックを「ここより元の世界がいいのか」みたいに言われて申し訳なくて不安になって、トレード仲間と思ったアニキは死んじゃってがっかりして、そしたらトレードしたのはワイフでキャスで驚いて。

でもキャスは意地悪だった。何だよーあのせいぜい頑張りなさい的な上から目線！色気も胸もたつぷりだからってー。反論できないけどっ！

そうやって感情がぶんぶん振り回されてたところに、ハニートラップ扱いが来た。

ラウーが誠意で提供できる最高の待遇、妻。それを不純な行いで盗み取るうとしてるみたいに。そんなつもりもないのに。そんなんじゃないのに。そんな方法で欲しくはないのに。行き場のない悔しさが涙腺で暴れた。

うんでもあの不適任発言は怖かった。だよ。激しく迷惑と苦労ばかりかけてる、ハニートの一滴もないただのトラップだもんね。はらわたも煮えくり返るよね。涙も速乾したよ。アロナルフアもびつくりだよ。

とにかく怒られて我に返った。乙女の涙をくだらない、仕事しろと叱りつける冷血にも慣れなくちゃね。

冷血といえ、と桐花は手元の小さな包みを見下ろした。ラウーが押し付けられた、不要だ、処分しろと投げ付けてきたもの。患者さんの感謝をヒドい。ラウーを英雄視してた鞠姐さんの好意をヒドい。

中身を覗いてもいいよね。ほら処分するにも分別とかあるし、と口実をつけて開けてみる。

現れたのは白い三角形だった。竹皮に守られたおにぎりはつやつやと輝いていた。乱暴に扱われたのに形を保っているのは、きゅつと大事に握られたから。お米の甘い匂い。海苔の香りが潮を呼んで、涙が溢れてきた。

日本文化が恋しいか。ここに留まる理由よりも、望郷の念の方が強いのか。

尋問みたいな事務的口調が歓迎できない事態だと明言していた。助手兼妻にホームシックで帰国されたりしたら大損失だから。ラウーには契約書や「ここで生きてたいです」発言を振りかざして、望郷など無駄だと論破する方法もあったのに。

だって包みを捨てるつもりなら捨てればいいんだもん。海にでもゴミ箱にでも。わざわざ投げ付けてくるなんて、くれたとしか思えないよ。ラウーは中身が日本食だって知っててやったんだよ。何でも与えるって約束を守ってくれたんだ。

医務室の扉の前に駆け戻り、遮られた向こう側へ叫ぶ。

「ラウー、ありがとう！　ありがとう！　ありがとう！　一緒に食べようね。レオン兄妹と月天と分けようね。三つを五人で分けると一人何個？　数学得意な人が等分してね！」

「医者の手元を狂わせたいなら叫び続けている」

「ムハハ、大佐が笑つ……うらやましいです、今夜は大佐の手元でなく息子が暴れ狂うギャアア痛いです大佐お手柔らかにイイ」

ハニートラップなんていわれのない悪意は気にしない。頑張つてれば見てる人は見てくれてる。たとえたった一人でも、その一人がラウーであることが大切！

ボーウと霧笛が鳴り響き、アマゾナス河口の滝がゆっくり旋回していく。気付いた大切さを胸に抱き、徐々にスピードを上げて離れていく瀑布を眺めていて、大切な何かを忘れていることに気付いた。記憶の糸を手繰って戦艦に乗った目的を思い返してみる。

一つ覚えたら一つ出て行くなんて、本当に脳の容量に問題があるんじゃないだろうか。

日系人村で製紙用樹脂のこと聞くの忘れてたー！

16・チップに人生の残り全部

3÷5は？ なんだ0.6でキレイに割り切れるじゃん。じゃあ次の問題。正三角形の面積を6:4に分割せよ。解答制限時間はラウーに樹脂調査失敗が露見するまでとする。

往路と潮位が違うから、岩礁地帯の様相は一変していた。渦潮の位置も動いている。

艦長も乗組員も月天ロザリア組も艦首に取り付き、安全な航路の確保に懸命だった。すいませーん忘れ物したのでリターンお願いしますとは絶対言えない雰囲気だ。船も自分の信頼も座礁する。

操船の邪魔にならなそう船尾の隅で、桐花はダラダラと心臓に冷や汗をかいていた。

ダルジ少将と戦艦を動員させて、拉致されて武器工場で交戦させて死傷者まで出た。大規模な軍事行動に発展してしまった船旅の最初の目的、樹脂の調査をきれいさっぱり忘れてたなんて。

心象風景そのままに空は暗雲に覆われ、海は不穏な風に煽られて大きな波頭を立てている。

これはさつさとおにぎりを消化すべきだと思う。失態がバレて回収されるのはイヤだ。そうだらうーが治療で多忙な間に0.6個を先にもらっちゃおうか。

でもおにぎりの具が違ったら、それぞれを分けなきゃいけない。正三角形を5等分ってどうやって？ しかも具の入ってる中心部分を必ず含めなくちゃ。また鞠姐さんに幾何学の父ナントカって怒られてしまう！

「なあに一人で爆発してんのお……」

甘ったるい声に脳内の三角形が溶解した。キヤスは風に巻くモンブランケーキ色の髪をうざったそうにして、風上へ顔を背け細い眉をしかめている。

そうだった、と桐花は気と唇を引き締める。アダマスの人質発言

に茫然とした隙に逃げられて、話が途中で終わっていた。

「あの。ダルジ少将のそばから離れた方がいいと思います」

「なあにそれ、脅迫う？」

眉間に世にも嫌そうなシワを寄せても美人は美人のままなんて、神様はえこひいきだ。

「いえ。武器工場が制圧されたので、捕虜や職人が移動するはずで、少将の周囲にいると見咎められるんじゃないでしょうか。アニキのワイフは反アダマスゲリラに加勢してたと分かっていますから、きつと逮捕されます」

「やあだ、何でそこまで知ってんのお……スワップだけと思っただのにい、もおお」

ピンヒールが最後尾のマストに苛立ちを蹴りつけている。「キャスIIアニキのワイフ」まではバレてないと思っただけらしい。

「あいつとあたしは切れたのよお。いいじゃない昔のことなんて」
「でも元の世界から持ってきた拳銃がありますよね。この世界では製造不可能なSF級の武器です。そんな危険物を隠し持ってダルジ少将のそばにいるのを見過ごすわけにはいきません」

「じゃああげるわよお」

気抜けするほどあっけなかった。キャスはハンドバッグから拳銃をつまみ上げると甲板に置き、ピンヒールの先で軽く蹴って寄越した。金属の野蛮な塊がくるくる回転しながら滑ってくる。桐花は慌てて飛びのいた。

「うふふん。危ない危ない。トリガー引くだけで撃てちゃうわよお」

そんなものをむきだしでバッグに突っ込んだのか！ 少将に事故がなくてよかった。

アダマス軍は銃火器を厳しく管理している。民間人が持つていれは不法所持だ。銃の受け渡しを目撃されなかったかとアタフタ見回したが、幸い戦艦乗組員たちの注意は前方に集中している。

桐花はこの船旅で肌身離さず、それこそ鬼の首に干されてた時さえ握り締めていたトートバッグの中を覗いた。英和、和英の二冊の

分厚い辞書は鞠姐さん謹製。ピーチパイの残骸にまみれてベットベトだ。でも収納場所は他にない。辞書に慎重に拳銃を挟んだ。

「少将を傷つけたりしないわよお。だーいじな、素敵な権力者さまだものお」

ぶるつやの唇は優勢を微笑んでいる。

「分かつてるう？ もうあたしたち共犯よう？」

身の危険を説けばキヤス自ら姿をくらましてくれると考えたのに、甘かった。少将の愛人という豪華な椅子から降りる気はないらしい。オリジナルの拳銃を手放してしまえば、キヤスにはアニキのワイフだったという物的証拠は何も残らない。指紋鑑定法はまだないはず。武器工場の捕虜たちの証言など、他人の空似と笑い飛ばして済ませる計算だろう。

ダルジ少将の愛人が親ゲリラ武器商人の妻だったのも、スマラグダス大佐が国家的政略結婚した妻の出身詐称も、アダマスには大スキャンダルだ。国家に忠誠を誓った軍人二人の経歴は傷つき、キヤスと桐花は居場所を追われるだろう。

ラウーのそばにいらなくなる。

背筋に寒気が走って、身を縮めた。

キヤスが少将を傷つける気がないのなら、お互いが口をつぐんでいれば収まる話なんだ。気分のいい話じゃないけど、これが一番無難な解決法だと思う。

「分かりました」

「うふふ。そうよねえ。なら、誓いの儀式しましょうよお」

「はい？」

するん、と身体を寄せてくるキヤスは水中で餌をねだる熱帯魚に似ていた。ピンクのてらてらドレスの裾をひらめかせた魚にすり寄せられ、桐花は思わず二歩三歩と後退する。腰が船尾の手すりに当たったところで、ピンクの熱帯魚はひらりと横に並んできた。

苦手な相手に密着されて落ち着かない。カバンを抱えてモジモジしてしまう。

「えーと、儀式つて？」

あのねえ、と微笑み大接近する艶やかな顔に目を奪われた。パアンと乾いた音が何かなんて、腹部への衝撃でそれどころじゃなかった。尻餅について大きく揺れた視界にピンヒールの靴底が追撃してくる。ガンガンと腰を蹴られ、手すりの間から上半身が外へ抜けた。

「あらあ。二丁あるって言い忘れてたあ。ふふ、うふふ」

べったり塗られた唇が勝ち誇って歪んでいる。手すりの外へ見覚えのない拳銃が投げ捨てられていった。波間に沈んだ拳銃の後を追わせようと、ピンヒールの蹴りが容赦なく加えられる。

桐花は腹部を抱えて呻いた。

「この………嘘つきピラニア！」

後方で響いた銃声にびくりと跳ねた。

三本のマストと帆に遮られて船尾の様子は知れない。海面の注視を中断された乗組員たちとカル口は顔を見合わせた。

「艦長先生、あっち浅いよ」

チチチとさえずり続けていたロザリアが早口を挟んだ。暗礁探知から集中を逸らさない妹の成長に息を飲む。認められようと学問に励んだ二年間がグラついた。

「面舵二十度。副艦長、事態の報告を」

アイアイサー、と答えた副艦長が乗組員を二名選んで船尾へ向き直ったとき、下層に続く階段からスマラグダス大佐が飛び出してきた。軍医の白衣を羽織ったまま、手には弓矢を携えている。

誰より迅速に船尾へと駆ける上官の背を、カル口は迷わず追った。月天に抜かれた。ロザリアを船首に置いてきたようだ。負けまいと歯を食い縛り、長い甲板を走って船尾へなだれ込んだ。

トーカ女史が狂った。

としか思えない状況だった。女史はへたり込んで船尾の手すりに

しがみつぎ、般若の形相でダルジ少将の愛人を睨み上げている。伸ばした手がぶるぶる震えながら握るのは拳銃だ。

狙われている金茶髪の女は硬い表情で、大きな胸の前でおろおろと手首をさすっている。靴のヒールが片方折れていてふらつくが、それでも健気に立っていた。怪我はないようだから銃弾は外れたのだろう。

「大佐夫人！ 違法な危険行為です。ただちに武器を下ろしてこちらに渡して下さい」

副艦長の仲裁を女史は拒否した。ピンクのドレスの女を見据える目には明らかな殺意がこもっている。

何やってんすか、とカルロは頭をかきむしった。

スマラグダス大佐の妻、和平の花嫁が銃を無許可携行の上、あるうことか発砲、殺人未遂だとツ。大佐の輝かしき名誉に傷が！ 間違いなく降格だ！

「殺されちゃうわあ、助けてえ」

すすり泣くドレスの女に副艦長は慌てふためいて、必ず助けますからとなだめている。泣きたいのはこっちだ！

「レオン副官」

渦中の女史にいきなり呼ばれて心臓が飛び上がった。危険な視線はドレスの女から外れていない。いつ撃つてもおかしくないと思える。はいと答えるつもりの返事は喉に詰まった。

「辞書あげます。翻訳に使って。それからわたしとラウーが結婚してないこと、証言して下さい。わたしが何をしてもラウーは無関係です。今からすることはわたしの意思で、わたし個人の責任です」

普段の情けない女史と同一人物とは信じがたい強烈なオーラに囚われる。心肺が冷えて腹へ落ちる感覚。頭をすっ飛ばした内臓のどこかが、これが命懸けの決意表明だと悟った。

空気がびんと張って肌を刺す。どれだけ胸を膨らませても息が吸えない。

「ラウー。ごめんね」

場に似つかわしくない、静かで柔らかい声が言う。

「ラウーの隣が良かった。けど、無理になっちゃったみたい」

大佐はゆっくり瞬きした。見間違いかと疑うほどのほんの一瞬、安らいだ顔をさせたのは何だろうか。重圧からの解放、天上の許し、待ち焦がれた慕情を与えられた者のような満ち足りた顔をさせたのは。

しかし即座に鋼鉄の軍人顔に戻る。

「桐花、落ち着いて私の提案を聞くんだ」

「イヤです。夫でもない人の命令は聞けません」

「そうか。月天、私の背後へ。マスクを作れ」

理解できなかった。

怪訝な視線が飛び交う中、月天が大佐の背後にぴたりと寄り添う。渡された白衣の袖を引き破り、二人の顔の下半分をそれぞれ覆って後頭部で緩く結んでいる。ぼそぼそと小さな会話が聞こえたが白衣が口と喉元を隠していて、カルロには発言者が特定できなかった。意味が分からず戸惑う一同をよそに、大佐の声が響き渡る。

「トーカ、ならば私がその女を撃つ。おまえの制止は聞き入れない」

「トーカ、ならば私はおまえを撃つ。提案を聞くなら命は残してやる」

言い終わる時にはすでに白魔の弓が引き絞られていた。

ラウー・スマラグダス大佐は有言実行の男である。

副官ならずとも誰もが知っている。比較的や九割方などと半端な実現率ではない。大佐が突破すると宣誓すれば、百戦錬磨の兵士がこれも運命かと諦観を抱いた窮地さえ屈服させたと聞く。その判断は常にアダマス帝国軍に恩恵を捧げてきた。

しかし民間女性への狙撃宣告は忠実な大佐にあるまじき乱心だ。

一人は総統のご子息ダルジ少将が寵愛する愛人、一人はネイティヴとの和平の象徴であるご自身の妻。

人道にもアダマスにも弓引く愚行だが、やると言ったらやる方だからやる。実行されれば降格どころか投獄もありうる。

悪夢としか思えない。なぜこんなことになったんだ！ カルロは一世一代の怨念をこめ、狂乱の元凶を睨みつけた。女史の視線はドレスの女に据えられたままで、脇からの敵意など気付きもしない。

だが大佐の声は届いていたのが見て取れた。黒い瞳が動揺して唇も震えている。頬に涙が筋を作り、顎を伝い落ち、腿を打ってぱたぱたと音を立てた。

涙を追った先で違和感を覚えたカルロは片眼鏡をしっかりはめ直し、女史の服を凝視する。

かすかだが、白いワンピースに散る汚れは靴跡か？ 破れている箇所もある。めくれた裾から覗く腿には擦り傷がつき、赤く腫れた内出血は少将の愛人の壊れたヒールと形状が似てはいないか。ヒールの破損は壊れるほど女史を蹴りつけたからか。

銃を構え圧倒的優位にある者が、そこまでの激しい反撃を甘受するだろうか？

傷ついた脚の脇に女史の布製カバンが落ちている。穴が開いている。焦げたような小さな穴だ。カバンの口から分厚い本がはみ出している。表紙に並ぶ金文字に妙な歪みがあり、何かがめり込んでいる。交戦後の武器工場と同じものを見た。盾に撃ち込まれて潰れた銃弾。

胸の隅で黒い違和感かもやりと大きくなる。カルロは副官の証である軍服の飾緒を握り締めた。

ドレスの女はまだおろおろと手首をさすっている。
仮にだ。

カルロは数学の文章題を解くときの客観的思考回路を引っ張り出した。

立ったまま相手の下腹に拳銃を押し付けると仮定した場合、手首は多少無理のある曲げ方を強いられる。その状態での発砲は衝撃により手首を傷めるのではないか。

不意打ちを狙って拳銃を相手の死角に隠そうとするなら、カバン越しの発砲はうってつけじゃないのか。だが分厚い本が鎧代わりに銃弾を阻むことは予想できる事態だ。襲撃する者がわざわざ防御の厚い場所を狙うのは道理に合わない。

つまり女史がカバン越しに発砲したなら、そこに頭の回らない壊滅的バカだということになる。あり得る。しかし仮にそこまでバカではなかったら？ 女史が本を鎧代わりに使った、あるいは幸運にも鎧代わりになったのだとしたら？

毛穴という毛穴に氷が詰まった。

立ちすくんだまま見回した。副艦長と乗組員たちは少将の愛人へ痛ましい同情を、女史には警戒の視線を送っている。無理もない、女史には奇行の噂が多すぎる。

実際に奇特ではあるが、大佐に足る妻になりたいと願っていた眼差しは真摯だった。その女史が婚姻関係がないと告白し、こんな自滅行為に走るからには、切迫した事情が裏にあるんじゃないのか。誤解ではないか。狂った女史がダルジ少将の愛人を射殺しようとしている、この解釈は間違っているんじゃないのか。誤った危険なシナリオが進行している予感がする。このまま取り返しつかない事態が起きれば悲劇だ。

大気を固体化させる緊張の中、白魔の弓身がしなうって軋むかすかな鳴き声が出た。

17・張りめぐらす罫の糸、心の糸

白魔の弓の照準は曖昧だ。少将の愛人と女史、両者を狙える中空にある。

『トーカ、ならば私がその女を撃つ。おまえの制止は聞き入れない』
『トーカ、ならば私はおまえを撃つ。提案を聞くなら命は残してやる』

最後通牒は二通あった。賭けの記録を取らされたから知っている。大佐の声か月天の声帯模写なのか、矢の標的がどつちなのか、聞き分けられるのは女史だけだ。

二枚のマスクの裏から大佐の声が連射された。

「トーカ、動くな。動けば狙撃する。トーカ、言い訳は通用しない。基地には硝煙で狙撃手を嗅ぎ分ける軍犬がいる。トーカ、稀少な銃を隠し持っていた罪は大きい。トーカ、罪深き妻の似顔絵を作成したばかりだ。逃亡は許さない。トーカ、私はこの世の冥府からもおまえを連れ戻す」

女史への降伏勧告が続く。

顔の下半分がマスクに隠れたせいで眼光の凶悪さが際立っている。大災害に似ている。抵抗の意志をすり潰される。いかなる凄惨も受容する以外にないと悟らされ、凧いだ境地に招かれるような眼だ。

大佐に秘策があるのは明らかだ。単なる降伏勧告のために珍妙なマスクを装着する必要はない。女史宛てに秘めたメッセージを送っていると思える。降伏勧告に偽装した何らかのメッセージを。

「トーカ、諦めろ。信頼に足る目撃証人がいる。トーカ、アダマスに害をなす毒蝶は射落とすぞ。迷いなく、それこそ虫ケラと同様だ。トーカ、」

「うるさいのお！」

炎を吐くような一喝が空気を裂いた。

「さっさとこの女を捕まえなさい！ あたし殺されそうなお、」

何グズグズしてんのよお！」

威嚇的な命令の後には、戦艦が海を切り分ける波音だけが続いた。嘘を量る天秤が傾き始めている。降り始めの雨の緩やかさで、疑惑という名の分銅が天秤皿に積もっていく。

なぜなら連射された言葉にはドレスの女に不利な弾はないはずだ。投降への説得にキレて女史を刺激するのは賢くない。

もしドレスの女に後ろめたい事情があるのだとしたら？ 撃つという最初の狙撃宣告をされたのは自分ではと感じるやましい点があるのなら。暗号めいた降伏勧告に不安を煽られ、怒鳴りたくなるかもしれない。

神経質に引きつる唇が嘘の口紅で塗られているように見えてきた。甲高い罵声を浴びた副艦長は二人の女と大佐の間でぐるぐると視線を迷走させている。

待て。口車に乗るな。カル口は無言で訴えながら副艦長と乗組員へ首を振り続けた。奇妙な違和感を彼らも嗅ぎ始めたようだ。助けに動く者はいない。

「そお………」

副艦長たちの取り込みに失敗したと気付いたようだ。女は青い瞳を白けさせ、鼻先を鳴らした。

だが劣勢に落ちた女に敗北の気配はない。したたかに、ねっとりした値踏みの上目遣いで金属鎧を眺め回した。

「そおいうことね。あんたもグル。でしょお？ でもねえ、あなたたちはあたしを撃てないわ」

勝算があるようだった。撃てるものなら撃つてみなさいよお、そう挑発するように悠然と手すりへもたれて胸を張る。

「知ってんでしょお。スワップすると周りのモノもついてくるのよねえ。今あたしがスワップしたらあ、この女も巻き込んでやるわあ。スワップ指名されると破談にする力をもらえるけどお、モノみたいに巻き込まれた女にはそんなルール当てはまんないんじゃない？」
「うふふ、と失笑が混じった。」

「どこにも帰れなくなるわよお」

「キャンセル権……使うってこと……?」

トーカ女史はやつと言葉を取り戻したようだ。呟く唇は色を失っている。死ぬより避けたい恐怖に足をつかまれたように。指の震えだけでトリガーを引いてしまっそうだ。

スワップが何を示すのか不明だ。それでも嫌味な態度と女史の怯え方で脅迫だと分かる。しかも凄まじく効果的な。本性を現したドレスの女は余裕の微笑で形勢逆転をうまそうに舐めている。

神経に障る微笑は副艦長と乗組員たちに悪意のありかを教えた。今や彼らの敵視は女史からドレスの女へ完全移行している。

くそ、それでも推測の域を出ない加害者は少将の愛人だ。自分の軍人としての将来と意味不明だが強力な脅迫が、取り押さえるといふ強硬手段をためらわせる。始末が悪いのはドレスの女がそれを承知していることだ。場は得意げな悪意の侵食に揺らいだ。

「嫌よねえ、うふふ。嫌ならあたしに従って、」

「おまえは出来ない」

氷の刃が甘ったるい声を斬り落とす。大佐だけは太平の大地よりも動じていなかった。冷徹な口調に女の微笑が凍る。

「脱出を望んだのは、巻き込むほどの身近に拳銃を備えて保身する苦境に陥っていた者だ。おまえの企みはおまえには実行出来ない」

気高い威厳が打ち広がり、カル口の魂が畏れに震える。清冽な気に満ちた声が凜と大気を抜った。

「両手を挙げて床へ腹這いになれ。抵抗を捨てるならば命は残してやる」

「真正銘の降伏勧告。矢尻が魔性へ狙いを定めた。

「ちくしょう……!」

後は一瞬の出来事だった。

怨嗟をほとばしらせた女が女史につかみかかる。強奪されかけた

拳銃と白魔の矢が鳴るのは同時だった。金切り声が響き、ピンクのドレスが弾かれたように甲板を舞う。

「確保しろ！」

倒れたダルジ少将の愛人の肩を矢は深々と貫通していた。甲板に点々と血が散る。

「いたあい、痛いのお！ もお嫌あ、ここも嫌、あたしの価値分かんないクズばかり！ 換えてえ、またスワップしてえっ！ お願ひよお……あたしにふさわしいのはどこのお……」

射落とされた毒蝶はもがいて助けを泣き喚いたが、副艦長たちの迷いない手で捕獲された。

ああよかった、終わった。ようやく空気が流れだす。緊張からの解放と血の赤に腰が抜け、カル口がしゃがみこんだとき。

「撃つちゃった」

茫然自失の眩きがして振り返る。女史はへたり込んだまま、震える拳銃を虚ろに眺めている。ああしまった女史の人生まで終わってた！

「おまえには射撃の素質がない。命中させたのは私だ」

普遍の原理を語る口調で淡々と無能宣告する大佐。

「うそ。当たってないわけないよ。至近距離で撃つたんだよ？」

「傷を鑑定すれば私の正しさが証明される」

女史の頭は緩慢に横へ振られる。拳銃の重さに耐えかねた腕がゆっくり脱力していった。

問題は当たったかどうかではない、とカル口は巨大苦虫を奥歯に突っ込まれた心地で思った。

あれは正当防衛にあたるだろうか？ 少将の愛人は銃撃もやむを得ないほどの脅威を与えただろうか？ 事件の発端は全く謎だが、女史が銃を不法携行し少将の愛人に発砲したのは事実だ。空軍犯罪諮問機関にかけられ違法と判断が下れば女史は破滅、大佐も罪を免れない。

マスクを外した大佐は弓矢を副艦長に渡して自ら武装を解いた。

ならつたように女史も武器を甲板へ放す。細い両手首を差し出された乗組員は、捕縛は遠慮させて頂きますと応じなかつた。

「紡ぐ家のトカ」

大佐は珍しい呼び方をした。

「ネイティヴの誇りを保つて聴取に答えろ」

「うん。でも撃っちゃった」

女史はへニヤツと笑う。照れたような、妙にスッキリした笑顔で大佐を仰いだ。

「ラウー。おにぎりおいしかった。食べれなかつたけど、人生で一番おいしいおにぎりだったよ」

二人は別々に身柄を拘束された。

ワゴンを押している、というよりワゴンに支えられてるのが明白な衰弱ぶりです。戻ってきた。片眼鏡越しの遠目でも間違いない。遭遇を避けたいがゆえに目に焼き付けたあの骨太ひよる長は厨房のアントニオだ。

カルロはワゴンに駆け寄った。

皿の配置は覚えている。かぶせられた銀のふたを持ち上げ中を確認する。よし、大佐は通常通り完食。トーカ女史は、ああクソつまた食べ残した。日誌に控えておいたメニューのうち、食べ残されたものを丸で囲む。

衝撃の発砲事件から三日が経過していた。

あの日、戦艦の軍港帰着を待たず、連絡を受けたダルジ少将は驚で乗り込んできた。概要を聞くと箝口令を敷き、スマラグダス大佐、トーカ女史、愛人を基地のどこかに個別に留置したようだ。ロザリアがどんなに耳を済ませても聞き取れずにいるから、恐らく宮殿地下。

カルロが事件の目撃者として事情聴取されたとき、相手はダルジ少将一人だった。空軍犯罪諮問機関は召集されず、少将が単独で捜

査しているようだ。民間女性同士のトラブルに大佐が介入しただけとの判断なのか、事件に機密レベルの重大性があるのか。両方が。

大佐も女史も不在では、カルロの仕事はほとんどない。二人宛ての手紙や荷物は検閲のため、少将の副官シュレイダー氏へ回されている。戻されてきたものを保管するだけだ。ことごとく開封された郵便は激しい屈辱を覚えさせる。

主の不在に傭兵である月天とロザリアも無為な時間をじっと耐えていた。

マスクの裏で大佐が女史に伝えかったメッセージは何なのか。

月天は大佐の合図があつたときに女史の名前を言っていたそうだが、記憶を元に、大佐ご自身の呼びかけで始まる文章を拾うところなる。『ならば私がその女を撃つ。おまえの制止は聞き入れない。言い訳は通用しない。基地には硝煙で狙撃手を嗅ぎ分ける軍犬がいる。私はこの世の冥府からでもおまえを連れ戻す』

カバンの弾痕は誰の発砲によるものか、軍犬が真実を嗅ぎ分けてくれる。愛人の言い訳は通らない。私とその女を捕らえるから、おまえは撃つな。

そう伝えて冷静にさせたかつたんだと思える。

ここまでは推測できても謎はまだ多い。スワップ、キャンセル権の意味。少将の愛人が女史を襲った理由。女史がその真実を話さず、愛人に反撃して一人で罪を負う覚悟でいた理由。大佐がマスクを使って真意をかく乱した理由。

いくら考えても答えは出ない。

そして仕事はない。製紙事業も樹脂問題で頓挫している、と対ロザリア有害図書月天に愚痴ってしまったほどだ。せいぜい大佐と女史の健康状態を食事でチェックするくらいしかやることがないし、他に二人の消息を感じる方法がないのだ。

厨房を張り込み配膳係を突き止めた。アントニオなのはウザかったが、同時に安心材料でもあった。アントニオは以前から女史が気に入る食事作りに一人勝手に張り切っていたからだ。さすがに届け

る部屋の場所は口を割らないが、プライドをねじ曲げて頼むと皿のチエックは見逃してくれた。

「なーなー、オレ寿命が百年縮まる恐怖体験しちゃったんだよ、聞いてくれよー」

皿チエックが済んでさっさと帰ろうとしたところを、後ろから襟首つかまれた。百年縮まったらもう絶命しててもいいはずだが。

「スマラグ……うわマズい今のナシ、彼がさ、最初に言ったんだよ。奥様の好物は鯨だから毎食入れてやってってくれっさ。オレ頑張ってんだ、毎回違うの入れてんだ。でも今日初めて残されちゃって、なあこれって嫌いな味付け？」

ウザい。無視してやりたかったが、アントニオの協力を失いたくない。

しぶしぶ銀のふたを開けば確かに鯨フライのトマトソースがドンヨリしている。それが恐怖体験か？ だとしたら女史が食い忘れた歴代の食事にアントニオの寿命は何転生ぶん吹っ飛ぶことか。

「彼さ、食べんのすんげー遅くね？」

いや一秒の無駄もなく効率的に召し上がる方のはずだ。

「すんげー遅くてさ、邪魔しちや悪いから、奥様のを先に片付けるんだよ。それから彼の皿を回収しに行くと、奥様の食べっぷりを聞かれるわけ。会話は基本禁止されてるけど、食い物の話くらいは衛兵も止めないし」

何イイ皿チエックを大佐自らなさってたのか！ 自分の唯一の仕事が無意味に。副官だと確認できる唯一の作業がアア……。「でな、さつきも聞かれて、鯨フライを残したと話した瞬間に……」

クワツと目を見開き、アントニオは身を反らした。次に上半身をワゴンに突っ込み、食器に埋もれて動かない。寿命が百年縮まる恐怖体験を思い出したらしい。

大佐が女史のずさんな健康管理に呆れる姿なら以前に見ている。恐怖体験などと大げさな。下っ端シェフコートをソースまみれにし

て横たわるアントニオを放置し、カルロはその場を去った。

しかしトーカ女史の好物は鯨より白身魚だったと記憶している。

次の食事ではアントニオが泣いて頼み込んだせいか、女史は怪訝な顔をしながら鯨を食べ切ったそうだ。前回より深くワゴンに撃沈したままアントニオは呆然と呟いていた。

「今日ボル・ヤバルは沈むんだ……笑った、彼が笑った……」

「俺の身にもなれってんだよ、小姑」

重厚かつ壮麗かつ高価そうな執務机にドーンと軍靴の足を載せ、豪華かつ巨大かつ快適そうな椅子にズーンと沈んだダルジ少将は獐猛な唸り声を鳴らした。

たてがみのような波打つ黒髪はかき回したのか乱れており、銅色の肌は倦怠にくすみ、筋肉質の巨体もいつもの覇気に欠けていた。ふてくされた唇が文句を連ねる。

「あいつ参謀本部のエースだぞ。そんなんと渡り合ってみろ、俺はもう考えすぎてハゲそうなんだ」

「はい、いえ、申し訳ございません」

「隠そうつたつてそうはいくか。ところがだ、つじつま合わせようとする空想みてーなブツ飛んだ話になっちまう。俺に大嘘ついたらあの錯乱ヒステリーが唯一、真実をしゃべってることになっちまう。んな矛盾あつてたまるか。なのに銃だの辞書だの物証はある。なあ俺の苦悩が分かるかってんだ」

「はい、いえ、申し訳ございません」

うなだれて何十回目になるうかという詫びを述べつつ、カル口は胸中で深く嘆息した。

延々と垂れ流される愚痴は話の長さにもかかわらず情報が少なく、真実は窺い知れない。分かるのは証言の食い違いに少将の頭が煮崩れてることくらいだ。

「納得いくようで信じられねー空想は別としてだ。もう一度聞いとくぞ。ラウーの暴れ妻が撃った弾は、錯乱女に当たったか？」

愚痴が尋問に転じた。カル口は背筋を伸ばし直す。

侮蔑と不信もあらわに錯乱女と呼び捨てられるのは少将の元愛人だろう。アントニオは元愛人の食事を世話していない。留置されているのは病院か獄中か。

「位置関係からしますと当たったように思いますが正確にはその、傷を見ておりませんので分かりかねます」

「診察した医者とは、ラウーじゃねーぞ、医者は矢傷しかないと言いやがった」

あの至近距離で外していたのか。女史の射撃センスは壊滅的だ。素質がないと断じた大佐は正しかった、と満足に頷いた。

ズゴーンと軍靴が机に踵を落としてカル口はヒヤツと縮み跳ぶ。机上に散乱していた手紙類がさらに散乱した。

「てめー頭を使え。考えてみる、白魔の矢だぞ。ラウーなら弾道を寸分違わず矢でなぞって、銃撃の痕跡を隠滅するくらい出来んだろ」

「お、お二人が撃つたのはほぼ同時でした」
同意という餌を求める猛獣を前に声が裏返る。

「お言葉ですが少将のおっしゃる、針の穴を通すようなピンポイントを狙います時間などありませんでした」

正直に実感を述べた。が、猛獣はウガーと強情に吠えて餌をゆるる。

「だからあいつは白魔だつってんだろ、人間ワザじゃねーんだよ！ てめえいつペン前線に出て来い、俺の説に全身全霊で賛同するぞ！ あいつは銃撃を隠蔽しやがったんだ！」

それこそ信じられねー空想でありますッ！ 大佐がそんな無駄な面倒を踏む理由が理解できません！

ふーう、と巨体もしぼむ大きなため息をこぼして、不満げな獣は深く椅子に沈んだ。

トレードマークの金属鎧をまもっていなくても識別できた。すらりとした体躯が堂々と威厳に満ちた足取りで近付いて来る。一本の乱れもなく整えられた金髪。聡明さを漂わせる額。凜々しい口元は意志の強さの象徴だ。そして何より特徴的な、魂を圧する力を有した異色の眼。

ラウー・スマラグダス大佐は四日にわたる拘留の疲労を全く見せなかった。逆に充分な睡眠を取ったためか気に満ちている。ダルジ少将の執務室に入り、洗練されたフォームで敬礼なされる姿が輝かしい。頼もしい限りでありますッ、とカル口は内心涙にむせんだ。

対するダルジ少将は椅子に埋もれたままキレのない敬礼を返した。「癪に障るがどうやらこのゲーム、俺に分が悪い。降りてやる」

「格別のご配慮に感謝致します」

今月の返済分です。あーご苦労さん。という債務者と取立て屋の幻覚が見えた。

「おまえが隠蔽した一発は見逃してやる。俺が何発もブチ込んだあいつの正体まで隠蔽した礼だ。ったく、おまえが頭と体張って守る女でこつちが戦犯じゃどーしよーもねー。公になったら俺がヤバかった。うへー借りがデカすぎてこえー」

「何のお話か理解しかねます」

残金はおいくらほど。生かさず殺さず搾ってやるさ。という債務者と取立て屋の幻覚が見えた。

「あいつの空想話もつじつまは合うが忘れてやる。真相を糾弾してジョーカーを失うより、取り込んで現状維持した方がアダマスの利益だと判断した」

債務者はむくれたまま言う。

「道化なんて可愛いモンじゃねーな。おまえのジョーカーはトリックスターだ。トラブルを持ち込むが宝も拾ってくる。あの銃を海に捨てなくて命まで拾った」

「反アダマスゲリラへの武器供給を断ったうえ、銃火器生産設備を入手した。ダルジ少将はアダマスの誇りです」

大変なお仕事ですね。来月分もキツチリ納めるよ。という債務者と取立て屋の幻覚が見えた。

ダルジ少将はやつと執務机から足を下げ、軍靴に敷かれていた手紙類をつかむ。文面を眺め下ろす黒い瞳はくすぶっていた。

「総統からやる気満々の挑戦状が来た。競驚に復帰して俺の連勝記

録を止めるんだと」

賭博好きのアダムス国民が熱狂する大イベントの開催は間近。驚
乗りたちの華やかな戦場だ。

カルロが亡命してきた二年前、総統は腰痛のためすでに一線を退
いていたが、息子のダルジ少将と並ぶ連勝記録を誇っていると聞い
た。

「で、総統は同時におまえのジョーカー宛てに手紙を寄越してる。
いいか」

不機嫌な棒読みが始まる。

『細やかな気遣いに大変驚かされた。感謝の証に詩を贈ろう。我を
優しく撫でるその柔肌、深手を癒し慰める。兵は再び驚へと奮い立
ち、縦横無尽に空駆ける。もう君なしではいられない、地の果てま
でも連れて行く。ああ恋しい伴侶、トイレットペーパー……………』

□

グシャー。少将は親の仇を絞め殺す勢いで親の手紙を握り潰した。
「このド下手な詩が便箋三枚も続いてんだぞ！ 何が腰痛だ！ 検
閲したシュレイダーが笑いをこらえるあまり腹筋を痛めたんだ！」

無心……………無心だ……………。カルロは腹筋のために自
分に言い聞かせた。

「クソ拭き紙製作者を処罰したら俺が総統の不興を買う！ ラウー
おまえだろ、総統に取り入ったのは！」

「職人村視察船出発とほぼ同時刻に発送しました」

取立て屋は債務者の親から保証をせしめていた。

「製紙は国家事業です。途中経過報告を兼ねて試作品を柔らかく叩
きほぐし、総統好みの香り付けを施して、桐花の名前で献上するく
らい当然です」

うめきながら軽く両手を挙げた仕草は、ダルジ少将の降参のよう
だった。

「マジで俺は一刻も早くこの忌々しい一件を忘れ去りたい。おまえ
とジョーカーを無罪放免してやる」

「ところで、俺はあるデカイ賭けの清算をしなきゃならねーんだ」
降参したばかりの手が呼び鈴をガンガンと腹いせの勢いで卓上に打ちつけた。

呼び鈴は普通、軽く揺らして鳴らすものである。悲鳴に似た金属音にカルロは目を回しかけた。入室してきたシュレイダー副官は慣れているのか、いつもの穏健な微笑で上司の暴挙をスルーした。

名前と賭け金が列記された皮紙の厚い台帳と、嚴重に封蝋された石筒が机に積まれる。

「ああ恋しい伴侶、トイレットペーパー……」

と少将が呟くとシュレイダー副官は腹をかばい、風の速さで退室していった。

「これだ。おまえの結婚だよ。どうでもいいって顔してたからな、覚えてねーだろ。おまえは独身、俺は政略に賭けた。まずおまえの負けは確定だな。ざまーみる」

ようやく訪れた小さな勝利にダルジ少将のご機嫌が上向いたようだ。が、賭けられた当事者は指摘通りどうでもよさげな白けた面持ちで黙っている。

「あとは政略か恋愛かだ。俺はジョーカーから答を聞いてるぞ。知りたいか？ ん？」

少将がいつもの調子を取り返すのは早かった。椅子にふんぞり返って得意顔をすれば、宝箱を前にした海賊の親玉だ。

一方の大佐は、真っ黒と言ったら真っ黒が顔面蒼白になりそうな黒すぎる気迫で少将を睨み下ろしている。雷雲を呼んで海賊船を沈める算段に違いない。窓の外を通りかかった不運な鳩が墜落していた。

「おまえはどーなんだよ。大金が動く問題だからな、正直に答えるよ」

聞くまでもなく政略、いやそれ以前に婚姻関係がない。

カルロは発砲事件当時、トーカ女史から婚姻関係がないと証言するよう請われたが、ダルジ少将にはその件を伝えていない。この様子からすると発覚しなかったようだ。

大金が絡むとはいえ、結婚していないことは暴露できない。構わない、婚約は取り付けてあるのだ。婚姻関係があるとみなしてしまえばいい。

こんなヒヤヒヤも女史が虫皮紙を毛嫌いしなければ味わわなくて済むのに、腹立たしい。ああっもしまや羊皮紙を調達すれば解決する問題だったのか？ 取り寄せねば！

スマラグダス大佐は茶と翡翠の異色の瞳に深慮をたたえ、しばらく黙っていた。

「言葉が人間だけが成し得た偉業ならば」
学者の謙虚さで、ようやく静かに語られる。

「言葉で表現できないもどかしさは、人間だけが負う誇るべき苦痛なのだろう」

カルロはうつむく。

当てはまる言葉を探せずに胸の奥で滞積する想い。下手な表現や無言が曲解や軋轢を生むと痛感していてもなすすべなく見送るしかない、そんな場面が幾度あったことか。

大佐の語りは格調高い。総統閣下のクソ拭き紙賛歌とは雲泥の……む、不敬罪だろうかこれは。

「てめーそれで逃げられると思ってるのか」

銅色の指先が机にイライラしたりズムを刻んだ。仕方ない、文学に全く心を動かされない人間もいる。

崇高な学者顔がチツと舌打ちを刻み返す。えええ逃げるつもりだったのですか？

大佐は腕組みをして片方の指先をこめかみに添え、しばし苦痛と闘ってらっしゃるようだった。一言、政略とお答えになればいいものを。

そうか、少将を賭けに勝たせてしまっのを渋っているのか。お二

人は時々、子供じみた意地の張り合いをなさる。

ややあつて腕を解くと、大佐はゆっくり唇を開いた。

「興味を持った女はいたが、それだけだった。興味の構成要素を把握してしまえばただの搾りカスになった。だが桐花は興味を飛び越え、私の制御困難な領域に住み着いた。その永住を願うのは執着と言える」

穏やかな瞳は、軍人としては忌むべき制御困難の事態をむしろ歓迎しているようだった。

「この固執がそうでないならば、何が愛情なのか、私には想像できない」

「回りくどい言い方すんな、寝そうになっただろ。愛してるで済ませろよ。ゲーなんだこのオッズ、大穴すぎて家が建つぞ」

む、むむむむどういうことだ！ 政略結婚であることは周知の事実だというのに。大佐は恋愛だと迫真の演技をしてまで少将を賭けに勝たせたくないのか？ それにしては少将がすんなりと、まるで結果を知っていたように負けを受け入れている！

少将が石筒をひねると嚴重な封蝋がたやすくねじ切れた。

「おまえの恋愛結婚に賭けた世紀の変わり者は一人だけだ。そいつは失踪して死亡扱いになつてる。払戻金は遺産として処理される。これが遺言状だ」

むむむお待ちを。なぜ準備良く勝者の遺言状まで揃っていたのか？ 賭けの結果が分かっていたとでも？

遺言状の丸まりを引き伸ばす少将の手は、總統の詩を扱うより数段丁寧だった。読み上げる口調も一転、おごそかな敬意をはらんでいた。

『遺産は全て文化事業に寄付する。管財人としてラウー・スマラグダスを指名する。ジョージ・タイラー』

たとえ文官でもアダマス軍人なら知らぬ者はいない。ジョージ・タイラー、多くの豪傑の中で異彩を放った初代白魔の名だ。

戦に身を投じながらも、誰より平和を祈願していたと伝えられる。

ダルジ少将やスマラグダス大佐を始め、タイラー氏に弓を師事した軍人は数知れない。また、大佐と共に文化遺産を資料館に収集し保護した知識人でもあった。

「……物好きじじいめ」

少将の呟きで、部屋はしんみりと湿度を増した。

「知ってるかラウー。師匠は結婚の賭けがあるたび、必ず恋愛に賭けたんだ。面識のねえ兵士でも必ずだ。賭け金は結婚を司る神に納める賄賂代わりだとか言ってたな」

縁結びの神への賽銭。

タイラー氏が日本文化を知るわけではないが、タイラー式賭けの思想は良縁祈願に似ていた。

「そういう慈愛は受け継いでなくせに二代目白魔を名乗ってんだからなー、詐欺だろ」

「自ら二代目と吹聴した覚えはない」

「おまえの口がカネなら、減らなくても喜べるんだがな。とにかく、この賭けの払戻金はタイラー師からの義援金だ。心して使えよ」

「使途はすでに決め」

ふと、カネならいいのと言われた口を閉じて、大佐は後方を振り返った。強い視線は扉を開け放とうと試みているようだ。

発声を控えた唇が「トーカ」の形を作ったように見えた。

合格発表みたい、と桐花はざわめく胸を押さえた。

見たいけど見るのが怖い。会いたいけど会うのが怖い。だって合格発表は落第発表でもある。

ダルジ少将がお呼びです。と告げて先導する衛兵はお呼びの理由を教えてくれない。私物を全部持って出るように、という指示は監獄へのお引越し命令に聞こえた。

四日間暮らしたのは前女王の執事頭やメイド長クラスが使ってた風の、簡素ながらも一通り家具が揃った部屋。ドアの外に衛兵が常駐してただけで身体の拘束はなし。あつたかい食事が出て、詐欺および殺人未遂容疑者としては優雅な軟禁生活だった。

うん、とつても優雅だった。

寝られるベッドがあるだけで五つ星ホテルだよ！ だって袋とじ本を持ってただけで籠に詰めて鷲の厩舎に一晩転がされたり、使用実績のある石棺に寝かされたりしたんだよ？ 自由に使えと言われたベッドは粋しかなかったりしたんだよ？

そんな鬼畜のそばにいたくて発砲した自分が変人に思えてくるからやめよう。

そういえば食事にしつこく鯨が出たのは何だったんだろ。食べてくださいと怯えたアントニオに泣いて頼まれたこともあった。鯨にはキレやすい性格を緩和する成分が含まれてるとか？ 百科事典で調べなきゃ。

……あ。

もう出来ないんだった。

フフと自嘲に笑ったら、前を歩く衛兵の肩がビクツと怖がった。

背後からでも十字を切ってる仕草が丸分かりだ。うわー絞首台に連れてく罪人を哀れんでるみたいじゃないか。冗談になってないけど、フフリ。

あの時、どうするのが正解だったんだろう。

トレードをバラされるとネイティヴとの和平の象徴という大義が失われ、ラウーのそばにいられなくなる。少将に危害が及ばないなら、キヤスがアニキのワイフだった過去を黙つとくのが波風立たない解決法だと思った。

でもキヤスはもつと完璧に口封じしたかったんだ。辞書が弾を防いでくれないければキヤスの思惑通りになってた。すつごいムカついて、もう絶対に信用できないキヤスを口封じし返すしかないと覚悟した。

だってキヤスを告発したらトレードが発覚してしまう。ラウーが妻の出身詐称を承知していたのか追及されてしまう。軍人として忠誠を誓ったアダマスへの裏切りだ。でも、実際には婚姻関係のない元妻が犯した殺人ならスキヤンダルで済むかも。

どっちにしてもラウーのそばを追われる。ならラウーへの悪影響が少ないほうがまし。少将の愛人殺しで逮捕されてもひたすら黙秘しとけば、ラウーが背任を問われることはない。

なーのーにー。

そんな決死の覚悟でいたつていうのに「私がその女を撃つ」とかいきなり水の泡な発言は何だー！ わたしが黙秘に耐えられないとでもっ？

そっかラウーは拷問が得意な毒針使いを雇ってるんだったね。計画倒れになる計画だったね。実行性のなさまで計算されちゃったのかな。キヤスがアニキのワイフなことも、トレードした側でキャンセル権持っていないことも見抜いてたし。

キヤスニアニキのワイフって図式にいつ気付いたんだろ。わたしを戦艦に降ろした後に指名手配用の似顔絵作りに行ったらしいからその時かな。怪我人の治療を終えたら捕まえる予定だったのかもしれない。

なんていうかもう、ラウーの足を引つ張った気しかしない。両足にタツクルかまして汚泥に転倒させて複雑骨折させるぐらいの勢い

で引つ張った気がしない。

『紡ぐ家のトカ。ネイティヴの誇りを保って聴取に答える』

って言われたからダルジ少将の聴取でもトカに徹し、トレードのことは一切「ワカリマセーン」で通した。キヤスがしゃべったらしくて焦ったけど、ラウーが国家反逆罪に問われるのは困るから頑張った！

今、その結果発表に向かっている。

四角錐の鉾が並ぶいかにも堅牢な、本丸ココですと主張する鉄扉を覚えていた。ダルジ少将の執務室である扉の隙間をすり抜け、ダンディな副官が出てきた。背を丸め肩で息をついている。トランプの意味は切り札だと教えてくれたシュレイダー氏だ。

桐花の姿を認めた瞬間、柔和で穏健な副官の顔が苦痛に歪んだ。痛みをかばうように上半身をグツと折り、涙の浮いた目線だけで「あなたを見るに耐えません。失礼してよろしいですか」と訴えてくる。桐花の反応を待たず、副官は肩を震わせながら風より速く隣室へと消えた。

ものすごく哀れな顔だ。殺人未遂の罪で収監される乙女に胸を痛め、涙してくれてた。被害者側のダルジ少将関係者なのにいい人だ。

逆に言えばダルジ少将側の人さえ憐憫をもよおす処罰って一体・
・
・
・

どうなっちゃうんだろう、という不安はなるべく考えないようにしてきた。この世の冥府からでも連れ戻すとラウーは言ってくれたけど、アダマスと天秤にかけられたら国家に忠誠を誓った軍人が選ぶものは決まっている。

だからどんな処罰が下っても嘘つきなんて思わない。

ただ両親に謝りたい。ラウーとの幸福を願ってくれたのに、自分で壊しちゃってごめん。親不孝でごめんなさい。もう伝えるすべもないけれど。

ぶわつと涙がこみ上げて、慌てて私物を詰め込んだカバンのハンカチを探した。

衛兵がギョツとしてる気配がする。見るな！ 女優さんと違って一般庶民の泣き顔は真っ赤で歪んでしゃくりあげて鼻水も出るし、見られたくないというより見られない大変なことになるものなんだ！ その大変なことになってる顔にどうにかハンカチを押し当てたとき。

ドン、と勢いよく開かれた扉に吹っ飛ばされた。大理石の硬く冷たい床へ前のめりに突っ込む。

外開きのドアは廊下を確認してから開けるー！

不注意な乱暴者を怒鳴りつけるべく振り返った。

立ちほだかっていたのはキビツと無駄に緊迫溢れる軍服姿。踏まれた記憶のある軍靴。背中にめり込んだ覚えのある膝。緩めて寛いでいるのが新鮮だった襟。そこに縫い取られた大佐の記章。

知ってる。顔を確かめなくても誰だか知ってる。だってずっとずっと思い返してた。

あと少し視線を上げればあの異色の瞳があるはず！

「聞いていたか？」

ラウー。会いたかった！

という満開の心の花畑を瞬間凍結、ナノレベルまで粉碎する高性能プレス機に睨み潰されていた。泣く子も凍る地球温暖化の最終兵器だ。

そっか大理石って柔らかくて温かいものだったんだね。比較対象がラウーだと。

わーん二度と会えないかもしれないと思ってたのにー抱きつきたいのー奥ゆかしい日本人が抱きつくのがどれだけはじた行動か分かっているのかードアで殴ったの無視かー無様に転んでるのに手を差し伸べるとかないのかー。

めそめそと小さく反抗する。

「聞いたかって何を？ こんな分厚くて硬くて痛いドア越しに聞こ

えるわけないじゃん！」

さりげなく痛かったと主張してやった！

「立ち聞きなどで教えるつもりのないことをだ」

思いつきスルーされた！

「ええとそれって……罪状？」

そうだな……と地球規模の冷気を召喚しながら白い魔王様が言う。

「不器用と鈍感が処罰できるなら、おまえは三回絞め殺しても足りない重犯罪者だ」

覚えのない言いがかりで絞首刑を宣告された！ 自分の腸で首を吊れタイプの自虐的懲罰じゃないのが珍しい。キレてんの？ 鯨が足りないんじゃないの？ と突っ込めちゃうほど落ち着いたというか泣く気も失せた。

どうしてこんな再会しなきゃいけないんだろ。

床に座り込んだままドンヨリと大理石を撫でさすっている間に、尊大な足音が執務室と廊下を行き来する。大嫌いな金属音で鎧を身に付けていると分かる。時間だ出かける、の憎らしい告知とセットの音。

けれど聞こえてきた言葉は違った。

「行くぞ、桐花」

「監獄に？」

「製紙事業の期限まであと四日と八時間二十七分だ」

時計より淡々としたカウントと共に辞書入り穴開きトートバッグを渡される。

……まさか牢屋の中でも紙を漉けと？

しまった、和平の花嫁役から追放されても助手の契約は一生涯なんだった。牢屋で罪を償う心静かな日々なんて許さない気なんだ！

ラウーはいつもの金属鎧姿に戻り、弓矢も返してもらっている。

背任の疑いはないってことだ。よかった、巻き込まなくて済んだ。

「レオン副官、明朝五時発でアダマス本土へ戻るフライトプランを

提出しておけ」

きつと何事もなかったように、結婚なんてなかったみたいに軍務に戻っていくんだね。そばにいられなくなっちゃったけど、監獄の中から手伝わせてね。柵越しでいいから、ラウーが展望し実現する知の時代を話して聞かせて。

でも再婚だけは黙ってて。

執務室の奥でダルジ少将が指一本で招いている。刑を言い渡されるんだ。倍増した重力をどうにか押し返して立ち上がり、亡霊が絡んだみたいにけだるい身体を机の前まで運んだ。謝罪を込めて一礼する。

「ご迷惑をおかけして、」

「おまえはジョーカーだ」

ジョーカーって名前の刑罰があるのかな。

「最強のジョーカーだろうと、それ一枚じゃ役になれない。俺のジャックとペアにしておく」

「あなたのジャックではありません」

開いたままの鉄扉を通して、背後の廊下から食い気味にラウーの訂正が入った。

「俺のクイーンだった二枚舌のカードは、二度と誰も脅かせない場所に閉じ込めた」

不服だけど諦めた。そんな顔をしていたダルジ少将は、そこでやっと二カツと笑った。

「ジャックと一緒にアダマス発展に励めよ、トーカ・スマラグダス」

「製紙と並行して活版印刷と出版事業の準備に入れ。文字サイズの鑄造に長けた職人を確保しろ。校正に明るい者を三名選んで」

「ラウー！」

感謝の挨拶を最速の早口で済ませ、少将の執務室を飛び出した。レオン副官に指示発令中なのは分かってたけど、助走つけて思いつ

きり金属鎧に抱きついた。

「今まで通りでいいって！ よかった、ありがとう、きつとラウーがまた得意の凶悪知能犯な闇取引とか恫喝とかしてくれただね！

ありがとう！」

「……………選んで桐花に面接させる。四日間で滞った業務を優先度の高い順に報告しろ。最優先事項は礼の述べ方をわきまえない口のしつけどが」

ガツブー。痛い痛い痛い下唇に噛みつかれたー！

痛さに一瞬固まったせいで逃げ遅れた。腕でガツチリ捕縛され、頬とか耳とか喉まで歯を立てられる。やめてー身体に歯形を集める趣味はないって否定したのにー！

ん？ してない気がしてきた。月天の発言だったらいいなって現実逃避したような記憶が。ちゃんと否定しなきゃ！

出かかった声は、硬い歯が急に温かな柔らかさに化けたせいで昇華した。

「おまえら、愛人が減った俺に嫌がらせか！」

背後の執務室からダルジ少将がわめくのが聞こえた。呼び鈴や台帳が飛んできた。これもアダマス発展のために励む共同作業です！でもラウーのくせに間違ってる。周囲の視線から遮断された口内じゃ、舌がどれだけ情熱的でも新婚パフォーマンズにならないの。うん、そうそう腰に手を回すのいいと思う。鎧に抱き寄せられるのは痛いけど我慢する、隙間なくしてぎゅうつと抱きしめ……………。

「わああ、だめっ！ お腹しめつけちゃだめ！」

さすが兵士の反射神経、ラウーはぱつと力を緩めて半身を引いた。お腹を見透かすように見下ろしてくる。

うわああバレちゃったかな。恥ずかしさで一気に顔が熱くなる。うつむいたら、ぐいーと顎をつかまれ仰向かされた。真剣極まりない瞳が覗き込んでくる。

「自覚症状があるのか？ 気分が悪くはないか」

「悪いよ！ 自覚がなきゃ嫌がらないよ！ 四日間も部屋の中で運動もしないで食べて寝てたら、ウエスト増えるの当たり前じゃん！ 測っちゃだめ」

静けさのうちに、顎をつかんでいる指の圧力が急速に上昇していった。激痛小顔マッサージではないと思う。マッサージ師は雷雲背負って施術しない。

「鯨の揚げ物を食い残したのはそれが理由か」

「えっよく知ってるね。だってドツシリしたお肉のフライなんて太るに決まってるもん」

少し離れた場所でレオン副官が消え入りそうな声で優先度の高い業務とかいうものを読み上げ続けている。冥福を祈る小坊主の読経に聞こえた。

鼻先を噛みちぎりそうな近さでは、濃厚な闘志に溢れる雷鳴がとどろいた。

「何でも与えると言った。今夜、望み通り女王の流儀を授けてやる。四日分の運動をさせてやる」

空の青さは透けるシルクを広げたみたいでワントーン淡くなり、夏にはなかつた形の雲が薄く広がっている。櫛の歯状に屹立する岩山も、メノウ色のマーブル模様を巻く木星も、輪郭を柔らかくして穏やかだ。

少し離れていた間にアダマス本土には早い秋が顔を覗かせていた。岩山に囲まれた馬蹄形の湾には石柱が密集する。それを支柱にして石板を敷き詰め建設された空中都市には草木がなく、季節の移ろいを感じ取るのは難しい。

それでも空には映っている。

製紙事業を監督・統括するラウー・スマラグダス空軍大佐は、桐花が提出した紙を入念に検分している。強度、硬度、平滑性、重量、寸法。チェックを待つ間に執務室の窓から空を眺め、桐花は秋の気配を拾っていた。急に、ずいぶん長くこの世界にいるような気がした。

「いいだろう。期限まで一日と十六時間四十一分で完成だ」

秋空に栗ときのこの炊き込みご飯を回想してゴキユリと喉を鳴らしていた桐花は、三拍遅れて我に返った。

「また日本食か。今度は何だ」

ラウーに頭の中を読まれる頻度が高くなっている。

「読心ではない」

ほら読んでる！

「読むのは表情や仕草だ。蓄積した経験があれば難しくない。心が読めるのであれば、おまえが思い浮かべた献立まで言い当てられるはずだ」

製紙の追い込みで疲れた心身からは返す言葉も出てきやしない。疲れてなくても出て来ない。

「日系人村をボル・ヤバル基地近隣へ移転させるため、稲作に適し

た土地を調査させている。同時に前女王の植え付けた差別意識を払拭しなければ経済発展の障害だ。移転計画が実現すれば比較的容易におまえの胃袋も鎮圧できるだろう」

暴れる妖怪胃袋みたいな表現しないで欲しい。

「何でも与えると言っているはずだ。おにぎりが食べたいと一言私に相談すれば、事態は混乱しなかった。おまえは要求に偏りがありすぎる」

「樹脂問題が解決してほんとよかったよねー」

言葉は時に人を傷つける。ラウーの場合、無言も神経に致死傷を与える。鼻歌まで追加して話題をそらした。

樹脂問題は釈放の日にあっさり解決した。月天が松ヤニに代わるものをくれたのだ。

ラウーと月天を聞き分ける賭けで、月天は負ければトカの望みをかなえてあげると約束していた。レオン副官から樹脂問題を愚痴られ、ラウーの拘束で暇だったという月天は望みは樹脂と勝手に解釈、数種探してきてくれていた。

その中の一つが完璧な紙を作り上げた。

おかげで日系人村樹脂調査が目的をひとかけらも達成せず終了した失態を責められずに済んだうえ、製紙事業も軌道に乗りそうだ。ラウーの指が製紙手法の最終報告書をめくった。

「松ヤニの代替品名が記載から漏れている」

話題をそらしたつもりが、なんとという墓穴。

「あつそれは書類のミスじゃないです。代替品は企業秘密っていうか、どうでもいいっていうか、現場に任せたいっていうか気にしないで下さい」

絵文字が使えるなら語尾にハートマークを奮発したつもりでっこりしてみせた。

もちろんハニートラップ不適任者のレッテルを貼られた笑顔じゃ騙せなかった。企業秘密を社長に秘匿できる社員がいるわけもない。城塞の一角に陣取るラウーの執務室は機能性に満ちていた。イン

テリアと誤解した絵は指名手配犯一覧で、オブジェと思ったのは作りかけ人体模型で、来客用に見えた椅子は拘束具つきだった。とても実用的な部屋だ。

おもむろに立ち上がりL字形の机を回ってくるラウー・スマラグダス大佐兼軍医は、拘束椅子に座らせた婚約者で生の人体模型を作りそうな据わった眼をしている。

「シエラックです」

さっさと白状しておいた。報告書に素早く書き足した。

「シエラックとは何だ」

「さつきは代替品名しか聞かれなかったと思うんだけど」

「ここにはまだ自白剤という痛覚に負担のない尋問方法はない」

「シエラックは樹脂と似た性質を持つ物質で、カイガラムシの体の表面の分泌物です。生態系が前の世界と少し違うみたいで配合率に試行錯誤したけど樹脂よりはうまく行って、それにレオン副官が」
レオン副官がすこし協力的になったのだ。無罪放免になった日から。ただしあの日は挙動不審だった。

固執は固執だッ！ とか、意地を貫かれたのだッ！ とか呟きながら歩き回った挙句、水ッ！ と叫んで浴びるように飲み始めた。水差し一本分を飲み干したあと諦め顔で、現実で埋め立てますと言った。陰湿さが低下した。

水で悟っちゃうなんてヘレン・ケラーか。

意味不明な儀式でレオン副官は何かを吹っ切ってくれたらしい。悪霊を聖水で切り離れたのかもしれない。吹っ切った割には時々思い出したように睨まれるんだけど、とにかく製紙事業は順調に運んだのだった。

桐花が補佐役の態度軟化とセルフ悪魔被い疑惑とチームワーク改善を熱く語っている間、ラウーは眉間をつねるようにしてずっと顔を伏せていた。話が終わっても伏せていた。

以前から聞きたかった疑問を口にしてみる。

「ねえラウー……それって笑ってるポーズなの？」

「違う。失笑している」

誰か、この人にも聖水を。

確かに虫皮紙がイヤで取り組んだ製紙が虫の分泌液で完成するなんて皮肉、失笑モノだけど！ だから報告書にも書かなかったんだけど！

シエラックは前の世界で食品や医薬品に利用されてて、知らずに口にしたたと思ったら吹っ切れちゃったんだ！

「次は活版印刷だねー。どんどん知識の受け売りしちゃうから」
人体模型が完成したら目を異色に塗ってやると密かに誓ってから、再び話題転換を試みた。

ラウーと月天を聞き分ける賭けでは、ダルジ少将から製紙・印刷・図書館事業への全面的協力までも勝ち取っていた。資金、資材、人材、用地、全てが今まで以上に迅速かつ豊富に回る。本を作れる日が確実に近付いているのを感じて、桐花は嬉しくなった。

「たとえカイガラムシの体表分泌物の配合比率だとしても」

話題転換に乗ってやる気遣いが欠如してるのに、なんで軍みたいな大組織で出世できるんだろっ。

「おまえの創意工夫が介入している。零細な創意工夫も、雨粒が大河を成すように文明の滋養となる」

完全なる受け売りではないと慰めてくれるのか、工夫が雨粒並みにちっさいと叱咤してるのか。ラウーの眉間は押さえすぎてほんのり赤みを帯びている。後者に決定。

「活字の鑄造はすでに進行中だ。この紙に適した印刷インクを選定しろ」

「カイガラムシの体表分泌物が配合された紙に適したインクですね」
「原稿リストを用意した。しばらくは政府刊行物でフル稼働になる。その間におまえの書店に置きたい本の翻訳を進めておけ」

「カイガラムシの体表分泌物が配合された紙でできた本ですね。・

「……書店？」

紙よりフラットな口調で自虐に努めてたのに、たった一単語に釣り上げられた。

ラウーの腹の立つ指はようやく眉間から離れ、机の上から数枚の書類を引き寄せている。

「ジョージ・タイラー文化基金からの出資が決定した。書店の管理者にはおまえを任命する」

それはあの妖木老兵タイラーおじいちゃん？ 基金なんていつの間。帰国しちゃったのに決定って誰が？ 書店って、書店って……書店！？

「舌に焼印を押されたいなら大口を開けたままでいる。書店の標章デザインはレオン副官と日系人の協力で決定済みだ。活版印刷による出版物の検印にも使用を予定している」

頭がスパークしても、誰かのおかげで処罰的文言は聞き取れる耳ができています。焼肉は好きだけど自分のタンを食べるのはイヤなので顎を押し上げ、手で口を閉じた。

書類束が一枚後ろに送られる。ラウーの手元に現れたデザインに見入った。

柏餅みたいに広く丸い葉は豊かで、絵の下半分をどっしりと支えている。そこから真つ直ぐ天へ伸びる三本の花房には、すずらん風の愛らしい花が咲き誇っている。

桐花紋という名称を知らなくても、桐花の生まれた国ではあまりなじみ深い紋章だ。五百円硬貨、パスポートの顔写真ページといった身近な場所に溢れていた。

けれど国家や陸地が造り変えられたこの世界では見かけなくなっただものだった。

『おまえはおまえの作った紙に姿を留めるだろう』

製紙事業に出発するときのラウーの言葉をようやく理解した。紙に似顔絵でも描いてくれるのかと思ってた。

「受け売りだと遠慮して、おまえは要求しなさ過ぎる。書店名を決

める権利をやる」

「うう、ありがと、ひっく、は、『白魔書店』にする。ううう」

桐花がたつぷり三回しゃくり上げる間、心臓に障る沈黙が続いていた。ようやく沈黙を破ったのは、沈黙より心臓に悪い低い声。

「権利をやるとは言った。だが人類の比類なき文化遺産である書籍を扱う場に、豪雪災害の化身の名は不向きだ」

確かに怪しげな魔術本専門店みたいだけど！ 本の代金に魂削られそうな名前だけど！

「いい名前だもん！ ひくっ、だって、白魔が訪れた後には春が来るんだよ。うきゅ」

ラウーの異色の瞳みたいに。兵でありながら知の時代を望む二人の白魔は豊饒の茶色の大地、瑞々しく芽ぐむ新緑の春を内包してる。だから泣いてしゃくり上げてるときにキスされたら噛んじゃうってば！ それにキスするならせめて書類をどっかに置け！ 新婚じやなくてワーカホリックのパフォーマンスになってるぞ！

と脳内抗議したところで気付いた。執務室には二人きりだ。作りかけ人体模型は人にカウントしなくていいと思う。

「ギャラリーいないよ」

「私に不都合はない」

大アリだと思っただけど。

コンコンコンと遠慮がちなノックがして音源を探せば、隣室とのコネクションドアだった。おっとり賢そうなタレ目の青年副官が顔を出す。

「トーカさまの護衛候補の方がおみえです」

「通せ。おまえの護身は私の保身と同義だ」

護衛？ という疑問は即座に読み取られていた。おまえが人質になると私が迷惑だ、とおっしゃってるんですね。こっちだって真意は読めるんです。

タレ目副官は眉尻まで垂らして、ほっとけない困り顔をした。

「それが、大佐のご友人を名乗る男性も一緒に……」

「いるのかラウー！」

隣室の奥から、ご友人を名乗る男性らしき声が響いてきた。

「おまえ俺に黙って結婚するなんてひどいだろ！ 慰謝料としておまえと同じ目をした妹は俺にくれー！」

「妹本人の了解を取る方が迅速確実じゃない？ そして、やだ」

「うっわ、兄が兄だけに妹もひどいな！ でも、くれ」

ぎゃーぎゃーと続く騒がしさを壁越しに眺めるラウーの表情は、対照的に静穏だ。どんな事態も頭脳と度胸で迎撃する自信と、遠くない知の時代を見据えた理念に満ちている。

この人の隣にいたい。

視線を感知したのか振り向いたラウーは心を読んだみたいに、頷くような柔らかい瞬きをした。

20・星の数ほど白魔たち（後書き）

ここまで読み進めてくれた皆様、ありがとうございました。お疲れ様でした！

読書欲を満たす一片になれたとしたら嬉しいです。星をいくつか送ってもらえると、心のエサとして大喜びで食います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9754j/>

青い鳥ルーレット

2011年8月28日03時17分発行